

吸血鬼は紅い血を吐いた

はるねりま

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

【前編：第一章〜第三章】家族を妖怪に殺され、死にもの狂いで逃げ切った少年、卓郎が出会ったのは幼い女の子の姿をした吸血鬼だった。それから卓郎は生きるために吸血鬼の住む『紅魔館』で働くことになったのだが、そこで待ち受けていたのは一癖二癖もある紅魔館の住人と妖精メイドたちだった。何の能力も持たない彼は、己の努力で住人たちの信頼を得るために奔走していく。

【後編：第四章〜第七章】紅魔館に働き始めて八年。すっかり立派な大人になった卓郎はある日、人里で十年ぶりに寺子屋の恩師と再会する。それをきっかけに卓郎は館の主人に対する疑問、家族が殺された八年前の事件に対して疑問を抱き始める。様々な葛藤を抱きながらも、卓郎は八年前の事件の真実を追究していく。——これは何の能力も持たない一人の人間と、吸血鬼の物語。【2016/07/14】『小説家になろう』にも掲載しています。

目次

〔21〕	—	295
〔20〕	—	282
〔19〕	第五章	266
〔18〕	—	248
〔17〕	—	235
〔16〕	第四章	218
〔15〕	間章	215
〔外伝3〕	—	202
〔外伝2〕	—	191
〔外伝1〕	—	182
〔14〕	—	166
〔13〕	—	155
〔12〕	—	141
〔11〕	第三章	127
〔10〕	—	110
〔09〕	—	94
〔08〕	—	83
〔07〕	—	69
〔06〕	第二章	52
〔05〕	—	42
〔04〕	—	27
〔03〕	—	15
〔02〕	第一章	4
〔01〕	序章	1

〔30〕	〔29〕	〔28〕	〔27〕	〔26〕	〔25〕	〔24〕	〔23〕	〔22〕
終章	第七章					第六章		
435	413	387	372	354	344	333	324	312

## 【01】序章

死にもの狂いで走った末、卓郎は湖らしき水辺の前で力尽きた。すでに時間は夜である。辺りは霧がたちこめており、周囲の状況がほとんど確認できず、ちろちろと近くで水の流れている音しか聞こえなかった。

いつたい何時間、逃げ続けただろう。

しかし、そんなことを悠長に考える暇もないくらい彼は疲れ果てていた。

今、彼の脳裏にあったのは、家の床が赤色に染まっている光景だった。

農作業から帰ってきた時のことである。家の中で母親と兄が倒れており、その中心に髪の毛の長い少女がたずんでいたのだ。母親と兄は手首を切り取られており、腹に刺し傷がある状態で息絶えていた。

——妖怪だ。

そう思った瞬間、少女のひどく澱んだ目がこちらを振り返った。

彼女の右手は血に染まっており、いつたい彼女がこの家でどんな行為を犯してしまったのか言うまでもない。

持っていた道具を全て投げ捨て、卓郎は走った。後ろで妖怪が追いかけてくる気配がして、彼はさらに走る速度を上げた。

——いやだ。死にたくない。

とにかく、その時はただ殺されるのが怖くて、卓郎は必死で逃げ続けた。草木の生い茂った森を駆け抜け、流れる川を強引に突破し、何としてでも妖怪から逃れようと無我夢中で走り続けた。

その甲斐もあり、何とかここまで逃げ切ることができたが、もはや指一本すら動かす体力も残っていなかった。

気付いたら、手足のところどころに傷ができていた。

特に左腕の傷がひどい。逃げている最中に、木の皮で思いつきり皮膚を抉ってしまったのだろう。かなり出血している。

だが、疲れで感覚が麻痺しているのか、不思議と痛みはあまり感じ

なかった。

「ふっ……」

卓郎は小さく息を吐き、目を閉じる。  
もう考えるのも嫌になってきた。

朝から農作業に追われて何も食べてないし、口の中もひどく渴いている。早くこの苦しみから逃れようと、卓郎は体の力を徐々に抜いていく。

その直後、何者かがこちらに近づいている気配を感じた。

「あら、なにかしら」

女の声だった。ただ、女にしてはやけに幼すぎる声だった。

「人間、みたいですね。しかも、怪我をしているみたいです」

「見た目からしてまだ若いわね。ユキ。生きていますか確認しなさい」

「分かりました」

幼い声が命令すると、何者かが卓郎の腕を掴んでくる。

当然、抵抗する力などない。会話から察するに、幼い声の方がユキと呼ばれる者よりも地位が高いようだ。

「生きていますみたいですね。呼吸していますし、脈も動いています」

「そう。生きていますのね」

直後、小さな手らしきものがそつと卓郎の顔に触れる。

「起きなさい」

その言葉に釣られるように、彼は目を開ける。

瞬間、全身の体温が一気に下がった。

目の前にいたのは、幼い女の子だった。だが、その背中には蝙蝠を彷彿させる羽根が付いており、一目で普通の人間ではないことが分かった。

「どうしてこんな所で寝てたの？」

少女はそう訊いてきたが、卓郎は口を動かすことができない。彼女から発せられる雰囲気は、完全に圧倒されていたからだ。

これまでの人生の中で、弱小の妖精程度なら何度か遭遇したことはあるが、彼女の雰囲気は明らかにそれとは別次元のものだった。呼吸をするのも苦しく感じる。

「答えられないのね。まあ、いいわ」

彼女は手を引っ込めて、その口を小さく開ける。

そこには、鋭利な牙が付いていた。

「館の近くで生きた人間を見つけられるなんて、今日は運の良い日ね」

「お嬢様。今日はここで済ませるつもりですか？」

「ええ。いつも人間を探すのも手間がかかるし、今日はここで済ませるわ」

抵抗する暇は一瞬たりともなかった。

お嬢様と呼ばれた幼い女の子は、卓郎の左肩に勢いよく噛みついてきた。そして傷口から噴き出てくる血を、そのままごくごくぐりと喉に流し込んでいく。

いつしか村の噂で聞いたことがある。

村から遠い場所には、恐ろしい吸血鬼が住んでいる館があると。その吸血鬼はどんなに多くの妖怪が束になっても勝てないほどの強さを持ち、人間など一瞬で葬り去られてしまうらしい。

卓郎の脳裏に、母親と兄が倒れている姿が浮かんだ。

僕もここで死ぬのかな、と思いつながら卓郎は意識を失った。

## 【02】第一章

目が覚めると、紅い色の天井があった。

状況が把握できず、しばらく卓郎は呆然とその天井を眺めていた。

とりあえず起きてみようかと体を動かした時、全身から痛みが発せられ、卓郎はわずかに顔をしかめる。起き上がって初めて、自分はベッドに寝ていたことに気付いた。

ここはどこだろう。

周囲の状況を確認して、ようやく彼はこの場所の大きな違和感に気付いた。

部屋全体が紅く染められているのだ。

壁、ベッドだけに留まらず、箆笥やカーテン、テーブルといった全ての物が紅色に染まっているのだ。

非常に目がちかちかする環境だったが、その割に中にある家具は全て高級品のようである。自分の家にあるものとは比べ物にならないくらい、箆笥はきれいな装飾が施されていたし、カーテンやテーブルはそもそも家に存在していなかった。

これは夢なのかと疑ったが、改めて自分の状態を確認して、それは消えた。

手足の至るところに包帯が巻かれてあったからだ。ついでに左肩にも違和感を感じたので、着物をめくってみると、そこにも包帯が巻かれてあった。

誰かが治療をしてくれたのだろうか。

だが、肝心の記憶が曖昧でよく分からない。

窓の外を見てみると、すでに空は明るくなっていた。

ようやく目も慣れてきた。

目を擦って、改めて部屋を見渡すと、正面のテーブルに視線が留まる。

テーブルには何かを上で覆うように、布が敷かれてあったからだ。それをめくってみると、中には水の入った容器とパンの積まれたかご



が置いてあった。

おいしそうなパンを見た直後、彼の腹が大きく鳴った。そして勢いよく、まずは容器の水を飲み始めた。

なにせ、昨日から飲まず食わずだったのだ。多少のためらいはあったものの、命には代えられない。水を一気に飲みきるや否や、今度はパンの方にもかぶりつく。小麦の香りと歯応えのある食感が食欲を増幅させ、さらにかごのパンを掴んでいく。

卓郎にとって、パンを食べるのは久しぶりのことだった。

空腹に加え、最近はずっと少ないお粥ばかりの食事だったので、普通のパンがとてもおいしく感じられた。

あつという間に全てを平らげ、卓郎は満足気に息を吐く。腹も膨れたことで、ようやくまともな思考ができそうな気がした。

その時、部屋の扉が開かれる。

「あつ。目が覚めましたか?」

中に入ってきたのは、おしやれな服を着た少女だった。赤色の装身具を乗せた髪は雪のように白く、背中にはとんぼのような羽根が生えている。

それを見て、瞬時にこの子は人間じゃないと分かった。おそらく妖精か何かの類だろう。卓郎はこれまで何度か、村の外で妖精に遭遇したことがあったのだ。

その様子を見かねてか、少女は穏やかに微笑む。

「安心してください。危害を加えるつもりはありません」

ここで少女の視線がテーブルのかごを捉える。

「——あつ、そこにあったパンはもう食べちゃったんですか?」

はっ、としたような顔を卓郎は浮かべる。

「もしかして、食べちゃだめだった?」

「いえいえ。よっぽどお腹が空いていたんだなと思ってまして」

少女はおかしそうに笑う。

「申し遅れました。私、この紅魔館でメイドをしているユキといいます。見た目から分かるかと思いますが、人間ではありません」

「ということは、やっぱり妖精?」

「はい、そうです」

ユキはそれを証明するように、羽根をひらひらと動かす。

「僕は卓郎。卓郎といます」

「卓郎さんですね。よろしくお願いします」

ひととおり挨拶を交わした後、卓郎は紅い部屋を見渡した。

「それにしても、これは一体どういうことなんですか」

「あら。もしかして覚えてないんですか」

ユキの問いに、卓郎は目を丸くさせる。

「昨日、霧の湖の前であなたが倒れているのを、私とお嬢様が見つけたのです」

「……湖の前？」

その瞬間、卓郎の脳裏に昨日の出来事が一気に蘇ってきた。

自宅の床が血の色に染まっている中、倒れている母と兄。

そして、その中心でたたずんでいる黒髪の少女。その右腕は赤色に染まっている。

いつの間にか、卓郎の体はがたがたと震えていた。

思い出すだけで、すぐ近くにその妖怪にいないかという恐怖に駆られてしまう。

突然の卓郎の変化に、ユキは戸惑いの表情を浮かべる。

「あ、あの、どうかしましたか」

「殺されたんだ」

えっ、とユキは瞠目する。

「僕の母さんと兄さんが、妖怪に殺されたんだ」

※

卓郎はユキに連れられて、大部屋の扉の前まで来ていた。

「くれぐれも失礼のないようお願いしますね」

「あ、うん……」

閉ざされた紅い扉を眺めながら、卓郎は不安げに頷く。

この先には、紅魔館の主である『お嬢様』が彼の到着を待っている。

卓郎は昨日の経緯をユキに話した後、お嬢様にも事情を説明してきますと言つて、いったん部屋から出て行つた。その間に卓郎はユキの

命令で、新しい着物に着替えたり、体を布で拭いて清潔にしておいたりと準備を進めておいた。

そしてユキが部屋に戻ってきて、お嬢様が来てもいいという許可をもらったので、こうして扉の前までやってきたのだ。

「それでは、入りますよ」

ユキが扉を叩いて先に中に入り、卓郎もそれについていく。

中には一人の少女が奥にある椅子に腰掛けていた。

足を組み、椅子の縁を利用して膝枕をしている。その横にある小さな丸テーブルには、湯気の出たカップが置いてある。

「ユキ。ご苦労だったわ。後ろに下がっていいわよ」

「はい。失礼します」

ユキは深くお辞儀をして、部屋の後ろに下がる。

高級そうな椅子に腰掛けた少女は、そのまま卓郎の方に視線を合わせる。

見かけは十歳前後の少女だった。しかし、背中から蝙蝠を彷彿とさせる羽根が生えており、人間ではないことは一目瞭然だった。髪は紫色に近く、桃色のふわふわとした帽子とおしゃれな服を着こなしている。

ユキの言う通り、いかにもお嬢様と感じさせるような風貌だった。

「ユキから話は聞いたわ。卓郎っていう名前なのね」

「はい」

「歳はいくつなの」

「十五歳です」

「なにか特別な能力とか持ってるのかしら?」

卓郎は首を傾げる。

「能力? どういうことでしょうか」

幼い少女は何度も目を瞬かせる。

「ふうん。どうやらあなたは純粹に普通の人間のようなね。そんな人間が妖怪の追跡から逃れられたなんて、ある意味、奇跡に近いね」

感心するように言い、幼い少女は足を組み直した。

「名乗るのが遅れたわね。私はここの『紅魔館』の主人、レミリア・ス

カーレットよ。これでも四百八十七年生きてきた正真正銘の吸血鬼よ。何の能力も持たない人間が、私と出会えるだけでも奇跡だと思いなさい」

「……吸血鬼、ですか」

ここでレミリアは口元を吊り上げ、ぺろつと唇を舐める。

「あなたの血、とてもおいしかったわよ」

「えっ」

「覚えているかしら。昨夜、偶然館の近くであなたは倒れている所を発見したのよ。私と、あなたの後ろにいるユキがね。もちろん、当初はあなたを血を全て吸い尽くすつもりでいたんだけど、途中で気が変わったっちゃってね」

レミリアは卓郎の包帯に向けて、指を差した。

「今は治療を済ませているからそこまで目立ってないけど、倒れている時のあなた、普通の状態ではなかったわ。体中に傷があって、泥まみれ、草まみれ。まるで何かから必死に逃げてきたような感じだったね」

昨晚のことが脳裏によぎり、卓郎は視線を落とす。

「そう思った瞬間、急に興味が出てきたのよ。どうして、この人間はこんな状態で倒れているのかって。だから、あなたを生かしてここまで運んできたのよ」

「そんな理由で僕を生かしたんですか」

「あら、もしかして死ぬつもりだったの？ だったら、すぐお望み通りにさせるけど」

レミリアは、やたら鋭利に尖った爪を掲げる。

殺気を感じて、卓郎は慌てて首を振った。

「い、いえ、そんなわけじゃないです」

「まあ、いいわ」レミリアは座る体制に戻る。

「話を戻すけど、私もここ最近いろいろと退屈していてね。なにか刺激的な話があればいいなって思って運んできたけど、どうやら私の予想は的中したようね。ユキの話を聞く限り、なかなか凄惨な話じゃないの。あなたを生かしておいて正解だったわ」

卓郎は頭を抱えて、嘆く。

「そんな……もう思い出したくもありません」

「こっちは治療までしたのよ。事情を知る権利くらいはあるわ」

先ほど布で拭いたばかりなのに、体はすでに汗でびしょ濡れである。

しばらく迷った末、ついに卓郎は「分かりました」と頷いた。

「それでいいの。じっくりと説明してちょうだい」

とはいえ、卓郎が知っている事実は少なく、記憶も曖昧な所が多かったので、説明自体はすぐに終わってしまった。

「卓郎の家族は、その殺された母親と兄の二人だけなのかしら」

事情を聞き終えたレミリアが、膝枕をしながら問う。

「はい。父さんは、僕が生まれた後に病気で亡くなりました」

「で、その二人を殺した犯人が、どうしてすぐに妖怪と分かったわけ？」

「手、です」

「手？」レミリアは首を傾げる。

「右手が紅く染まっていたからです」

卓郎は、自分の右手を掲げた。

「右手の手首まで、紅い塗料が塗られたように真っ赤に染まっています。それに僕、見てしまったんです」

「何を？」

「逃げようとした時、持っていた農業用具をその妖怪に投げつけてやったんです。そうしたらその妖怪、右手を一振りして、用具を全て真っ二つにしてしまったんです。今、思いますと、それが時間稼ぎになって逃げられたのかもしれないが」

妖怪の能力に関しては、レミリアもわずかに関心の態度を示した。

「ふうん。素手で物を切り裂く妖怪ねえ。そんな妖怪っていたかしら」

レミリアは、部屋の隅にいるユキに視線を移す。

ユキも首を傾げた。

「聞いたことないですね」

「うん。私も聞いたことがないわ」

「ただ、卓郎さんの住んでいる村は人里からだいぶ遠い所にありますからね。この世界の決まりごとをよく知らない新参者の妖怪が、誤って人間を殺害してしまったのではないのでしょうか」

「あり得るわね。まあ、事情はどうあれ二人の人間を殺してしまったんだから、奴らも黙っているはずないでしょ」

レミリアはいったん言葉を止めて、ふんと鼻を鳴らした。

「事情がどうあれ、その妖怪は裁かれるのは間違いないわね」

「どういうことですか」卓郎が問う。

「人間が人間を裁くように、妖怪にも裁く者がいるのよ」

「妖怪を裁く者？」

「そう。人間には人間の世界の決まりごとがあるように、この世界にはこの世界の決まりごとが存在してるの。そして、あなたの親族を殺した妖怪は必ずこの世界の決まりごとに則って裁かれるわ。この世界のことを、私たちは『幻想郷』と呼んでいるの。だから、あなたの件に関しては『そちら側』の者たちに任せておきなさい」

「でも、それじゃあ僕は……」

「ただの人間が、妖怪を裁くことはできないわ」

卓郎の言葉を遮るように、レミリアは断言した。

「まあ、当事者でもない私が言っても、納得できないのは仕方ないと思うけど。でも、だからといって、何の能力もないあなたが復讐を果たすなんて現実的に無理な話ね。返り討ちにあってしまうのが目に見えているわ」

彼女の指摘に、卓郎は無言でうつむく。

「悔しい気持ちはよく分かるわ。大切な親族が殺されているんだからね。でも、復讐なんてそんなくないことは考えないことね。死ぬ覚悟で行くのなら話は別だけど」

ここでレミリアは立ち上がり、卓郎の目の前までやって来た。

レミリアの身長は卓郎の肩までしかないので、どうしても彼女を見下ろす姿勢になる。だが、彼女から放たれる威圧感に、卓郎は目を合わせることすらできなかった。

吸血鬼の少女は、右手の人差し指を卓郎の左胸に置く。

「卓郎、これだけは覚えておきなさい。あなたの周りには、知ってはならないことが多くあるわ。あなたは能力を持たない、ただの人間。この世界では下の方に属するわ。下層の種族は下層の種族らしく、おとなしくしておいたほうが身のためよ」

卓郎は唾を飲み込む。

彼女は吸血鬼であること以外、その具体的な能力は分からない。

だが、もし少しでも彼女がその人差し指に力を込めれば、一瞬にして自分の心臓はその指に貫かれてしまうだろう――。そんな光景を容易に想像させてしまうような、圧倒的な力を肌で感じた。

レミリアはふっと口角を上げて、人差し指を引っ込めた。

「この話はこれで終わりにしましょ。信じるか信じないかは、あなた次第よ」

そう言って、レミリアは再び椅子の方に戻った。

「少し内容に欠ける所があったけど、なかなか刺激的な話だったわ。これなら合格点を与えてやったほうがいいね。ということ、今後の処遇に関して今回は特別にあなたに生かす選択肢を与えることにするわ」

「生かす選択肢？」卓郎は目を瞬かせる。

「そうよ。今日から一週間、あなたに自由な時間を与えるわ。とはいつても、紅魔館の中に限られる範囲だけどね。そして一週間後のこの時間、あなたは私これから言う選択肢の中から一つ選ぶのよ。まず、一つ目は紅魔館に残る選択肢。ただし、その場合はあなたの血を頂戴するよ」

「それってつまり……」

「あの時は私の気まぐれで生かしたけど、次は分かっているわね？」

卓郎は昨晚のことを思い出し、わずかに震える。

「そして二つ目。これはさつきと逆で、紅魔館から出ていく選択肢よ。もちろん、出ていった後の行動は全てあなたの自由。故郷の家に戻ってもいいし、人里に行つて職を探すのもいいんじゃないかしら。それでこれが一番重要だけど、もしここから出ていくんだったら、私はあ

あなたに傷一つ与えないと約束するわ」

「えっ。無傷で済むんですか?」

「紅魔館の主、レミリア・スカーレットの名にかけて約束は守るわ」

レミリアを眺めながら、卓郎は今までの言葉を頭の中で反芻させる。相手はあの吸血鬼だ。もしかしたら、今の選択肢には何か裏があるのではないか。

「来る者は拒まず、去る者は追わず」

彼の様子を見かねてか、レミリアが言葉を付け加えてきた。

「紅魔館の掟の一つよ。本来は妖精メイドに対する掟だけどね。本当かどうかは、後でユキにでも確認しておきなさい」

ここでレミリアはユキと視線を合わせる。ユキは無言で頷いた。

「さて、これで私の話は以上よ。今日から一週間、ゆっくり体を休ませながら今後の新しい人生について考えなさい。その末でやっぱ死にたいと望むなら、容赦なくあなたの血を吸わせてもらうわ。でも、生きたいのならその意思を尊重するわよ」

吸血鬼は椅子から立ち上がる。

「私の寛大な措置に感謝しなさい。それじゃあ一週間後、楽しみにしてるわよ」

そう言って、部屋から去っていった。

※

ユキに連れられ、卓郎は先ほどの部屋まで戻ってきた。

「良かったですね。一週間も考えられる時間をいただきました」

「うん。そうだけどね……」

卓郎は浮かない顔で口ごもる。自分は生かされることになりそうに安堵している反面、納得いかない所もいくつかあったからだ。

ユキはそれを察したのか、補足するように言った。

「確かに、お嬢様の言っていることは一方的な所もあつたと思います。でも、お嬢様がそう判断なさつたのなら、素直に応えるべきだと私は思います」

「そのお嬢様が、事件の当事者ではなかったとしても?」

「はい。お嬢様は人間以上に、この世界のことをよく知っております」



から」

そう言われると、さすがの卓郎も反論できなかつた。

彼女は吸血鬼である。卓郎にとって、吸血鬼も妖怪も同じような感じの印象でしかない。その彼女が言うからには、人間には知り得ない何らかの根拠があるのだろう。

その後、卓郎は食事の時間や睡眠の時間などについて、ユキから説明を受けた。

途中で、先ほどレミリアから言われた紅魔館の掟についてユキに確認してみたところ、それは本当だと即座に答えてくれた。

「なにかありましたら、私を呼んでくださいね」

説明を終えたユキは丁寧にお辞儀をして、部屋から出ていった。

ようやく一人になった卓郎は、すぐに部屋のベッドに横になる。

ベッドはふかふかで非常に心地が良く、生きている間にこんな高級寝具で寝ることができるとは夢にも思わなかつた。

その感触を確かめているうちに、改めて自分はこの一日で環境が劇的に変わってしまったんだと自覚した。一昨日までは、つぎはぎだらけの湿った毛布が卓郎の寝床だった。

そのうちに、これまでの生活が頭に蘇ってきた。

卓郎は人間の里から離れた場所にある、村の出身である。

彼が生まれてからすぐに父親が病気で亡くなり、母親が女手一つで卓郎とその兄である拓馬を育ててきた。歳の離れた拓馬が農業を手伝うようになった頃は、家の生活も安定しており、母親たちの勧めもあつて、卓郎は里の寺子屋に通うようになった。

しかし、長年の心労が祟って母親は体を壊し、さらに拓馬も事故で足を負傷し、満身に仕事ができなくなってから、家の生活は少しずつ悪くなっていった。寺子屋も一年足らずで辞めざるを得なくなり、卓郎は家の農業を手伝うことになった。

貧困で明日の生活もよく分からない中、昨日の事件が起こつたのだ。

一瞬にして、家族を失ってしまった。

今までの生活を振り返っているうちに、自然と頬に涙が流れてき

た。泣いている途中で、ようやく卓郎は実感する。

もう二度と、自分は家族に会えないのだと。

貧困に苦しんでいたのは事実だが、卓郎はこれまでの生活に大きな不満はなかった。

母と兄はどちらも真面目すぎる性格であったが、優しく卓郎に接してくれて、卓郎も二人の負担を少しでも減らそうと仕事に励んだ。体を動かす作業は苦手であったが、母さんと兄さんを支えるのは自分しかないんだと言い聞かせ、辛い作業にも耐えてきた。

ふと、窓の外を見てみると、すでに空は暗くなっていた。

これから自分はどうしていけばいいのだろう。

家族を失った悲しみの涙を、卓郎はいつまでも流し続けた。

紅魔館にやってきて三日目の朝となった。

目を覚ました卓郎は、自分が大量の汗をかいていることに気付いた。

またかと思いながら、彼は横になったままの状態でも額の汗を拭う。嫌な夢を見てしまった。

だが、具体的にどんな夢だったのかは忘れた。目が覚めた時、嫌な夢を見たかもしれない、という感覚だけが残っていた。

それでも昨日に比べたら、まだ今日はましだったかもしれない。

昨日は、例の妖怪に追いかける夢を見てしまった。

夢の中でその妖怪は、血に染まった右手を構えて、必死で逃げる卓郎をいつまでも追いかけていた。どんなに必死で逃げようと、その妖怪はいつまでも視界から消えることはなく、彼にとつてまさに生き地獄のような夢だった。

ふーっと深呼吸をしてから、卓郎はベッドから出る。

手前のテーブルには、すでに朝食と濡れた布が置いてある。眠っている間にユキが用意してくれたのだろう。

手ぬぐいで全身の汗を拭いた後、卓郎は朝食を摂った。今日もパンだった。

窓からは光が差し込み、紅に染まった部屋を照らしている。最初は目がちかちかして、非常に見えにくかった紅い景色も、さすがに三日目にもなると慣れてきた。

昨日は一日中、この部屋に引きこもって過ごした。

レミアと約束した日の夜、卓郎は一晩中泣き続けた。

そして泣き疲れて眠った次の朝、少しだけ気分が落ち着くことができた。

その代わり、今度は猛烈な倦怠感が襲ってきた。何もかもが面倒になってしまい、考えることはもちろん、食事を摂る気分にもなれなかったのだ。風邪でもないのにベッドに横になり、時々恐怖に震えな

がら、卓郎はぼんやりと一日を過ごした。

定期的に部屋にやってきたユキは、最初は心配そうに声を掛けてきたが、しばらくすると何も言わなくなった。

このように二日目は無為に過ごしてきた卓郎だったが、さすがに三日目となると、別の感情が湧き起こってきた。

——このままではいけない、と。

そして一つの考えが頭に浮かんだ時、ユキが部屋にやってきた。

「おはようございます。気分はどうですか」

「少しは落ち着いてきました」

卓郎の返事を聞き、ユキはにこっと笑う。

「それは良かったです。昨日の卓郎さん、ぼんやりとしてばかりで少し心配していましたから」と、安心した様子で食器を片づけ始める。

頼むなら今しかないと、卓郎は思い切って口を開いた。

「あの、ユキさん。一つお願いがあります」

「なんででしょう」

「僕の家族が本当に亡くなったのか、確認することはできないでしょうか」

ユキは作業している手を止める。

無駄なあがきであるのは承知の上である。

あの時、母と兄が倒れている姿を見たのは一瞬のことだった。

もしかしたら、それは卓郎の見間違いで、実は二人とも生きている場合があるかもしれないと思ったのだ。

もちろん、その可能性は限りなく低いと覚悟しているが。

「それは、二人の生存を私が直接、確認するということでしょうか」

「直接が一番いいですけど、無理はしなくていいです」

「そうですねえ……」ユキは考え始める。

この二日間で分かったことだが、ユキは妖精にしては非常に頭が良かった。

妖精という種族は基本的に頭が悪い。

何らかの能力を持っている代わりに、知能が人間以下なのだ。しかも、人間に対するいたずらを非常に好んでおり、卓郎の家も農作物を

盗まれたりと何度か被害に遭ったことがある。

しかし、ユキに関しては、その常識を改めなくてはいけないようだった。

「この目で確認するのは、やはり難しいと思います」

しばらく考えた末、ユキは口を開いた。

「でも、間接的に確認することはできると思います。お嬢様ですら久しぶりと言ってしまうほど、複数の人間が亡くなる事件はここしばらく無かったですからね。人里に行けば、詳しく事情を知っている人がいるかもしれません」

「じゃあ、そこから確認できますか」

「必ずとは断言できませんが、やるだけのことはやってみようと思います」

そう断言して、ユキはにこやかに微笑む。

頭が良いだけでなく、性格も非常に優しい妖精であった。

「ただ、今すぐ確認が取れるわけではありません」

申し訳なさそうに、彼女は付け加えてきた。

「次に私が里に行くのは明後日の予定ですので、どんなに早くても報告は明後日の夕方くらいになると思います。それでもいいですか？」

「もちろんです」

「分かりました。では、失礼します」

ユキは食器を片づけを済ませ、部屋を出て行った。

取り換えてもらった手ぬぐいを手に持ち、改めて自分の顔を拭く。

気持ちの整理はまだ完全についていないが、ひとまず動ける分には動いていこうと決心した。

※

まずは、紅魔館を適当に歩き回ってみることにした。

この二日間、卓郎は部屋にこもりっぱなしだったので、外はおろか屋敷の中ですら把握していなかったからだ。

歩き回っているうちに、館のいくつかの特徴が分かってきた。

一つ目は、窓が異様に少ないことである。

卓郎自身、この目で窓硝子を見たことはほとんどない。硝子も高級

品の一つで、寺子屋に通っていた時に里でちらほら見かけた程度である。

しかし、その卓郎ですら少ないと感じてしまうくらいの数しかなかった。

そして二つ目は、とにかく屋敷の規模が広いことである。

今まで卓郎が遭遇した広い建物は、せいぜい里の寺子屋くらいだ。しかし、それを軽く凌駕してしまうくらいの規模がこの館にはあった。下手に動いたら、すぐ道に迷ってしまいそうである。

「……あれ？」

そして、気付いた時にはもう遅かった。

予想外の建物の広さで、卓郎自身も道に迷ってしまったのだ。

慌てて今まで来た道を引き返したが、屋敷の中はこれといって特徴的なものが少なく、辿ってきた道もすぐに分からなくなってしまった。

どうしよう、と慌てながら周囲に目を配ると、あるものが視界に入る。

それはユキと同じように、おしゃれな制服を着た妖精メイドだった。その妖精は箒を持って、せっせと廊下の掃除をしている。

以前、ユキから軽い説明を受けたが、この紅魔館にはユキだけでなく多くの妖精メイドが働いているらしい。彼女以外の妖精メイドを見るのは、これが初めてのことだった。

「あの、すいません」

道を尋ねようと、卓郎が妖精メイドに近づいた瞬間だった。

びくつと妖精は驚いたように体を跳ねらせ、箒を放り投げて、そのまま空を飛んで逃げ出してしまったのだ。

「あつ、ちよつとー」

卓郎は呼び止めようとしたが、あつさり妖精は視界から消えていなくなってしまうた。

ほかん、と口を開けながら、彼はその場にたたずむ。

考えてみれば、この数日間でもとにも面と向かい合ったのはレミリアとユキだけなのだ。いきなり初対面の人間がやってきたら、さすが

の妖精も驚くだろうが、それでもあの態度はやや度が過ぎるのではないか――。

そんなことを頭の中で考えながら歩き回っていると、今度は大きな扉の前に辿り着いた。

扉の横に貼ってある金属板には、大きく『LIBRARY』という文字が刻まれている。卓郎には読めない種類の文字だ。

その扉を見上げながら、卓郎はつばを飲み込む。

ここは吸血鬼の館だ。主人から中を歩き回る許可があるとはいえ、油断するに越したことはない。

とはいえ、少しだけ様子を見てみよう、扉の取っ手を掴もうとした瞬間だった。

「あら。噂をすれば、そっちの方からやってくるとはね」

声は後ろの方からだった。卓郎は振り返る。

そこにいたのは、分厚い本を脇に抱えた一人の少女だった。

少女と推定したのは、身長が卓郎よりも下だったからである。

レミアと同様、ふわふわの帽子を被っており、腰まで伸びた紫色の髪が印象的である。ただ、レミアとユキにはあつた羽根が見当たらないことから、少なくとも妖精か吸血鬼の類ではないようだ。

「細かい話はレミイから聞いたわ。けっこうひどい目に遭ったらしいね」

「……あなたは？」卓郎は声を落として問う。

「パチュリー。私の名前はパチュリー・ノーレッジ。魔法使いよ」

「えっ？」

魔法使いという言葉に戸惑う卓郎をよそに、パチュリーは扉に手をかける。

「こんな所で立ち話をしてても仕方ないわ。せつかくだから、中に入れてさせてあげる。ここは私の部屋だから安心していいわよ、卓郎」

「僕の名前を知っているんですか」

「当然よ。ついさつきまでレミイと一緒に、あなたの話をしていたんだから」

「レミイ？」

「あら。もう忘れたのかしら」

目を細めて、パチュリーは巨大な扉を引く。

「この館の主人は、レミア・スカーレットっていう名前じゃない」

その直後、少しほこり臭い空気がこちらに流れ込んできた。

扉の先には、書物が所狭しと並べられた広大な空間が広がっている。

魔法使い。

卓郎も、村の噂でちらほら聞いたことがある。

この世界には、『魔法』という奇妙な術を扱う者が存在していると。そして魔法使いの手にかかれば一瞬にして雨を降らせたり、嵐を巻き起こしたり、挙げ句の果てには龍を呼び起こすことができるという噂をよく村で聞いていた。

卓郎自身、噂は噂だと捉えていたが、まさか本当に実在するとは思ってもみなかった。

しかも、先ほど彼女はレミアのことを『レミィ』と呼んでいた。つまり、パチュリーとレミアはだいぶ親しい関係であることが推測できる。

あの、強大な力を持つ吸血鬼とである。

「私の図書館へようこそ。さあ、入りなさい」

パチュリーに連れられ、卓郎は慎重な足取りで中に入っていた。

※

図書館の中は、呆れるほど広い空間だった。

少し窮屈と感じてしまうくらい本棚が並べられており、紙とほこりが入り混じったような匂いがする。部屋の高さも相当で、首をかなり傾げなければ天井が見えないほどだ。

先に進むと、本棚のない空間があり、そこにはテーブルと二つの椅子があった。テーブルと一方の椅子には本が積まれている。

パチュリーは何食わぬ顔で、本の積まれてない椅子に座った。

「そこにある本を全部どかして座りなさい」

「あ……はい」

とりあえず彼女の命令通りに本を動かし、卓郎は椅子に座った。



「人間を招待するのは本当に久しぶりでね。片づける暇がなかったのよ」

「この部屋にある本、全部パチュリーさんのですか?」

「そうよ。まだ全部は読み切っていないけどね」

澄ました顔で言うのと、パチュリーは本をテーブルに置いて開く。

レミリアとユキに比べたら、やや無愛想な感じの少女である。

何となく彼女の本を覗いてみるが、知らない文字で書かれてあった。

「それで話を戻すけど、どうして私の部屋の前にいたのかしら」

卓郎は頭を掻く。

「この館を見て回ろうとしたら、迷ってしまったんです」

「広いからね。あなたに限らず、ここに来たばかりの妖精も最初は苦労する——」

その時、パチュリーは言葉を止めて、横の方を向く。

視線の先には、蝙蝠と似たような羽根を付けた少女が、盆を持って二人のテーブルに来ようとしていた。一瞬、羽根の形からレミリアかと驚いたが、全くの別人だった。

その少女は不思議そうな目つきで、卓郎を見ている。

「例の人間よ」

パチュリーが説明をする。

「紅茶はそこに置いといて。あと、床に置いてある本は後で棚に戻しておいて」

「あつ、はい」

少女はパチュリーの横にそつと紅茶のカップを置き、そのまま去っていった。

どうやら、彼女には専属の部下がいるようだ。

「屋敷を歩き回れるようになったとすると、もうだいぶ落ち着いてきたのかしら」

「完全ではありませんが、それなりに落ち着いたと思います」

「レミィの話を聞く限り、だいぶひどい目に遭ったらしいわね。正直、人間は精神力の弱い種族だから、いつまでも落ち込んでいると思った

けど、そうじゃなさそうね」

「いつまでも落ち込んでても、仕方ないですから。それに――」

ここで卓郎は、家の生活を思い浮かべながら続けた。

「母さんと兄さんは、同じことで何度も何度も悩んじゃう人たちだったんです。例えば、僕はぜんぜん気にしてないのに、ずっと僕が寺子屋を辞めたことを自分たちのせいだと言ってました。だから、僕は同じことを長く引きずらないようにと決めました」

「反面教師ね。で、関係ない質問だけど、どうして寺子屋を辞めちゃったの?」

「家のお金が無くて……」

ふうん、と呟いてパチュリーは紅茶を口に含む。

こんなほこりの溜まっている場所でよく飲むことができるな、と卓郎は思った。

「だいぶ気分も落ち着いてきたのは確かのようにね」

カップを置き、ここでパチュリーは卓郎と目を合わせ、

「それなら話は早いわ。立ち直ったなら、さっさとこの館から出て行くことね」

静かに、そして力強く、そう断言した。

表情が固まる卓郎に対し、パチュリーは再び本に目を落とす。

「レミイとの約束を聞いたけど、一週間後には館を出ていくか出ていかないか決めなくちゃならないんですよ。出ていかない選択肢を選んだら、あなたはレミイの餌食となる」

ここでパチュリーは、卓郎に視線を動かした。

「一つ質問するけど、今、あなた死にたいと思ってるかしら?」

「えっ?」

「だから、死にたいと思ってるのかしら?」

卓郎は慌てて首を振る。

「そんな、死にたいだなんて……」

「そうよね。一週間も考える時間を与えられて、死にたいと答える人間はそういないわ。精神的な動揺は多少残っているかもしれないけどね」

胸がちくちくと痛むような感覚がした。

「じゃあ、ここで一つお題を出すけど、今の話を前提として、どうしてレミイがあんな選択肢を出したのか分かるかしら」

「選択肢ですか？」

「いいから、ちよつと考えてみなさい」

二十秒ほど考えてみて、卓郎は恐る恐る答える。

「もしかして、僕を確実に追い出すためですか？」

「ご名答。つまり、最初から選択肢なんて無かったってことよ。でも、レミイはすぐに出ていけとは言わず、わざわざあんな選択肢を作った。なぜだか分かる？ それは、あなたに気持ちの整理をさせる時間を与えるためのよ」

「そんな意図があつたんですか」

「だから一週間経つたら余計なことは考えず、レミイの気持ちを察して館から出ていくことね。分かっていると思うけど、レミイはかなり自尊心の高い吸血鬼よ。下手な返事したら、逆上して怪我じゃ済まないことになりかねないからね」

ためらいもあつたが、仕方なく卓郎は頷いた。

「今のところは出ていくつもりです」

「そう。それでいいの。ここは能力を持たない人間が居られる環境じゃないからね。あなたがこの目で確かめたように、この館は人間以外の種族が多く集まっていて、とても危険な場所なのよ。私たちがその気になれば、一瞬であなただを葬り去ることだってできるわ。下手したら、能力の高い妖精にすらやられてしまうかもしれないわね」

卓郎は唾を飲み込む。

「パチュリーさんは、たしか魔法使いでしたよね」

「そうよ。見た目は人間の姿をしているけどね」

ここでパチュリーの視線が、彼の腕に留まる。

「その腕の包帯、もう外しても大丈夫よ」

「えっ?」

「包帯よ。いいから騙されたと思って、外してみなさい」

パチュリーの言う通りに外してみても、卓郎は唾然とする。

彼の左腕は何事もなかったかのように、完治していたからだ。

ユキの話によると、湖で倒れていた時の卓郎の状態はともひどかったらしく、特に左腕の方は逃げている拍子に木の皮で深く皮膚を抉ってしまったようで、かなり出血がひどかったと聞いた。

この傷の治療を受けたのが三日前。

たった三日で、完治できるほどの怪我ではなかったはずだ。

「言い忘れてたわ。あなたの怪我の治療を行ったのは私よ。まあ、私は外傷に効く薬を渡しただけで、包帯とかの措置は全部ユキに任せただけだね」

平然と話すパチュリーだが、人間の使う薬では比べ物にならない効果だ。

人間が扱っている医療とは、明らかに次元が違う。とりあえず傷が完治していることが分かったので、卓郎は残りの包帯も外していくことにした。

ここで、初めてパチュリーは表情を緩めた。

「これは私の実力のほんの一部分よ。薬を作ること自体、そこまで得意じゃないのよ。むしろ、私は自然の力を応用した魔法を使うのが得意だね」

「じゃあ、村の噂で聞いた通り、雨を降らせたりすることもできるんですか？」

「噂の内容がいかにも農村らしいけど、それくらい容易ね」

「へえ……」

卓郎が感心している間に、横から再びパチュリーの部下がやってきた。

今度はカップの置かれた盆ではなく、一冊の本を手を持っていた。

「パチュリー様。頼まれた本を持ってきました」

「ありがとう」パチュリーは本を受け取る。

「それじゃあ、床に置いてある本を戻しておきますね」

部下の少女は積み重なった四冊の本を持つと、羽根をぱたぱた動かして空中に飛び、部屋の奥へと消えていった。その勢いに煽られて、部屋のほこりが軽く舞う。

「彼女は『小悪魔』というのよ。図書館で私の補佐の仕事をしてるわ」  
そう言つて、パチュリーは残りの紅茶を飲み干す。

「紅魔館にいる者は原則として、何らかの仕事が与えられているわ。ユキのように館の雑務全般を行っている者もいれば、館の門番を行っている者もいる。能力的な差で成果の度合いはみんなまちまちだけど、仕事を全く行っていない者はいないわ。あなたも農業をやっているなら知っていると思うけど、『働かざる者、食うべからず』ってことよ。この館は基本的に来る者は拒まないけど、あまりに足手まといになりすぎると、強制的に追い出すということもあるしね」

「じゃあ、パチュリーさんも何か仕事をしてるんですか?」

「私は普段、仕事という仕事はしてないわ。レミイとは昔からのよしみで、ここに住まわせてもらっているの。ただ、ここが吸血鬼の館である以上、吸血鬼の存在を快く思わない輩がいてね。たまに屋敷を襲ってくる時があるのよ。その時は——」

パチュリーの目に鋭さが増す。

「私の魔法で潰しているけどね」

その言葉に込められた威圧感に、卓郎は思わず体を震わせてしまった。

やはりこの魔法使いもこの館の主人と同様、ただ者ではない。

話を切るように、パチュリーはここで本をぱたと閉じた。

「無駄話をしすぎたわ。ここでやめましょ。ちなみに、ここ最近館を襲ってくる輩はいないから、安心して本を読んでいられるわ」

パチュリーは、机の横に置いてあった小型の鈴を鳴らす。

すると、十秒も経たずに小悪魔がやってきた。

「また悪いわね。彼を元の部屋に連れてってちょうだい」

「分かりました」小悪魔が頷く。

「では、案内します。ついてきてください」

小悪魔に連れられて、卓郎は図書館から出ようとした直後だった。

「なるべく、事件や館の事は忘れなさい」

背後から、パチュリーの声が聞こえてくる。

「忘れることが、今後のあなたのためなのよ」

そんなことできるわけがない、と思いながら卓郎は図書館を後にした。

それから、あつという間に一日が過ぎてしまった。

四日目の夜。夕食を食べ終わった卓郎は、部屋でユキの到着を待っていた。

今日のユキは里に買い出しに出かけており、他の仕事の関係で夜まで卓郎の部屋まで来れないらしいので、今日の夕食は別の妖精メイドが持ってきてくれた。

その妖精は短い桃色の髪が特徴的で、来るやいなや「あーもー。なんであたしがこんなことしなくっちゃなんないのよー」と愚痴を吐いてきた。

少し動揺しながらも、卓郎はせめて挨拶だけはしようと自己紹介をした。

「あたしはハルっていうの」

卓郎の紹介後、妖精はそう答えながら、皿をテーブルに置く。

今日の夕食はカレーライスだ。食べようと食器に手を伸ばした時、ハルがこちらを見ていることに気付いた。

「……なんですか」卓郎が訝しげに問う。

「ふーん。見た目はすごく弱そうなのに、よく妖怪から逃げ切ったなと思って」

小馬鹿にするような目つきで彼女は言う。

どうやら、すでに妖精にも事件の詳細が出回っているらしい。

「弱そうで悪かったな」言葉を崩して返す。

「これが火事場の馬鹿力というやつなのかもね」

やけに「馬鹿」の部分を強調して、ハルはそのまま部屋から出ていった。

少し嫌な気分になりながらも、気を取り直して卓郎はカレーを食べることにした。

食事は、この生活の中で数少ない楽しみである。

この紅魔館で出される料理は、どれも実家で暮らしていた時代では

到底ありつけないものばかりだったからだ。人里では、どれも高価な値段で売られている。

カレーライスもその一つだ。食べるのはこれで二回目である。

今のところ、出された中で一番気に入っている料理だった。食欲をそその刺激的な匂いと、ぴりつとした辛さとご飯との相性が抜群で、今回も卓郎はすぐに平らげてしまった。

水を飲んで一息ついたところで、卓郎は先ほど来たハルの顔を思い出した。生意気な妖精だったが、まだ他の妖精に比べたらましな扱いを受けた方である。

なぜなら昨日、紅魔館を歩き回って分かったことだが、この館の妖精メイドの多くは卓郎を避けている様子だったからだ。

小悪魔に連れられて部屋に戻った後、卓郎は再び紅魔館を歩き回ってみたのだ。無論、今度は迷わないように常に順路を確認しながらである。

その間に、ユキ以外の多くの妖精メイドと出会った。

みんな卓郎に近い年齢の女の子の姿をしており、できるだけ挨拶もした。

しかし、ほとんどのメイドは挨拶するや否や、すぐに逃げ出したり無視したりした。中には、いきなり「仕事の邪魔」と言われてしまうこともあった。

結局、誰とも親交を深めることができず、卓郎はがっくりと肩を落としながら、その日の探索を終了させたのである。嫌われるようなことをした覚えはないが、おそらく自分が人間であることが影響しているかもしれない。

そう思い返しているうちに、扉を叩く音が聞こえてきた。

はいと答えると、ユキが中に入ってきた。

「遅くなりました。一応、里でいろいろ話を聞くことができました」

「ああ、ありがとう」

「いえいえ。買い物のでだったので、そこまで苦労はしませんでした」

この時間にユキがやってきたのは、卓郎の家族が本当に死んでし



まったのかという、昨日の約束を果たすためである。

そして、ユキの苦しそうな表情を見て、何となく卓郎は気を引き締める。

「卓郎さんに、伝えなくてはいけないことがあります」

「……うん、いいよ」

「今日、里の方を歩き回って、事件の詳細を聞いてきました。そこで卓郎さんのお母さんとお兄さんは、事件で亡くなったとの確認がとれました。それぞれ違う場所で三人の人間から事件の詳細とお二人の名前が出てきましたので、まず間違いないと思います」

昨日の時点で、ユキには母親と兄の本名を伝えていた。

「里では、結構騒ぎになっている感じでしたね。ここ最近、複数の人間が妖怪に殺されるという事件が無かったものですから」

こみ上げてくる感情を殺して、卓郎は訊く。

「他に分かったことはある?」

「事件に詳しい人の話によりますと、妖怪退治の専門の人が卓郎さんの村に向かったらしいです。一通り現場を調べてから、その妖怪を探し当てると聞きました」

「妖怪退治の人が……」

そんな人がいるのかと、少し意外に思った。レミリアの言う通り、この事件は妖怪退治とやらの専門の人たちに任せておけばいいのかもしれない。

卓郎は続けた。

「僕が生きていることは、里の人たちには伝えたの?」

「さすがにそれはできませんでした。いきなり卓郎さんの生存を打ち明けても、里の人は誰も信じてくれませんしね。かえって、私にあらぬ疑いをかけられるかもしれません」

「言われてみればそうだね」

「話はこれで以上です。他になにか訊きたいことはありますか?」

「いや、特にないよ」

「そうですね。報告はこれで終わりです」

そう言って、ユキは扉の方向へと歩き始める。だが、扉の前でしば

らく立ち止まった後、意を決したように振り返ってきた。

「卓郎さん。今はとても辛いかもしれませんが」

悲しそうな口調に、卓郎は瞠目する。

「でも、辛いことばかりは続かないと思います。辛いことの後には、必ず良いことがあると私は信じています。あと三日の付き合いですが、何か頼みたいことがありましたら、遠慮なく私に言ってください」

卓郎が返事する暇もなく、ユキは「失礼します」と頭を下げて出ていってしまった。

彼女が去ったドアを眺めながら、卓郎は小さく笑う。

つくづく、ユキは真面目でしっかりしている妖精だなと思った。妖精らしい性格ではないが、そのおかげで少し心が軽くなったのは事実である。

卓郎はベッドに腰掛ける。

——もう、母さんと兄さんはいないんだ。

ユキの報告を受けて、改めて自分は独りになってしまったのだと自覚した。

涙は流さない。もう流さないと、先日の夜に決意したのだ。事件の傷は完全に癒えたわけではないが、いよいよ今後のことも考えなければならなくなってきたようだ。

だが、考えていくうちに、卓郎はどうしようもない虚しさを感じてしまった。

もう故郷の村に帰ることはできないだろう。

あの惨劇が起こった場所で一人で暮らせるとは思えなかった。だからといって人里に引越すにしても、どうやって生活していけばいいのか全く思い浮かばない。当てがないわけではないが、その場所に行くには少なからず抵抗があった。

ため息を吐いて、そのままベッドに横になる。

残された時間は、あと三日しかない。

※

翌日の朝、ユキに連れられて卓郎がやってきたのは、館の食堂だった。

目が覚めた時、いつもテーブルに置いてあった朝食がなかったので首を傾げていると、ユキがやってきて、今日は食堂でお嬢様と一緒に朝食を摂ると説明してくれた。

食堂も例に漏れず、窓の少ない部屋だった。

前方と後方に一つあるだけで、太陽の光がほとんど入ってこない。壁の至るところに置いてある燭台のおかげで部屋全体はとても明るかったが、あまり朝という感じはしなかった。

食堂には長方形のテーブルがいくつもあり、その一つにレミリアが座っていた。

「来たわね。見る限り、だいぶ元気そうじゃない」

「気持ちの整理は、まだ完全についたわけじゃないですけど……」

「結論は明後日に聞くとして、今は食事にしましょう」

卓郎は、レミリアと向かい合う位置に座る。

しばらくすると、二十人ほどの妖精メイドがやってきて各自テーブルに座った。

レミリアいわく妖精は飢えて死ぬことはないのですが、食事も交代で摂っているとのことである。妖精は生きるために食べるのではなく、嗜むために食べるらしい。

ユキの手から朝食が運ばれてきて、食事が始まった。

相変わらず美味しい料理に舌つづみを打っていると、後ろからユキがやってきた。

「卓郎さん。味はどうですか？」

「うん。すごくおいしいよ」

ユキの表情がぱつと明るくなる。

「ありがとうございます。普段、外から来る人にもあまり料理を振る舞う機会がないので、そう言われるとすごく嬉しいです」

「じゃあ、もしかして今まで僕が食べた料理って——」

「紅魔館の料理は、ほとんどユキが作っているわ」

「ここで会話を挟んできたのは、すでに料理を済ませたレミリアだった。」

「ユキは妖精としての能力が無い代わりに、知能がとても優れている

わ。おまけに大半の妖精が嫌がる繊細な作業も苦にならないから、料理の方もさせているのよ。もちろん、主軸は館のメイドをまとめる仕事の方だけだね」

「へえ。すごいですね」

「ありがとうございます」

ユキは照れながら笑う。

「——ところでユキ。話が変わるんだけど」

締めめの紅茶を飲みながら、レミリアが言う。

「ここ最近、新しい妖精メイドが入ってこないわね。先月も二人辞めていったけど、残りの妖精メイドに対して仕事の振り分けはできているかしら」

「各自の仕事量は増えましたが、振り分けはできていると思います」

「そうかしら。最近、妙に掃除の行き届いてない所があるんだよね」

その発言に、ユキだけでなく周囲の妖精メイドも一斉に表情を凍りつかせた。

即座にユキは頭を下げる。

「申し訳ありません。私の配慮が至りませんでした」

「別に気にしなくてもいいわ。メイドの人数も減ったんだから、調整もいろいろと難しいでしょ。私もあまりしつこく言うのは嫌だから、そこはユキに任せるわ」

「はい……。ありがとうございます」

再び頭を下げるユキに、レミリアは「じゃあ、よろしくね」と言い残して食堂を去っていった。

大きなため息をした後、ユキは食器の片づけを始める。卓郎たちのテーブルを済ませると、その食器を持ったまま今度は妖精たちのいるテーブルへ向かう。

リーダーも大変そうだな、と卓郎が思った瞬間だった。

がしやん、と何枚もの皿の割れる音が食堂に響いた。

音の方に顔を向けると、ユキが四つん這いの体勢のまま、呆然と散らばった皿の破片を眺めていた。その光景に、卓郎だけでなく他のメイドたちも一瞬、時間が止まったように動けなかった。

どうやら、ユキが皿を抱えたまま転んでしまったようだ。

「あつ……あつ……」

次第にユキは体を震わせる。

「ちよつと、ユキ。なにしてんのよー」

一人の妖精メイドが呆れ顔で言う。それは、昨日出会ったハルという妖精だった。

「ご、ごめんね。つい転んじやって」

「ちゃんと片付けておくのよー。もし、少しでもごみや汚れが残っていたら、お嬢様に叱られちゃうじゃない。ただでさえ、さつき注意されたばかりなんだし」

ハルの言葉に、周りの妖精メイドがくすくすと笑う。

「じゃあ、私は仕事に入るから、しつかり片づけておくのよー」

そう言つて、ハルは食堂から出ていった。

それにつられて、他の妖精メイドもぞろぞろと出ていく。あつけなく食堂は、卓郎とユキの二人だけになった。

居ても立ってもいられず、卓郎は席を立ち、散らばった食器を片づけ始める。

「た、卓郎さん。そんな、手伝わなくてもいいですつて」

「どうせこの後は暇だし、これくらいなら僕にだってできるよ」

ユキの言葉を無視して、卓郎は片づけに取りかかる。

やがて彼女も観念したのか、調理場から雑巾と掃除用具を持ってきてくれた。

幸い、割れた皿はそんなに多くなつたので、片づけは十分程度で終わった。床の汚れもきれいに拭き取り、すっかり元の状態に戻すことができた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いいよ、これくらい」

卓郎は扉の方に目を向ける。

「それにしても、他のメイドは冷たいなあ。せめて一人くらい、片づけを手伝うとかしてくれればいいのに」

「気にしないでください。私が悪いんです。まだまだ私はリーダーと

して未熟なので、これくらいのごことは自分で責任持たなくちやいけないですから」

「そう言われるとなあ……」

頭を搔く卓郎に対し、ユキは作り笑いを浮かべる。

——参ったな。何か元気づけることはできないかな。

そう考えているうちに、一つの案が浮かんできた。

「ユキ。今日は他にどんな仕事が入ってる？」

卓郎の問いに、ユキは目を丸くさせる。

「館の仕事だよ。どうせ今日も暇だし、何か体を動かす仕事があればいいな」

※

照りつける太陽に、卓郎は煩わしさと少しの懐かしさを感じてしまう。そういえば、外に出るのは五日ぶりのことだった。

卓郎は汗を拭い、てきぱきと草を抜いていく。

ユキが卓郎に与えてくれた仕事は、館の庭の草むしりであった。

もともとは二週間前に、妖精メイドが行う予定だったものである。しかし、生憎の雨で中止となってしまう、その後も行う機会がなかったらしい。おかげで庭の草もかなり長くなっており、手強い相手になりそうだった。

大変な仕事なので、当初はユキも心配そうにしていたが、卓郎は笑顔で大丈夫だと返した。農業をやっていたこともあり、こういった仕事は手慣れている。

三時間ほどで、結構な量の草を刈り取ることができた。

それを一つの場所に集めてみると、小さな山ができた。

ただ、この館の庭は卓郎一人ではどうしようもないくらい広かった。どんなに頑張っても、数日はかかるだろう。とりあえず、目の前に生えている範囲を済ませてから休憩しようかな、と考えていた矢先だった。

「お疲れ様です。気分はどうでしょうか」

後ろから声が掛かってきた。しかも、ユキの声ではない。

振り向くと、そこには赤髪の女性がいた。

初めて見る顔だ。背丈は卓郎よりも高く、赤い髪が腰まで伸びている。レミリアとパチュリー同様、帽子をかぶっており、そこには『龍』と書かれた星型の紋章が付けられている。

卓郎の驚く様子をうかがってか、女性が「あっ」と声をあげた。「すみません。自己紹介がまだでしたね。私はこの館の門番をやっている、紅美鈴といいます。卓郎さんの話は妖精メイドから聞きました」

「門番？」

それを聞いて、卓郎は先日のパチュリーの言葉を思い出す。

この館には、門を守る仕事を行っている者がいる。この五日間、卓郎はユキから立ち入り禁止と言われた場所以外は、くまなく館を歩き回ったが、そういえばまだ門の方は行ってなかった。

美鈴という名の門番は、卓郎が集めた草の山に目を留める。

「おおっ。数時間でこれだけの量はすごいですね。草むしりは得意なんですか」

「家が農業をやっていたので、これくらいなら平気です」

「あははっ。調子が良さそうね」

美鈴は笑顔を浮かべる。

月並みだが、太陽のような明るい印象の女性だった。

「今のところ、どこまでやるつもりなんですか」

卓郎は指でその範囲を示す。

「一応、これくらいです」

「じゃあ、そこまで私もお手伝いしますよ」

「えっ。でも、仕事中じゃないですか？」

「大丈夫です。今は一時的にですが、別の妖精メイドに任せています」

美鈴はしゃがみ込み、近くにあった草を掴む。

「素手のままでいいんですか」

卓郎は手に布を巻きつけて、鎌で草を刈るやり方を行っている。

「後で洗えばいいですし、この程度なら大丈夫ですよ」

そう言って、美鈴は軽快な動作で草を抜いていく。

驚いたことに、地中の深い所まで根が張っている雑草まで顔色一つ

変えず、片手一本で豪快に抜いていった。さすが館を守る門番といった所か、非常に力のある者だとうかがえた。

その光景を見るうちに、卓郎はある質問を試みたくなった。

「美鈴さん」

「はい」

「美鈴さんは人間ですか？」

「妖怪ですよー」

平然とした態度で答える。

何となく予想はしていたが、やはり美鈴も人間ではなかったのだ。

※

目標としていた範囲が終わり、卓郎と美鈴は一緒に休憩をとることにした。

場所は館の入口近くに設置してある、小さな丸テーブルだった。今日は心地よく過ごしやすい天気だったので、外で休憩することにしたのだ。

用意した冷たいお茶をテーブルに置き、卓郎たちは椅子に座る。

お茶を一気に半分まで飲み、卓郎は大きく息を吐く。

久しぶりに体を動かしたということもあって、全身に広がる爽快感はなかなかのものだった。

「ありがとうございます。おかげで早く終わりました」

「いえいえ。庭の管理は一応、私もやっているのです、たまにはちゃんと言わないと」

「へえ」と、少し意外に思いながら、卓郎は広大な庭を見渡す。

庭にある花壇は一応、手入れがしっかりされているようだったが、花壇以外の部分は多くの雑草が生えており、庭全体を見る感じではあまり景観は良くない。

「こんなこと言うと失礼かもしれないですけど、ちよつと庭が汚いですよね」

「ええ、まあ……。そこは私も承知しています。ただ、なにぶん本職が門番ですので、庭の管理は気が向いたらという感じでいいとお嬢様から命令されているんです。だから、草むしりといった、ほとんどの作



業はメイドに任せているんですよ」

「門番という仕事も大変そうですね」

先ほど、彼女は自分は妖怪だと話してくれた。

妖怪といえ、村では必ず人間に危害を加える者として恐れられてきた。

しかし、不思議なことに美鈴に対しては、そういった危機感はありません。むしろ安心感すら抱いてしまう。それは言うまでもなく、彼女の明るい印象からのものだろう。

「そういえば、いつまでいるんですか」

突然の美鈴からの問いに、卓郎は我に返る。

「えっ、なんですか」

「卓郎さんは、いつまで紅魔館にいるかということですか」

「ああ……。一応、明後日までの約束です」

「明後日なんですか。けっこう早いんですね」

「気持ちの整理ができるには、十分な時間だと思います」

「館を出た後の行き先とかも、ちゃんと考えているんですか？」

その問いに対し、卓郎は何も答えられない。

頭の片隅では理解していた。

だが、考えても考えても一向に具体策が思い浮かばないから、つい逃げ出してしまった。今朝、卓郎がユキに手伝える仕事はないかと申し出たのも、先の見えない現状から少しでも目を逸らしたかったのだ。

彼の様子をうかがってか、美鈴は慌てたような顔になる。

「ごめんなさい。別に悪気があつて言ったわけじゃないんです」

「いえ、気にしないでいいです」

「それで、どこか行き先の目処はついているんですか」

美鈴が声を落として尋ねる。

「一応、あるにはあるんですが、僕としてはあまりそこには行きたくないんです」

「どういうことですか」

「実は、人里には僕の伯父さんが住んでいるんです。昔はよく伯父さ

んの家に遊びに行っていましたけど、最近はいろいろありましてなかなか行けなかったんです」

「何やら、深い事情がありそうですね」

卓郎は苦笑いをする。

「僕の家はあまり裕福じゃありませんでした。特に、母さんと兄さんが満足に仕事ができなくなっただけからは家計も火の車で、しょっちゅう伯父さんからお金を借りていたんです。伯父さんの家も決して裕福な状態じゃなかったんで、最近はお母さんとお金の関係でけっこう口論になっていたそうです」

「そんなことがあったんですか」

「それに」

一拍置いて、卓郎は続けた。

「僕としては、これ以上、伯父さんに迷惑をかけたくないんです。ただでさえ伯父さんの家も苦しい状態なのに、そこに僕がやってきたら、ますます伯父さんを苦しめることになります」

「でも、行く場所は伯父さんの家しかないじゃないですか」

「そうなんですけど……」卓郎は視線を落とす。

「伯父さんの家に行くくらいだったら、里で職を探して暮らしたほうがいいんじゃないかって思うんです」

「卓郎さん、まだ十五歳でしたよね。雇ってくれる所なんてあるんでしょうか」

「分かりません。だから、いろいろと迷っているんです」

うーん、と美鈴は唸る。

「事件の詳細を知っていれば、卓郎さんの伯父さんも同情してくれるとは思いますがね。卓郎さんのお母さんとは、いろいろ喧嘩とかあったかもしれないけど、さすがにその恨みで卓郎さんをひどい扱いにさせるとは限りませんし。まあ、こればかりは私の想像なんて断言できませんけどね」

確かに、美鈴の言うとおりかもしれない。

伯父とは何度か面を合わせたことがあるが、卓郎の印象としては決して悪い人ではなかった。

むしろ、腹が減っているだろうと言って、数少ない食べ物を恵んでくれた優しい人だった。だからこそ、なおさら迷惑を掛けたくない。そうなると思えば働くという選択肢が出てくるが、これは先ほどの美鈴の指摘通り、彼を雇ってくれる場所があるのかが問題だった。下手したら、家で暮らしていた頃よりもひどい生活を強いられるかもしれない。

考えれば考えるほど、まともな選択肢が思い浮かんでこなかった。沈黙が続いた矢先だった。

「どうしてもだめだったら、紅魔館に残るといのはどうでしょうか」美鈴が発した言葉に、卓郎はぴくんと反応する。

「この館だったら、最低限の衣食住は保証してくれます。ただ、それは妖精メイドに限った掟なんで、人間の卓郎さんに通用するかは分かりませんがね」

「それは無理です。ここに残ったら、レミリアさんに血を吸われちゃいますから」

「どういうことですか？」

もしかして、レミリアとの約束の話までは聞いていないのかなと思いい、卓郎は細かい内容を説明した。

話が終わると、美鈴は困ったような顔をした。

「あー。その話は私も知りませんでした。ごめんなさい、余計なことを言いました」

「いえいえ。どうせ出ていく選択肢を選べば、その後の行動は自由ですし——」

と、ここで卓郎の言葉が止まる。

この瞬間、頭の中で一つの『新たな選択肢』が頭に浮かんできたからだった。

しかし、それはあまりに危険すぎると一瞬、自分自身でためらった。もし、下手なことをしたらレミリアに殺されかねないくらい、それは危険な選択肢だった。だが、不思議とそれがこれまでの中で一番しつくりとくる選択肢でもあった。

「卓郎さん。どうしましたか？」美鈴が首を傾げる。

「美鈴さん。紅魔館の中で、確かこんな掟がありましたよね。『来る者は拒まず、去る者は追わず』って」

「ええ。ありますけど、それがどうかしましたか」

「もしかしたら、ここに残れる方法を思いついたかもしれません」

「ええつ。本当ですか？」

美鈴は驚いたように顔を上げる。

「はい。でも、けっこう綱渡り的な方法なんですけど……」

卓郎は今思いついた方法を、美鈴に打ち明けてみることにした。話を聞き終わった彼女は腕組みをしながら、やや険しい顔つきになる。

「ちよつとそれは強引じゃないですか。よつぽど紅魔館に残りたいのであれば、やってもいいような気がしますが、本気で実行するつもりですか？」

卓郎は頬を掻く。

「さすがに今思いついたばかりなので、やるかどうかは分かりませんが、ただ、考える時間はありますので、なるべく早く早く決めようと思います」

「でも、期限は明後日までですよね」

「二日もあれば十分だと思います」

「そうですか……」

腕組みをしながら、美鈴はそれ以上何も言わなかった。ちよつど良く、お互いのお茶も飲み終わった頃だったので、卓郎はそのまま席から立ちあがった。すでに今日の目標は終わっているの  
で、後は部屋に戻るだけである。

「今日は手伝ってくれて、ありがとうございます」

「いえいえ。また何かあったら、遠慮なく私に言ってください。あと……」

美鈴はいったん口を止めてから続ける。

「さっきのことで、もしそれでもここに残ると決めたのなら、私に相談してください。できる限りのことはしますので」

「ありがとうございます」

再び礼を言って、卓郎はその場から去った。

紅魔館に残りたいという願望は、実は以前からあった。

残るとレミアアに殺されてしまうので、やむを得ずパチュリーの前では「出ていく」と答えたが、本当は心の中では留まりたいと思っていた。

彼女にあれだけ脅されたにもかかわらず、ここに残りたいと思っっているのは卓郎自身も少し不思議に感じていた。もしかしたら、この五日間で紅魔館を歩き回ったことで、何らかの心の変化があったのかもしれない。

約束の日まで残り二日。

あとはひたすら、自分自身に対して覚悟を問うだけだった。

あつという間に時間が経ち、ついに約束の日となった。

「きたわね。一週間前に比べて、ずいぶん顔色も良くなったじゃない」  
相変わらず高慢そうな態度で椅子に座るレミリアの前に、卓郎はた  
たずんでいた。傍にはユキがおり、状況としては前回と全く変わりが  
ない。

「約束通り、結論を聞かせてもらうわ。紅魔館を出ていくか、それとも  
死ぬか」

卓郎は大きく息を吐いてから、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ここを出ていくということに決めました」

その返答を聞き、レミリアは予想通りと言わせんばかりの態度で頷  
く。

「ここまでは何も問題はない。」

卓郎にとつて、ここからが本当の勝負だった。

丸一日、考えた末での結論である。

後悔はない。全ては自分の言葉にかかっていた。

「そして『紅魔館を出ていった』という前提で、一つお願いがあります」

卓郎の言葉に、レミリアは首を傾げる。

そして土下座の体制になった卓郎は、大きく言い放った。

「お願いします。ここで働かせてください！ 僕は普通の人間で何の  
力もありませんが、紅魔館のためにどんな仕事も進んでやっていくつ  
もりです。お願いします！」

さつきまで、余裕すら感じられたレミリアの顔が固まる。

傍で状況を見守るユキも目を大きく見開かせ、口を手で覆ってい  
た。

レミリアは「ははっ」と、笑い声をあげる。

「冗談はやめてちょうだい」

「冗談は言っていないません」

彼女の目に鋭さが増す。

「卓郎。それ本気で言ってるわけ？」

「本気です」

「もしかして一週間前の約束、忘れちゃったのかしら。もしあなたが紅魔館に留まるという選択肢を選んだら、容赦なくあなたの血を吸うって」

「それに関しては、先ほども言った通り『紅魔館を出ていく』という選択肢を選ばせていただきました。なので、レミリア様は僕の血を吸うことはできません」

「はあっ？」

がしやん、と丸テーブルにあったカップが割れた。

気付いたら、椅子に座っていたレミリアが卓郎の目の前に佇んでいた。

彼女の動きを全く目で追えず、卓郎は肝を冷やす。

「さっきから言ってることが矛盾してるわ。なんで紅魔館に残るくせに、私は血を吸えないとほぎくのかしら。訳が分からないわ」

「でも、レミリア様。一週間前、レミリア様自身が言っていましたよね。紅魔館から出ていく選択肢を選びましたら、その後の行動は僕の自由でいいと」

「言っただけど、それが何が——」

ここでレミリアが、何かに気付いたように言葉を止める。

好機だと思った卓郎は、ここで一気に言った。

「実はここに来る前、僕はいったん紅魔館の敷地から出ました。レミリア様の『紅魔館から出ていく』という約束に従いまして、紅魔館を出たのです。そして今度は、僕の個人的な意思で再び紅魔館に入りました。一週間前に交わした約束に従うなら、紅魔館を出て行った後ならば、僕の行動は全て自由ということでしたからね」

つまり、これで『紅魔館に留まる』という選択肢を選んだわけではなくなるので、レミリアは卓郎の血を吸うことができなくなるのだ。

紅魔館に戻ってきたのは、あくまで『出ていく』という選択肢を選んだ後の卓郎の個人的な意思である。

レミリアは大きく目を見開かせながら言う。

「あんた……自分の言っていることが理解できてるの」

「来る者は拒まず、去る者は追わず」

卓郎は一週間前、レミリアが言っていたことをそのまま返した。

「その言葉に従うのなら、レミリア様が僕を止める権利はないはずで  
す。僕は紅魔館を去った人間であると同時に、やってきた人間でもあ  
りますから」

卓郎は再び土下座をする。

「強引なのは承知しています。でも、ここで働きたいという気持ちは  
本物です。レミリア様の命令なら、なんでも聞くつもりです。お願い  
します！　どうか、ここで働かせてください！」

これが卓郎の思いついた、第三の選択肢であった。

一昨日に美鈴にも突っ込まれた通り、強引すぎるのは覚悟の上であ  
る。

しかし、これが卓郎にとって最も良いと思った選択肢でもあった。  
他に選択肢がなかったのも理由の一つだが、自分でも不思議なこと  
に紅魔館に残りたい気持ちが非常に大きかったのだ。

沈黙が流れる。

「顔を上げなさい」

ぼつりとレミリアが言う。

卓郎がそれに従った瞬間、首に強い衝撃を受けた。

レミリアが片手で卓郎の首を掴み、その顔を近づけてきたのだ。

「人間。調子に乗るのも、いい加減にしろよ」

怒りに染まった紅い瞳が、至近距離でぶつかる。

「あんた、自分の立場が分かってんのか？　いくら言葉で押し通した  
ところで、私があんたの命を握っていることに変わりないんだよ。つ  
まり、今ここで私が強引にあんたを殺すことだってできるんだよ。あ  
んたの詭弁を全て無視して、強引になっ——」

レミリアは首を絞める力を強くさせる。

だが、卓郎もこの程度では引き下がらない。

苦しくて満足な呼吸ができないが、視線だけは決してレミリアから  
離さなかった。額の汗がレミリアの腕に滴り落ちる。



場の緊張が、極限に達した瞬間だった。

——ふと、レミリアの手の力が緩まった。

「もしかして、卓郎がこうするのを知っていたんじゃないでしょうね」  
レミリアが発したのは卓郎ではなく、その後ろにある扉に向けてだった。

直後、扉が開かれ、そこから美鈴とパチュリーが部屋に入ってきた。  
美鈴はともかく、この場所にパチュリーが来たのは卓郎にとっても意外だった。

美鈴はやや困ったような顔でつぶやく。

「あはは……。やっぱり扉が閉まっていますが、気配でばれちゃいますね」

「門番。どこまで知ってたのかしら」

鋭い声でレミリアが問う。

「一応、全部です。あと、卓郎さんをいったん外に出させる手伝いもしました」

「すると、あなたが今回の陰の立役者ってこと？」

「結果論としてそうなってしまいますね。一応、止めはしましたが」

ここで、レミリアの手が卓郎の首から離れる。

それと同時に緊張の糸が切れた卓郎は、その場に座り込んで「げほっ、げほっ」と大きく咳き込んだ。

「卓郎さん！」

卓郎の状態を確認しながら、ユキはレミリアたちに目を配る。

「あ、あの、これは一体、どういうことでしょうか」

「なんてことはない。こいつは、うちの門番を保険にただけよ」

レミリアの答えに、ユキは「えっ」と声をあげる。

「あー。それは私の方から説明します」

美鈴が軽く手を上げた。

「実は昨日、卓郎さんに二つのことを頼まれました。一つは今日、お嬢様と会う前に一瞬だけでもいいから、紅魔館の外に出させてくれということでした。これはさつき卓郎さんも言っていたことです。そして卓郎さんの希望通り、ほんの少しの間だけ門の外に出させました。そ

してもう一つの頼みですが、それは途中でお嬢様が勢い余って自分を殺してしまわないように、こっそり裏で見守っていてくれということでした」

「で、その二つの頼みを承諾したというわけね」

「はい。最初は私もそんな無茶はしない方がいいと説得しましたが、卓郎さんの話を聞いていくうちに、彼は半端な気持ちでここに残るわけじゃないと感じましたので、最終的に私の方が折れました」

「確かに、ここに残りたいという覚悟は私も感じられたわ。一週間前は私を見るだけで震えていたくせに、今は生意気にも睨み返してきたんだからね」

レミリアの視線がパチュリーに移動する。

「パチエ。もしかして、あなたも最初からこのことを知ってたのかしら」

「私が見つけたのはついさっきよ」

パチュリーは、あからさまに大きく息を吐いた。

「うちの小悪魔が美鈴から聞いた話を、そのまま私に伝えにきたの。まあ、ここに来た時はすでに遅かったけどね」

「じゃあ、パチエはまだ反対の立場というわけね」

「ええ。願わくば、今すぐ出て行って欲しいくらいだけど……」

パチュリーは一瞬卓郎を睨みつけた後、諦めたように肩を落とすた。

「もういいわ。勝手にしてちょうだい」

そう言つて、扉を荒っぽく閉めて出ていった。

あれだけ出ていけと口を酸っぱくしていた彼女にとっては、不満を抱くのも当然だろう。

「もしかしたら、私はとんでもない曲者を拾ってきたのかもしれないわね」

ぽつりと呟いて、レミリアは再び美鈴に目を向けた。

「ねえ。どうでもいい質問だけど、もし私が本当に卓郎を殺してしまっていたら、あなたはどうしていたのかしら」

「私の知っているお嬢様は、その程度で簡単に人を殺したりしません

よ」

その答えに、ふっとレミリアは微笑む。

「なるほどね」

ようやく呼吸が落ち着いてきた卓郎に、レミリアは体を向けて言った。

「いいわ。ちょうど妖精メイドも少なくなっているところだったし、今回はその覚悟に免じて、あなたの主張を認めてあげるわ。ここで働いてもいいわよ」

この瞬間を待ち望んでいた卓郎は、即座に頭を下げる。

「はい。ありがとうございます」

「じゃあ、その上で問うけど——」

ここでレミリアは目を細める。

「もし、私がここで『今すぐ死ね』と命令したら、あなたは今ここで死ぬるかしら?」

あまりの問いに、卓郎は体を硬直させる。

レミリアは首を横に振った。

「冗談よ。そこまでの覚悟は求めてないわ。死んだら何の意味もないしね。ただ、偉大なるスカーレット家のもとで働くことになった以上、死ぬまでここにいるくらいの覚悟で望んで欲しいけどね。まあ、心がけはそれくらいにしろいて、これからのことを言うわ」

レミリアは腕を組む。

「卓郎、あなたは明日から館の『使用人』として働きなさい。いくら下等とはいえ、ただの人間に妖精と同じ仕事をやらせるのは少々もったいない気がするからね」

「使用人、ですか?」

「館にいる妖精メイドを統括する立場のことよ」

これには卓郎だけでなく、横にいるユキも驚きの顔を浮かべた。

「館の妖精メイドを、僕がですか?」

「そうよ。そしてこれが一番重要なことだけど、一ヶ月以内に館の妖精メイドから信頼を得られなかった場合は、あなたを紅魔館から追出すからね」

「ええつ。追い出すんですか？」

思わず声を張って返す卓郎に、レミリアは挑発的な視線を向ける。「あら。あなたはさつき、私の命令なら何でも聞くって言っただじやない。それに全ての妖精メイドを引っぱっていく立場に就くんだから、彼女たちとの信頼関係を早急に築くのは当然のことじやない。何かおかしいこと言っただけかしら」

「い、いえ……」

押し黙る卓郎を横目に、レミリアはユキに命令した。

「ユキ。あなたは今日から彼を助ける立場に回りなさい。あなたは確かに知能が優れているけど、それにも限界があるわ。最初は館のことを彼に教えるだろうけど、慣れてきたら彼の仕事を助ける立場に切り替えなさい。その瞬間は自分で決めるのよ」

「は、はい！」

ユキの答えを聞いてレミリアは頷き、出口へと体を動かす。

「あ、そうそう」

扉に手を掛けた時、思い出したように彼女は口を開いた。

「勘違いしないで欲しいけど、まだあなたを正式に使用人として認めたくはないからね。強引に紅魔館に入ったんだから、それ相応の結果を出さないと私たちも納得できないのよ。特にパチエは、明らかに納得してない様子だったしね。紅魔館の一員として認められたいのなら、それこそ死ぬ気で頑張りなさい。じゃあ、一ヶ月後に期待してるわよ」

レミリアが部屋を出た直後、室内にいた三人は一斉に息を吐いた。

「一時は、本当にどうなるかと思いましたよ」

美鈴が胸を撫でおろす。

「これも美鈴さんのおかげです。ありがとうございます」

「い、いえ。感謝されるほどのことはしてませんって」

それから美鈴は「では、頑張ってくださいね」と言い残して、部屋を出て行った。

本人は謙遜していたが、今回のことは間違いなく美鈴がいなければ成立していなかっただろう。彼女のためにも頑張ろうと思った。

そして卓郎は、まだ状況を完全に把握してない様子のユキに頭を下げた。

「——というわけで、今後ともよろしくお願いします」

「え、あつ、ええと……」

「うん？」

「私より卓郎さんの方が立場が上なので、そんな丁寧には話さなくていいと思います」

「ああ、そうだね。じゃあ、よろしく頼むよ。ユキ」

ユキはにつこりと笑って、丁寧にお辞儀をする。

「はい。お嬢様に認められるため、お互い頑張っていきましょう」

※

それから、あつという間に夜を迎えてしまった。

この日はユキに案内されながら、紅魔館を巡ることに費やされた。

この一週間の間に館中をぐるぐる歩き回ってきた卓郎だが、それでも初めて通る場所もかなりあり、改めて彼は館の広大さを思い知らされた。

妖精メイドへの挨拶は明日の朝食時にすることにして、今日の仕事は終わった。

部屋に戻った卓郎は水を一杯飲み、そのままベッドに横になる。

引き続き、部屋は今まで使っていた所を使用するということになった。最初は慣れなかったベッドや紅色に染まった壁は、今やほとんど抵抗がなくなっていた。

明日から、いよいよ本格的な使用人としての仕事が始まる。

いろいろと考えた挙げ句の選択肢なので、後悔はない。

ただ、使用人として働くことへの不安は指の数では足りなくらいあった。

しばらくウトウトとしていたが、なかなか寝付けなかったので、水を飲もうと卓郎はベッドから出る。

だが、テーブルの水入れはすでに空っぽだった。

仕方ないなと思い、卓郎は水入れを持って部屋から出る。記憶が正しければ、食堂の方に水を補充できるところがあったはずだ。

廊下の照明は半分ほど消えており、残った燭台からはぼんやりと紅い光を放っている。その暗さと明るさの対比が、不気味な恐怖を感じさせた。

そういえば村にいた頃、こんな怪談話を近所の老婆から聞いた。

それは、とある村に存在している流血屋敷の話だった。

屋敷の中は、壁や家具といったあらゆる物が全て赤く染まっていた。その理由が、屋敷に住んでいる老婆がその近くを通りかかる人々を次々と殺害し、その血をどんどん壁や家具に塗りつけていったからである。いつしか、周囲の人々はそれを流血屋敷と名付けた。

その話を思い出し、卓郎は小さく体を震わせた。

こんなくだらない話を、どうしてこんな場所で思い出してしまったのだろう。

卓郎は、慎重な足取りで食堂に向かっていく。

衝撃的な光景を見たのは、その直後のことだった。

「はあっ……はあっ……」

荒い息と共にやってきたのは、血まみれになったレミリアの姿だった。

一瞬、本当に妖怪がやってきたと思った卓郎は「うわあっ！」と、その場で大声をあげて尻もちをついてしまう。

レミリアは卓郎の姿を確認すると、わずかに微笑んだ。

「あら、こんな遅い時間に何をやっているのかしら」

「み、水を取りに……」

「ああ、そういうことね」

だるそうな目つきが、彼の持つ水入れに留まる。

レミリアに付いている血は、主に上半身に集中していた。

胸元は大きな紅い斑点が出来上がっており、口元からは今もだらだらと血が流れている。

卓郎の反応を窺ってか、やや焦点の定まっていな目でレミリアは微笑んだ。

「あら。そんなに震えなくてもいいじゃない」

「で、でも、血が……」

「ああ。これは私の血じゃないから安心なさい」

「じゃ、じゃあ、その血は？」

その問いに対し、レミリアは不気味な笑みを浮かべる。

「仮によ。もし、今日あなたが『紅魔館に残る』という選択肢をしていたら、この血はあなたの血だったかもしれないわね。それじゃあ、お休みなさい」

体に重りでも付いているような動作で、レミリアはゆっくりと横を通り過ぎていった。

彼女が去った後も、卓郎はしばらくそこから動けなかった。

一瞬、これは幻覚なんだと思いたくなかったが、床に滴り落ちている血がそれを否定させる。しかも、それがレミリアの血ではないとする——。それ以上は、卓郎も考えたくなかった。

彼女は人間でも妖怪でもない。吸血鬼なのだ。

もちろん、その割に優しい一面があることも卓郎は知っている。

だが、彼女が強大な力を持っている事実に変わりはない。彼の命はレミリアに握られているといっても同然なのだ。

その吸血鬼が住んでいる館で、自分は過ごさなければならぬのだ。

窓から見える月が、紅色になって映っているように見えた。

## 【06】第二章

翌日の朝、食堂の前には館の妖精メイド全員が集まっていた。

「今日からあなたたちのリーダーが変わったわ。名は卓郎。人間よ」

卓郎の横で、レミリアがメイドたちに説明する。

「知っているメイドもいると思うけど、彼は一週間前にここにやってきて、それから紅魔館で働きたいという意思を申し出てきたわ。念のため言うておくけど、彼は能力も何もない普通の人間よ。でも、使用人として見込みがありそうだったから、こうして雇ったというわけ。そういうわけで一ヶ月間、あなたたちも彼が使用人に足る人間がどうか判断してちょうだいね。あなたたちの意思によつて、彼を正式に使用人にさせるか決めるから」

ここで、卓郎は頭を下げる。

「卓郎といます。今日からよろしくお願いします」

妖精たちの視線が一気に集まる。

大勢の目が自分の方に向けられ、思わず卓郎は尻込みをしてしまった。

「ここからさらに簡単な説明をした後、レミリアは「じゃあ、あとはよろしくね」と言つて、そそくさと去つていつてしまった。

食堂の扉が閉められた直後、妖精たちが一斉にざわめいた。

「えーっ。嘘ーっ。ユキに代わつて、人間がリーダーになるの?」

「見た感じ、ぜんぜん頼りなさそうじゃない。あんな人間の命令を受けられるわけ?」

「なんかめんどくさいわねー。サボっちゃおうかしら」

あまり歓迎されていない様子に、どうしようかと卓郎は内心焦る。これまでの彼女たちの態度から何となく予想はしていたが、見事的中してしまったようだ。

すると、彼の隣にいたユキがぱんぱんと手を叩いた。

「ええと、卓郎さんは今日から働き始めるから、まだ分からないことも多いわ。だから、もうしばらくは私が指示していくからね」



ユキの言葉で大方の妖精メイドは黙ったが、一部のメイドはあからさまに不快そうな目つきで彼女を見ていた。

ここでユキは、鉛筆と一冊の小さな青い本を取り出した。

「じゃあ、今日の仕事を始めるよ。まずは買い出しに行きたい人、手を挙げて」

「はい。わたしやりますー」「わたしもー」何人かの妖精が手を挙げる。それを見て、彼女は本に書き込んでいく。

どうやら、仕事の振り分けは任意で行われているようだ。

「次、発光草が少なくなってきたから、それを採取しに行きたい人」

「はいはい！ わたしそれやる！」「わたしもです」これも何人かが手を挙げる。

「次は館の掃除ね。やりたい人いる？」

だが、これには誰も手を挙げなかった。どの妖精も「あんたが手を挙げてよ」と言わんばかりに、ちらちらと仲間の妖精に視線を向けている。

「誰か手を挙げないと、私が勝手に選んじやうよ。それでもいいの？」

ユキの問いかけにも、誰も応じる気配はなかった。

小さくため息を吐いて、ユキは桃色の髪の毛のメイドに目を向けた。

「ハルちゃん。たしか、ハルちゃんはここしばらく館の掃除をしてなかったよね。そろそろやった方がいいんじゃないかな？」

「はあ？ なんてあたしなの？」

ハルは不快そうに眉間に皺を寄せると、隣のメイドを指差した。

「館の掃除だったら、アキの方が最近やってないじゃん」

「ええっ。わたし？」

困惑しながら、アキと呼ばれた茶髪のメイドが答える。

「で、でも、わたしは門の仕事とかあるから……」

「それは知ってるわよ。でも、そっちの仕事をやりすぎて、掃除や洗濯をあんまりしないのは不公平じゃん。だから今日はアキが掃除やってよ」

「そう言うハルちゃんだって、最近よく仕事サボってるじゃん」

「そうよ！ サボり魔のハルが偉そうな口を叩くんじゃないわよ！」

アキにつられて、別の妖精メイドも割り込んでくる。

ハルはそのメイドを睨みつけた。

「はあっ？　いつ、どこであたしが仕事をサボったって言うの？　その証拠は？　証拠が無いんだったら、どの時間、どの場所であたしがサボっていたのか聞きたいわね」

「そんな細かいところまで分かるわけないじゃん！　ただ、ここ最近、仕事にあんたの姿をあんまり見かけないから、どっかでサボっているな、と思っただけよ」

「それじゃ、あたしが仕事をサボっているということにはならないわね」

挑発的な言動のハルは、ここで「あっ」と何かを思い出したように言った。

「そういえば昨日、四時過ぎくらいだったかしら。あんたがこっそり自分の部屋で隠れて紅茶を飲んでる所を見かけたわ。たしか昨日、あんたは廊下の掃除当番だったよね。これって立派なサボりじゃないかしら？」

その妖精メイドは表情を凍りつかせる。

「も、もしかして、見られてた？」

「外からまる見えだったわよー。あんたは隙がありすぎるのよ。偉そうな口を叩くんじやないわって言ってたけど、あんたみたいな奴に言われたくはないわねー」

「てめえっ！　能力を使いやがったなっ！」

その妖精メイドが、ハルに掴みかかろうとする。

さすがにまずいと察知したのか、ユキが慌ててその間に入り込んできた。

「ちよつと二人とも。喧嘩しないでよー！」

「じゃあさ。ユキはどうなのさー！」ハルが声を荒げて問う。

「ユキは、今日の掃除をアキにやらせたほうがいいって思わないの？」

「えっ、アキちゃんに？」

「そうよ。あたしよりアキの方がやるべきでしょ」

「え、ええと……」

ハルの強気な言動に押されてか、ユキは口ごもってしまう。

これはやむを得ないと思い、卓郎もユキたちのもとにやってきた。

「ユキ。もういいよ。あとは僕が命令するから」

「卓郎さん……」

「じゃあ、こうしようか」

卓郎はハルとアキの交互に目を配る。

これが初めての命令となる。

緊張はしたが、卓郎は思い切って言い放った。

「ハル。今日はお前が館の掃除をするんだ。そしてアキの方は、今日はいつも通りの仕事をするんだ。でも、明日に館の掃除をさせるからな」

「ええっ。あたしが掃除するの?」

納得いかない様子のハルに、卓郎は反論した。

「でも、ハルだってしばらく掃除をやってないんだろ。サボってるサボってないは別として、しばらく掃除をやってないのはハルもアキも同じじゃん」

「ええー。でも、めんどくさーい。ただでさえこの館、すごく広いんだし」

「そんなこと言うなよ。明日はアキが掃除するんだからさ」

また反論してきたらきりがないので、卓郎は強引に話を進めた。

「じゃあ、ハルは決まったということとして、他に掃除をやりたい人はいるかな。やる人がいなかったら、僕が適当に選んでいくよ」

何人かの妖精が、面倒臭そうに手を挙げていく。

それぞれの仕事に向かうまで、ハルは不貞腐ったような目で彼を見ていた。

※

夜、ようやく一通りの仕事を終えた卓郎は、重たい足取りで部屋に戻った。

仕事用の着物を床に放り投げ、就寝用の着物に着替える。

今日は特別に着物での仕事認められたが、しばらくしたら彼専用の制服が支給される予定だった。着慣れた服装で過ごす生活も、あと

少ししかない。

用意していた水を一杯飲んで、卓郎は重たいため息を吐く。初日からとても疲れた。とにかく、妖精メイドに翻弄されっぱなしの一日だった。

買い出しに不備があったり、掃除の行き届いていない所が多くあったり、妖精がなかなか言うことを聞いてくれなかったりと散々な有様だった。

特に夕食の完成が遅れてしまったのは、一番の失敗だった。

買い出しの不備でユキの調理を始めた時間が遅れてしまい、本来の時間から八分遅れで完成させたのである。幸いレミアは十分遅れで食堂にやってきたので、咎められることはなかったが、主人が来ないように祈った八分間は冷や汗が止まらなかった。

ともあれ、不測の事態は多くあったが、初日の仕事はこれで終わりである。さっさと寝て明日に備えようとした卓郎が、ベッドに潜り込んだ直後だった。

こんこん、と扉が叩かれた。

返事をする、ユキが慌てた様子で部屋に入ってきた。

「卓郎さん、大変です」

「どうした」

「今日の洗濯物が、まだ洗い切れてないことが分かりました」

「ええっ！」

卓郎はベッドから飛び起きる。

ユキの説明によると、二十着ほどのメイド服が洗い場のかごの中に放置されてあったらしい。紅魔館の妖精メイドは卓郎を含め、下着は各自の責任で管理することになっているが、それ以外の仕事服は全てその日の担当者がまとめて洗うことになっている。

「今日、洗濯したのは誰だっけ？」卓郎が問う。

考えられる原因として、今日の洗濯の担当者が仕事をサボってしまったか、もしくは自分たちの過失で、洗濯の仕事を誰にも振り分けなかったことが挙げられる。

「じ、実は……」

ユキはわずかに体を震わせながら言った。

「その書いた手帳を失くしてしまいました、誰だったのか分からないんです」

「ええっ。じゃあ、覚えてもないのか？」

「はい。私、覚えることは苦手で、だからいつも手帳に書いているんです」

「じゃあ、誰がサボったのかも分からないじゃん」

「すみません……」

卓郎はため息を吐く。

今にも泣き出しそうなユキを見てみると、咎める気力も起こらなかった。

「じゃあ、洗えなかった服はどうするんだ」

「明日の朝一に、私が責任を持って全て洗濯します。一応、メイド服はみんな何着か持っていますので影響はないと思いますが、朝一でやりますので、もしかしたら朝食を作る時間に間に合わないかもしれません」

それを聞き、卓郎はユキがここにやってきた理由を察した。

明日はユキが朝食当番である。彼は朝一でやる仕事はない。

しょうがないな、と卓郎は呟いた。

「じゃあ、僕も少しだけ洗濯を手伝うよ。朝食が遅れたらどうしようもないしね」

「すみません。私のせいで卓郎さんに迷惑を掛けてしまつて……」

「いいんだよ。気にしないで」

「はい。ありがとうございます」

ペこりと頭を下げて、ユキは部屋から出ていった。

洗濯自体は農家時代でもよくやっていたので問題はないが、明日は少しだけ早起しなればならないようだった。

それにしても、と卓郎は疑問に思う。

どうしてユキはわざわざ洗濯の手伝いを自分に頼んできたのか。

自分はまだ紅魔館に入ってきたばかりだ。それだったら経験豊富な妖精メイドに頼んだほうが、自分に頼むよりははまだ安心できるは

ずのではないか――。

※

翌日、ようやく洗濯物を洗い終えた卓郎は、あくびをしながら大広間に向かう。

結局、朝食を作る時間に合わなかったので、先にユキを調理場に行かせて、残りのメイド服は全て卓郎一人で洗うことになったのだ。

本当は手伝いで何人かの妖精メイドも呼びたかったが、あいにく適当な妖精が見つからなかった。しかも、館のメイド服はなかなか手では洗いにくい代物で、思っていたよりもかなり時間が掛かってしまった。

卓郎が食堂に入ると、すでに十人ほどのメイドがテーブルで食事を摂っていた。

「おはよう」

メイドたちに向けて、卓郎は声をかける。

だが、何人かのメイドが一瞬こちらを見たくらいで、誰も挨拶を返そうとせず、そのまま談笑を続けた。

少し注意しようと思ったが、朝一からそんな気分にもなれず、卓郎は一人寂しくメイドたちから離れた席に腰掛けた。幸い、その直後にユキが「おはようございます」と言って朝食を持ってきてくれたので、少しだけ気持ちが悪くなった。

朝食を終え、卓郎は紅茶を飲みながら一息ついていた時だった。

「あれ、私の分は？」

ユキが慌てた様子で、メイドたちのいるテーブルまでやってきた。

「ねえ、私の分の朝食はもうないの？」

その問いかけに、一人の妖精メイドが返した。

「あれ、ユキ。まだ食べてなかったの？」

「うん。卓郎さんの分で最後だったらしくて、今やっと気付いたの」

「今日はお嬢様たちの分を含めて、どんくらい作ったの？」

「たしか二十食くらいだけど……」

「じゃあ、足りなくなっただんじやない？ 今日は何つこうみんな食べ

に来てたし」

「ああ、そうだよね」しよんぼりとした顔で、ユキは頷く。

一連の会話を聞いて心配になった卓郎は、ユキのもとにやってきた。

「ユキ。大丈夫なのか。何も食べなくて」

これに対し、ユキは慌てながら笑みを浮かべた。

「安心してください。妖精は何も食べなくても死にませんので」

「そうだけど、せっかく手間かけて作ったのに……」

「いいんです。数が足りなくなるのは、いつものことですから」

「いつものことって、その度にユキは食べられないってことか？」

「あはは……。まあ、そうなりますね。みんなその時の気分でやってきますので、何食作ればいいのか事前に分からないんです。でも、それでいいんです。私が作った料理をみんながおいしく食べているだけで、私は満足ですから」

その愛想笑いに、わずかな悲壮感が入っているように感じた。

「じゃあ、私は残りの食器を洗ってきますので」

軽く頭を下げて、ユキが調理場に向かおうとした瞬間だった。

体の向きを変えた拍子に、彼女のメイド服から何かが床に落ちた。

「あつ、なんか落ちたぞ」

そう言いながら、卓郎が代わりに拾おうとする。

だが、途中でその手が止まってしまった。

ユキのメイド服から落ちたのは、ひどく汚れた一冊の本だった。そして、その青い色の表紙は卓郎も見覚えがあった。

「あつ……」

慌ててユキが落ちた本を拾おうとしたが、わずかに卓郎の方が早かった。

本を手にとり取って、素早く中身をめくってみる。だが、中身は砂やほこりがべったり付いて変色しており、途中の何項かは乱暴に破られているという有様だった。

わずかに読み取れる項を開いてみると、日付とメイドの名前、その日にメイドが行う仕事内容が書かれてあった。

予想通り、これはユキの手帳だった。

おそらく、掃除で使った後の汚水を浴びたのだろう。

卓郎の記憶が正しければ、昨日は綺麗な状態だったはずだが。

「返してくださいー」

強引にユキが取り返そうと手を伸ばすが、卓郎はそれを避ける。

「これ、昨日失くしたと言ったはずの手帳だよな。どうしてそれを  
持ってるんだ」

「今日の朝、見つけたからです」

「どこで？」

「……………」

「ユキ。答えてくれよ」

「ちよ、調理場のごみ箱の中に、です……」

半ば予想していたことであると同時に、嫌な寒気を卓郎は感じた。  
手帳をじっくり見てみると、昨日の日付の部分は完全に破られてい  
るようだった。これでは、昨日は誰が洗濯の担当だったのかが分から  
ない。

卓郎は汚れた手帳を、メイドたちの方に掲げた。

「おい、これに見覚えあるか？」

メイドたちは一斉に会話を止めて、その手帳に目を向ける。

真っ先に反応したのはハルだった。

「あー。それ、ユキの使ってるやつでしょ」

「今日の朝、調理場のごみ箱に入ってたんだ。たぶん、誰かのいたずら  
でこんなことになったんだと思う。誰か、心当たりのある人はいない  
かな」

いい機会だったので、ついでに卓郎は続けた。

「あと、昨日の洗濯当番が誰だったか覚えてる人はいないかな。昨日  
の洗濯当番がサボったせいで、僕とユキが代わりに洗ったんだ。覚え  
ていたら教えてくれないかな」

あまり期待せずに言ってみたが、ここでメイドたちは予想外の反応  
を見せた。

ほとんどのメイドが、くすくすと小さく笑い始めたのだ。



「あれー。昨日は誰が洗濯担当だったっけ？」ハルが言う。

「ごめーん。わたし分かんないや」別のメイドが言う。

「たしか、あんたじゃなかったっけ？」

「違うわよ。わたしは発光草を採りにいったのよ」

「そうだっけ？　じゃあ、誰がやってたのか分かんないわねー」

卓郎は思わず身震いをした。

彼女たちを取り囲む雰囲気に、一種の不気味さを感じてしまったからだ。

「そういえばさー。ユキ、また手帳よごされちゃったの？」

ハルの問いかけに、ユキはうつむいたまま何も言わない。

「これで何回目よ。いい加減、自分の扱うものくらいしっかり管理しなさいよ。あんたがしつかりリーダーの仕事してくれないと、あたしたちが迷惑しちゃうんだからね」

妖精たちは、さらにくすくすと笑う。

ユキは体を震わせて、うつむいたまま動かない。

嫌な予感が確信に変わった瞬間だった。

「な、なあ……」

何か言わなければと思った卓郎だったが、

「卓郎さん。お願いです。手帳を返してください」と、ユキに遮られてしまった。

どうすることもできず、彼女に手帳を返す。

「それじゃ、私は調理場の方に戻りますので」

ユキはうつむいたまま、駆け足で調理場に戻ろうとした瞬間だった。

目の前で奇妙な現象が起こった。

ユキの前に突如、テーブルクロスが出現したのだ。だが、駆け足の彼女がそれを避ける暇はなく、そのままテーブルクロスに足を引っ掛けてしまう。

「きゃあっー」という声と共に、ユキはその場で尻もちをついて転んでしまった。

きゃははははっ、とテーブルの妖精たちが一斉に笑った。

卓郎が慌ててユキのもとへ走る。

痛そうにお尻をさすユキを心配しながら、卓郎は彼女が転ぶ原因になったテールブルクロスに目を移す。当たり前だが、いきなりテールブルクロスが出現するはずない。

「おい、誰だ！ こんなことをしたのは！」卓郎は声を荒げる。

考えられるのは、この場にいる妖精メイドの誰かが何らかの能力を使ったことだった。

卓郎自身も何度か農家時代に、妖精たちの不思議な能力によって農作物を盗まれたりなど、悪質ないたづらを受けたことがあったのだ。しかし、ここで彼を制したのは意外なことにユキだった。

「卓郎さん、私は平気です。だから、そんなに怒らないでください」

「でも……」

困った顔を浮かべる卓郎をよそに、ユキはゆつくりと立ち上がった。

「本当に大丈夫です。みんながいたづらをするのはいつものことです。なので、あまり気にしないでください。それでは、今日も頑張ってくださいませ」

おぼつかない足取りで、ユキは改めて調理場へ進んでいく。

すれ違う瞬間、彼女の表情が涙ぐんでいるのを卓郎は見逃さなかった。

でも、かけてあげる言葉が見つからない。

ユキの後ろ姿を眺めながら、卓郎は言い様のない悔しさを覚えた。

※

二日目の卓郎の仕事は、館の掃除だった。

昨日の反応から分かるように、掃除はメイドたちの中では人気のない仕事である。

そして卓郎も、二日目においてその理由を身を持って体感することになった。

「ふう……」

ようやく廊下のごみを集め終えた卓郎は、ちりとりを使い、溜めたごみを回収する。

とにかく紅魔館は広いのだ。広すぎると言っても過言ではない。一階の廊下のごみを集めるだけでも、かなりの時間が掛かってしまった。

二階は他のメイドに任せているので、ひとまず廊下のごみ拾いはこれで終わりだが、今度は窓拭きと廊下に設置されている燭台の手入れをしなければならぬ。しかも、それと同時に、リーダーとして他のメイドにも命令も出していかねければならぬ。

自分の仕事をするだけでも精一杯なのに、それ以外のことにも目を配らなければいけないのだ。

お茶の一杯すら飲んでいる暇もない。メイドたちが掃除をやりたくないと言いつ張っていたのも、今なら少し分かるような気がした。

ごみ拾いを終え、卓郎は廊下の窓を拭く作業を入ろうとした時だった。

「あらあら。まだ掃除続けてんのねー」

生意気な声が聞こえてきて、雑巾を持つ手を止める。

やってきたのはハルト、ナツと呼ばれる目に矯正器を付けた青髪のメイドだった。やかましいハルトとは対称的の、どこか無愛想な印象があるメイドだ。

卓郎は顔をしかめた。

「そうだけど、お前たちは終わったのか」

「うん。今日は順調に発光草が集まったからね。予定よりも早く終わって帰ってきちゃったから、どうしよっかなーって考えてたところ」

ふうん、と答えながら、卓郎は水の溜まった桶に雑巾を入れる。

発光草とは、館の照明として使われる一種の燃料のことである。

卓郎の農村では、主に行灯や提灯などが照明として重宝されていたが、紅魔館は発光草と呼ばれる非常に特殊な草を照明として使っているのだ。

見た目は普通の草と変わらない。

だが、擦り潰して固めておき、そこに特殊な薬品を混ぜると、激しく紅色に発光するという不思議な性質を持っていた。

パチユリーいわく、発光草にしか含まれていない成分と薬品が化学反応を起こして発光すると述べていたが、卓郎にはよく理解できなかった。

その薬品はパチユリーにしか作れないので多少の手間がかかるが、発光時間が非常に長いので、規模の広い紅魔館では重宝されている代物だった。おまけに、ろうそくとは違い、火災の心配がいらぬのも大きな利点の一つである。

ただ、紅魔館から遠く離れた湿地帯でしか生育していないので、採取に少し手間がかかるのが大きな難点だった。

飛行能力を持っている妖精でさえ、朝早く出発しても、だいたい帰ってくるのは昼過ぎになってしまおうという。

それが先日、ユキに説明された発光草についての知識である。

農村時代はろくな照明もなかったもので、夜になると基本的に眠っていた卓郎だったが、これのおかげで夜になっても平気で行動できるようになった。その分、仕事の時間も増えるということだが。

どうやら、今日は予想以上に採取がうまくいったのだろう。

ある意味、卓郎にとつてそれは好都合だった。

「じゃあ、ハルたちには掃除を手伝ってもらおうかな」

「えーっ。せつかく早く終わったのにー。自分の仕事がのろいからといって、それをあたしたちにも押しつけるのって、リーダーとして恥ずかしくないんですか?」

「そう言うなって。二日目から、そううまくできるわけないじゃん」

「ふーっ。まったく、しょうがないわね」

大げさにため息を吐いて、ハルは言った。

「じゃあ、手伝ってあげるわ。ナツもそれでいいわよね?」

「まあ、いいけど」ナツは無愛想に頷く。

「で、私たちは何をすればいいのさ」

「窓拭きの方をやってくれないかな。僕は燭台の手入れをやるから」

「はいはい」

卓郎から雑巾を渡されたハルとナツは、そのまま羽根を使って飛び、卓郎の身長では届かない高さにある窓を、手慣れた手つきで拭い

ていく。

こういう時に限って、飛行能力を持っている妖精をうらやましく感じてしまう。

ほとんどの一階の窓を拭き終わった所で、卓郎は残りの窓拭きをハルに任せ、ナツと一緒に今度は燭台の手入れを行うことにした。卓郎では手の届かない位置をナツに任せて、それ以外の部分を彼が掃除していくというやり方である。

その最中、周りに誰もいないことを確認してから、卓郎は上にいるナツに目を向けた。

「ナツ。一つ訊きたいことがあるんだけど、いいかな」

「なんででしょうか」淡々とした声で返ってくる。

桶の上で雑巾を絞りながら、卓郎は尋ねた。

「ユキって、いつ頃からリーダーになったんだ？」

彼の上をひらひら飛んでいた妖精は、わずかに首を傾げた。

「いつ頃だったかな」

「知らないか？」

「ごめんなさい。わたしは詳しく知りません。わたしがここに来た時には、たしかユキはもう妖精メイドのリーダーをやったと思います」

「となると、ずいぶん長い間、ここのリーダーをやっているのか」

「そうかもしれないですね」

ふと、ここでナツは作業している手を止めた。

「たしか、こんな話を仲間から聞いたことがあります」

「なんだ？」

「ユキは紅魔館に来る前、だいぶ周りの妖精たちからいじめられていたそうです。ユキは何も能力を持っていなかったので、よくいじめの標的にされてたそうですよ」

「いじめか……」

頭で予想はしていても、いざ言葉で出されると、やはり重たい気分になってしまう。人間の世界と同様、妖精の世界でもそんなことがあるようだ。

雑巾を絞り終えた卓郎は、再び燭台を拭いていく。

「じゃあ、今日の朝にユキが受けたいたずらは誰の仕業だったんだ？」

「ああ、それはですね——」

その瞬間、ナツは目を大きく見開かせ、言葉を止めた。

「ナツ？」 卓郎は首を傾げる。

彼女の視線は、卓郎から少し左を向いていた。

卓郎もそこに目を向けてみると、奇妙なことに気が付いた。

いつの間にか、卓郎のすぐ横にあった桶が無くなっていたのだ。つい数十秒前まで、そこで雑巾を絞っていたはずの桶がである。

おかしいな、と思いつながら辺りを見回した瞬間だった。

頭上に突然、逆さまになった桶が出現した。

そして、桶の汚れた水が、そのまま彼にめがけて降ってくる——。抵抗する暇もなく、卓郎は汚れた水を頭から盛大にかぶってしまった。

その拍子に体の平衡を崩し、尻もちをついて転んでしまう。同時に桶も大きな音を立てて床に落ち、あたりは一瞬にして水びだしになってしまった。

「きやはははは！ 大成功、大成功！」

びしょ濡れのまま呆然とする卓郎の前にやってきたのは、ハルだった。

「おどろいた？ これがあたしの『あらゆる物を見えなくさせる程度の能力』よ。まあ、種明かしすると、周囲の色に合わせてその物の色を変えるだけだから、目を凝らせばすぐばれちゃうんだけどね。でも、見事に引つかかったわね！」

それを聞いて、彼はハルを睨みつける。

「じゃあ、朝のテールブルクロスはお前の仕業なのか？」

「そうよ。ユキの奴、きれいに転んじやうから、すごくいい気分だったわ。あっ、きれいに転んだといったら、この前の朝食の時もなかなかだったわね。皿が割れて、あいつが呆然としている姿を見た時は笑いを堪えるのに必死だったわ。あいつ、リーダーのくせにすごく間抜けだから、いたずらのしがいがあるのよねー」

哄笑するハルを見て、卓郎の中で一瞬何かが切れそうになった。  
しかし、理性が寸前で握った拳を抑えた。

ここでハルを殴ってはいけない。もし、暴力を振るってしまったら、もう二度とハルだけでなく、館のメイド全員が自分に従わなくなると理性が叫んだからだ。

だが、それでも卓郎は腹の底から湧き上がる怒りを抑えることはできなかつた。

そばに落ちていた桶を掴み、やけくそ気味に妖精たちとは逆方向に投げた。桶は勢いよく壁に激突し、その強烈な音にハルとナツはびくつと体を跳ねらせた。

「ちよ、ちよつと、なにやってんのよ」

焦った様子のハルに、卓郎は低い声で放った。

「おい。ちゃんとやつとけよ」

「えっ?」

「掃除だ、掃除! 誰がここを水びだしにしたと思ってるんだ!」

その怒鳴り声に、ハルは小さく悲鳴をあげた。

「そ、そんなに怒ることないじゃない……」

「何か言ったか?」卓郎はハルに鋭い視線をぶつける。

彼のただならぬ雰囲気、さすがのハルもまずいと察したようだ。

「あはは……。すいませんでした。掃除しときます」と、素直に従ってくれた。

ここでようやく、卓郎はびしょ濡れの体をどうにかしないと思っただ。持っていた布で試しに頭と顔を拭いてみると、布にびっしりとごみが貼りついていていた。

この野郎、と心の中で思いながら、卓郎はなるべく平静を保って言った。

「ちよつと部屋に戻って着替えてくるから、後は頼んだ。ちなみに、もし僕が戻ってきてからも床がびしょ濡れだったら、ちよつとした罰を与えるからな」

「はい?」ハルは目を見開く。

卓郎は微笑みながら、自分の額に手を当てた。

「頭突き。言っておくけど、僕、すごく石頭だから」

その罰は、寺子屋時代に一度だけ恩師から受けたものである。それ以来、その罰が怖くて必死で勉強していたことを覚えている。

ぼかんと口を開けるハルたちを背にして、卓郎は前に進む。

早く着替えないと風邪をひいてしまう。

びしょ濡れのまま、卓郎は駆け足で自分の部屋に向かった。



だが、現実には妙なところで意地悪だった。

翌日、額に濡らした布を置いたまま、卓郎はベッドで眠っていた。朝から妙に気分がすぐれなかった卓郎は、図書館に行つてパチュリーに相談してみた。すると、軽い風邪をひいているから休んだほうがいいという指摘を受けたので、レミリアに許可をもらい、今日は休養することにしたのだ。

風邪の原因は、おそらく昨日ハルに水をかけられたからだろう。すぐに対処したつもりだったが、この程度でこうもあっさり体調を崩してしまうと、さすがの彼も情けない気持ちで一杯になった。

ユキは「急に環境が変わつたんですから、体が疲れちゃうのも仕方ないですよ」と言ってくれたが、それでも気持ちは晴れなかった。

結局、その日は夜まで寝込んでしまった。

そのおかげか、夜になるとだいぶ体調も回復してきたようだ。

本来なら明日の朝まで寝続けるつもりでいたが、夜遅くにレミリアとパチュリーが部屋にやつて来たので、やむを得ず卓郎は起きることになった。

レミリアはティーセットの他に、果物の盛り合わせを持ってきてくれた。

ティーセットがあるということは、長くここにいるつもりなのか。それらを運んできたユキは、すぐに退室してしまった。

「ありがとうございます。今日は何も食べてなかったんです」

「お礼はいらないわ。ほとんどはここで私が食べるつもりだから」

「あ、そうですか……」

レミリアはふふつと微笑んで、椅子に腰掛ける。

パチュリーもレミリアの隣に座り、持ってきた本をそのまま開いた。

「ここに働き始めて三日経つけど、感触はどうかしら」レミリアが問う。

「めちやくちや厳しいです」

「でしようね。あれだけじゃじゃ馬が多いと、扱いも大変だろうしね」

「あはは……。そうですね」卓郎は苦笑いをする。

そのじゃじゃ馬のせいで、自分はこんな状態になってしまったのだ。

「ただ、扱いが大変だからといって、自分を見失うのはいけないわね」

ここでレミリアは腕を組む。

「まだ、ここにやってきて日も浅いから今回は見逃してあげるけど、もしまた館の壁や物を傷つけた時は、ちよつと痛いお仕置きをするから覚えておきなさいよ」

「はい。申し訳ありませんでした……」

ベッドの上で座ったまま、卓郎は頭を下げる。

彼が注意を受けたのは、昨日のハルとの件だ。

あの後、ハルは指示通りにびしょ濡れになった廊下の掃除をやってくれたが、一っだけ元に戻せないものがあつた。

それは卓郎が桶を投げた拍子にできた、壁の窪みだつた。

さすがに黙っておくわけにはいかず、その日の夜にレミリアに謝りに行つた。

幸い、今回の件についてはレミリアも許してくれたが、昨日の行動はいくらハルのいたずらが原因だつたとはいえ、自分でも浅はかすぎたと反省している。

「それで体の調子はどうなの？」

本に目を落としながら、パチュリーが訊く。

「だいぶ良くなりました。パチュリー様の薬のおかげです」

「そう。その調子なら、すぐに復帰できそうね」

以前、卓郎がケガをした時と同様、今回もパチュリーの薬のお世話になつた。

発光草の薬といい、パチュリーの紅魔館での役割は意外と大きい。

「あつ、パチエ。薬で思い出したんだけど」

紅茶をカップに入れながら、レミリアが口を開いた。

「そろそろ新しい錠剤を作ってくれないかしら。数が少なくなつてき

たの」

「あら。もうそんなに飲んじやったの？」

「そりゃあ、毎日飲んでるとね」

レミリアはティーポットの横にある小さな布袋を開いて、そこから一個の錠剤を取り出した。錠剤は紅色だ。それをぽとりと紅茶に入れて、かき混ぜ始める。

その光景をぼんやり眺めていると、レミリアがその視線に気付いた。

「どうかしたの？」

「いえ、その錠剤が少し気になりました」

「ああ、これね」

レミリアは布袋の端をつまんで、いくつかの錠剤をテーブルの上に放り出した。

「これはパチュリーお手製の、人間の血液成分が凝縮された錠剤よ。これを一日一錠飲まないと、吸血衝動を抑えることができないのよね」

吸血、という言葉に卓郎は大きく反応してしまう。

「吸血衝動とは、その名の通り人間を吸血したい欲のことよ。まあ、簡単に言っちゃうと人間の食欲や性欲と同じようなものかしら。この薬がないとすぐイライラしちゃって、しまいにはつい人間に噛みついてしまうのよね」

「噛みついてしまうんですか」

「でも、いちいち人間の血を吸うのも、すごく面倒なのよね。人間を調達するだけでも面倒臭いし、血は生臭いし、それだったら薬でごまかした方が効率的なのよね。だからパチュエに頼んで、こうして薬を作ってもらっているのよ」

「へえ、パチュリー様が……」

と、言ったところで卓郎は首を傾げる。

もし、レミリアの話が本当なら、先日のあれはなんだったのだろうか。

彼女が血まみれの状態で廊下を歩いていた時のことである。

「なんだか、あまり納得してない様子ね」

「ええ、そうですね」

「どうしてかしら？」

卓郎が先日のことを指摘してみると、レミリアは「なるほど」と頷いた。

「確かに、この前はついあなたに刺激的な所を見せちゃったわね」

「あれは一体なんだったんですか」

「想像に任せるわ。ただ、少しか言わせてもらおうと、さっきの吸血衝動に関しての話にはまだ続きがあつてね」

「続き？」

「どれだけ薬を飲んでも、どうしても欲求を抑えきれない時がたまにあるのよ。人間から直に血を吸いたいという欲求がね。減量中についておいしい食べ物を口にしちゃうように、頭では分かっているんだけど、どうしても我慢できなくなっちゃうのよね。その時は、私も面倒だけど外に出ているわ」

「僕を見つけたのも、その最中だったんですか」

「ええ、そうよ」

あの日、レミリアは湖の前で倒れていた卓郎を見つけた。

彼女の尖った八重歯が、自分の左肩を抉った時の感触は今でも覚えている。

「ただ、その人間がこの館で働くことになるとは想像できなかったけどね」

りんごを齧りながら、レミリアはつぶやく。

「で、私とレミィがここにやってきたのも、改めてその意思を確認するためよ」

ここでパチュリーがぱたん、と本を閉じた。

「数日間、ここで働いて分かったと思うけど、あのメイドたちを統括していくのは並み大抵のことではないわ。下手したら、誰も命令を聞かなくなっちゃうかもね。なんて言ったって、あなたは普通の人間だからね。中には人間の命令なんか受けたくないメイドだっているわ。それでも、あなたはここで働き続けるのかしら？」

「今さら何を言ってるんですか。これくらいで辞めるんですしたら、わざわざお嬢様の前で土下座なんてしませんよ」

強気な返答に、パチュリーは微笑む。

「それもそうね。じゃあ、これをあげてもいいかしら」

パチュリーは椅子から立ち上がると、二枚の紙を卓郎に差し出した。きた。

一枚は妖精メイド全員の名前が書かれた紙。

そしてもう一枚は、なぜか時間割が書かれてある紙だった。

「あなたのその意思に免じて、その紙をあげるわ。その紙の中に、妖精メイドに効率良く命令を出せる手掛かりが隠されているわ」

「手掛かり?」

「あなたが以前、寺子屋で授業を受けていたという話を聞いて、これなら馴染みのあるものかと思ってね。あなたのリーダーとしての発想力を試させてもらうわ」

ますます意味が分からなくなる卓郎の様子を見て、パチュリーは続けた。

「別に難しく考える必要はないわ。なぜ時間割が作られたのかを考えていけば、おのずと正解に導けるはずよ。正直、今のユキがやっているような命令の出し方じゃ、いろいろと欠点が多いのよね。でも、この方法ならその欠点を改善させることができるわ」

「まあ、だからと言ってユキがダメなメイドというわけじゃないんだけどね」

パチュリーの横で、レミリアが小さく息を吐いた。

「そもそも紅魔館は、昔からリーダーにふさわしいメイドがいなかったのよ。ユキをリーダーにさせたのも、ただ周りのメイドより知能が優れていただけでね。知能は周りのメイドに比べたらずば抜けてるけど、それでも人間や魔法使いには劣っちゃうのよね」

「そういうわけで、あなたを使用人にさせたのよ」と、パチュリー。

なるほど、と思いつながら、卓郎はこの数日間のユキの仕事を振り返ってみる。

レミリアの言う通り、確かにユキにリーダーの仕事をやらせるには

荷が重すぎるかもしれない。仕事の出来不出来はともかく、単純に性格が優しすぎるからである。

再び時間割の紙に視線を落とし、悩む卓郎にパチュリーが口を開いた。

「念のため言っておくけど、たとえ正解に導けたとしても、必ずメイドたちがそれに従ってくれるとは限らないからね」

ええっ、と卓郎は顎を上げた。

「それじゃあ、正解の意味がないじゃないですか」

「馬鹿ね。私はただ効率的に命令できる方法を提示したままで、それで必ずうまくいくとは限らないわ」

呆れたように彼女は言う。

「それに、なかなかうまくいかなかった時にこそ、リーダーの本領が試されるんじゃないかしら。たとえそのやり方がうまくいかなかったとしても、その都度、改善していけばいいじゃない。柔軟な発想が持てない人間に、ここにいる資格なんてないわよ」

パチュリーの静かな迫力に、卓郎は何も言い返すことができなかった。

「それじゃ、良い結果になれるよう期待してるわ」

残りの紅茶を一気に飲み、パチュリーは部屋から出ていった。

続いてレミアも「それじゃ、お大事に」と言い残して、そそくさとして出ていってしまった。空になった紅茶のカップと皿は、後でユキが片づけに来るようで放置されたままだった。

「結局、お嬢様が全部食べちゃったのか……」

ため息を吐きながら卓郎はベッドに横になり、改めて二枚の紙に目を通す。

とにかく、パチュリーに認められるには正解を見つけるしかないさそうだった。しかし、風邪で頭が回らないのもあるが、いくら考えても意味がよく分からなかった。

考えていくうちに眠気も襲ってきた。

今日はもういいや、と思い、紙をテーブルに置いて目を閉じる。眠りにつく前のもやもやとした意識の中、不意に先ほどのパチュリーの

言葉が蘇ってきた。

——なぜ、時間割は作られているのか？

その直後、彼の頭の中で寺子屋の光景が映し出された。

※

卓郎は十一歳から一年間、寺子屋で学問を学んでいた。

あの頃は家の生活も安定していたので、非常に充実していた時期だと言える。

毎日、家から一時間かけて人里に向かうのは大変だったが、それなりに寺子屋の授業は楽しかったので、あまり苦には感じなかった。

だが、この日の卓郎は眠気をこらえながら、黒板の内容を紙に写していた。

内容は歴史で、恩師は黒板を指差しながら熱心にしゃべっている。

彼は歴史や地理が非常に苦手だった。

文字の読み書きや算数の授業は好きだったが、歴史の授業になると、いつもあくびを噛み殺してやっていたのだ。

しかし、だからといって手を抜くわけにはいかない。

少しでもだらけている態度を見せれば、もれなく恩師の頭突きがやってくるのだ。それを回避するためには、演技でもいいから真面目に取り組んでいる姿を維持しなければならない。精神的につらかったが、恩師に怒られるよりはましだと思った。

ようやく終了の時間となり、恩師はゆっくりと教科書を閉じた。

「今日の授業はこれまでだ」

その言葉で、教室の空気が一気に軽くなった。

卓郎の隣に座っているカズタロウは大きく体を伸ばし、「早く遊びにいこうぜー」と大声で数人の友人を連れて、駆け足で教室から出て行ってしまった。

卓郎も道具の整理をし終え、帰ろうとした時だった。

「だいぶ暇そうにしていたが、そんなに私の授業がつまらなかったか？」

恩師が苦笑いをしながら、卓郎の前までやってきたのだ。

一瞬、怒られるのかと身構えたが、どうやらその感じではなさそう

だった。

「……つまらなくはないです」恐る恐る卓郎は答える。

「ほんとか?」

「でも、先生の話を聞いてると、頭がごちゃごちゃしちゃうんです」「ほう。となると、もう少し口頭での説明を簡単にさせるべきなのかな」

ここで恩師は、卓郎と向かい合う位置に座る。

「よし、今日は特別だ。お前が今日やった内容を理解するまで付き合っただけでやるぞ」

「ええーっ!」

「そう嫌な顔するな。言っておくが、私が一対一で教える機会は滅多にないぞ」

残っていた生徒も外に出て、教室は恩師と卓郎だけになった。

断る言葉も思いつかず、半ば強制的に卓郎は恩師と二人きりで授業をすることになってしまった。

卓郎の指摘を素直に受け取ってくれたのか、恩師の解説は授業の時よりも分かりやすく丁寧になった。当初は卓郎も理解することができたが、そう簡単に苦手意識を払拭できるわけでもなく、途中からかなりの苦戦を強いられることになった。

ようやく半分終わった頃には、空はだいぶ赤色に染まっていた。

「うーん。どうやら、お前は本気で歴史が苦手のようなな……」恩師は頭を搔く。

「先生。もう終わりにしていいですよ。僕のためだけにそんな時間を使わなくても」

「何を言っている。理解するまで付き合っただけでやると言ったからには、最後までやるぞ」

まだまだ諦めない恩師に、卓郎は思わず本音を漏らしたくなった。

「ねえ、先生」

「どうした」

「なんで歴史の授業をやらなさいといけないんですか?」

その言葉に、恩師の目が見開く。



「僕、いつも歴史の授業をやつてて思うんです。もつと読み書きの時間や、算数の時間があればいいのになつて。僕、算数とかが好きだから、その時間がいっぱいあれば、寺子屋の勉強ももつと楽しくなると思うんです。どうして歴史の授業もやらなくっちゃいけないんですか？」

「そうだな」

恩師は教科書を置いて腕を組む。普段はとても厳しい人だが、どんなささいな質問にも応じてくれる姿勢には、卓郎を含めて周りの生徒も好感を持っていた。

やがて、恩師は目を見開いた。

「卓郎。一週間のうち、歴史は合計何時間あるか覚えてるか」

時間割表を取り出して、卓郎はそれを数えてみる。

「四時間です」

「じゃあ、算数は？」

「四時間です」

「読み書きは？」

「……四時間」

「そう。それで分かったと思うが、時間割は好きなことも嫌いなことも平等に分けることができるのだ」

ここで恩師は、卓郎の隣の席に顔を向けた。

「カズタロウの場合はどうだろう。カズタロウは、お前とは逆に歴史が大好きで算数が大嫌いだ。もし、お前の希望通りに歴史の時間を減らして、算数の時間を増やしたらどうなるだろう。お前は喜ぶかもしれないけど、きっとカズタロウは嫌な顔をするだろうな」

言われてみれば確かにそうだと卓郎は思った。

「寺子屋はお前だけのものではない。ここにいるみんなのものだ」

強く断言して、恩師は卓郎の時間割表を手を持った。

「そして、その全員が平等に授業を受けられるには、この時間割という仕組みが絶対に必要なんだ。もちろん、他にも偏った知識を持たせないためにもあるし、生徒に効率良く授業を受けさせる目的のためにもあるがな」

「じゃあ、歴史の授業を減らすことはできないんですか？」

「当たり前だろ」 恩師は微笑む。

「私の理想としては、どの生徒も全ての授業を好きになってほしいんだが、なかなかそう上手くいかない。だから私は、苦手な奴でも楽しく歴史を覚えられるような授業を目指して、今日も頑張っているんだ」

そして、恩師は再び教科書を開いた。

「いいか。いくら歴史が苦手だろうと、お前にはしつかり今日の授業の内容を覚えさせるからな。そしてできるなら、その苦手を克服してほしい。私も最大限、協力するよ」

穏やかな顔で微笑みながら、恩師は彼の肩に手を置いた。

やがて、その表情が徐々におぼろげになっていく。

この瞬間、卓郎は目を覚ました。

窓の方を見ると外はまだ暗く、眠ってからそんなに時間は経っていないだろう。

ベッドから起き上がり、手で額を押さえながら、卓郎はつい先ほどまでの恩師との会話を思い出す。

——好きなことも嫌いなことも平等に分けられる？

その瞬間、卓郎の中で一つの着想が稲妻のように降ってきた。

忘れないうちに、彼は急いでテーブルにあつた二枚の紙を手持った。

それに目を通しながら、記憶の中で恩師が教えてくれた時間割の意味を改めて思い返す。そして何度も確認するうちに、自分の着想は悪いものではないという確信を得た。

ユキはこれまで、仕事の振り分けを任意で行ってきた。

しかし、それでは先日の掃除で誰も手を挙げなかったように、メイドたちが嫌う仕事にはなかなか数が集まらないという欠点を持っていた。

でも、この卓郎が考えた方法なら、それを改善させることができる。やってみる価値はありそうだった。

「よし」

二枚の紙を眺めながら、卓郎は決意を固めた。

※

六日目の朝、食堂は妖精たちのどよめきに包まれた。

メイドたちの前には、一枚の大きな紙が広げられてあったからだ。その紙には、紅魔館にいる全ての妖精の名前と、それと一緒に今日の仕事の内容が書かれていた。

「これってどういうこと？」

ハルの問いに、すっかり風邪も完治した卓郎が答えた。

「この紙に書かれてあるのが今日、みんながやる仕事だよ。今までは各自がその日にやりたい仕事を希望していただろ。でも、今日からこの表に書かれてある通り、あらかじめ僕が振り分けた仕事をやってもらうことにするから」

メイドたちは「ええーっ」と、ざわめいた。

「ウソ。私、今日掃除じゃない。なんでよー」表を見たメイドが嘆く。「わたしなんて料理よ。料理なんて、ほとんどやったことないのに」「うわー。警備の仕事か。今日は発光草を採りに行きたかったのになー」

彼女たちの不満の声を、卓郎は黙って聞く。

彼が行ったのは、メイドたちの一日の仕事を全て自分の手で振り分けることだった。つまり、その日の役割分担を全て卓郎が決めるということである。

例えば、今日ならハルは洗濯、ナツは掃除、ユキは警備の仕事をする。

そして翌日になったら、ハルは掃除、ナツは警備、ユキは洗濯といった具合に仕事を一日ごとにずらしていく。

これなら、どの妖精にもまんべんなく館の仕事をさせることができるのだ。

一日かけて考えをまとめた卓郎は早速、昨日の朝にユキにこの考えを提案した。当初はユキも驚いていたが、卓郎の説得で最終的には賛成してくれた。

そして昨日のうちに、仕事の役割分担表を二人で一気に作った。

卓郎にとっては三年ぶりに文字を書く機会だったので、最初はなかなか上手く書けず、途中までユキの力を借りながら紙に文字を書いていった。

完成した表は丸一週間分。傍目から見れば、それは寺子屋の時間割のようだった。それ以降の役割分担表も、空いた時間を使って随時作っていくつもりだった。

ばん、と卓郎は表を軽く叩いた。

「ちゃんと確認した？ 今日はこの表で書かれてある通りでいくからな」

困惑している妖精たちを代弁するように、ここでハルが口を開いた。

「ねえ。どうして、いきなりこんな表を作ったわけ？」

「これならみんな平等に仕事ができるからだよ」

「でもさー。それって、あたしたちの都合とか完璧に無視しちゃってるよね。リーダーとして、それは自分勝手すぎると思わないんですかー？」

「自分勝手？」卓郎は首を傾げる。

「別に無茶な命令はしてないと思うけど」

「リーダーはそう思うかもしれないけど、あたしたちはそう思うの。みんなだって、自分のやりたい仕事をしたいでしょ？」

ハルの問いかけに、何人かのメイドがうなずく。

彼女たちの言い分もよく理解できた。

確かにこの仕組みで行うと、その日の行動が全て卓郎によって決められる。少し極端なことを言うなら、彼女たちの自由を卓郎の手によって制限してしまうことになるのだ。

とはいえ、そう簡単に引き下がるわけにもいかなかった。

「でも、この方法なら、この前の時のように、いちいち今日の仕事を何にするかで争うことはなくなるし、誰がどの仕事をやっているのかも表にできるから分かりやすくなる。今までのように、ユキ一人で管理させるにはいろいろと限界もあったしね」

「そうかもしれないけど、それであたしたちが納得できるとでも思っ

てんの？」

「紅魔館の妖精メイドは、嫌な仕事だからといってやらないのか？」

この言葉にハルだけでなく、周囲のメイドも反応を示した。

「僕としては、嫌いだからといってやらないのはメイドとしてどうかと思うよ。もし、みんなが好きなお仕事だけやって、嫌いな仕事をやらなかったらどうなる？ 僕たちだけじゃなく、お嬢様やパチュリー様だってきつと嫌な顔をすると思うよ。掃除だって、誰もやらなかったら館が汚くなっちゃうじゃん」

主人の名前を出したのは効果的だったようで、メイドたちの顔に緊張感が出た。

卓郎は表情を緩めて続けた。

「まあ、僕だって正直、初めてのことだからうまくいくかどうかは分からないよ。でも、やってみる価値はあるんじゃないかな。みんな不満とか言いたいことはあるだろうと思うけど、今は騙されたと思ってやってみないか」

ハルはまだ納得いかない様子であったが、何も言い返してはこなかった。他のメイドたちも同様で、試しにやってもいいんじゃないかなという雰囲気は漂ってきた。

その時、茶髪のアキが手を挙げた。

「ねーねー、ユキちゃん」

「んっ？」

「ユキちゃんは、この仕組みにしちゃってもいいと思ってるの？」

ユキはこくりと頷いた。

「うん。卓郎さんの考えたことだから、きつと大丈夫だと思う」

「ふーん。だいぶ、リーダーを信頼してるのね」

ハルが小馬鹿にしたような口ぶりという。

そんな彼女を軽く睨んで、卓郎はぱんぱんと手を叩いた。

「よし。それじゃあ、改めて今日の仕事を始めるよ」

この言葉と共に、妖精たちはそれぞれの持ち場へと向かった。多少の反発はあったものの、無事にメイドたちを説得させることができたようだ。

ようやく緊張が解けた卓郎は、ふうーっと大きく息を吐いた。

「良かったですね。みんなやってくれまして」隣のユキが言う。

「うん。これでユキの負担も少しは減ると思うよ」

これまではユキが一人でメイドたちの仕事の管理を行ってきたが、今回からは卓郎とユキの二人がかりで管理を行うことに決めた。

なので、以前の洗濯騒動のように、誰がどの仕事をやっていたのか分からなくなるといふ事態はまず起こらなくなるだろう。

「もう、私が卓郎さんに教えることは無さそうですね」

「なに言ってるんだ。正直、まだ分からないことの方が多いよ」

「でも、さっきの卓郎さん。とてもリーダーらしくて、かっこよかったですよ。私がやっている時は、みんな私の言うことなんて聞いてくれませんでしたから」

「そうかな……。ありがとう」

照れながら礼を言った直後、卓郎はあることを思い出した。

「あつ、そうだ。ユキ。ちよつとここで待っていてくれ」

そう言つて、卓郎は駆け足で食堂から出ていく。向かうのは自分の部屋だ。そして食堂に戻ってくると、部屋から取ってきたある物をユキに渡した。

「はい、これ。新しい手帳だよ」

「え、これって……」

それは先日、仲間に汚されたものと同じ種類の青い表紙の手帳だった。昨日のうちにパチュリーから許可をもらつて、図書館にあった余りの手帳をもらったのだ。

「今度は汚されないようにしろよ」

ユキは嬉しそうにその手帳を掴んで、ぎゅつと体で包み込んだ。

「はい。大切にします。ありがとうございます」

卓郎が紅魔館で働き始めて、十日が経った。

さすがに十日も経つと仕事にも多少の慣れが出てくる頃で、最初はたどたどしかつた掃除や洗濯も少しはこなせるようになってきた。

制服もようやく完成して、これまでの着物からおしゃれな感じの服で仕事をするようになった。

ネクタイにワイシャツ、ウエストコート、スラックスなど、どれも十五年の人生で初めて聞くような名前の服ばかりだった。着物に比べたら非常に圧迫感を感じる服で、やや動きにくい所が難点だったが、そこはすぐに慣れた。

そして、肝心の卓郎が作った仕事の役割分担については、大きな問題が起ころうとしていた。

それは、メイドたちの「わがまま」が一向に改善されないことだった。

「卓郎さん。今日の確認が終わりました」

夜に差し掛かった頃、ユキが手帳を卓郎に渡してきた。

中身に目を通してみると、今日は七つの×印が付いていた。

この仕組みになってから、卓郎はユキと一緒に毎晩、メイドたちがしつかり今日の仕事を行ったのかを確認するようにしていた。

どうやら、今日は七人のメイドが仕事をサボってしまったようだ。

卓郎は困ったように言った。

「ちよっと多くなってるな」

一昨日は三つ。昨日は六つだったから、徐々に増えていることになる。

当初は誰が仕事をサボっているのかを明確にして、それを注意していけば、おのずとみんなしつかり仕事をしてくれるだろうと踏んでいた。

だが、事態はそう簡単にうまくいってないようだった。

卓郎とユキは、今日サボったメイドたちの所に向かった。

最初は、二階の廊下掃除を担当していたアキである。

廊下に掃除用具が放置されたままだったのを他のメイドが見つけた。卓郎に報告してきたのである。

そのことを指摘すると、あっ、と思いだしたように彼女は両手を口元に当てた。

「ごめんなさい。途中で疲れちゃったので、ちよつと部屋で紅茶を飲んでました」

「本当に紅茶を飲んでいただけだったの？」と、ユキ。

「じ、じつは気持ちよくて、ついうたた寝をしちゃいましたー」

えへへ、とアキは照れくさそうに笑う。卓郎はがくりと頭を落とした。

彼女は警備に関わる仕事ならやる気を見せてくれるのだが、それ以外の仕事になると、すぐにサボる傾向にあった。おまけに本人の性格が非常におっとりしていることもあり、あまりサボったことを気にしない所も少し問題だった。

とりあえず注意はしておき、卓郎たちは次の所へ向かった。

次はハルだった。今日のハルは食事の当番だったが、調理場に来なかったらしい。

そのことを話すと、ハルは珍しく謝罪の言葉を述べた。

「すいませーん。実はナツが洗濯と交換してくれないかって頼んできたんです」

「えっ。でも、調理場にナツはいなかったと聞いたぞ」と、卓郎。

「な、なんだってーっ！　じゃあ、あいつもしかしてサボったな」

「ということは、お前はナツの代わりに洗濯をやったということだな」

「はい。そうですよー」彼女は微笑む。

「そうになると、ちよつとおかしいんだよな」

「えっ？」

「だって、今日は僕も洗濯当番だったんだけど、ハルの姿は全く見かけなかったよ」

しまった、というような顔をハルは浮かべた。

アキよりもきつめに注意しておき、卓郎たちは次の所に向かった。



ちなみにユキの手帳には、アキの方も今日サボったメイド一覽にきっちり入っていたので、ハルの嘘は最初の段階でとくに見抜いていた。ハルはサボりの常習犯なので、警戒するのは当然である。

残りのメイドたちにも注意を済ませ、ようやく卓郎は今日の仕事を終えた。

ユキと「おつかれさま」の挨拶を交わして、部屋に戻った。

扉を閉めて、大きく深呼吸をする。

今日も疲れた。本当ならば、すぐにもベッドに横になって明日に備えたい所だったが、そうはいかない。

部屋に入って寝間着に着替えた卓郎は、そのままテーブルに置いてあった教科書を開く。これから毎日一時間、睡眠時間を削って勉強をするつもりでいるのだ。

本はパチユリーの図書館から借りたもので、内容はやや高度な漢字を取り扱った教科書だった。以前、仕事の役割分担表を作ろうとした時、なかなか文字を思い出せずにユキの助けを借りてしまったことがある。

この出来事で自分の学力不足を痛感した卓郎は、パチユリーに頼んで、今の自分に分かる内容の教科書はないかと尋ねてみたのだ。

「真面目な奴ね」と言われたが、彼女は快く教科書を貸してくれた。

勉強を行いながら、卓郎は今日のことを思い返す。

どうやったら、メイドたちに仕事を任せられるか――。

この問題の厄介な所は、何度も何度も卓郎が注意しても、メイドたちは一向に聞く耳を持たないということだった。アキはすでに二回もサボっているし、ハルも今日で四回目である。よっぽど、卓郎が来る前からサボることが日常茶飯事だったのか、妖精という種族の性質なのかは定かではないが、あまりよくない流れであるのは間違いない。

だからといって、メイドたちを傷つけるような方法はやりたくない。

「うーん……」

鉛筆を持つ手を止めて、卓郎は何か良い方法がないか考えた。

しかし、なかなか有効な手段が思い浮かばず、考えすぎても仕方ないと思い、勉強を再開させようとした直後だった。

こんこん、と扉が叩かれた。

はい、と答えると、中に入ってきたのはレミリアだった。

突然の主人の来訪に、卓郎は驚いた。

「お嬢様。こんな時間にどうかされましたか？」

「別にたいしたことではないわ。あなたに頼みがあつてやってきたの」

「頼みですか？」

ええ、と言つてレミリアは続けた。

「明日の夜、あなたに洗濯の仕事をしてもらいたいの。おそらく、そこにはユキもいると思うから、実質二人でやることになるわね」

「洗濯、ですか」

「言つておくけど、そこらへんのメイド服を洗えというわけじゃないわよ」

レミリアは自分の服をつまむと、口元を吊り上げた。

「私の服を洗うのよ」

※

十一日目の夜は、雲一つない満天の星空だった。首を大きく曲げて夜空を見上げていると、一瞬にして星の世界に吸い込まれそうな感覚に陥ってしまう。

だが、今の卓郎は綺麗な星空を堪能する気分にはなれなかった。

「お嬢様はもうすぐ帰ってきます。それまでもう少しでの辛抱ですよ」

彼の横にいる美鈴がつぶやく。

今、卓郎は紅魔館の門の前で、美鈴と一緒にレミリアの帰りを待っていた。

レミリアは現在、ユキを連れて外に出ている最中である。外出の内容については、まだ具体的に明言していないが、何となく嫌な予感を感じた。

普通の洗濯だったら、わざわざ卓郎を呼び出したりしないだろう。

そして、その嫌な予感は的中することになった。

「あつ、帰つてきましたよ」

美鈴の視線の方向に目を向けると、上空から二つの人影がこちらに降りてきた。一人はユキ、そしてもう一人は血まみれ姿のレミリアだった。二人は地面に着地する。

「お帰りなさいませ、お嬢様」先に美鈴が言う。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

目を逸らしたい気持ちを何とか抑えながら、卓郎も言葉を紡いだ。

レミリアは疲れたような目つきながら、口元を吊り上げた。

「ええ、ただいま。早速だけど、血が乾かないうちに洗濯してもらおうわよ」

そう言つて、そそくさと館の敷地へと進む。卓郎とユキもそれに続く。

館の玄関から最も近い大部屋に入ると、すぐにレミリアは服を脱ぎ始めた。そして下着姿のまま、血まみれの洋服と帽子を卓郎に投げた。

血生臭い匂いがして、わずかに顔をしかめた。

「ほら。さっさと洗いなさい。あと、今から私の方に顔を向けてはダメよ」

あらかじめ用意しておいた洗濯桶を使つて、卓郎は彼女から背を向けて洗濯を始めた。その直後、背後から「ユキは下着の方をお願いね。こっちも汚してしまつたから」という声と共に、わずかに布の擦れる音が聞こえてきた。

「それじゃあ、私が戻ってくるまで、しつかり済ませておくのよ」

その言葉と共に、がちやりと扉の閉まる音が聞こえてきた。

卓郎は石鹸を使つて、慎重かつ素早い手つきで服を洗つた。もし服を傷つけたり、汚れを残してしまつたりしたら、レミリアの機嫌を大きく損ねてしまう。

これが今日、レミリアが卓郎に与えた仕事の内容だった。

仕事自体は決して難しいものではなかったが、精神的にはなかなか辛い仕事であつた。

この血を持った人間は、今ごろどうなっているのだろう……。洗うたびに桶の水がどんどん真っ赤に染まっていく光景は、見ていて気持ちの良いものではなかった。

ようやく服を洗い終え、ユキと休憩している最中にレミリアが部屋に戻ってきた。洗っている間に新しい服に着替えたようで、赤い血は一滴もついていなかった。

「ごくろうさま。時間も余っていることだし、少しお茶にしましょ」  
別の妖精メイドにお茶を用意させ、卓郎とユキはレミリアと向かい合う席に座った。

紅茶を一口飲んでから、レミリアが問う。

「卓郎。初めてやる仕事だったと思うけど、どうだったかしら」

「少し大変でした」

「血まみれの服を受け取った時、すぐくおびえた目をしてたじゃない」  
「ええ、まあ……」

「かなりの頻度でやる仕事じゃないから安心なさい。せいぜい月に一、二回くらいね」

「そうですか」

卓郎はうつむいたまま紅茶を飲む。

彼の様子をうかがいながら、レミリアが呟いた。

「なんか、すごく疲れた顔をしてるわね」

「体調でも悪いのですか？」ユキは心配そうな目で見つめてくる。

「いや、そういうわけじゃないんです」

卓郎は慌てて手を横に振る。

どうしようかと一瞬迷ったが、思い切って言うことにした。

「あの、お嬢様」

「なにかしら」

「今日はどちらまで行かれたんですか？」

その質問に、彼女の手が止まる。

これでもだいたい内容を遠回しにした方だ。

本当ならば血を吸った人間はみんな殺してしまうのか、どのようにして吸っているのかと、もっと直接的な質問をしたかった。

レミリアは不敵な笑みを浮かべた。

「そんなことを知って、何になるのかしら」

「そ、そうですね……。おかしな質問をして、申し訳ありません」

「今日は人里から少し離れた村まで行っただわ」

えっ、と戸惑う卓郎にレミリアは続けた。

「そうしたら、ちょうど良く歩いている人間を見つけたの。おそらく盗賊か何かの類でしょうね。こんな遅い時間に提灯も持たずに歩いている人間なんて、だいたい予想がつくわ。その後のことは、あなたの想像に任せることにするわ」

卓郎は唾を飲み込んだ。あまり考えたくないことだった。

レミリアは小さく息を吐いた。

「でも、最近の人間はみんな人里に集中しているから、探索もやりにくくなってるのよね。人里の近くは妖怪に対する防御も固くなっているし」

「ああ。人里に集まっている話は、僕も聞きました」

これは、卓郎の住んでいる村にとっては大きな問題であった。

近年、悪質な妖怪に対抗するため、人里は以前よりも防御を固めるようになった。

それを受けて、幻想郷の各地に住んでいる村の住人が、安全を求めて里に移住するようになってきたのだ。卓郎の村でも同様のことが起こっており、村の人口もどんどん減少傾向になっている。最近では、里の者がわざわざ各地の村にやってきて里への移住を勧めているという噂も聞いたことがある。

「まったく、おかしな話だと思わない？」レミリアが呆れたように言う。

「なにかですか」

「昔から人里は人間だけじゃなく、妖怪の出入りも認めているのよ。人間と妖怪の共存を目指しているとか言っているくせに、肝心の人間がこのような態度をとってくるんだからね。妖怪が嫌なら、嫌だとはつきり言えばいいのにね」

——人間と妖怪が一緒に暮らすなんて、できるわけないじゃない。

これは以前、卓郎の母親がつぶやいていた言葉である。

卓郎は幻想郷の歴史には詳しくなかったが、レミリアの言う通り、昔から人里は人間だけではなく妖怪も積極的に出入りしていた。

もちろん、人間に危害を加えるために里に来ているわけではない。

だいたいは買い物のために来るので、妖怪が商店の主人と値段交渉している姿は、人里では割とよく見かける光景となっている。だから、妖精メイドも堂々と人里で買い出しができるのだ。

ただ、必ずしも妖怪とは穏便な関係が続いているわけでもない。

妖怪による人間殺しはほとんど無くなったが、相変わらず妖怪によつて怪我をする人間は後を絶たなかった。

一年前には、卓郎の近くの村に住んでいる陶芸家が人喰い妖怪に襲われてしまったことがある。陶芸家は命からがら逃げ切ることができたが、左腕を丸ごと持つていかれてしまい、二度とろくろを回すことができなくなってしまった。

襲われる側の人間と、襲う側の妖怪。

人間と妖怪との間に、どんな歴史的な取引があったのかは知らない。

ただ、何とも奇妙な関係が人間と妖怪にあるのは確かだった。

「もしかしたら、この世界の人間はみんな人里に集まってしまうかもしれないわね」

レミリアの言葉に「そうかもしれないですね」と、卓郎も同意する。

「まあ、一つの場所に集まるのは一向に構わないけど、もし里の防御力を超える脅威がやってきたら、中の人たちはどうやって対処するのかしらね」

「脅威、というのはどういうことでしょうか」

「例えば、強力な妖怪が里に襲ってきた時とかね。下手したら、里の人間が一気に全滅しちゃうかもしれないわ」

「そうならましたら、お嬢様にとつても深刻な問題になりそうですね」

「ふふっ。そうね。あなた以外の人間が全滅しちゃうんだもんね。そうなるよ、今後は卓郎からでしか血を吸えなくなっちゃうわね」

嫌な冗談に、卓郎は苦笑いするしかできなかった。

レミリアはカップを持ったまま部屋を見回した。

「深刻な問題が人里に起こったら、私も少しは人間が生き残るように協力しちゃうかもね。例えば、紅魔館の一部の部屋を人間に貸したりとかね」

「これだけ広い屋敷でしたら、かなりの人が入りそうですね」

「まあ、よほど物好きな人間でないと、こんな紅い館に滞在しないと思うけどね」

「……物好きな人間ですか」

それは自分も含まれるのかと思いつつ、卓郎は紅茶を飲む。

外面はともかく、この館は非常に広いことは確かである。現在、卓郎を含めて多くの妖精メイドが住んでいるが、それでもかなりの部屋が余ってしまうほどだ。

「で、話は変わるけど——」カップを置き、レミリアは両手を絡めた。「新しい仕組みを作って六日が経つけど、メイドたちの感触はどうかしら？」

「まあまあという感じですね。真面目なメイドはしっかりとやってくれますけど、一部のメイドはよくサボってますね」

「ふうん。何はともあれ、パチエの出したヒントから正解を導き出せたようね。でも、パチエも言ったけど、それだけじゃメイドたちはあなたに従わないわ。今の問題をどう改善するのかは、あなたの考えにかかっているわね」

「そうですね」

「それで、何か改善策はあるのかしら？」

「一応、考えてはいるんですけど……」

卓郎はうつむきながら呟く。

「あら。あんまり自信がなさそうね。言ってみなさい」

「サボっているメイドに、何らかの罰を与えようかなと思っっているんですが、いまいちその気になれないんです」

「へえ。頭で考えてるくせに、どうして実行する気が起こらないのかしら」

卓郎はうーん、と唸りながら答えた。

「これ以上、僕が勝手なことを決めてもいいのかなって……」

「ずいぶんと弱気な態度ね」

「最初に役割分担表を作ったときにも、メイドからいろいろ言われたんです。僕がメイドたちの今日の仕事を全て決めるのは自分勝手すぎるんじゃないかって。だからこれ以上、僕が勝手な仕組みを作ってもいいのかって思うんです」

「なるほど。自分勝手すぎる、ね」

あの時は気にしない素振りをしてきたが、実は彼自身、ハルの言葉はけっこう気にしていたのだ。

自分の生活が掛かっているので、今は必死でこの仕事をやっているが、決して卓郎は自分がリーダーに向いている人間だとは思っていなかった。

今でも妖精たちに命令を出す時は、何とも言えない後ろめたさを感じてしまうのだ。

「彼女たちを大切にするのは良いことだわ」

カップを持ちながら、レミリアは彼を見据える。

「でも、その考えでは紅魔館の使用人は務まらないわね。時には反発されるのを覚悟でリーダーが厳しい命令を出さなくちゃ、後で強烈なしっぺ返しを喰らうことになりかねないからね。特にユキは、私の言っていることがよく分かるんじゃないかしら」

ユキは何も言わず、メイド服をぎゅっと握る。

「まあ、具体的にどうするかは全てあなたに任せるわ。約束の一ヶ月までまだ二十日も余っているんだし、じっくり考えてみなさい」

ここでレミリアは紅茶を一気に飲んで、立ち上がった。

「そろそろ寝ましょう。二人とも、準備をしなさい」

※

レミリアの就寝準備を済ませて、二人は彼女の部屋を出た。

今日の仕事はこれで終わりなので、後は自分の部屋に戻るだけである。すでに薄暗くなっている廊下をユキと肩を並べて歩いていく。

「ふう……。今日も疲れたな」

「卓郎さんもお疲れ様です」



迷惑にならない程度の音量で会話をする。

「ユキは明日、買い出しに行くんだっけ」

「はい。卓郎さんは明日の午後はお休みでしたよね」

「うん。初めての休みだよ」卓郎は声を弾ませる。

本来ならば、使用人の仕事に休みはないものである。

しかし、妖精や体力のある妖怪ならともかく、人間の卓郎にとって休みを与えないのは体力的な面において非常に辛いことだった。なので、十日に一度——それも午後の時間に限って、休みを与えることになったのだ。

「休みの時間は何をするつもりですか？」ユキが尋ねる。

「特に考えてないな。一応、勉強しようかとは思ってるけど」

「それじゃあ、一緒に里に行きませんか？」

突然のユキの誘いに、卓郎は目を瞬かせる。

「卓郎さん、まだ館の外に出ていませんでしたよね。だったら、休みの日のうちに人里への道を覚えておいたほうがいいんじゃないかと思うんです」

「でも、ユキは明日は仕事だろ？」

「そうですね、私が明日に買うものは日用品ですので、そんなに焦って買う必要はないです。食材とかでしたら、すぐに飛んでいかないといけませんけど」

「なるほどね」

悪くない提案だな、と卓郎は思った。

「じゃあ、里への案内を頼もうかな」

「はい。任せてください」

にっこりと笑うユキに、卓郎は「よろしく頼むよ」と返した。

十二日目、準備を済ませた卓郎は部屋を出て、館の門へと向かう。すでに館の制服から、馴染みのある着物に着替えている。

人里では着物が主流なので、ちよくちよく里に行っている妖精メイドはともかく、人間がおしゃれな制服姿のままで行くと非常に目立ってしまうからだ。

門に到着すると、そこにはメイドのアキが待っていた。

「あつ。卓郎さん。待っていましたー」

「美鈴さんはどこにいる？」

「湖の方で小舟の用意をしていますよー。卓郎さんが来たって伝えませんか？」

「うん。頼むよ」

「了解しましたー」

ここでアキは目を閉じて、胸元に手を置く。

すると、彼女の体がにわか光り始めた。

「美鈴さん。卓郎さんがやってきましたー。門へ来てくださーい」

いつものほわほわとした声でしゃべってからはしばらくして、湖の方向から美鈴が走ってくるのが見えた。

「遅れてすみません。今、ちょうど準備が整いました」

大声で言いながら、美鈴は卓郎たちの前に到着する。

「アキちゃん、ありがとう。もう下がっていいわよ」

「はーい。了解です」

門番の仕事が終わって、アキは館の方へ戻っていった。

彼女はこの後、人間の里へ買い出しに出かける予定だった。

すでに買うものは食材と決まっているので、ユキと違って急いで行かなければならない。卓郎たちが里に到着する頃には、買い物済ませて館に戻っている頃だろう。移動の素早さも、飛行能力を持っている妖精ならではの特権である。

ちなみに、アキが先ほどまで門番をやっていたのは持ち前の能力に

あった。

アキは『遠くから言葉を伝達できる程度の能力』を持っている。自分の言葉を一切の道具を介さずに遠くにいる相手に伝えることができるのだ。伝達距離は無制限で、しかも一瞬にして相手に伝えられるのが大きな利点である。

その一方で、アキからでしか言葉を発信することができず、一度に一人しか発信できないという欠点も持っていた。

とはいえ、便利な能力なことに変わりはないので、美鈴が何らかの事情で門にいられない時は、大抵アキが代わりに門番をしているのだ。

もし、美鈴が不在の時に何者がが館にやってきた場合でも、彼女の能力によって美鈴やレミアに一早く情報を伝達することができる。いくら体力に自信のある美鈴とはいえ、常に門の前にいられるわけではないのだ。

待っている途中、横の美鈴がびくんと体を動かした。

「あつ。今、アキちゃんから報告がありました、ユキちゃんはまだ準備中らしいです」

どうやら、アキが館の中から能力を使ったようだ。

「じゃあ、ユキが来るまでここで待ちます」

「なら、それまで少し駄弁りましょか」

美鈴は、門の横にある壁に背を預ける。卓郎もそれに倣う。

「新しい仕組みを始めてから、今日で一週間が経ちますね」

「そうですね」

「メイドたちからも、いろいろと言われていますよー」

えっ、とこれには卓郎も大きく関心を示した。

「どんな感じで言われているんですか？」

「だいたいメイドは賛同してますが、中には反対してるメイドもある感じですね」

「ああ……やっぱり、そんな感じですか」卓郎は項垂れる。

「いやいや、そんなに落ち込むことはないですよ。ほとんどのメイドが賛同しているだけでも、結構すごいことだと思いますよ」

「でも、サボっているメイドもどんどん増えてますので、油断はできないです」

昨日も確認できただけで、八つのサボりが判明した。

大半の妖精は今の仕組みに従っているとはいえ、この状況を放置し続けることは卓郎にはできなかつた。昨日のレミリアに言われたように、油断していると後に大きなしっぺ返しを喰らうことになりかねないのだ。

「何か、改善策とかあるんですか」美鈴が問う。

「一応、サボったメイドに罰を与えようかなと思っっているんですが……」

昨日、レミリアにも言ったことを美鈴にも説明した。だが、卓郎自身、まだ考えが定まっていないうこともあり、説明内容はかなりあやふやなものになってしまった。

「具体的には、どんな罰を与えようと思ってるんですか？」

「実は、まだそれも考えていないんです」

「うーん……」

美鈴は困ったような表情で腕を組む。

「何も考えてないとなると、さすがに私も助言できませんね」

「ごもつともだと思ひ、卓郎は頭を下げた。」

「もう少し考えてから、また相談しに来ようと思います」

「ええ。時間が空いた時にでも、またやって来てください。ただ、あんまり一つの考えにこだわらないほうがいいですよ。サボったメイドに対して罰を与えること以外にも、何か良い方法がありますって」

「そうですね。ありがとうございます」

美鈴は笑顔を浮かべながら、「頑張ってください」と返す。

誰かに悩みを打ち明けたことで、少しでも気分も和らいだ。

そういえば卓郎が紅魔館で働くという選択肢が思い浮かんだのも、美鈴と話している時だった。もしかしたら、また彼女と話していくうちに良い着想が生まれるかもしれない。

「すいません。遅れてしまいました」

そう考えているうちに、ユキがこちらに走ってくるのが見えた。

※

紅魔館は、やたら霧の発生する湖の畔に建てられている館である。そのため、人里に行くにはまず湖を越えなければならぬ。一応、湖を遠回りをする道でも行けるのだが、それではかなりの時間を要してしまう。

だから、湖を渡る必要が出てくるのだ。

美鈴に見送られた卓郎とユキは、湖の前までやってきた。

「これで移動するのか……」

目の前に浮かんでいる小舟を眺めながら、卓郎がつぶやく。

小舟は木製で、やや古びた印象だった。

少し前に美鈴が作ったものらしいが、あまり使われることなく今日まで館の近くに放置されてあったらしい。一応、直前に美鈴が補修してくれたようで、よほどのことがない限り、沈む心配はないとのことである。

「結構、霧が立ちこめてますね……」前方を眺めながら、心配そうにユキが言う。

「でも、このまま真つすぐ渡って行けばいいんだよね」

「はい。卓郎さんは船を漕いだ経験がありますか？」

「漕いだことはないけど、何とかやってみるよ」

やや緊張した面持ちで、卓郎は小舟に乗る。

とにかく、真つすぐ漕いでいけばいいのだ。

用意していた竿を使って、卓郎はゆっくりと小舟を漕ぎ始めた。ぎしぎしと軋む音がする。ユキも彼の真上を飛びながら、船に並行してついていく。

最初は竿の操作がうまくいかず、なかなか真つすぐ進まなかったが次第に慣れてきた。

視界も濃い霧のせいで見えにくかったが、ユキが適宜「方向を調整してください」と言ってきてくれたので、航海は順調に進んだ。妖精は人間に比べてかなり目が良いらしく、彼女の目からは対岸がしっかりと見えるらしい。

——これなら無事に渡れそうだ。

卓郎がそう思った矢先だった。

「その船、ちよつと止まりなさい！」

どこからか、子供っぽい声が聞こえてきた。

そして、霧の中から青色の髪の少女が彼らの前に出現した。背中には氷でできた菱形に近い羽根が生えており、すぐに卓郎はこの少女は妖精だと分かった。

「あたいの許可をもらわないで、勝手に湖に入っつてこないでちょうだい！」

「許可？」

「そう。ここはあたいの湖なの。だから、あたいの許可が必要なもの。それであたいの許可なく勝手に中に入っつてきた奴は、みんな氷漬けにしちゃうつて決めたの」

——意味が分からない。

あまりのことに卓郎たちは呆然とする。

青髪の妖精はユキの顔を何回か見た後、その目を大きく見開かせた。

「あれっ。あんたつて、もしかしてユキ？」

驚いたのは青い妖精だけでなく、ユキも同様だった。

「えっ。もしかしてチルノちゃん？」

「へえーっ。しばらく見てないなと思つたら、こんな所にいたのね」

意外な展開に、卓郎はユキに顔を向ける。

「なんだ。知り合いだったのか？」

「はい。まだ私が紅魔館に来る前からの知り合いです」

「そーよ。あたいとユキは友達なの。ねっ、そうでしょ？」

「う、うん……」

ユキは、やけにぎこちない声で答える。

「チルノちゃんは、いつからここに住み始めたの？」

「つい最近よ。前から住んでいた所に飽きちゃつて、ぶらぶらーつと飛んでいたら、この湖を見つけたの。そしたら、すぐく居心地がよかつたからここに住むことに決めたのよ」

「そうなんだ……」

「で、あんたは何してんの？　なんか、すごくおしやれな服を着てるけど」

「この近くにある館でメイドの仕事をしてるの」

「えーっ！　あのユキが？　メイドオー？」

あはははは、と彼女は大きな声で笑った。

「あ、あの、『ダメダメ』で有名だったユキがメイドの仕事ー？　あははははっ！　信じられなーい。どうせ嘘に決まってるんでしょー！」

「嘘だったら、メイド服なんて着ないわよ……」

「へえーっ。じゃあ、ほんとにメイドやってるんだ」

ここで、チルノは見下すような目つきになった。

「じゃあさ、ユキ。今からあたいと『弾幕鬼ごっこ』して遊ばない？

昔のようにさ。あたいが氷の弾をひたすら撃ちまくるから、ユキはそれを避けながら逃げ続けるのよ。そもそもって、弾がユキに当たったらあたいの勝ち。遊びはあたいが飽きるまで続くよ」

これにはユキだけでなく、卓郎も顔が引きつらせる。

今のは、どう聞いても遊びには聞こえなかった。

「チルノちゃん。ダメだよ……。今は仕事だよ」震えた声でユキは返す。

「はあ？　せつかくこのあたいが遊びに誘ってんのに、断るつもり？

昔は何回もあたいの弾に当たって、ピーピー泣いていたけど、今はメイドになったんだから少しくらいは強くなってるでしょ」

以前、ナツが言っていたことを卓郎は思い出した。

紅魔館に来る前、ユキは周囲の妖精から能力を持っていないことを馬鹿にされ、いじめを受けていたということ。

ユキは体を震わせながら、首を振った。

「でも、仕事をサボるわけにはいかないよ……」

「ふうーん。それでも断るんだ」

チルノの視線が、卓郎のいる小舟の方に向けられる。

そして不気味な笑みを浮かべると、卓郎のいる小舟に向けて手を掲げてきた。その直後、周囲の温度が急に冷えてきて、大量の氷の弾がチルノの周囲に発生する。氷の弾はりんごほどの大きさであり、その

異様な光景に卓郎は直感的にまずいと感じた。

チルノが腕を振つたと同時に、彼はとっさに湖の中に飛び込む。

直後、異様な速さで氷の弾が小舟に襲いかかってきた。

木でできた小舟は大きな音を立てながら粉々になり、そのまま湖の中に沈んでいった。もし、このまま避けていなければたら間違いなく怪我だけでは済まなかっただろう。

しかし、彼の危機はそれで終わらなかった。

水面まで何とか上ってきた卓郎は、そのままもがき続けながら叫んだ。

「ユ、ユキ、助けてくれ！ 僕、泳げないんだ！」

「卓郎さんー！」

慌ててユキが溺れていた卓郎の所まで飛んでいき、彼の体を背中から抱きかかえるようにして引き上げる。

だが、ユキの力では彼の上半身を持ち上げるだけで限界だったようで、卓郎は下半身を湖に沈めたままの状態で、チルノと向かい合うことになった。

「なにするんだ。危ないだろ！」

「今のはユキがあたいの誘いを断った罰よ。怒るんなら、ユキの方にしてよね」

「ふぎけるな。いたずらにしてはやりすぎだぞ」

「あははは！ 人間がこのあたいに向かって怒るなんて百年早いわね！」

全く悪びれない様子でチルノは笑う。

どうやら、非常に質の悪い妖精に出会ってしまったようだった。

妖精は基本、生意気な性格であるのは卓郎も承知している。だが、先ほどの氷の弾からして、かなり力のある妖精のようで、その所は大きな脅威になりそうだった。卓郎の船をあつさり破壊したように、いたずらの範疇を超えたことも平気でやってくるようだ。

チルノは卓郎たちの前まで飛んできて、両手を組んで言い放った。

「人間。あたいの部下になるんだったら、助けてあげてもいいわよ」

「はっ？」 突然の提案に、卓郎は訝しげな顔になる。



「あたいはまだこの湖にやってきたばかりなの。だから、まずはどんな部下を作って、このあたいが湖で最強であることを示していかなきゃいけないのよ。だから、あたいの部下になってくれるんだったら許してあげるわ」

馬鹿らしいと答えようとしたが、ここで卓郎はある一つの策を思いついた。

とにかく、今はこの危機を逃れることが先決だった。

「お前の部下になれば、本当に助けてくれるんだな」

「当然よ。あたいは約束をしつかりと守るわ」

えっへんと胸を張って、チルノは答えた。

「そうか。最強の妖精の部下になれるなんて、とても嬉しいな」

「あははっ！ やつとあたいの偉大さが分かったようね！」

予想通り、おだてるとすぐ調子に乗る性格の妖精のようで、これならうまくいきそうだと卓郎は手応えを感じた。

「た、卓郎さん。もしかして本当にチルノちゃんの部下になるつもりなんですか？」

彼を抱きながら、ユキが慌てたように呟く。

疲れも溜まってきているのか、耳元から聞こえてくる息もだいぶ荒くなっていた。

「本気で部下になるつもりはないよ。でも、この状況だと言わざるを得ないだろ」

冷たい水にがたがたと体を震わせながら、卓郎は答える。

普通の状況であれば即座に断るが、さすがに自分の命にも関わる状況ではそういうわけにもいかなかった。

今は人間としての尊厳より、身の安全が最優先である。

妖精は基本的に頭が悪いので、適当にはぐらかしていけば何とかなるだろう。

卓郎がさらにおだてようとした、その直後だった。

「ねえ、チルノちゃん。もうやめようよ……」

ユキのか細い声が聞こえてきた。チルノは目をぱちぱちさせる。

「えっ。なに、ユキ。よく聞こえなかったわ」

「もうやめて。いじめるのは私だけでいいから、卓郎さんだけはいじめないで」

「はあっ？ あんた、誰に向かって言ってるのかしら」

「……やめてと言ってるのよ」

「はい？」

「もう、卓郎さんをいじめるのはやめてと言ってるのよ！ 卓郎さんは普通の人間よ。これ以上いじめたら、本当に死んじゃうかもしれないのよ！」

これにはチルノだけでなく、卓郎も啞然としてしまった。

——あのユキが怒った？

周りの妖精メイドからどんなにひどい扱いを受けても、絶対に怒ることになかったユキが感情をむき出しにして吠えたのだ。卓郎も初めて見る光景だった。

しばらく呆然としていたチルノだったが、次第にその顔が不機嫌になっていった。

「ははん。あたいに指図するなんて、いい度胸してるじゃない」

「指図なんてしてない。注意しただけよ！」

「ふうーん。あたいが見ないうちに、ずいぶんと生意気になったよね」

そう言つて、チルノは手のひらをユキたちに構える。

「卓郎さん！」

チルノから氷の弾が発射された直後、ユキが卓郎を抱きかかえながら体を半回転させる。

どっ、と何かが当たる音がしたと同時に、ユキが苦悶の声をあげた。

衝撃は小さいながらも卓郎にも伝わってきた。

「おい、ユキ」

「わ、私は大丈夫です……。背中当たただけですから」

そうは言ってくれたものの、その顔はひどく歪んでいた。

卓郎は唇を噛む。

ユキの必死の叫びは、どうやら火に油を注ぐ結果になってしまったようだ。チルノは他人を攻撃することに、全く抵抗を感じない性格の

ようである。いよいよ、まずい状況になってきたが、この状況を乗り越える手段が全く思い浮かばない。

卓郎はチルノに背を向けたまま叫んだ。

「妖精！ 僕たちが悪かった。だから、これ以上はやめてくれ！」

「うるさい！ あたいを怒らせた罰よ。これでも喰らえ！」

背後から氷の弾が発射される音が聞こえてくる。

もうだめだ、と諦めようとした直後だった。

何者かの影が卓郎たちの上を通過していった。そして、背後ではしゃばしやと大量の氷の弾が湖に落下したような音が聞こえてきた。何が起こったんだと思いつながら後ろを振り向くと、そこには意外な人物がいた。

※

「二人とも、大丈夫ですか！」

卓郎たちを守るようにして、前にたたずんでいたのは美鈴だった。

ここは湖の上なので、空中に浮遊しながら立っている格好である。そして美鈴の横にはなぜかアキもおり、おろおろしながら卓郎たちを見守っている様子だった。

「何とか大丈夫です……」

ユキがそう答えると、美鈴は安心したように頷いて、改めてチルノと向かい合った。

その表情はいつになく真剣そのものだった。

「あなた、最近ここにやってきた妖精ね。うちのメイドに何をしたのかしら」

「そ、そいつがあたいを馬鹿にしたのよ！ だから、少しお仕置きをしたのよ！」

「——と、彼女は言ってるけど、本当にそうだったのかしら？」

ここで美鈴はアキに視線を向ける。

アキは大きく首を振った。

「ぜんぜん違いますよー。わたしがここを通りかかった時、ユキちゃんはこの以上いじめると卓郎さんが死んじゃうからやめてくださいって、注意しただけでしたよ。あれは誰がどう見たって、氷の妖精

さんの一方的ないじめでしたよー」

どうやら、ここを通りかかったアキが能力を使って美鈴に伝えてくれたらしい。そういえばアキはこの後、人里へ買い物に出かける予定だった。

「第三者はそう言っているようだけど、本当かしら？」

チルノを見る美鈴の目が、さらに鋭くなる。

氷の妖精は追いつめられた表情になり、やがて開き直ったように叫んだ。

「そうよ！ だからといって、あたいが全部悪いってわけじゃないんだからね！」

その直後、周囲の気温が急激に下がっていった。

チルノは美鈴に向かって手をかざすと、大量の氷の弾を発生させる。

数は先ほどよりも圧倒的に多く、あまりの物量に卓郎は唾然としてしまう。まるで氷の花だ。チルノを中心とした、巨大な氷の花がそこにあつたのだ。妖精という弱小種族にここまで力を持っている者がいるとは、とても信じられなかった。

「これでも喰らえーっ！」

避ける隙間もないくらい的大量の弾が、一気に美鈴にめがけて襲ってくる。

だが、その弾は一つも彼女に届くことはなかった。美鈴の周囲からいきなり光の弾が出現すると、それが氷の弾を全てはじき返してしまっただ。

「なっ……」

チルノが瞠目して間もなく――。

はじき返した弾の一つが、チルノの顔のすぐ横を高速で通過していった。

その拍子に、青色の髪がひらひらと何本か落ちていく。もし、あの弾が顔に直撃していたら、普通の怪我では済まされなかっただろう。しばらくチルノは口を半開きにさせたまま、その場から動かなかった。

「今のはわざと外したのよ」美鈴が言う。

「外した理由は、まだ卓郎さんたちが大きな怪我をしていなかったから。どうやら、あなたは妖精にしては非常に強い力を持っているようにだけど、私の敵ではなかったわね」

黙ったままのチルノに対し、美鈴は続けた。

「この際だから言っておくわ。もしこれ以上、卓郎さんや館のメイドを傷つけるようなことをしたら、その時は私も容赦しないわよ。もちろん、いたずらをするのもだめ。分かったわね？」

美鈴から発せられる威圧感に、そばにいた卓郎も思わず唾を飲み込んでしまう。普段は笑顔の多い彼女だが、その実力はさすが紅魔館の門番を務めるだけのことはあった。

圧倒的な力の差を見せつけられて、さすがのチルノも戦意を喪失したようだ。

「わ、分かったわよ。仕方ないわね……」

それを聞いた美鈴はにっこりと微笑み、チルノに近づいていく。

ひつ、と顔をひきつらせるチルノに対し、美鈴は服の中から何かを取り出した。

それは小さな革袋だった。それをチルノの手のひらにそっと置く。

「じゃあ、仲直りの印にこれをあげるね」

チルノは恐る恐る紐をほどいて中身を見ると、ぱあつと目を輝かせた。

「わあつ、金平糖がいっぱいだ！　これいいの？」

「さっきの約束を絶対に守るって誓うなら、全部あげるわよ」

「守る守る！　絶対に守る！　ありがとうーっ！」

先ほどまでの暗い顔が嘘だったかのように、チルノは満面の笑みを浮かべて霧の中へ消えていった。単純な性格だったようで、その所は助かった。

チルノと別れた美鈴は、すぐさま卓郎たちのもとにやってきた。

「二人とも、大丈夫ですか」

「少し寒いですけど、何とか大丈夫です」卓郎が震えた声で答える。

「じゃあ、ユキさん。卓郎さんの体を持ち上げられますか？」

「すみません……。そろそろ体力の限界です」

「それなら、私が卓郎さんを運びましょう。アキちゃんも手伝って」

アキの手を借りて、卓郎は美鈴に背負られる形となった。

卓郎は美鈴の服が濡れてしまうと心配したが、彼女は笑って許してくれた。

このままの状態で里に行くわけにもいかなかったのです、卓郎たちはいったん館に戻ることにした。その途中で、卓郎たちはチルノの一部始終を説明した。

事情を知った美鈴は苦笑いをして答えた。

「それは災難でしたね。でも、卓郎さんたちが無事で良かったです。

あの氷の妖精さんも少しは反省しただろうし、もう襲われることはないでしょう」

「ありがとうございます。——あと、アキも美鈴に伝えてくれてありがとうございます」

アキは照れながら「そんなことないですよー」と返した。

今回は偶然アキが通りかかったことで難を逃れたが、もしあのままチルノの攻撃を受けていたら、自分は冗談ではなく本当に死んでいたかもしれない。

村にいた頃、よく母親からも「いたずら好きの妖精には注意しなさい」と口を酸っぱくされてきた。妖精は死という概念が無いので、いろいろと無茶な行動もできるが、力のない人間は死んだらそれで終わりなのだ。

改めて、卓郎はこの世界で生きていくことの厳しさを思い知った。

「卓郎さん。私のせいでこんなことになってしまって、すみませんでした」

突如、美鈴の横を飛んでいたユキが謝ってきた。

「私のせいでって、どういうことだよ」卓郎が返す。

「私がチルノちゃんの言うことに素直に従っていたら、こんなことにならなかったはずです。私のせいで卓郎さんを危険な目に遭わせてしまい、本当にすみませんでした」

ユキは今にも泣き出しそうに、その顔を歪ませていた。

——優しいというか、何というか。

もちろん、今の卓郎に彼女を責める気は毛頭なかった。

「あれはユキのせいじゃないよ。あのチルノという妖精が自分勝手に動いただけだよ。それに、ユキはチルノの攻撃から僕を守ってくれたじゃん。今さらかもしれないけど、すぐに自分を責めるのはユキの悪い癖だと思うよ」

「そ、そうでしょうか？　でしたら、すみません」

「ほら、また謝った」

「——あつ、いいえ、そ、そそ、そうじゃないです！」

慌てて訂正するユキの姿に、この場にいた全員が笑った。

濃い霧の地帯を抜けて、ここでもようやく視界の先に館が見えてきた。

「ユキ。僕から言っておくけどな」

館の方に目を向けながら、卓郎は続ける。

「ユキはもう少し自分に自信を持っていいと思うよ。ユキは本当に頑張ってる。だって、この十二日間、僕はユキが必死で働いている姿をこの目で見てきたんだからさ」

「でも、私は昔からよく『ダメダメ』の妖精って、みんなに馬鹿にされて……」

卓郎は小さく笑った。

「たとえ周りのみんなが、ユキのことを『ダメダメ』だと馬鹿にしようとして、少なくとも僕はユキのことを『ダメダメ』だとは思ってないよ。ユキは館に必要なメイドだ。だから、もう少し自分に自信を持っていいんじゃないかな」

「あつ、卓郎さん。少なくとも、とはひどいですねー」

「……ここで美鈴も口を開いてきた。」

「私だって、ユキちゃんは本当に頑張ってると思いますよ。誰が『ダメダメ』なんて言ってるんですか？　ひどいですねー」

「わ、わたしだって、ユキちゃんのこと『ダメダメ』なんて思ってないですよー。いつもお仕事がんばってて本当にすごいなーって、思ってますし」

美鈴だけでなく、その横を飛んでいるアキも答えた。  
そうしているうちに一行は湖の岸に辿り着いた。

「あの、皆さん」

すると、ここでユキが何故か湖の方を向きながら言った。

「少し疲れましたので、私はここで休憩します。皆さんは先に行つててください」

「えー。びしょ濡れのまんまだけど、いいのっ——」

アキの頭をぺちんと叩いた美鈴が、大きな声で返した。

「分かりました。じゃあ、先に行つてますのでー」

「はい。ありがとうございます、ま、す……」

最後の方は、完全に言葉になつていなかった。

文句を言うアキをなだめながら、卓郎たちは先に館に戻る。

こつそり後ろを振り返つてみると、ユキはその場に座り込みながら手で顔を覆っていた。彼女が体を向けている先の湖は、なぜか今だけ霧が晴れており、その美しい景色を見せていた。

※

良い着想とは、何気ない所で生まれてくるものである。

美鈴たちと別れ、部屋に戻った卓郎はまず、びしょ濡れになった服を脱ぎ始めた。

今度は風邪をひかないように、全身を丹念に布で拭いておくことも怠らない。替えの着物に着替えた後、濡れた服を洗い場のかごまで持っていく、再び部屋に戻った。

後処理を終えた卓郎は用意していた紅茶を飲み、ふうーっと大きく息を吐いた。

チルノとの一件で船が無くなったことで、人里へ行く手段を失ってしまった。つまり、今日の予定が完全に無くなってしまったというわけである。

「勉強でもしようかな」

だが、なかなか勉強もはかどらず、三十分で鉛筆を放り投げってしまった。

卓郎は嘆息をする。



こうなってしまうと、いくら美鈴と仲直りしたとはいえ、今日の予定が潰れる原因を作ったチルノには少なからず不満が出てきてしまうものだ。

紅茶を口に含みながら、何となくチルノとの一部始終を思い返した。

機嫌を悪くしたチルノが卓郎たちを攻撃をしようとした時、アキの能力で美鈴が助けにやってきた。そして美鈴はチルノの氷の弾を全てはじき飛ばした。

そして仲直りした美鈴が、チルノに渡したものは――。

この瞬間、卓郎の中である一つの考えが閃いた。

それはこの数日間、全く思い浮かばずに悩んできた、メイドたちの『わがまま』を抑える方法だった。初めて仕事の振り分け表を思いついた時と同じ、まさに稲妻が降ってきたような大きな衝撃だった。ごくぐり、と口に含んでいた紅茶を飲む。

素早く手帳を開き、今考えた内容を忘れないうちに書いていく。そして、この内容が果たして通用するのか何度も読み返して確認する。――いける。

少しだけ内容を修正した末、ついに卓郎は決行することにした。だが、この方法を実現させるには、ある一つの大きな壁があった。それはお金だった。お金が無ければ、絶対に実現できない方法であった。そして紅魔館のお金を掌握しているのは、当たり前だが主人のレミリアである。

つまり、結果としてレミリアの全面的な協力が必要になってくるのだ。

窓を見ると、すでに外は夜になっていた。考えをまとめているうちに、すっかり太陽も沈んでしまったようだ。

卓郎は改めて、まとめた内容を手帳に書き込んでいく。

今日の夜、それをレミリアに提示するためだった。おそらく、また何か言われるであろうが、それはやむを得ないことである。

ついに書き終えた卓郎は手帳を閉じ、自分の部屋を出た。

十五日目の夜、卓郎の呼びかけで食堂に全ての妖精メイドが集まった。

メイドだけでなく、レミリアとパチュリーもその場に居合わせていた。

今回の案はレミリアも巻き込んでいることなので、彼女も同席させてもらうことにしたのだ。パチュリーは、レミリアに呼ばれてやってきたらしい。

「みんな。とりあえず、今日の仕事もお疲れさま」

開口一番、卓郎はそう言った。

妖精たちも一応「お疲れさまですー」と返してくれたが、みんな訝しげな様子だった。どうして夜に全員を集めさせたのか、その真意が分からないからだろう。

いよいよだと思い、卓郎は口を開いた。

「僕の作った仕組みが始まって、今日で十日が経った。いきなりのことで最初はみんな戸惑ったと思うけど、今日まで無事にやってこれた。本当にありがとう」

この瞬間、卓郎は横にいるユキに合図を送った。

「そこでみんなに僕からささやかだけど、お礼をしたいと思う」

それを聞いて、妖精たちが一斉にどよめき始める。

ユキはテーブルに置いてあった巨大なかごから、一つの小さな革袋を取り出した。

それをゆつくりと開いて、ぱらぱらと中身を手のひらの上に落とすていく。色とりどりの粒の輝きに、メイドたちのどよめきがさらに増した。

「うわーっ。金平糖だ！」

「やったー。あたし金平糖大好きなんだよね」

それは人間だけでなく妖精の間でも人気のお菓子、金平糖だった。

先日、美鈴が仲直りの印としてチルノにあげたお菓子でもあった。

「お礼はそれだけじゃない」

そう言つて、卓郎は再びユキに合図する。

巨大なかごの横には、布をかぶせた皿が置いてあつた。ユキはそれを剥がす。

「おおう」と、妖精たちの歓喜の声を漏らす。

皿の上には、巨大なカステラが置いてあつた。表面は鮮やかな焦げ茶色、中はふわりとした黄色い生地で出来ており、人里では高級品に指定されているお菓子である。

「これはユキ特製のカステラだ。僕もさつき食べてみたけど、すごくおいしかったよ」

自信を持つて、卓郎は断言する。先ほどユキから余つた分のカステラを試食させてもらったのだが、あまりのおいしさについて涙が出てしまいそうになつたのだ。

本人は謙遜していたが、料理の腕は間違いなく紅魔館一であろうと確信した。

「卓郎さん。早く食べたいですよー」アキが急かす。

「まあ、慌てるな。今からこのお菓子をみんなに配つていこうと思うけど、たった一つ、お菓子を受け取るための条件があるんだ」

期待の眼差しを向けていたメイドたちに、それぞれ疑問符を浮かぶ。

卓郎はここで一冊の手帳を取り出した。

「この手帳には十日間、みんながすっかり仕事をしてくれたのかが記入してある。つまり、この十日間で誰がどの仕事をサボつたのかも、これで全て分かるわけだ」

手帳をばらばらとめくり、ある項を妖精たちに向ける。

そこには大きく二桁の数字が書かれてあつた。

「この十日間、一度もサボらずに仕事をやってくれた人数がここに書かれてある。僕はそのサボらずに仕事をしてくれたメイドだけに、お菓子を配ろうと思うんだ」

メイドたちが一齐に「ええーっ！」と声をあげた。

「いやったーっ！ 頑張つた甲斐があつたわ」と、はしゃぐメイドもい

れば、

「うそー。それじゃあ、あたしはもらえないのー?」「あわわわわ!ど、どうしよう、カ、カステラ食べたいのにー」と、嘆くメイドもいた。

これが、卓郎の考えた『お菓子の制度』であった。

今回は十日間にしたが、次回からは一週間ごとにお菓子を配る予定でいた。

個人的にうまくいったと思ったのは、真面目に働いている妖精たちに目を向けることができたことである。

これまでの卓郎は、サボっているメイドだけに目を向けてきた。どうすれば、妖精に大きな不満を与えることなく、罰を与えられるのかを常に考えてきた。

しかし、美鈴との会話で「サボった妖精に対して罰を与えること以外にも、他に良い方法があるのではないか」という言葉を受けて、初めて逆の発想が生まれたのだ。

つまり、サボっているメイドではなく、真面目に働いているメイドに目を向けるのである。

数字を集計して初めて分かったことだが、仕事をサボっているメイドより、真面目にやっているメイドの方が、数は圧倒的に多いのだ。そして、美鈴がチルノに金平糖をあげている場面を思い出して、初めてこの考えを思い付いたのだ。

サボる妖精に罰を与えるのではなく、逆に真面目にやっている妖精にお礼を与えることで、妖精たちのわがままを抑えるのである。

「それじゃあ、今から配り始めるよ」

卓郎がそう言ったところで、メイドの一人が手を挙げてきた。

予想していたが、それはハルだった。普段はご丁寧到手など挙げないが、この場にレミリアがいることで、このような態度をとったのだらう。

「ちよっと、いいですか」

「どうしたんだ」

「なんで、サボっているメイドにはお菓子をあげないことにしたんで

すか」

「なんでって……。言わなくても分かるだろ。真面目に仕事をやっ  
てこなかったメイドに対して、お菓子をあげるほど僕は甘くはないよ」  
「でもさ。あたしたちだって確かに何日かはサボってますけど、それ  
以外の日はちゃんと仕事してるんですよ。ほんの少しサボったか  
らって、お菓子を全くもらえないのは不平等だと思いませんか？」

かちん、と卓郎の中で何かが動きそうになる。

だが、それを抑えて首を横に振った。

「だめなものだめだ。もし、後悔してるんだったら、明日から真面目  
に仕事をすればいいじゃないか」

卓郎はここで声を強めた。

「というか、ハル。お前は事あるごとに僕に対していろいろ言ってく  
るけど、正直あまり良くないと思うぞ。僕に対する意見とか批判なら  
受け入れるつもりだけど、ハルの言っていることは批判じゃない。今  
もそうだけど、お前の言っていることは単なる『わがまま』だと分か  
らないのか？」

何人かのメイドが、厳しい視線をハルに向ける。

どれも、普段から真面目に仕事をやっているメイドたちであった。

ハルは追い詰められたような表情になる。

「その様子だと、少しは自覚しているようだね」

「う、うるさいわね！」

ここでハルは人差し指を立てた。

「じゃあ、こういうのはどうでしょうか。リーダーはサボったらお菓  
子は全くもらえないように決めましたけど、それだと不平等だと思  
いますので、サボった分だけ減らすってのはどうでしょうか」

この意見に対して、よくサボる何人かのメイドがうんうんと頷い  
た。

しかし、卓郎の答えは明白だった。

「それはだめだ」

「えっ？　ちゃんと意見を言ったつもりですけど」

「じゃあ、僕がハルの意見を聞き入れたのでしょうか。もしそうだった

ら、みんな一日くらい仕事をサボってもいいんじゃないかな、って思わなくならないか？」

「あつ……」と、ハルは不意打ちを喰らったような顔になる。

「それじゃあ、だめなんだよ。僕はみんなに一日もサボらずに仕事をやってほしいんだ。もしハルの言う通りにしてしまったら、今以上にひどいことになってしまうよ。だから、わざわざこうしてユキにお菓子作りを頼んでまで、この制度を考えたんだ」

「ええーっ。でも、わたしだってカステラ食べたいですよー」

ここで突然、口を開いたのはアキだった。

「卓郎さんのいじわる！ こんなにおいしそうなカステラが目の前にあるのに、食べれないなんてひどいですよ。拷問ですよー」

アキは二日サボってしまったので、お菓子はもらえない立場にいる。

彼女に便乗して、同じくお菓子をもらえないナツも口を出してきた。

「わたしも、たった一日くらいサボっただけで、これはひどいと思います」

「一日くらいい？」卓郎は眉をひそめる。

「ええ。別に一日くらい、サボったっていいじゃないですか」

「ちよつと、勝手なこと言わないでよー！」

ナツに対して、今まで真面目にやってきたメイドが言い放つ。

「なに。文句でもあるの？」ナツは不機嫌そうに顔を歪める。

「あるに決まってるでしょ！ この馬鹿！」

「いくらナツでも、今の言葉は聞き捨てならないわ！」

あつという間に食堂は、メイドたちの言い争いで騒がしくなった。

ユキが「みんなやめて！」と叫ぶが、彼女たちは止まらない。

よほど日ごろの不満が溜まっていたのか、彼女たちは口ぐちに相手の勢力を罵り合った。中には取っ組み合いの喧嘩にまで及んでしまったメイドたちもいる。

数は真面目にやってきたメイド側が多いが、サボっているメイド側には発言力のあるハルがいるせい、言い争いは拮抗していた。

こんな状況になってしまったにもかかわらず、レミリアとパチュリーは全く動く素振りを見せない。完全に卓郎に任せている様子だった。

「おい、やめろ！」

声を張って注意したが、メイドたちは全く聞く耳を持たない。

「あんたのせいよ！ あんたのせいであんなってしてしまったのよ！」

その時、別の妖精メイドが泣き顔で卓郎に向けて放った。

そのメイドはハルと同様、サボリの常習犯として注意してきたメイドだった。

「あんたがリーダーにならなければ、こんな面倒なことにはならなかったのよ！ 館の仕事くらい、あたしたちの好きにやってもいいじゃない！」

「おい、お前……」

「あんななんか、とつとと辞めちまえ！」

その言葉を聞いた瞬間、卓郎の中で何かが切れた。

本来ならばリーダーとして理性的な態度をとらなければいけないが、湧きあがる感情を抑えることはできなかった。

彼は手前の机に向けて、手帳を渾身の力で叩きつけた。

その強烈な打撃音に一瞬、場が静まる。

「お前たち、いい加減にしろ！」

食堂全体に響き渡る卓郎の叫び声に、妖精たちの誰も動けなくなった。

「たった一日くらいサボったほうがいい？ 自分たちの好きなように仕事をさせろ？ ふざけるな！ じゃあ、訊くけど、今日サボった分の仕事は誰がやるんだ？ 誰もやらずにそのまま放置しておくのか？ そんなわけないだろ。その分は全て、真面目に仕事をやってるメイドたちが代わりにやってるんだよ。お前たちのわがままでどれだけ他のメイドに迷惑をかけているのか、まだ気付かないのか！」

あまりの剣幕にメイドたちは誰一人動こうとしない。

卓郎はふうつと、一息ついてから言った。

「館の仕事は一人でやるんじゃない。みんなでやるものなんだ。お前

たちは一日、二日サボってもいいじゃないかって言ってくるけど、それじゃだめなんだ。意味ないんだよ」

ここで卓郎は視線を下げた。

「一日……たった一日サボっただけで、後で取り返しのつかないことになってしまうことだって、あり得るんだよ」

その悲痛な口調に、今まで様子を見ていたレミリアが初めて口を開いた。

「あら。もしかして、実際に取り返しのつかない経験でもしたのかしら？」

「昔、一度だけありました」

卓郎は、かいつまんで説明を始めた。

まだ寺子屋を辞めたばかりで、本格的に農業をやり始めた頃のことだった。

卓郎の家は、主に芋や野菜を中心とした作物を育てていた。

ただ、近くに山がある影響で、そこからやってきた猪が農作物を食い荒らしてしまうなど、野生動物の被害が多く発生していたため、その対策も入念に行っていた。

この日の夜、外は激しい雨と風に見舞われていた。

今日は卓郎が夜の見回り当番だった。

畑を回って怪しい動物がいないか、罨はきちんと機能しているか、この目で確認する仕事である。週の半分は母親もしくは兄がやってくれるが、どちらとも体を悪くしていたので、残りの半分は卓郎一人でやっていた。

しかし、この日は全く見回りをする気力が湧いてこなかった。

外は大雨なので、びしょ濡れになるのは確実である。とてもめんどくさい。

猪もさすがにこんな荒れた天気では外に出る気力はないだろうと思いい、つい卓郎はそのまま眠ってしまったのだ。

翌日、慌てた様子の兄に起こされた卓郎は急いで畑に行き、啞然とした。

作物のほとんどが、猪によって食い荒らされていたのだ。



調べた結果、昨晚の嵐で畑に仕掛けていた罫の一部が破損してしまい、その隙に猪が入ってきてしまったようだった。天気も彼が寝た直後に回復したらしく、明らかに彼の怠惰が今回の動物被害を引き起こしてしまったのだ。

母親にこつぴどく叱られ、卓郎の家族は三ヶ月ほどひもじい生活を強いられることになった。おかずが一品減らされ、飯も不味いものを食べざるを得なくなった。

たった一日——しかも、ほんの軽い気持ちでやったことが、後に取り返しのつかない事態を引き起こしてしまったのだ。

卓郎もこれには猛反省して、二度とこんなことはしないと誓った。「なるほど。あなたの言いたいことはよく分かったわ」

レミリアは納得したように言った。

卓郎は妖精たちに向けて、再び口を開いた。

「もちろん、農業の仕事とメイドの仕事は全然違う。でも、だからといって、後で取り返しのつかないことが起こらないとは限らないよ。それに——」

ここで彼は金平糖の方を指差した。

「まだ言ってなかったけど、ここにある金平糖とカステラの材料のお金は、全てお嬢様が用意してくれたんだ。せっかくお嬢様がお前たちのためにお金を出してくれたのに、サボったメイドにまでお菓子を配るのは、ちよつと失礼だと思わないか？」

メイドたちは、黙ったまま卓郎の言葉に耳を傾けている。

三日前の夜、お菓子の制度の考えをまとめた卓郎は、すぐレミリアの所に行った。

多くのお金を必要とする内容だったので、最初はかなり説得に苦戦するだろうと思っていた。しかし、予想に反してレミリアはあっさり承諾してくれた。

拍子抜けする卓郎に対し、レミリアは笑いながら言った。

「その程度のお金なら全然平気よ。たかがお菓子程度で、偉大なるスカーレット家の財産が無くなるわけじゃないじゃない。雀の涙にもならないわ」

後で聞いた話によると、スカーレット家が保有している財産は非常に多いらしく、主人のレミリアでさえ、あまりの金額の多さに数えるのを止めてしまったくらいである。噂によれば、何百人もの人間が一生遊んで暮らせるくらいのお金を保有しているらしい。

「これ以上、何か意見や反論はないかな？」

卓郎は問いに対し、ついに妖精たちは何も言い返さなかった。

「じゃあ、最初に言った通り、一日もサボらなかつたメイドにだけお菓子を配ることにするよ。名前を呼んでいくから、呼ばれたメイドだけ受け取ってくれ」

※

全てのお菓子を配り終え、ようやく妖精たちが食堂からいなくなつた後、卓郎は一人で中の片づけを始めた。お菓子を受け取つた妖精たちが、そのまま食堂に残つて夜のお茶会を始めてしまったからであり、その片づけだった。

お茶会には卓郎も参加して、場はかなり盛り上がった。

くだらない冗談で笑い合つたりと、久々に卓郎は楽しい時間を過ごすことができた。

お茶会の終了後、何人かの妖精が掃除の手伝いをすると申し出てきたが、卓郎は丁寧に断つた。何となく一人で掃除をしたい気分だったので。

箒を使って、床に落ちた金平糖やごみなどを集めていく。

卓郎自身も不思議に思っていることだが、最近、妙に掃除が楽しくなつてきているのだ。掃除を終えてきれいになつた部屋を見渡していると、とても清々しい気分になることを覚えたのだ。

だいぶごみも溜まってきた頃、食堂の扉が開かれた。

「どうやら、みんな部屋に戻つたようね」

やつて来たのはパチュリーだった。

レミリアとパチュリーはお茶会が始まつた直後、すぐに食堂から出ていったのだ。

「パチュリー様。どうしたのですか」

「お茶会が終わる頃合いを見計らつて、ここに戻つてきたのよ。とり

あえず、さつきはお疲れさまと言っておきましょう」

「先ほどは見苦しいところを見せてしまい、申し訳ございませんでした」

「ふふっ。一丁前なことを言うようになったじゃない」

パチユリーはわずかに口元を吊り上げた。

「まあ、合格点ね。時間割表の紙から正解に導いただけでなく、あなた独自の仕組みを考えたところは評価するわ。未熟な所もまだまだいっぱいあるけど、リーダーらしい所も垣間見れたし、これならメイドたちもあなたに従っていくでしょ」

「ありがとうございます」

すると、ここでパチユリーが手を差し出してきた。

「光栄なことだと思いなさい。私がこの世界にやってきて、初めて普通の人間と握手するのよ。私が認めたからには、それ相応の活躍をしてちょうだい。分かったわね？」

普段は無愛想なパチユリーだったが、今はいくぶん態度も柔らかい気がした。

卓郎はパチユリーと握手を交わす。とても柔らかい手だった。

「それじゃあ、おやすみ」

軽く手を振って、パチユリーは食堂を去っていった。

自分より遥かに強大な力を持つ魔法使いに、初めて認められた。非常に嬉しいことであると同時に、卓郎の中で大きな自信にも繋がった。

再び一人になった卓郎は、引き続き片づけを始める。

片づけが終わったら、自分用に残しておいた金平糖を食べようと心に決めた。

金平糖は卓郎の好物だ。お茶会の時は、お菓子をあげる立場の自分がそれを食べることに抵抗があったので、紅茶以外は全く口にできなかったのだ。

ようやく全てのごみを集め終え、大きく背伸びをした時だった。

食堂の扉が、今度はゆっくりとした動きで開かれた。

中に入ってきたのは、アキとナツだった。

「良かった。まだいたんですね……」アキが、ほっとしたように言う。  
「二人とも。どうしたんだ」

「実は、卓郎さんに謝ろうと思いましたが」

ナツはそう言った後、いきなり深く頭を下げてきた。

「本当にごめんなさい。わたし、これまで卓郎さんのことを馬鹿にしていた。でも、今日の話を聞いて、この人間は違うって初めて思うようになりました」

ナツは視線を下げたまま続けた。

「わたし、もともと人間が嫌いでした。大嫌いでした。たいした力もなく、無駄な意地を張ることだけは得意な間抜けな種族。そんなことを考えてました」

「……よっぽど人間が嫌いだったんだな」

「はい。昔、人間に住処を壊されたことがあります。そこから紅魔館の方にやってきたんですが——まあ、これは関係ない話ですね」

矯正器をいじりながら、ナツは小さく笑う。

「そういうこともありまして、人間の命令を受けなくなりました。できるなら卓郎さんには館から出ていってもらい、ユキがリーダーに復帰してもらいたかったです。そんな感じで、今まで卓郎さんが何を言っただけと仕事をサボってきました」

確かに、ナツがサボった回数はハルに次いで多かった。

普段から無愛想な感じの妖精で、なかなかその真意が掴めなかったが、ようやく卓郎は初めて彼女の気持ちを知ることができた。

「でも、卓郎さんのさっきの話を聞いて、初めて気付きました。この人は本気で紅魔館を良くしようとしている。必死で私たちやお嬢様のことを考えている。そう思った瞬間、急にわたしのやっていることが馬鹿らしく思ってしまった……」

ナツは今にも泣きそうな顔で言った。

「ごめんなさい。卓郎さんのことを馬鹿にして、ごめんなさい……」

ナツに続いて、アキも頭を下げてきた。

「わたしも、さっきは変なことを言っただごめんなさい。わたし、お菓子ばっかりに目が眩んで、周りのことをぜんぜん考えてませんでし

た。本当にごめんなさい」

普段は呑気なアキも、今はすっかりとした口調で言った。

卓郎はふうっと一息ついて、机に置いてある革袋を手に取った。

「お前たちの言いたいことはよく分かったよ」

そして、自分用に残していた最後の金平糖をナツに渡した。

「仲直りの印だ。一袋分しかないから、二人で分けてくれ」

「でも、わたしたちは……」

「いいんだ。どうせ、余りものだし、僕もどうしようか迷ってたところだったから」

卓郎は笑いながら続けた。

「それに僕、金平糖は苦手だし」

金平糖を受け取ったナツは、卓郎をじつと見た後、再び深く頭を下げた。

妖精たちが食堂を出た後、卓郎は困ったように頭を掻いた。

もう彼女たちの前では金平糖は食べられないな、と思いながら。

※

お菓子の制度が始まって、半月が経った。

あの日以来、メイドたちの卓郎に対する態度が変わった。

彼の出す指示にほとんど従うようになり、彼に対するいたずらも劇的に減った。卓郎自身、最も気になっていた仕事をサボるメイドもほとんどいなくなり、一日の仕事も順調にこなせるようになってきた。そして、レミリアとの約束から一ヶ月が経ったこの日。

命令を受けて、卓郎はレミリアの部屋にやってきた。

彼女は部屋の小さな丸テーブルで、紅茶を飲んでいた。

「来たわね。一ヶ月前の約束は覚えてるかしら」

「もちろんです」

「ふん。だいぶ自信のこもった口調ね」

レミリアは椅子に腰掛けたまま、紅茶に錠剤を入れてく。

「今さらメイドたちに問うまでもないでしょ。あなたは約束通り、彼女たちを従えるようになった。明日から、正式にスカーレット家の使用人として認めるわ」

待ちに待った瞬間が、ついにやってきた。

「はい。ありがとうございます」

勢いよく頭を下げる卓郎に、レミリアは紅茶をかき混ぜながら言った。

「で、ここから本題なんだけど、給料とかはどうするつもりなの？」

えっ、と卓郎は顔を上げた。

「正直、私もどうしようかと迷っているのよね。だって、人間を雇うなんて初めてのことだし、妖精メイドと同じような待遇にさせるわけにはいかないでしょ」

「妖精メイドの待遇は、具体的にどんな感じなんですか？」

「給料がない代わりに、自由と紅茶を与えているわ。当然、衣食住も保障してるわよ」

「きゅ、給料がないんですか？」

それは初耳だった。この一ヶ月間、何となく抵抗があったため、待遇に関する質問をユキたちに全くしなかったのだ。

「その気になれば、妖精と同じ扱いにしてもよかつただけだね。でも、この一ヶ月間のあなたの成果を考慮して、特別に私と交渉する権利を与えることにしたのよ」

「あ、ありがとうございます」

「で、給料とかはどうするつもりなの？」

「そうですね……」

卓郎は腕を組んで考える。

一体どうすればいいのだろうか。農家時代も家計は全て母親がやってきたので、お金の管理は未だに経験したことがないのだ。

しかし、卓郎は考えた末、ついに良い方法が頭に浮かんだ。

「あの、お嬢様」

「なにかしら」

「前借りでお金を出すことはできませんか？」

その問いに、レミリアは紅茶を持つ手を止める。

以前、スカーレット家は莫大な財産を持っていることを聞いた。これなら交渉次第で、一気に多くのお金を出してもらえないか

と思ったからだ。

卓郎が多くのお金を必要とした理由――。

それは、農業時代にやり残したことを清算するためだった。

◆ この日の仕事を終えた少女は、一人で家に帰ってきた。

最近夕方になると、だいぶ冷え込んでくるようになってきた。火鉢でゆっくり暖をとった後、少女はもうすぐ帰ってくる義理の父のために夕食の準備を始めた。

父はまだ店におり、着物を作る作業を続けている。最近はやく少女も手伝いを許してもらえるくらいには上達していたが、まだまだ一人前には程遠いところにいる。

少女の父は、人里で着物屋を営んでいた。

だが、ここ最近の売れ行きは非常に良くなかった。このままの状態が続けば、店を閉めることも考えの一つに入れざるを得ないくらい、店の状況は悪化していた。

原因の一つとして、今年に発生した食料不足があると少女は考えていた。

昨年と今年の夏は、比較的気温の低い日が続いた。その影響で作物がなかなか育たず、備蓄していた食料も減っていき、ついに食料不足の事態が起こってしまったのだ。

この影響で食料の物価が上昇した。

食べることで精一杯な状況に追い込まれた里の人間は、みんな着物類にお金をかけにくくなったのだろう。実際、近所の人たちの話に耳を傾けてみると、「最近、お金が無くてなかなか新しい服が買えないのよね」という話をちらほら聞いた。

もちろん、だからといって指をくわえて見ているわけにはいかない。

父もお客が来るように値下げなど様々な策を行ったが、状況はあまり良くなっていなかった。食料不足さえ改善されれば、おのずと店の売り上げも良くなっていくと思うが、まだまだ状況が好転していない以上、少女も気が気で仕方なかった。

そんなことを考えながら、夕食を作っている矢先だった。  
どんだん、と家の扉が叩かれた。

一瞬、父が帰ってきたのかと思っただが、すぐにそれを否定する。身内がわざわざ扉を叩いてくるはずがない。となると、こんな遅い時間なのに客が来たのか。

「どなた様ですか」

扉に向けて少女は言い放ったが、一向に返事の気配がない。どうしたのかと思い、包丁をいったん置いて少女は玄関に向かう。

扉を引いてみると、外には誰も人はいなかった。

代わりに、家の前に風呂敷が置いてあった。

周囲を見回しながら、とりあえず風呂敷の中身を確認しようと開いた直後、少女は思わず「ひゃあっ！」と声をあげてしまった。

風呂敷の中には、大量の現金が入っていたのだ。

ざっと見ても、お店一年分の売り上げはありそうだ。これだけまとめられたお金を見るのは、初めてのことだった。

現金の上には一枚の紙が添えられており、手書きでこう書かれてあった。

『このお金をお店のために使ってください。あなたの家族の幸せを願う者より』

何が何だか分からず、少女はお金と紙を何度も交互に眺める。

そして、これは夢ではないことを確認した。

一体、誰がこんなことをしたのか――。

風呂敷を玄関に置いて、少女は家の近くを走り回って探してみたが、すでにお金を置いた人はどこかに去ってしまったようだ。

放心状態のまま、少女は自宅に戻る。

この現金を見た瞬間、きつと父は腰を抜かしてしまっただろう。

そう思いながら、少女は風呂敷に入っていた紙の文章を読む。これだけのお金があれば、きつとお店も良くなるに違いない。

ふと、ここで少女は首を傾げた。

この文字の書き方は、どこか遠い昔に見たことのあるような気がしたからだ。



◆ 数分もしないうちに、ユキは空から戻ってきた。

目的の家からだいぶ離れた場所で待っていた卓郎は、すぐに言った。

「大丈夫だったか」

「はい。上から確認しましたが、無事に受け取ったようです」

「そうか。それは良かった」

安堵のため息を吐く卓郎に、護衛としてついてきた美鈴が言った。

「でも、これで良かったんですか。卓郎さんが行かなくて」

「いいんです。行方不明の扱いになっている僕が出てきたら、お金を渡すだけで済まされなかつたでしょうし」

卓郎たちが行ったのは、人里にある伯父の家だった。

目的は、農家時代に溜めていた借金を返すためだった。

すでに母親と兄が死亡しているので、人間の定めた決まりごとに従うなら卓郎にお金を返す義務が生じてしまう。もちろん、卓郎はすで行方不明の扱いになっているので、その気になれば雲隠れもできたはずだ。しかし、それをしなかつたのは、伯父に小さいながらも恩を感じていたからである。

現金を手に入れた卓郎はユキと美鈴に護衛をお願いして、夕方の人里にやってきた。そしてユキに頼んで、その現金を伯父の家の前に置いてもらったのだ。

この現金が、卓郎が館の使用人として受け取る全ての給料だった。

レミリアと交わした契約は、お金はその借金を返す分だけでいいから、一気にまとめて出してほしいという内容だった。

レミリアは最低でも二十年は絶対に館で働くことを条件にして、この約束を受け入れてくれた。つまり、卓郎はこれから二度とお金を受け取らずに、最低でも二十年は紅魔館で働き続けなくてはならないのだ。

お金を受け取れないので、実質的に待遇は妖精と同じものである。

だが、お金が無くとも、卓郎にとっては今の生活に大きな不満はなかった。

衣食住は保障されているし、嗜好品の紅茶はいつでも飲める。時間が空いた時は、パチユリーの図書館を利用して勉強や読書もできる。仕事は非常に大変だが、基盤となる館の環境がしっかりしているの  
で、現金が発生しなくても普通に生きていけるのだ。

農家時代の貧しい生活を体験してきたからこそ分かる、「普通」のありがたみだった。

「それじゃあ、館に戻りましょうか」

美鈴の言葉に卓郎は頷き、一緒に歩き始めた。

## 【11】 第三章

卓郎が正式な使用人となって、一ヶ月が経った。

彼が作ったお菓子の制度などは、若干の変更や悶着がありながらも、順調に機能していた。そしてこの一ヶ月で特に変わったと思うのは、彼に対するメイドの態度だった。

朝、いつものように身だしなみを整えた卓郎は食堂の扉を開けた。

「おはようございます」

中に入った瞬間、その場にいた妖精が一斉に立ち上がって頭を下げた。

「おはよう」

卓郎も挨拶を返すと、今日の料理担当のメイドがやってきた。

「おはようございます。今日は紅茶だけでなく、珈琲もありますよ。昨日、人里でユキちゃんが偶然豆を見つけてきたらしいんです。卓郎さんもいかがですか？」

「へえ、すごいな。じゃあ、お願いしようかな」

「了解しました」

小さく頭を下げて、その妖精は調理場まで飛んでいった。

「卓郎さーん。こっちの席が空いてますので、来てくださーい」

テーブルでアキが大きく手を振って招いてきたので、卓郎は彼女の隣の席に座った。

すでに周囲の席は妖精メイドで埋まっており、それぞれ朝食を摂っている。おそらく、彼のためにアキがこの席を残しておいてくれたのだろう。

食堂の数少ない窓を眺めながら、アキは機嫌良さそうに笑った。

「今日もいい天気ですね。日なたぼっこをするには絶好の日ですよ」

「アキは年中、日なたぼっこしてるような顔をしているよな」

「むっ。それはどういうことですか」

「いつも、眠たそうな顔をしていると言い換えた方がいいかな？」

「あーっ！ それ、馬鹿にしているんですか？」

「そうそう。油断したらすぐ眠っちゃいそうですね」左隣のメイドが言う。

「飛びながら眠ったりしてねー」前方のメイドも口を挟む。

「もおーっ！ 卓郎さんもみんなもひどいですよー！」

そんな会話をして笑っているうちに、朝食が運ばれてきた。

卓郎が食べている間も、メイドたちは他愛のない雑談を繰り広げた。

基本的に、この館のメイドはよくしゃべるので、卓郎が自分から話をすることはあまり無い。どちらかというところ、たまに笑ったり口を挟んだりする程度のことが多い。

それでも一ヶ月前に比べたら、だいぶ進歩したと思う。

始めの頃は、メイドとの会話に参加できなかっただけでなく、挨拶すら交わせなかったのだ。その時期に比べたら、だいぶメイドたちの態度も良くなった。一ヶ月前は平気でいたずらをしてきた妖精たちと、今は一緒に笑いながら会話をしているのだ。

単純な性格の妖精だからこそ、手のひらの返し様であった。

ただ、その全てが順調というわけでもなかった。

ほとんどのメイドは、卓郎の作った制度や環境を受け入れてくれたようだったが、一部のメイドはなかなか受け入れられずにいた。

その代表格がハルだった。

※

この日の夜、仕事を終えた卓郎とメイドたちは食堂に集まった。

今日は一週間に一度の、お菓子を配る日である。

ただ、最近はどこらかと言つと『お茶会の日』になりつつあった。ほとんどの妖精がサボらずに仕事をしてくれることに加え、配り終わった後は、そのまま食堂で配ったお菓子を食するという流れが定番になってきたからである。

ユキは、手帳をぱらぱらとめくって行く。

「ええと、それじゃあ名前を言っていくから受け取ってね」

名前を呼ばれたメイドたちは、嬉しそうな顔でお菓子を受け取っていく。今日はいつもの金平糖に加え、ユキ手作りのケーキも配られ

た。

配っている間、卓郎は横で自分の手帳を確認する。現在はどちらかが手帳を紛失しても大丈夫なように、ユキと同じ内容のものを卓郎も記入しているのだ。

今週は一人のメイドを除き、みんな仕事をサボらずにやってくれた。

「ユキちゃん。早くこっちに座ってー」

「今日のケーキもすごくおいしかったわよ。ねえねえ、作り方教えてちょうだい」

先に席に座ったメイドたちが、口々にユキを呼んでいる。

「ちよつと待ってて。すぐ向かうから」

慌てた口調で返しながら、ユキは残りのお菓子を配っていく。

卓郎に対するいたずらが無くなったと同時に、ユキに対するいじめも無くなった。おいしいお菓子を作れることが再評価に繋がったことも一つあるが、最も考えられる理由としては、ユキをよくいじめていた妖精がほとんど館を去ったことにあるだろう。

「卓郎さんも早く座りましょう」

その時、先に席に座っていたナツが彼に手招きをしてきた。

「ああ、いくよ」

ケーキの皿を持って、卓郎はナツの隣に行こうとした時だった。

視界の隅で、一人のメイドがひっそりと食堂から出ていくところを捉えた。

ハルだった。

彼女は今週は二回仕事をサボったので、お菓子をもらえなかったのだ。

何となく心配になった卓郎は、テーブルに皿を置く。

「悪い。すぐ戻ってくるから」

ナツにそう言って、卓郎は急いでハルの後を追って廊下に出た。

幸い、廊下の途中でハルに追いつくことができた。妖精なのに羽根を使おうとせず、ゆつくりと歩いている彼女の後ろ姿に、卓郎は何とも言えない寂しさを感じた。

「ハル」

卓郎の声に気付き、彼女が振り向いた。

「……ああ、なに？ わざわざ叱りにでも来たの？」

「そうじゃない。ただ、お前の様子がおかしいと思っただけ」

「別にたいしたことじゃないわよ」

「やっぱり、仲間の妖精が辞めたのが原因なのか？」

その問いに、ハルはわずかに反応する。

彼が正式に使用人になった後、紅魔館の妖精メイドの数にも大きな変動が起こった。

風の噂を聞きつけてやってきたメイドが八人増えた代わりに、卓郎の考え方が嫌になって辞めた妖精メイドが七人も出てきたのだ。

辞めたメイドのほとんどは、以前から仕事をサボりがちにしていた者だった。卓郎は粘り強く残ってくれないかと説得したが、メイドたちの決意は揺らぐことはなかった。

彼女らが辞めると表明した時、レミリアは特に驚きもせず、そのまま了承した。紅魔館の掟にある『来る者は拒まず、去る者は追わず』という内容に従ったからである。

それから程なくして、メイドの中でハルの立ち位置が急速に悪くなっていった。

食堂で飯を食べる時も、仕事をしている時も一人でいることが多くなってきたのだ。

メイドたちの会話にも、ハルに対する悪口が次第に増えていった。卓郎がその場にいる時は注意をしているが、あまり効果は感じられない。今のところハルに直接的な被害はないようだが、下手すると集団的ないじめに発展する恐れも出てきている。

しばらく黙っていたハルだが、ようやくぽつりとつぶやいた。

「まあ、そうかもしれないわね。最近、仕事もつまらなくなっただけ」

「お前らしくないな。いつものお前はどこに行ったんだ？」

心配そうにつぶやく卓郎に対し、ハルは鼻で笑った。

「はっ。あたしが何も言わなくなっただけ、せいせいしてるくせに」

「それは、その……」卓郎は口ごもる。

情けないことに、きつぱりと否定することができなかった。

「他のやつらもそうでしょ。あたしが何も言わなくなった瞬間、急に手のひらを返したようにあたしの悪口を言ってくるようになってき。ほんと、馬鹿みたい」

渴いた笑いをするハルに、卓郎は何も言い返せなかった。

彼女の言う通りである。

卓郎が使用人となった瞬間、妖精メイドは彼に対して全くいたずらをしなくなつたし、命令にも忠実に従うようになった。その反面、ハルに対しては、以前の卓郎と似たような冷たい扱いをするようになった。

最近、ユキに勧められて知ったオセロゲームの駒のように、いとも簡単に白と黒がはつきり入れ替わってしまったのだ。

「それじゃ、あたしは部屋に戻るから」

そう言つて、ハルが卓郎に背中を向けた時だった。

「ちよつと待って！」

突然、卓郎の背後から声が聞こえてきた。

振り向くと、ナツがこちらに向かつて飛んでくるのが見えた。

ナツはハルの前に着地すると、小さく息を切らしながら言った。

「卓郎さんとハルがいなかったので、もしかしたらと思つて追いかけてきました」

ハルは頭を搔く。

「今度はナツのお出ましか。で、あたしに何か用？」

「最近、あなたの様子がおかしいと思つてね」

「別に、おかしいことなんてないわ。じゃあ、あたしは部屋に戻るから」

「ちよつと待ってよ！」

ナツはハルの腕に掴みかかろうとする。

「触るんじゃないよ！」

だが、その腕をハルは勢いよく叩き返した。

呆然とする卓郎たちに、ハルは険しい表情で叫んだ。

「もういい加減にして！ あんたたちに同情されたって、ちつとも嬉

しくも何ともないのよ！ どうせ、あたしは迷惑なだけのメイドよ。仕事はよくサボってきたし、周りに対して言いたい放題してきた。あんたたちだって、あたしがこんな扱いされて『ざまあみろ』って思ってたんでしょ！」

「そ、そんなこと思ってるわけないじゃない！」ナツが返す。

「はあつ？ 自分だけ分かったような口ぶりをするんじゃないわよ」

「ハル、私はあなたのことが心配で……」

「はいはい。もういいから」

しっしっしと手を振って、ハルは強引にナツの言葉を遮った。

「これ以上、あたしに構わないでちょうだい。どうせ、明日になったら、ここから消えるつもりだしね」

ナツは目を瞬かせる。

「消えるって、どういうことよ」

「あたし、近いうちにここやめるから」

「えっ……」

突然のことに驚愕するナツに、ハルは投げやりに言った。

「何か文句でもある？ 館の掟に従うんだったら、あたしにも辞める権利だってあるでしょ。だったらなおさらだわ。こんなつまんないところ、さっさと辞めてやるわよ」

そう言い残して、ハルはそそくさと飛び去っていった。

彼女の後ろ姿を見送りながら、卓郎は拳を握りしめた。

確かに、ハルの発言はわがままな所が多かった。

しかし、だからといって必ずしも役に立たなかったわけではなく、少しは参考になった意見もあった。彼女がいろいろ言ってくれたおかげで、細かい欠点が改善できたし、その結果として、『お菓子の制度』という着想を生むことに繋がったのである。

そのハルが、今まさに館を去ろうとしている。

卓郎としては、できるなら彼女には館に残ってほしい。

でも、どうすれば残ってくれるのか、今の彼にはさっぱり分からなかった。

※



暗い気分のままお茶会を済ませた卓郎は、そのまま自室に戻った。今日はなかなか勉強できる気持ちではなかった。だが、貴重な自由時間を無駄にしたくなかったので、ひとまず鉛筆を握って勉強を始めようとした時だった。

「入るわよ」

何度か扉が叩かれた後、レミリアが部屋に入ってきたのだ。

慌てて卓郎は椅子から立ち上がる。

「お嬢様。こんな遅い時間にどうかしましたか」

「あなたに重大な頼みがあつて、やってきたのよ」

「重大な頼み、ですか？」卓郎は身を引き締める。

すると、レミリアは微笑みながら卓郎のところまで歩いてきて、至近距離まで顔を近づけてきた。その紅い目は、妙に興奮しているように見えた。

「あなたの血を吸いたい。今すぐに」

※

レミリアに連れられて、卓郎は彼女の部屋にやってきた。

館の主人らしく、卓郎の部屋の何倍もの大きさがある。衣類を入れる戸棚や奥にあるベッドなど、身のまわりの備品も彼の部屋より一回り大きい。部屋の照明はほとんど消されており、ベッド付近にある発光草だけがほのかに紅く光っていた。

吸血はこの部屋で行われることになった。

彼にとって、レミリアから吸血を受けるのは湖の前に倒れていた時以来だ。

その時の恐怖を思い出して、吸血を頼まれた時、卓郎はいつたんは断ろうかと考えた。しかし、主人の命令に逆らうことはできない。

レミリアは卓郎の方を振り向き、小さく呟いた。

「すぐ顔が強張ってるわよ」

その指摘に、卓郎はびくつと体を跳ねらせる。

「い、いえ……そんなことはないです」

「別に致死量まで吸うつもりじゃないわ。私は吸血鬼よ。どれくらい  
の量までなら飲めるのか、何となく感覚で分かるから安心しなさい」

「何となくですか……」

「まずいと思ったら、口でいいなさい。気分次第で止めるわ」

ますます不安になる卓郎に対し、レミリアは自分の服に手を掛けていった。

「さて、卓郎。あなたも脱ぎなさい」

「えっ。僕も脱ぐんですか？」

「当たり前じゃない。まさか服の上から噛みつくわけにもいかないでしょ」

そのままレミリアは帽子とドレスを脱ぎ捨てて、下着姿になった。

あられもない姿を見て、思わず卓郎は尋ねた。

「どうしてお嬢様も脱いだんですか」

「血でせっかくのドレスを汚したくないからよ。外に出るときは仕方なく着ているだけ。まさか、こんな姿で外に出るわけにはいかないでしょ」

「それはそうですね……」

納得しながら、自分の衣服を脱いでいく。

そして、レミリアと同じ下着姿となった。紅魔館に来るまではふんどしを着用していたが、今はトランクスという以前より開放感のある下着を着ている。

しばらく、二人はお互いの姿を眺めた。

家族を除いて、他人に自分の半裸姿を見せるのは初めてのことだった。相手も同じような姿になっているが、やはり恥ずかしいことに変わりはない。

レミリアは、白のベビードールにショーツという名前の下着を着ていた。

見た目は幼い女の子だが、その姿になぜか扇情的なものを感じてしまった。

「心の準備は整ったかしら？」

レミリアの問いに、卓郎はうなずく。

「じゃあ、ベッドに行きましょう」

二人は巨大なベッドの上に座り、今度は至近距離でお互いの姿を見

つめた。

彼女の肌は陶器のように白く、体の肉つきも全くもって無駄がなかった。

彼女の着ているベビードールは大人向けのようだが、肝心の彼女の胸が発達していないので、わずかに隙間ができている状態になっていた。

下手したら中が見えてしまう。わざとそうしているのかは分からないが、その部分に関しては卓郎もなるべく見ないように努めた。

幼い姿であるからこそまで来られたが、もし目の前の彼女が適度に成長した体をしていたら、おそらく彼の理性はまともな状態ではいられなかっただろう。

それくらい、彼女は将来の可能性に満ちあふれた吸血鬼だった。成長して絶大な力と類まれなる容姿を併せ持った瞬間、いったいどれくらいの人間が彼女の虜になるのだろうか。

その発展途上の吸血鬼は今、獲物を見るような目つきで卓郎を捉えていた。

「いくわよ」

レミリアは小さくつぶやくと、そのまま卓郎の体に寄りかかってきた。

二人を隔てているのは彼女のベビードールしかないのですが、嫌でも体温は伝わってくる。彼女の体は風邪でもひいているのかと思うくらい、非常に熱を帯びていた。

「寒くないかしら」レミリアが問う。

「僕は大丈夫ですけど、逆にお嬢様が熱すぎて心配です」

「心配しなくてもいいわ。ある意味、これは当然の現象なのよ」

レミリアはゆっくりと卓郎を押し倒す。

仰向けになった卓郎の体に、レミリアが上から抱きつく姿勢になった。

「この前も言ったと思うけど——」

卓郎の耳元で彼女がささやくように言った。

「私の吸血欲は、人間の食欲や性欲と同じようなものなのよ」

その直後、レミリアは大きく口を開き、卓郎の左肩にかぶりついた。激痛が走り、卓郎は顔を歪める。痛みで思わず彼女を抱きしめる力を強くさせるが、それに構うことなく、レミリアは貪るように血を吸い続けた。口から漏れる息と鼻息が首筋に当たり、少しくすつくたく感じてしまう。

彼女の羽根は血を吸うたびにどんどん広がっていき、最終的にはベッドと同じくらい長さまで到達した。間近で見るとその大きさに、卓郎は圧倒されてしまう。

痛みも鈍くなってきた頃、ようやくレミリアは卓郎の左肩を解放した。唾液と血の混じった液体が、糸のように彼女の口と彼の肩に繋がっていた。

その液を指で絡めてすくい取り、レミリアは名残惜しそうに口に放り込む。

最後の一滴まで飲み込むと、彼女は満足気に息を吐いた。

「久しぶりにいい血が飲めたわ。薬と違って生臭さがあるのが弱点だけど、やっぱり直飲みはやめられないわね。肉の噛み心地も良かったし、何より血に新鮮さがあったて飲み応えもばっちりだったわ」

「ありがとうございます」

用意していた布で止血をしながら、卓郎は礼を言った。

レミリアのことなので、冷や汗が出るくらいに吸われると覚悟していたが、意外と体は平気そうだった。これなら明日の仕事にもあまり影響はなさそうだ。

「湖で吸った時もそうだったけど、あなたの体って見た目は非力そうな感じなんだけど、間近で見るとけっこう筋肉質なのよね。不思議だわ」

「これでも農作業をやってましたから」

「なるほど。だから、噛み心地もちょうど良かったのかしら」

「やけに噛み心地にこだわってますね」

レミリアはふっ、と微笑んだ。

「私のこだわりみたいなものよ。やっぱり血を吸うんだったら、それなりに噛み応えのある人間から吸いたいのよね。噛み応えなら、あな

たのような若い男性が一番ね。女性はちよつと肉が柔らかすぎるのよ。その代わり、血の鮮度は男性より良いんだけど」

「女の人の方が新鮮な血になりやすいんですか？」

「何言ってるの。女性は生理的な現象で、定期的に血が入れ替わるじゃない。逆に男性はそういった現象がないから、たいがい古めの血を吸うことになるのよ。ただ、今日のあなたは二ヶ月前に盛大に出血してくれたおかげで、新鮮な血が飲めたけどね」

「そ、そうですか……」

嬉しいことなのかさっぱり分からないが、ひとまず卓郎は頷いておいた。

レミリアはテーブルに置いてあった紅茶で口直しをして、再びベッドに戻ってきた。下着姿のままなのは、単に着るのが面倒だからだろう。

「さて、満足に血も吸えやし、そろそろあなたに打ち明けようかしら」「何をですか」

「実はこの紅魔館にはもう一人、住人が住んでいるのよ」

唐突なことに卓郎は度肝を抜いた。

「えっ。住人って、妖精メイド以外の住人がですか？」

「当たり前じゃない。しかも、それは私の妹よ」

さらに度肝を抜いた。

「お、お嬢様の妹ですか？」

「そうよ。名はフランドール・スカーレット。この館の地下に住んでいるわ」

「地下……」

それを聞いて、卓郎はあることを思い出した。

まだここにやってきたばかりの時、ユキから「館を歩くのは自由ですが、館の地下には絶対に行つてはいけません」と、しつこく念を押されたことがあった。

その翌日、ユキの言う通り、図書館の近くにそれらしき階段を見つけた。

だが、階段の奥にある暗闇を眺めているうちに、猛烈が寒気を感じ

て、卓郎はすぐに引き返してしまった。見えない何かに首の根っこを掴まれたような、そんな得体の知れない恐怖を感じたからである。

それ以来、館の地下の話題はなるべくしないようにしてきた。仕事を始めた時も、ユキから「あの地下のことは気にしないでください」と言われたので、卓郎もそれに従い、掃除の振り分けの時も地下のことは考えずに表を作成したのだ。

だが、まさかそこにレミリアの妹が住んでいたとは……。

「どうして、地下に妹様が住んでいるんですか？」

「フランは精神的に不安定なところがあるからよ」

「でも、精神的に不安定なだけでしたら、わざわざ地下に住ませるのも……」

「理由はそれだけじゃないわ。フランは非常に強い力を持った吸血鬼なのよ。実力だけなら、そこらの妖怪とは比べものにならないくらい強いわ。下手したら、私以上の実力を持っているかもしれないわね」  
自尊心の強いレミリアがそこまで言うからには、妹の強さは相当のものだろう。

ここで彼女は目を合わせてきた。

「もし、精神状態が不安定な時に、その力が暴走してしまったらどうなると思う？ おそらく、それを止めるだけで館の半分は崩壊してしまうでしょうね」

「……お嬢様。まさか、それは本当にあったことなんですか？」

その問いに、レミリアは小さく笑って受け流した。

「だから、彼女を地下に置くことにしたのよ。パチュリーの結界魔法を使って勝手に外に出られないようにして、さらに外部に彼女がいることを分からせないために、音と振動を消す魔法も使ってるのよ。私が言うまで卓郎も全く分からなかったでしょ？」

「はい……。そうなりますと、妖精メイドの中でも知らない者がいるんですか？」

「そうね。フランのことは、ある程度、館に貢献したメイドにか話さないと決めているのよ。知っているのは全体の六割くらいかしらね。普段の世話については、ユキとナツに全て任せてるわ。二人は妖精メ

イドの中で最も長くここで働いているから、フランともけっこう顔なじみだね。ごくたまに力が暴走して『一回休み』になる時もあるけど、ほとんどは二人の言うことを聞いてくれるわ」

「じゃあ、僕が妹様の世話をすることはないんですね」

「当たり前じゃない。死なない妖精だからこそ、まともに世話ができるのよ。さつきも言ったけど、フランは精神的に不安定な所があるから、ほんの気まぐれでそばにいる相手を殺してしまうことだってあるのよ。あなただったら即死でしょうね」

「そうかもしれませんが……」卓郎は空笑いをする。

飛行能力だけでなく、死なないところも妖精の大きな特徴である。

先ほどレミリアが言った『一回休み』とは妖精特有の概念で、人間で言う『死亡』のことを意味する。

妖精という種族には不死である。もし、何らかの理由で死亡してしまっても、すぐに復活することができる。これを妖精たちは『一回休み』と呼んでいるのだ。

ただ、死なないからといって、普段から無茶な行動をするわけでもない。

いったん『一回休み』になると、復活しても一定時間は虚脱状態に陥ってしまうらしく、それを嫌って、あまり妖精たちは『一回休み』にはなりたくないらしい。もしくは、単純に痛いのが嫌で『一回休み』になりたくないと言う妖精もいる。

何となく理解はできても、人間の卓郎には全く想像できない話だった。

「ユキとナツが妹様の世話をしているんですね」

卓郎は感心するように言う。

「そうよ。最初の頃はよく『一回休み』にされて、けっこう苦労したらしいけど、今はそれなりにうまくやってみたいね。ここ何年かはフランの精神状態も安定期に入っているし、よくやってくれてると思うわ」

「そうですね」

「近いうちにあなたにもフランを紹介するわ。期待しなさい」

「……はい。ありがとうございます」

本当に大丈夫なのかと思いつながら一応、形だけ感謝しておくことにした。

「さて、そろそろ歩けるようになったでしょ」

レミリアはベッドから立ち上がる。

その言葉で察した卓郎もベッドから出て、脱ぎ捨てていた服を着始めた。その最中、不意にあることを彼女に相談してみたくなった。

ハルのことである。ぜひ、主人からの助言を乞いでみたくなったのだ。

「今日のところは感謝するわ」

だが、レミリアが先に口を開いてしまったため、相談する瞬間を逃してしまった。

「これからも定期的にあなたの血を吸わせてもらうわ。これで少しは外に出る手間が省けるしね。ただ、あまりやりすぎるとあなたの体に悪影響が出ちゃうし、やるとしても二、三ヶ月に一回くらいになりそうね。お互い損な結果にはなりたくしないしね」

「二、三ヶ月に一回ですか」

「残念だわ。あなたの血は本当においしいのに」

名残惜しそうに見つめるレミリアに、卓郎は頭を掻いた。

結局、ハルのことは相談できず仕舞いになってしまった。

ただ、これで良かったのかもしれないという思いも一方ではあった。

掟を重視するレミリアのことである。『それは彼女の決めたことだから、私たちがとやかく言うことではないわ』と、澄ました顔で返す可能性が高かっただろう。

着替え終えた卓郎は、そのまま扉に手をかけた。

「おやすみなさいませ。お嬢様」

「おやすみ。卓郎」

こうなったら自分で何とか説得するしかないと思い、卓郎は扉を閉めた。



次の日、卓郎の仕事は一階の掃除だった。

そして運の良いことに、ハルも同じ場所で掃除をするようだった。

朝の挨拶を済ませた卓郎は、すぐに今日の仕事に取りかかった。昨晩にレミリアから吸血をされたばかりだったが、特に後遺症もなく、箒を持つ手は快調だった。

廊下のごみもだいぶ溜まってきた頃、妖精メイドがやってきた。

「卓郎さん。ちりとり持ってきました」

「ああ、ありがとう」

妖精メイドが持つちりとりに、彼がごみを入れている最中だった。

「あの、一つお願いがあるんですけど……」と、妖精メイドが話しかけてきた。

「んっ。どうした」

「実は、外にいる友達が館に入りたいと言ってきているんです」

「外の友達が？」

「はい。最近、紅魔館がとても良くなってるという噂を聞いたらしくて」

「へえ。そんな噂が流れているのか」

「だから、入れさせてもらえないでしょうか？」

卓郎の返事は即答だった。

「いいよ。ここで働きたいなら、誰でも歓迎するよ」

妖精メイドの顔が輝いた。

「ありがとうございます。近いうちに友達に伝えますね！」

ごみを収めたちりとりを持って、妖精メイドは嬉しそうに去っていった。

その後ろ姿を眺めながら、卓郎は微笑む。

実は、昨日も同じようなことを二人の妖精メイドから頼まれたのである。つまり、この時点で三人の妖精が近いうちに館に来ることが決まったのだ。

自分の頑張りで館に良い噂が立つのは、嬉しいことである。

だが、そのせいで館に入りたいと申し出る妖精が最近になって急増しており、そこは少し手間が掛かりそうだった。実際、昨日の昼にも二人の妖精が館にやってきて、卓郎はその対応で昼の仕事を他のメイドに任せてしまったのだ。

仕事の役割分担表も、新しくやってきた妖精の分も追加しなければいけなかったので、昨日の夕方に慌ててその調整をしたのだ。

今はユキとナツが、入ってきたばかりの妖精に対して仕事を教えている。

ぜいたくな悩みであるのは承知しているが、しばらくはこの流れが続きそうだった。

そして、卓郎にとって最も解決しなければいけない問題がすぐそこに迫っていた。

廊下の掃除もそれなりに進んだ頃、ついに卓郎は彼女を見つけた。

ハルだった。彼女は羽根を使って、廊下の燭台を拭いているところだった。表情はあまり冴えていないようで、以前までの快活な印象はどこにも見当たらなかった。

「ハル。調子はどうだ」

卓郎の声を聞き、ハルはあらかさまに面倒くさそうな顔になる。

「別に、普通よ」

「少し休憩にしないか？ 今日順調に進んでるし」

ハルは作業する手を止めて、卓郎を見下ろす。

やがて、肩をすくめて彼のところに降りてきた。

小休憩なので、わざわざ紅茶を飲むわけにもいかず、卓郎たちは近くの部屋に寄った。用意していた水入れをテーブルに置き、二人は部屋の椅子に腰掛ける。

卓郎が口を開こうとした瞬間、ハルが先に断言した。

「今さら止めたって無駄よ。あたしは今日、館をやめるつもりだから」  
彼女の先制攻撃に、卓郎はわずかにたじろぐ。

「やっぱり、辞めちゃうのか？」

「だってさー。あたしの友達とかみんな辞めちゃって、一気に仕事が

つまんなくなっちゃったんだもん。こんなところにいるても意味ないから辞めるのよ」

確かに辞めていったメイドは、どれもハルと親しいメイドだった。「でも、親しくしていたのはそのメイドたちだけじゃないだろ。アキとかナツとか、それなりに親しくしていたような気がするけど」

「そうだけど、辞めるのはあたしの勝手でしょ」

ふうん、と卓郎はつぶやく。言うなら今しかない。

「アキとナツはすごく心配していたぞ。最近、お前が他のメイドから悪口を言われているから、どうにかしてくれないかってこの前、僕に相談してきたんだ」

「へえ。アキもナツも急にいい子ぶっちゃって、何を言ってるのかしら」

「僕だってそうだよ。正直、やめてほしくないと思ってる。ユキだって、ハルのことをすごく心配していたんだ。そりゃあ、ハルに不満を持つてるメイド中にはいるだろうけど、お前を心配してくれるメイドだっているんだ」

「アキとナツはともかく、リーダーとユキがそう言うのは納得いかないわね」

ここでハルは鋭い視線を投げってくる。

「あれだけあたしがいじめてやったのに、今さら味方ぶったような顔をしないでちょうだい」

「味方ぶるって……。同じところで働いているんだから、味方なのは当たり前だろ」

「ああ、もう！」

我慢できないように、ハルは足をじたばたさせる。

「もうあたしに構わないでちょうだい！ いい加減、うざったいのよ！ どうせ、あたしはもうすぐ消えるメイドなのよ。こんな奴に構ってる暇があったら、新しくやってきたメイドたちの面倒でも見たらどうなのよー！」

「おい、なに勝手に怒ってんだよ」

「うるさいうるさい！ もうあたしに構わないでちょうだい！」

そう叫んで、ハルはテーブルに突っ伏してしまふ。

その拍子に彼女のひじが水入れに当たり、卓郎は慌ててそれを支える。

幸い水はこぼれずに済んだが、次に返す言葉が見つからなかった。彼女の性格のことだから説得するのは難しいだろうと感じていたが、ここまでだとは思わなかった。

——ハル。ああ見えて、実はけっこう繊細なんです。

これは昨日の夜、ナツが述べた言葉である。

おしやべりでいたずら好きなこともあり、一見すると軽い印象のあるハルだが、実はけっこう寂しがり屋な一面もあるらしい。それ故に親しくなった相手をとても大切にする傾向にあり、今回の紅魔館を辞める件も迷っているらしいのである。

最初は卓郎も本当なのかと疑ったが、その後のナツの言い分はそれなりに納得のできるものだった。親しくしていたメイドが辞めても、しばらく館に残っていたのは、まだ館に親しいメイドが残っているからである。

その親しいメイドとは、言うまでもなくナツやアキのことだろう。長い付き合いのナツだからこそ分かる、ハルの知らない顔だった。

うずくまっているハルに、卓郎が言葉を掛けようとした時だった。遠くから凄まじい爆音が聞こえてきたと同時に、館全体が揺れたのだ。その拍子に、壁に掛けてあった絵画が床に落ちてしまふ。

これには卓郎だけでなく、机に突っ伏していたハルも顔を上げた。

「なんだ、今のは」

「……もしかしたら」

何かに気付いたように、ハルは立ち上がる。その表情は青ざめていた。

「もしかしたらって、なんだよ」

「妹様が結界を突破してしまったかもしれない。だいぶ昔だけど、前にも同じようなことがあって、その時も今のよう大きな音が聞こえてきたのよ」

「妹様が？」

驚きながら、卓郎も椅子から立ち上がる。

レミリアの妹、フランのことについて説明を受けたのはつい昨晚のことだ。まだ彼女のことは詳しく知らないが、深刻な事態が発生したのは間違いなさそうである。

「もし本当に妹様が逃げたのなら、まずいな。早く僕たちも行こう」  
「……まあ、そうね」

ハルは迷った顔を見せながらも、最後は承諾してくれた。

二人が部屋を出た直後、ユキが慌てた様子で飛んできた。

「卓郎さん！ そちらにいましたか」

「ユキ。何があつたんだ」

「妹様が結界を突破して逃げ出してしまったそうです。今、パチュリー様が雨を降らせましたので、おそらく館のどこかにいるかと思えます」

「雨？」

窓を見ると、確かに外は雨が降っていた。

ついさつきまで雲一つない良い天気だったのに、今はどしや降りの雨が降っているのだ。しかも、降っているのは紅魔館周辺だけのようで、遠くに山に雲は全く掛かっていなかった。

おそらく、フランが館から脱出しないための手段だろう。吸血鬼は雨が苦手なのだ。

ハルとユキを連れて、卓郎は廊下を駆けていく。

「それで、妹様は見つかったのか」走りながら卓郎が問う。

「まだです。今、お嬢様も含めて、メイド総出で探しています」

「もし、見つかったとしても、メイドだけで止められるのかな？」

「分かりません。それも妹様の気分次第です」

「気分か……」

そうになると、力づくで止められるのはレミリア、パチュリー、美鈴くらいになってしまう。卓郎にできることは、せいぜい口で説得するくらいだ。

探している間にも、何人もの妖精メイドと擦れ違う。

その途中、パチュリーと小悪魔に遭遇した。

「どう？ 見つかったかしら」息を切らしながらパチュリーが問う。  
「いえ、まだ見つかってません」と、卓郎。

「そう、今日は気分がすごく悪いから、早く見つけて——」  
言葉の途中でパチュリーは大きく咳き込み、その場にうずくまってしまった。

「パチュリー様！」小悪魔が彼女の体を支える。

その瞬間、外の雨が小降りになった。

小悪魔が卓郎たちに顔を向けて、焦った様子で言い放った。

「今日のパチュリー様はそう長く魔法が使えないんだ。だから、早く妹様を見つけてくれ。早くしないと、取り返しつかないことになるぞ！」

卓郎たちは頷き、パチュリーたちから離れて再び廊下を駆け始めた。

パチュリーは強力な魔法使いであるが、その代わりに身体能力が非常に劣っているのが弱点だった。

肉弾戦だけならば、卓郎にもあつさり負けてしまいうくらいである。しかも、喘息持ちなので、今のように症状が出て魔法が長続きしない場合があった。

「どうやら、今回はパチュリーの魔法にあまり頼ることはできなさそうだった。」

しばらく卓郎たちは一階の廊下を走り回ったが、結局フランを見つけることはできなかった。突き当たりを折り返して、三人は二階への階段前までやってきた。

「ねえ、三人で探すのは効率悪いし、手分けして探しましょうよ」

ハルの提案に卓郎は同意する。

「そうだな。じゃあ、ユキは二階の方。ハルは一階の部屋を探してくれ」

二人のメイドは頷き、各々が動き始めようとした直後だった。

突然、空気が重たくなるような感覚に襲われ、卓郎たちは足を止める。

そして目の前の光景を見て、彼は戦慄してしまった。

ついさつきまで、廊下の先には誰もいなかったはずである。しかし、彼がまばたきした瞬間に、一つの人影が瞬間移動でもしたかように忽然と目の前に姿を現したのだ。

それは、彼にとつて初めて見る少女だった。

背丈はレミリアと同じくらいで、髪は金色で白のふわふわの帽子をかぶっている。背中には、宝石のような装飾品の付いた細長い羽根が生えている。

「あなたなの？　最近、妖精たちの中で話題になってる新しい使用人って」

レミリアの妹、フランドール・スカレットは不気味な笑みを浮かべながら、卓郎たちの前に姿を現した。

※

レミリアいわく、フランは少し精神的に不安定なところがあるらしい。

あなただったら即死でしょうね、という昨晚のレミリアの言葉が蘇ってくる。下手なことを答えなら、一瞬にうちにフランに殺されてしまう可能性だってあるかもしれない。

とにかく無闇に刺激させないよう、卓郎は平静を装って答えた。

「はい。僕は卓郎といいます。一ヶ月前に正式な使用人となりました」

「へえーっ。そうなんだ。わたし、男の妖精メイドって初めて見たわ。というか男っていう存在自体、初めて見たかもしれないわ」

男の妖精？

何だか大きな勘違いをしているようなので、卓郎が指摘しようとした時だった。

「ユキ！　早くお嬢様に伝えにいつてー！」後ろでハルが叫んだ。

「で、でも、ハルちゃん卓郎さんが……」

「つべこべ言わないで！　どうやら妹様はリーダーに関心があるようだし、ここはあたしたちが何とかするから、あんたは早くお嬢様に伝えてー！」

「わ、分かったわ……」

ユキは頷いた後、すぐ横にある階段を上っていった。やや遠回りの道順となってしまうが、フランの横を通り過ぎるのは危険だと判断したのだろう。

フランはそんなユキに目もくれず、卓郎をじっと眺めている。

レミリアとは違う種類の威圧感に、卓郎は目を合わせる事ができなかった。

金髪の吸血鬼はふうん、とつぶやいた。

「ユキとナツから、いろいろとあなたの話を聞いてるわ。館のために規則を作ったり、お菓子の制度を作ったりとかね。まあ、どれもわたしの知ったこつちやない話だけど、ユキたちがいつも嬉しそうに話してくるから、嫌でもあなたのことを覚えちゃったのよ。だから、ちよつと気になつてね」

「もしかして、地下から出てきたのは僕に会うためですか？」

「まあ、そうなるね。ここしばらくは地下から出てなかったし、たまには上に行くのもいいんじゃないかなと思って、少し苦労したけど結果を壊したのよ」

「……嬉しいと思つたほうがいいのでしょうか」

「あなたが嬉しいと思つたのなら、わたしも嬉しいわね」

微笑みながらフランは答える。

——予想以上に会話がすんなりと進んでいる。

昨晚の話を聞いている限りでは、フランとまともな会話ができるのか心配だったが、一連の会話の中で特にこれといっておかしいところはなかった。

すると、フランは右手を差し出してきた。

「名乗るのが遅れたわね。わたしはフランドールって言うの。よろしくね」

「はい。よろしくお願いします」

握手を求めているのだと思い、卓郎も右手を差し出そうとした瞬間だった。

「だめ！ それに触っちゃだめ！」

ハルが叫びながら、卓郎のところまで飛んできたのだ。



それと同時に、不気味な笑みと共にフランの右手が微かに光り始める。

ハルが横から強引にフランの右手を握った直後――。

ばしやっ、という肉が潰れるような音と共に、ハルの右腕が爆発したのだ。

突然のことに、卓郎の頭は一気に真っ白になる。

ハルの右腕が何の兆候もなく、まるで花火のようにいきなり爆発したのだ。小刻みにされた肉と血が周囲に飛び散っていく。

この衝撃で、卓郎に寄りかかるようにしてハルは倒れてきた。突然のことでもとにも支えることもできず、卓郎はハルを抱えたまま一緒に転んでしまった。

そして次に目を開けた瞬間、卓郎は再び驚愕した。

「あっ……あっ……」

つい先ほど爆散したはずのハルの右腕が、いつの間にか元に戻っていたのだ。

だが、ハルは再生されたばかりの右腕を眺めながら大きく震えていた。辺りはハルの血で汚れてしまい、卓郎も思いつきり血を顔にかぶってしまった。

フランはぺろっ、と顔にかかった血を舐める。

「あらあら。彼に歓迎のあいさつをしようと思ったのに、急に邪魔してきてどうしちゃったのよ。彼は妖精なんだから、この程度なら問題ないでしょ」

今の行為を全く気にしていないような口ぶり、フランは笑った。確かに妖精は不死である。右腕が吹き飛んでも、すぐに再生できる。

だが、その痛みや衝撃は人間並みではないとはいえ、ある程度は受けるはずだ。現にハルは今の衝撃で半分ほど虚脱状態に陥ってしまったようで、卓郎に抱かれたまま一步も動けずにいた。

もし、あのままハルの助けがなかったら――。卓郎は身震いをした。

しかも、フランはとんでもない勘違いをしているようだ。

ハルの体を横に置いて、卓郎はフランの前に立った。

「妹様。どうやら勘違いしているようですが、僕は妖精ではありませんん」

「えっ」と、フランは初めて驚きの表情を見せる。

「僕は人間です。れっきとした人間です。だから、ハルは身を挺して僕を助けてくれたんです。どうか、これ以上のことをやめてください」

恐怖と緊張で思うように言葉が紡げなかったが、何とか返した。

「あなたは、人間なの？」

「はい。なので、妖精のように生き返ることはできません」

これに対し、フランはぶんぶん大きく首を横に振った。

「そんなのあり得ないわ。だって、お姉様からよく人間は頭が悪くて死にやすくて、とても弱い種族だという話を聞いたんだもん。わたしはまだ生きている人間を見たことないけど、そんな奴が紅魔館の使用人なんて務まるわけないじゃん！」

「でも、僕は人間です」

ここで卓郎は自分の背中を示す。

「ほら、見て分かりますと思いますが、僕には羽根が生えてません。これがれっきとした証拠です！」

ふん、とフランは鼻を鳴らした。

「たかが羽根くらいで決めつけないですよ」

そして彼女は右手をかざすと、そこに光の粒が集まってきた。

「だったら、手っ取り早い方法であなたが人間かどうかを確かめてやるわ」

彼女の右手に集まった大量の光の粒が収束し、やがてあるものを形成した。

それは一本の杖みたいなものだった。卓郎が唾然とした直後、その杖は一気に燃え上がった。だが、杖は燃え尽きることなく、その炎を纏うような形になった。

周囲の空気が一気に熱くなり、卓郎は反射的に服から布を取り出して、自らの口と鼻を覆った。そして壁際まで後ずさりする。

フランは炎を纏った武器を素手で握りしめて、口元を吊り上げた。「これをあなたに思いつきり刺して、本当に人間かどうかを確かめてやるわ。もし、本当に人間だったらあなたは死んじやうけど、妖精だったらすぐ生き返るしね」

——何を言っているんだ、この子は。

意味不明な言動に、いよいよ卓郎の思考は混乱してきた。ただ、一つだけ分かることはフランは本気で彼を刺そうとしているのだ。

近くで座り込んでいるハルは、顔を歪ませながら卓郎の方を見ている。

卓郎は最後のあがきで叫んだ。

「妹様ー、さつきまで人間と言ってましたが、それは嘘です！ 僕は羽根は付いていませんが、れつきとした妖精です。なので、僕を殺しても意味がありません。それに使用人の僕を刺してしまいますと、この後の仕事に影響しまして、お嬢様にも大きな迷惑がかかってしまいます！ だから、僕を殺さないでください！」

「やだ」

卓郎の言葉を一蹴して、フランは彼のもとに駆け出す。

地が震えるような音と共に、炎を纏った凶器が彼にめがけてやってくる。

恐怖で卓郎は目を閉じる。

その直後、凄まじい爆音と熱風——そして焼けるような痛みが彼を襲ってきた。その強烈な音に、卓郎の両耳は一瞬だけ聞こえなくなってしまう。

だが、いくら時間が経っても意識を失うことはなかった。

恐る恐る目を開けてみると、眼前にはフランの訝しげな顔があった。

そして、横の方に目を移した瞬間、卓郎は啞然とした。

彼の数十センチ左には、巨大な穴がぽっかりと空いていたのだ。しかも、穴の周囲は黒くこげになっており、焦げたような嫌な臭いがした。この攻撃によって、卓郎の左腕の制服は完全に燃えてしまい、さらに左腕の大部分が火傷してしまった。

穴の方をうかがいながら、フランは大きく後ろに下がる。

「あれ。わたしの見間違いだったのかな」

意味が分からず、卓郎は首を傾げる。今の爆音で耳がかなり遠くになってしまったが、何とか彼女の言葉は聞き取れた。

フランは目を擦りながら続けた。

「だって一瞬、あなたの姿が見えなくなっただももん。そのせいで少し手元が狂って、外してしまっただじゃん。ねえ、今の見えなくなったのって、あなたの能力なの？」

能力、と聞いて、初めて卓郎は近くにいるハルに目を向ける。

彼女は相変わらず苦しそうな表情している。

だが、彼と目が合った瞬間、ハルは小さく口元を吊り上げた。

ようやく卓郎は理解した。

ハルは『あらゆる物を見えなくさせる程度の能力』を持っている。具体的には対象のものを周囲の景色と同化させるだけなのだが、それが結果的に彼の命を救ったのだ。

フランが攻撃する直前に、ハルが能力で卓郎の姿を見えなくさせることで彼女の目を攪乱させ、わずかに攻撃の軌道を逸らせることに成功したのだ。

だが、それは単に運が良かっただけの話である。

いくら最初の攻撃をかわせたとはいえ、状況が好転するわけではなかった。

「まあ、いいわ。見えなくなる前に攻撃すればいいんだもの」

そう言つて、フランは再び攻撃の構えをとる。

今度こそまずい、と卓郎は思った。

相手は強大な力を持つ吸血鬼である。

その相手に、同じ手が二度も通用するとは考えられなかった。ハルの能力は所詮、対象を見えなくさせるだけである。

フランのことだから、おそらく気配だけで察知されるだろう。後ろに下がってくれたとはいえ、人間の卓郎が吸血鬼の攻撃を避けることなど不可能である。

——後ろに下がった？

この時、卓郎の中で一つの疑問が浮かび上がった。どうして、フランはわざわざ後ろに下がったのか。

現在、卓郎とフランの間には、かなりの距離が空いてしまっている。武器を構えるには、少し後ろに下がりすぎではないか。

その瞬間、卓郎の中でこの状況を打開する方法を思いついた。

時間はない。一か八かの勝負だった。

卓郎はハルに向けて叫んだ。

「ハル、今だー！」

その言葉に釣られて、フランの視線が一瞬だけハルの方を向く。時間稼ぎに成功した。

この隙に、火傷の痛みをこらえて卓郎は体のある方向に投げだす。

それは、先ほどフランが空けた巨大な穴だった。穴の先は館の庭である。

火傷している左腕から、そのまま卓郎は館の庭に突っ込んだ。ちょうど彼が倒れたところには水たまりがあったので、飛び込んだ拍子に盛大に水しぶきが舞った。

泥だらけになりながら中を見ると、穴の先にはフランの呆然とした顔があった。

今、パチュリーの魔法で外は雨が降っている。

吸血鬼は流れる水——もしくは雨を越えることができない。

つまり、フランは卓郎がいる庭に踏み込めないのである。だから、フランは先ほど大きく後ろに下がったのだ。穴から雨が漏れてきたため、それを避けるために下がったのだ。

これでフランの攻撃を受ける心配は無くなった。

顔に付いた泥を拭い、卓郎は言った。

「どうしたんですか妹様。攻撃してこないんですか？」

卓郎の挑発に、フランは凶器を握り締めながら、憎悪を含んだ視線を向けてきた。どうやら、卓郎の目論見は見事に当たったようである。

使用人としては非常に不謹慎であるが、ざまあみろと思った。

「ハル。卓郎。時間稼ぎ、よくやったわ」

その後、ようやく待ち望んでいた声の中から聞こえてきた。  
フランの顔が横に向けられる。

卓郎からでは中の様子はよく確認できないが、何とか間に合ったよ  
うだ。

「フラン。私の所有物に何をしていたのかしら？」

紅魔館の主、レミリア・スカーレットの威厳に満ちた声が確かに聞  
こえてきた。

フランの姿が見えなくなった後、妖精メイドが穴から卓郎のもとへやってきた。

来たのはユキ、アキ、ナツ、ハルの四人。

フランの攻撃を受けたハルは、ナツに背負われた状態だった。

「卓郎さん。しっかりしてください！」

ユキの問いかけに、卓郎は大丈夫だと言わんばかりに立ち上がった。

「ちよつと火傷したけど、問題ないよ。それよりハルはどう？」

「ハルちゃんは大丈夫です。軽い虚脱状態になっているようですが、しばらくすれば良くなると思います」

それを聞いて卓郎は安堵の息を吐く。

だが、急に左腕が痛み出して、すぐに顔をしかめた。

「あつ。嘘いわないでください。けっこう重傷じゃないですか」

アキは能力を発動させて、「卓郎さんが火傷を負っています。急いで冷えた水を持ってきてください」と、誰かに伝えた。

ユキは慌てて布を取り出すと、火傷の部分に付いてしまった泥をそつと拭き取っていく。

その直後、中から激しく物が激突する音が聞こえてきた。と、同時に派手な破裂音と共に、近くの窓硝子が一斉に飛び散り、卓郎たちはびくつと体を跳ねらせた。

中ではおそらく、吸血鬼の姉妹が激しい戦闘を行っているのだろう。何かが激突する音が聞こえるたび、建物がぎしぎしと嫌な音を奏でた。

卓郎の状態を見ながら、ナツは焦ったように言った。

「まずいわね。ここからだ、中に入るには回り道をしないといけな  
いわ」

「どうしてまずいの？」アキが問う。

「ここから館に入るには、裏口の方まで行かないといけないわ。でも、

卓郎さんとハルの状態を考えると、かなりの時間が掛かってしまいうね。下手したら、卓郎さんの火傷が悪化しかねないことになるわ」ユキとアキは、「あつ」と同時に声をあげた。

この場所は紅魔館の敷地内では、かなり端の方に位置している。

そのため、最寄りの入口まで結構な距離があるのだ。しかも、今は雨で地面がぬかるんでいるため、一刻も早く治療しなければならぬ卓郎にとって、それは手痛い時間の消費だった。

だからといって、目の前の穴に入るのは危険である。

「私たちならともかく、人間である卓郎さんが穴を通るには危険すぎるわね」

ナツの言う通りである。最悪、激しい戦闘に巻き込まれて死ぬのが目に見えている。

その時、アキが思いついたように手を叩いた。

「そうだ。美鈴さんに卓郎さんを運んでもらえばいいじゃない。今から私が能力で美鈴さんに伝えるから、もうちよつと待ってて——」アキが言い終わらないうちに、近くで強烈な爆裂音が聞こえてきた。

直後、卓郎たちの近くにある館の壁が崩落した。

運良く崩落した壁には巻き込まれなかったものの、その規模は先ほどのフランの攻撃とは比べ物にならないほど大きかった。

崩落した壁の先には、張りつめた空気がたちこめていた。

吸血鬼の姉妹がお互いに武器を持って、睨み合っていたのだ。

フランは先ほどの炎を纏った武器を持っており、レミリアの方は紅色の投槍みたいなものを構えていた。卓郎にとって、レミリアの武器を見るのはこれが初めてだった。

彼が見ない間に、中で壮絶な戦闘が行われていたのだろう。

両者とも、すでに肩で息をしている状態だった。天井や壁の至るところにひびが入っており、中の調度品は全て破壊し尽くされていた。

「……久しぶりだね、この感覚。全身の血が騒ぎに騒いでいるわ」興奮した目つきでレミリアが口を開く。

「お姉様もずいぶんと平和ボケしちゃったよね」



「それはお互い様よ。あなたもしばらく、こんな派手に戦わなかったでしょ」

「そういえばそうね。この前はいつ戦ったかな。忘れちゃったわ」

「お互い疲れたし、もうあなたもこれで満足したでしょ。悪いこと言わないから、とつととおとなしく地下に戻りなさい。目的の使用人にはもう会えたんでしょ」

「会えたけどさー」

フランの視線が一瞬、外にいる卓郎の方に向けられる。

「なんか腹立たしいのよね。せつかくわたしが遊んでやろうと思ったのに、彼が下手な小細工を使ってきて、遊んでくれなかったんだもん」  
「その下手な小細工にやられたのはあなたの方でしょ」レミリアはため息を吐く。

「全く情けないわね。格下に一本取られた時点で、あなたの負けは決まってるのよ」

フランは歯ぎしりを立てた。

「お姉様。今、わたしはものすごく機嫌が悪いの。だからこれ以上、わたしを怒らせないでくれる？」

「ふん。まだ気が済んでないなら、かかってらっしゃい。付き合っただげるわ」

姉の言葉を受けて、フランは武器に纏っている炎を増幅させる。地の底が鳴いているような低い音が、卓郎たちの方にも聞こえてきた。フランは炎の武器を大きく掲げると、レミリアに向けて振り払った。

すると、炎が自ら勝手に動いてレミリアに迫ってきた。

レミリアは羽根を使って天井まで飛翔する。だが、炎もその後を追うように上昇していく。下から迫ってくる炎に対し、レミリアは瞬時に横に動いて避ける。その瞬間の動きは、卓郎も目で追えなかった。炎はそのまま天井に激突し、消えて無くなった。

火の粉を振り払いながら、今度はレミリアがフランに向けて急降下する。

そして、その紅い剣を縦に振り降ろした。

剣の軌道を見切ったフランは瞬時に横に動いて、剣を避ける。レミアの剣はそのまま床に突き刺さり、この拍子に周囲の床が大きく陥没した。

剣を避けたフランは、体制を立て直しながら炎を発生させる。

一方のレミアも床から剣を引き抜き、フランの方を確認しながら剣を構える。

——姉妹の目が合ったのは、ほんの一瞬のことだった。

お互いが同時に真つすぐに動き出して、それぞれの武器を激突させる。

その瞬間、衝撃波が卓郎とメイドたちに襲いかかってきた。

あまりの勢いに全員、その場で転がり込んでしまう。衝撃波は周囲の瓦礫をも吹き飛ばしたが、幸い誰にも当たらずに済んだ。

急いで立ち上がり、卓郎はレミアたちの方を見る。

すると、卓郎からの位置では二人の姿が見えなくなっていた。

「お嬢様！」

メイドたちも連れて、彼は再び穴から中に入る。

レミアとフランは肩で息をしながら、両端の壁にそれぞれ背を預けていた。

二人ともすでに武器は持っておらず、お互いに軽く血を流している。帽子もどこかに吹き飛ばされており、服もところどころが焦げてしまっていた。

「お嬢様、妹様！ お怪我はありませんか！」

声を張り上げて、ユキとアキがそれぞれの所へ行く。

アキの手を借りて、レミアは苦笑いをしながら立ち上がった。

「やっぱり、お互いかなり平和ボケしちゃってるわね。思ってたより体力を消耗するのが早かったわ。まあ、この程度の傷ならすぐ治るから安心しなさい」

フランもユキに体を支えられながら、何とか立ち上がった。

「あーもーっ。体が動かないわ。こんなはずじゃなかったのに」

どうやら、さっきの攻撃で姉妹どちらとも体力が尽きてしまったらしい。あれだけ壮絶な戦いをしていたのだから、いくら吸血鬼でも体

力の減りは半端ないだろう。

「妹様。そろそろ地下に戻りましょう。私が運びますので」

ユキの言葉にフランは物足りなさそうな顔をしたが、やがてため息を吐いた。

「……そうね。もう疲れたわ。早く寝たいよ」

ここでフランは顔を上げた。

「ねえ、ユキ。そんなことより、さっきのお姉様との戦いを見てたでしょ。だったら、今のはわたしの勝ちでいいよね。ねっ。わたしの勝ちで」

「え、ええっ……」

ユキは困惑の顔を浮かべる。

助けを請うようにレミリアに顔を向けるが、彼女は意地悪にも口を吊り上げるだけで何も言おうとしない。

「そうですね」

ユキは姉妹の顔を交互に眺めてから、さらっと言った。

「今日は引き分けにしましょう。お嬢様も妹様も全く動けない様子ですので」

※

ユキがフランを連れて地下に潜っている間に、卓郎の治療は行われた。

応急処置を済ませた後、地下の結界を作り直したパチュリーがやってきて、そのまま治療をしてくれたのだ。彼の火傷は左腕の広範囲に渡っていたものの、皮膚の深いところまでには及んでいなかったため、治療自体はすぐに終わった。

彼女の説明によると、何日か安静にしていれば仕事に復帰できるとのことである。もちろん、人間の医療技術ではその何倍もの時間が必要であっただろう。

ちなみに、卓郎以上に容態が深刻になってしまったのは、意外にも治療したパチュリーの方だった。体調が万全ではない中、結界の修復、卓郎の治療を連続して行ったため、全てを済ませた直後、廊下で倒れてしまったのだ。

後で聞いた話によると、そのまま三日間も寝込んでしまい、治った後も一週間くらいは不機嫌だったらしい。

火傷の治療後、卓郎はユキ、アキ、ナツに付き添われ自分の部屋に戻った。ハルはまだ右腕の衝撃が残っていたので、もう少し体を休ませるということだった。

「妹様の状態はどうだった？」卓郎はユキに尋ねる。

「今は地下で眠っています。あの状態ですと、しばらく起きないでしょう。あと、これはあまり関係ないことだと思いますが――」

いったん間を置いて、ユキは口を開いた。

「卓郎さんのことを、最後まで人間だと認めてくれませんでした」

がくり、と卓郎は頭を落とした。

「なんでだよ」

「おそらく、人間のことをよく知らなかったからだと思います。妹様はこれまで一度も人間と交流をしてこなかったのです」

「四百年以上も生きてきて、一度も人間と交流がなかったのか」

「はい。ほとんど地下で生活してきましたから」

つまり、フランは世間知らずな吸血鬼ということになる。

今回の卓郎に対する誤解も、そこに原因があったのかもしれない。

おかげで、とんでもない目に遭ってしまった。ハルがいなかったら、今ごろ自分は本当に消し炭になっていたかもしれない。

釈然としない所もあったが、とりあえず今回は納得してやることにした。

ユキたちをいったん外に出して、卓郎は着物に着替える。準備を済ませると、そのままベッドに横になり、「入ってもいいよ」と扉に向けて言い放った。

すると、入ってきたのはメイドたちだけでなく、レミリアもそこに含まれていた。メイドたちは、主人の後ろで緊張した顔つきになっていた。

卓郎は慌ててベッドから上半身を起こす。

「お嬢様。体はもう大丈夫なんですか」

「ええ。少しだるいけど、動けるようにはなったわ」

すでにレミリアは新しい服に着替えており、火傷もとつくに治っているようだった。吸血鬼の傷の治りは、人間とは比べものにならないほど早い。

「いろいろなと迷惑をかけてしまって、申し訳なかったわね」

「いいえ。気にしないでください」

命の危機であったが、今はだいぶ平静さを取り戻していた。この二ヶ月間で多くの壮絶な経験をしてきたせいか、神経もだいぶ頑丈になってしまったようだ。

「ユキの話によると、すでにフランは地下で眠っているそうね。まあ、今日はあれだけ暴れたんだもの。しばらくは、今日のようなことは起こさないでしょ」

「あの、お嬢様と妹様はたびたび戦っておられるんですか？」

「そうよ。今日は少し派手にやった方かしら。当たり前だけど、さすがに殺し合いになるほどの喧嘩は一度もしてないわ。フランの方だって、いくら精神的に不安定なところがあるうと、その所はしっかり弁えてるわよ」

レミリアは腕を組んで断言した。

「なんだかんだで、私と同じ血が通ってるんだからね」

同じ血、という言葉聞いて、なぜだか卓郎は胸が痛くなった。

「それじゃあ、私は部屋に戻ってもう少し寝るわ。お大事にね」

軽く手を振って、レミリアは部屋から出ていった。

彼女が出ていった後、ナツが呆れたようにため息を吐いた。

「喧嘩するのはお互いの自由ですけど、少しくらいは後始末するメイドのことを考えてくださいよ。あれを修理するのに、いつもどれだけ時間が掛かっているか……」

「ほんと、お嬢様と妹様の喧嘩って、すごく派手だよね」アキも同意する。

「館の修理を加えますと、また仕事も増えそうですね」ユキも頬を掻く。

「これじゃまともに休むことはできないな、と卓郎も思った直後だった。

こんこん、と扉が叩かれる音がした。

卓郎が返事をする、少しぎこちない感じでハルが中に入ってきた。

この場にいたメイドたちの顔に、わずかな緊張が走る。

「ハル。もう大丈夫なのか」

「うん。やられたのが右腕だけだったから、もう大丈夫」

ぎこちなく答えながら、ハルは右手を開いたり握ったりする。右腕が無くなった拍子にメイド服も破れてしまったが、今は新しい服に着替えているようだった。

「そうか」卓郎は胸を撫で下ろす。

「お前が体を張ってくれたおかげで、本当に助かった。何度、お礼を言っても足りないくらいだよ。ありがとうな」

ハルは目をぱちぱちさせて、卓郎からの視線を逸らした。

「ま、まあ、当然よね。あたしが身代わりにならなくっちゃ、リーダーの腕が吹っ飛んでたんだからね。妖精は死ぬことないし、こ、これくらいは当然のことよ！」

アキはうんうんと頷いた。

「ハルちゃんって、すごく勇気があるよね。いくら妖精が死ななくたって、痛いのは痛いんだからさー。わたしだったら、絶対にできなかったよ」

「あははは！ 私の手にかかれば、これくらいはお手のものよ」

ハルは口を大きく開けて笑うが、次第にその声は小さくなっていった。

しばらくして、ハルは「ふうーっ」とため息を吐いた。

「なんかさー。すごく言いにくいことなんだけどさー」

ハルは天井に目を向ける。

「あたし、結局どっちを選んだほうがいいのかな……」

その言葉は、まさにナツが言ってくれたことを証明するものだった。

館に残るか否か――。親しくしていたメイドたちが辞めても、しばらく館に残っていたのは、まだ館に親しいメイドが残っているから

だ、とナツは説明してくれた。

フランの騒動が起こる前は「ここを辞める」と断言していたハルだったが、やはり本当の気持ちは、館に残るか否かでまだ迷っているようだった。

すると、ここでナツが矯正器を上げた。

「ハル。私からはつきり言わせてもらおうわ」

「ナツ？」

「ここを辞めないで。お願い」

ナツのあまりの真剣な表情に、さすがのハルもたじろいだ。

「辞めないでって……。それはあたしの勝手じゃない」

「私はここで大切な友達を失いたくないのよ」

目を見開いて驚くハルに、ナツはゆっくりと続けた。

「ほら、私ってこんな性格だから、紅魔館にやって来ても、しばらく親しいメイドがいなかったのよね。だからといって、他のメイド仲間にはいたずらされていたわけでもないし、仕事もつまらなくはなかったけど、何か物足りないなって気がしてたの」

「ちよつと、なに言ってるのよ……」

「その時、私に話しかけてきたのが、ここに入ってきたばかりのハルだった。最初はうるさいメイドだなんてくらいしか思わなかったけど、次第に一緒にいるのが楽しくなってきたね。だいたいハルの話を私が聞いているような感じだったけど、ハルの話はいつも面白くて、そこで初めてここで仕事するのもいいかもしれないって、思うようになったの」

ナツは改めて、真つすぐな視線をハルに向けた。

「だからお願い、ハル。紅魔館を辞めないで。ハルから見ると、私はただの友達の一人にすぎないかもしれないけど、私にとっては誰よりも大切な友達なのよ」

普段は無愛想なナツが、感情を込めて言い放った。

「また、私と一緒に仕事やろうよ。ハル」

ナツの視線に耐え切れないように、ハルは顔を下げる。

しばらく、何とも言えない沈黙が続いた。

「……ユキはどうなのさ」

やがて、ぽつりとハルが言った。ユキが反応する。

「リーダーがやってくる前は、よくあんたのこといじめてたよね。まあ、いじめていたメイドは、あたし以外ほとんどいなくなっちゃったけど、ユキはどう思ってるのさ。あたしもいなくなつた方が都合がいいと思わないの？」

挑発的なハルの口調に、ユキは静かに首を横に振った。

「別に、そんなこと思っていないわ」

「へえ。またいじめちゃうかもしれないけど、それでもいいの？」

「その時は——」ユキは微笑みながら言った。

「ハルちゃんにちよつと仕返しをしちゃうかもね」

この場にいた全員が固まったように動けなくなった。

周りの反応に、ユキは焦つたように手を振った。

「ちよ、ちよつと、そんなに驚かなくていいじゃない」

「あんた……知らないうちにだいぶ変わったわね」ハルが呟く。

「そんなことないよ。私はいつも通りだよ」

「いや、絶対にそれはないわ」

ハルは頬を搔いてから、改めてナツと目を合わせる。

そして大きく息を吐いてから、ぽつりと口を動かした。

「分かったわよ。ナツがそこまで言うなら、館に残るわ」

ナツの目が明るくなる。

「本当に？」

「こんなところで嘘をつくほど、あたしはひねくれてないわよ」

ナツの体が震えてきた。

「ありがとう、ハル！」

喜びを爆発させて、ナツは親友に飛びかかってきた。

「ちよ、ちよつと……苦しいわよ、ナツ」

抱きしめられて困惑するハルだったが、まんざらでもなさそうで、苦笑いをしながらナツを受け入れているようだった。

様子を眺めながら、卓郎はベッドに横になる。

どうやら、ハルの説得に関しては自分は全く役に立たなかったよう



である。ナツがいなければ、間違いなくハルは紅魔館に残ってくれなかっただろう。

本来は自分の仕事だったのに、今回はメイドたちはかなり助けられてしまった。

—— 使用人の仕事は難しいな。

そう思いながら、はしやぐメイドたちの姿を眺めた。

フランとレミリアの戦闘から、二ヶ月が経った。

ハルが紅魔館に残ると決めた後、懸念していた彼女に対するいじめは無くなった。

その大きな理由は、体を張って卓郎を守った行為がメイドたちに認められたからであり、妖精の単純な性格が、今度は良い方向に導いてくれたようだった。

ハル自身もあの一件以来、仕事をきちんとしてくれるようになった。

うるさい性格も復活して、新しい友人もできたようである。卓郎に対しては、これまでの言動のまま接してきているが、そこは笑って許してやることにした。

そしてこの日、卓郎とメイドたちは姉妹が戦った館の西側に集まっていた。その理由は館の完全復旧に立ち会うためであり、レミリアもこの場に加わっていた。

二人が派手に戦った後、メイドたちによって館の補修が始まった。だが、思った以上に損傷が激しく、予想より多くの時間がかかってしまった。

卓郎も初めてやる種類の仕事だったので、最初は非常に苦勞した。その方面に詳しいメイドと協力したり、自身もパチュリーの図書館から専門の本を借りて勉強したりと、常に試行錯誤を繰り返しながら命令していき、ようやく今日まで辿り着いたのだ。

補修された部分の壁は、まだ白のままだった。

「ナツ。最後の締め、頼むわよ」

レミリアの命令に、ナツは「はい」と頷く。

ナツは壁の白い部分まで歩み寄ると、その部分に手を置く。そして小さく息を吐いた瞬間、彼女の体がにわかに光り始めた。

変化は一瞬だった。

さっきまで白かった壁の部分が、周りに同調するように紅に変わった。

たのだ。

色違いで極端に目立ってた補修の形跡は、これで全く分からなくなった。さらに新しく買った絨毯などの調度品にも触れていき、それぞれ紅色に変えていく。

全ての物を紅色に変えた後、ナツは「終わりました」と宣言した。

「さすがナツね。これで完璧よ」

レミリアを含めて、その場にいた全員が拍手をする。

ナツの目は、どこか誇らしげに見えた。

彼女は『物の色を変える程度の能力』を持っている。

生物を除いて、食べ物や家具などあらゆる物の色を変えることができるのだ。使い方は様々で、今のように壁や調度品の色を変えたり、メイド服を作るときに素材の色を変えたりと、その多くは館の雑務において非常に役立つものだった。

「それじゃあ、ここで解散。各自、今日も頑張りなさい」

レミリアが何度か手を叩き、その場にいたメイドたちはそれぞれの仕事に向かう。

卓郎も持ち場に行こうとした時、レミリアが彼のもとにやってきた。

「卓郎。確か、明日の午後は休みだったよね」

「そうですけど」

「いい加減、そろそろ故郷の様子を見に行ったほうがいいんじゃないの」

レミリアの言葉に、彼は動きを止める。

「あなたがここにやってきて、もう四ヶ月が経ったわね。正直、私が予想していた以上にあなたは頑張ってると思うし、実際にそれなりの成果も出てるわ」

「……あ、ありがとうございます」

「でもね。仕事を必死でやっているあなたの姿を見ると、少し思っちゃうのよ。まるで何かに目を逸らすために、必死で仕事をしているんじゃないかって」

あまりの的を射た指摘に、卓郎は何も言い返せなかった。

「否定はしないのね。じゃあ、あなたは何に対して恐れを抱いているのかという疑問が出てくるけど、それは言うまでもないわ。あなたの家族が殺されたという話よ。実際、この四ヶ月の間に、あなたは家族の話とかほとんど出さなかったじゃない」

レミリアの紅い瞳がぶつかる。

何もかもが、彼女の瞳に見透かされているような気がした。

「だから、明日の休日を利用して、故郷に行ったほうがいいんじゃないかしら。せめて自分の家くらい、どうなったのか確認してきなさいよ」

「でも……」卓郎は体を震わせながら答えた。

「もし、あの妖怪に見つかったら、今度こそ殺されてしまいますよ」

レミリアは意外そうに目を瞬かせた。

「たかが一匹の妖怪ごときで、そんなに震えるんじゃないわよ。あなたらしくない。少し故郷に戻ったくらいで、家族を殺した妖怪に遭遇できるほど、この世界は狭くはないわ。そんな弱気な態度になっちゃって、それでもあなたは偉大なるスカーレット家の使用人かしら。今度、また今と同じような顔を見せたら、干からびるまで血を吸うわよ」

「申し訳ございません……」

「ともかく、明日中に故郷に戻って状況を確認してきなさい。そんなに妖怪が怖いなら、誰か護衛でも連れていけばいいじゃない。これは命令よ」

「命令ですか」

「念のため言っておくけど、これはあなたのために言ってるのよ。いつまでも過去を引きずっていたって仕方ないからね。帰ってきたら、しっかりと私に報告しなさい」

主人の命令に逆らえるはずもなく、卓郎は「はい」と頷いた。

「じゃあ、ちゃんと行ってくるのよ」

そう言ってレミリアが去った後、卓郎は頭を抱えた。

彼が最後に見た家の光景は、母と兄が倒れている姿だった。それを思い出して、頭の中を針でいじられるような痛みが襲ってくる。

——本当に戻っても大丈夫なのか？

その場でたたずむ卓郎のところに、ユキたちがやってきた。

「卓郎さん。辛い顔して、どうかしたんですか？」

心配な様子で見つめてくるメイドたちに、卓郎は明日のことを説明した。

「へえーっ。じゃあ、明日は故郷に行くんですねー」いつもの調子でアキが言う。

「でも、卓郎さんの言う通り、いつ妖怪に襲われるか分かりませんからね。お嬢様の言う通り、護衛を連れていったほうがいいでしょう」

ナツの発言を聞いて、ハルが「はいはい！」と手を挙げた。

「じゃあ、あたしがリーダーの護衛をするわ」

「なんでお前が護衛するんだよ」卓郎は訝しげに問う。

「だって、この前だって妹様の攻撃を防いだのって、あたしのおかげじゃん。だから、もしその妖怪が襲ってきたら、あたしの能力でリーダーを守るじゃない」

「お前が護衛だと少し不安だな」

「ちよつと、何よ……。あたしじゃダメなわけ？」

「お前の能力って、ただ対象の姿を消すだけじゃん。妹様の時は相手が油断していたから良かったけど、同じような方法が通用するとは思えないな」

ハルの頬がどんどん赤くなっていく。

「じゃあ、あたし以外に護衛にふさわしい者がいるとでもいうの？

自分で言うのも難だけど、ここにいる妖精メイドの中ではあたしが一番強いだよ」

「でも、美鈴さんには叶わないだろ」

「ぐっ……」ハルは黙り込んでしまう。

この紅魔館で美鈴ほど護衛にふさわしい人物はいない。レミリアの命令で故郷に行くことになってしまったと話せば、彼女も承諾してくれるだろう。

「というわけで、今から美鈴さんに頼みに行ってくるよ」

歩こうとする卓郎だったが、ここで思い出したようにアキに顔を向

けた。

「そうだ、アキ。明日、美鈴さんの代わりに門番の仕事をやってくれな  
いかな。長くいるつもりはないけど、念のために頼むよ」

「えへへ、もちろんですよ。任せてくださいーい」

アキに礼を言つて、卓郎は門の方に向かう。

妖精たちと話したおかげで、今は少し気持ちも楽になった。

※

翌日の午後、準備を済ませた卓郎と美鈴は門の前にいた。

長い距離を歩くので荷物は少なめにして、服も着物に着替えた。

彼を見送りに、ユキを含め六人の妖精メイドがやってきた。以前、  
ユキと人里に行くときにはなかった光景である。

「いつてらっしやいませ、卓郎さん。美鈴さん」

「うん。行つてくるよ」

卓郎が手を振ると、妖精メイドたちが一斉に頭を下げた。

「だいぶ信頼されてきていますね」

横でつぶやく美鈴に、卓郎は微笑みながら首肯した。

湖の前に辿り着いて、卓郎たちは用意していた小舟に乗った。

チルノとの一件の後、美鈴が新しく作ってくれた小舟である。あれ  
以来、湖を通つてもチルノに襲われることはなくなり、最初はうまく  
いかなかった小舟の操縦も今やお手のものだった。

湖を通り抜けて陸に上がると、美鈴は大きく体を伸ばした。

「さて、今日はどの道筋で行くんですか」

「いったん人里の方に向かって、少し休憩してから故郷に行きましよ  
う。寺子屋に通っていたので、人里から故郷に行く道のりなら覚えて  
いるんです」

二人はひとまず、里に続く道を歩き始める。

「ちなみに家から寺子屋まで、どれくらいかけて歩いていたんですか」  
「ざっと一時間くらいでしたね」

「おおっ。それをほぼ毎日ですか。すごいですね」

「いえ、寺子屋に行くだけなら、まだ良いほうでした。それよりも、肥  
料を買うために人里に行つたときの方が辛かったですね」

「人里に肥料があるんですか？」

「はい。尿尿を買って、桶に入れて家まで運んでたんす。ただ、その桶がすごく重たくて、慣れるまでけっこう大変でしたね」

「ああ、なるほど。重たい荷物で一時間は辛いですね」

そんな感じの会話をしながら、二人は歩を進めていく。

卓郎の故郷は、人間の里からやや離れたところにある小さな村である。

これといった特徴や名所もないので、産業のほとんどを農業が占めている村である。

小さな村ではあるが、村人全体の助け合い精神は非常に強く、卓郎の家も何度か近所の人たちに助けられたことがある。

あの事件以来、村の人たちはどうしているのか。

卓郎には全く予測がつかなかった。買い出しで人里にやってきた時も、ひっそりと迅速に済ませてきたので、村に関する話も全く耳にしていないのだ。

二時間ほど歩いて、ようやく二人は村の入口に辿り着いた。

「いよいよですね」村の方向を眺めながら、美鈴はつぶやく。

「僕の家は少し外れの方にあります」

「行ってみましょう」

こうして、ついに卓郎は四ヶ月ぶりの故郷に足を踏み入れる。

だが、入ってすぐにその異変に気付いた。

村は人っ子一人おらず、閑散とした空気が立ち込めていたからだ。

畑は荒れ放題で、道端には農業用の荷車が捨てられていた。いくら人の少ない村だったとはいえ、ここまで人の気配が無いのは明らかに異常だった。

美鈴の目に鋭さが増す。

「卓郎さん。念のため、私から離れないでくださいね」

つばを飲み込んで、卓郎は頷く。

近くの家に寄ってみると、そこも人が住んでいる気配は全くなかった。家の物はほとんど無くなっており、割れた火鉢だけが隅に放置されているだけだった。

他の家にも寄つてみたが、結果はどれも同じだった。

その中には以前、卓郎の母と親しくしていた人の家もあった。

美鈴は、家に放置されていた桶を手にとった。

「本当に誰もいませんね。家の状態から察しますと、住人がいなくなつたのはつい最近のことでしょうか。ただ、中が荒らされていないということは、誰かに無理やり追い出されたという感じではなさそうですね」

「ということは、家の住人が自分の意思で出ていったということですか」

卓郎の推論を聞いて、美鈴は「うーん」と唸る。

「断定できませんが、その可能性は高いでしょうね。一応、後で人里に行つて、どうしてこうなつたのか確認する必要がありますけど」

「でも、その前に僕の家に行かないと……」

「そうですね。まずは卓郎さんの家に行きましょう」

一通りの家を調べ終えた後、二人は卓郎の家に向かった。

だが、家の場所に辿り着いた時、二人は啞然としてしまった。

卓郎の家が、跡形もなく消滅していたからだ。

使い古した農業用具はおろか、屋根に使っていた藁の一本すら無かつた。まるで十五年間の記憶が全て幻であつたかのように、その場所には一片たりとも卓郎の思い出の名残は消えて無くなつてしまつていたので。

代わりに、家の跡地には二つの墓が建てられていた。

その墓には、卓郎の母と兄の名前が刻まれていた。

※

「僕の家が、ない……」

体を震わせながら、卓郎は墓の前までやってくる。

確かにこの場所に家があつたはずである。生まれた時からここに住んでいるから、場所を間違えるはずがない。

二人の墓の前には、桃色のきれいな花が置かれていた。まだ枯れていないところを見ると、花が置かれたのはつい最近のことだろう。

よく見てみると、墓自体はきれいに手入れされているようだった。



「最近、誰かお墓参りに来たみたいですね」美鈴が言う。

「近所の人でしょうか」

「さあ、私にはさっぱり」

手入れはされているようなので、ひとまず卓郎と美鈴は墓の前で手を合わせた。

目を瞑っているうちに、卓郎は改めて思い知った。

——もう、母さんと兄さんはこの世にいないんだと。

泣きはしなかった。覚悟はとつくの昔に決めている。

そして心の中で、天にいる母と兄に、墓参りが遅くなってしまったことを詫びた。さらに、どこの誰かは分からないが、二人のためにわざわざ墓を建ててくれたことに遺族として感謝の意も述べた。

家が無かった事実は悲しいと思つた反面、少し安心したところもあった。もし、家があつたら、卓郎の中でまた悲しい記憶が蘇つていたかもしれないからだ。

墓参りを済ませると、美鈴が訊いた。

「まだ他に行っていないところはありますか」

「たしか、あっちの方はまだ行つてなかったと思います」

卓郎の案内で、二人はさらに村の奥に進んでいく。村の中心部に人は誰もいなかったのも、おそらく無駄なあがきだろうと思つていた。

だが、最後の家の前までやつて来て、卓郎たちは驚いた。

これまでの家とは違い、その家は明らかに人がいる気配を感じたからだ。家の横にある菜園には野菜が栽培されていたし、その横には洗濯物が干されていた。しかも、記憶が正しければ、その家の住人は卓郎にとって顔なじみの人物だった。

ふうつと深呼吸をして、卓郎は扉を叩く。

それから何秒も経たないうちに、勢いよく扉が開かれた。

「だから言つたじゃろ！ わしは絶対にここから出ていか——」

恐ろしい剣幕で老婆が出てきたが、卓郎の姿を見た直後、その言葉を止めた。

「ばあちゃん……」卓郎がつぶやく。

威嚇するようだった老婆の目が、みるみるうちに驚愕に変わつて

いった。

「お、お前さんは、あ、あの卓郎か」

「久しぶり。ばあちゃん」

笑顔で応じたが、ここで老婆は慌てて首を振った。

「い、いやいや、卓郎は例の事件で死んでしまったはずじゃ。そうなる  
と、目の前にいる悪質な妖怪なのかもしれないのお……」

「そんなはずないだろ。僕はちゃんと生きてるよ」

未だに信じられないような態度の老婆に、卓郎は説得を始めた。

目の前にいる老婆は昔から怪談話を好んでおり、その奇特的な趣味は  
村の間でも非常に有名だった。卓郎も幼い頃はよく彼女の怪談話を  
聞いて、その度に怖い思いをさせられていた。特に流血屋敷にまつわ  
る話は、今でも記憶に残るくらいに衝撃を受けた。

とはいえ、なんだかんだで事件が起きるまでは親しくしており、も  
ともと祖母がいなかったこともあってか、卓郎は「ばあちゃん」とい  
う愛称で呼んでいたのだ。

説得の末、ようやくばあちゃんを落ち着かせることができた。昔の  
思い出をいくつか語ったことで、ようやくばあちゃんは目の前の卓郎  
を本物だと信じてくれたのだ。

「そうか。お前さん、生きておったのか……」

安堵するように、ばあちゃんは息を吐く。

その瞬間を見計らってか、美鈴が一步前に出てきた。

「失礼します。私は卓郎さんと同じところで働いている者です」

突然のことに、ばあちゃんは目を丸くさせる。

「今日、卓郎さんと一緒にこの村にやって来ましたが、村がこのような  
状態になっていまして、私も卓郎さんも少し驚いています。もし、よ  
ろしければ、どうしてこの村がこうなったのか教えて頂けないでし  
ょうか」

※

美鈴の突然の言葉に戸惑うばあちゃんだったが、卓郎が「この人は  
大丈夫」だという旨を伝えると、ひとまずばあちゃんは歓迎の意を表  
してくれた。

「まあ、話は長くなるから、まずは二人とも家に上がんなさい」  
「おじやまします」

卓郎たちが家に上がると、ばあちゃんはお茶を用意してくれた。  
「さあ、遠慮せず飲んでおくれ。これは来客用のお茶なんじゃ。どうせ、来客なんてお前さん以外に誰も来ないと思うから遠慮なく飲んでおくれよ」

その冗談に軽く笑いながら、卓郎は用意された緑茶を飲む。  
すっかり紅茶の味に舌が慣れてしまったせいか、かなり渋いように感じた。

一息ついた後、美鈴が切り出した。

「では、改めまして訊きますが、どうして村に人がいなくなったんでしょうか」

ばあちゃんはうつむき加減のまま、事情を話してくれた。

要約すると、人間の里の政治を司る者たちが今回の事件を受けて、村の住人たちを里に移住するよう勧めてきたからである。卓郎の家族が殺された事件は、村の中だけでなく人里の方においてもかなりの衝撃をもたらしたらしい。

里の役人がわざわざ村までやってきて、家を一軒一軒回ったというから、かなりの力の入れ具合だったことがうかがえた。

「最初にそれを聞いた時、そりやもう飛び上がるくらい驚いたもんだ」  
当初は、老人たちを中心に村は反対の立場をとった。

だが、逆に子供を持っている家族にとっては願ってもない話だった。

最近の人里は、妖怪などの脅威に対抗するための防衛に力を入れている。

自分の子を守るなら、村より里に行った方が安全だと思ったのだろう。まず、子供を持つ親たちから移住を望む声が出てきた。

そして、流れが決定的になったのは、里がある提示を出してからだった。

もし移住を承諾した際には、それに関する費用は全て里が持ち、さらに農業用の土地も一定の範囲で与えるという破格の待遇を持って

きたのだ。これが決め手となり、最終的には彼女以外の村人全員が、里への移住を決めてしまったのだ。

納得したように美鈴はうなづく。

「言われてみれば、そうですね。私たちもほとんどの家を回ってきましたが、どこも荒らされたという感じではなかったですからね」  
「でも、どうしてばあちゃんは出ていかなかったの？」

卓郎の問いに、彼女はふんと鼻を鳴らした。

「出て行くもんか。わしがこの村で生まれて、この村で育った。だから、死ぬときもこの村でと決めてるんじや」

ばあちゃんはそう断言して、お茶を口に入れる。

「どうせわしは古い先の短い、しがたないばあじや。慣れない里で新しい生活をするよりかは、生まれ育った故郷で死ぬのが一番いいに決まっておる。じやが、わしは何度もそう言ってるのに、里の連中は聞く耳を持たないで、今でもしつこくわしの家に来よる。どうして奴らは簡単に諦めてくれないんだろうかのお。つい数時間前にも奴らがやってきたから、その時は茶碗を投げてつけて追い返してやったわい。したら役人の奴ら、ひいひい言いながら逃げていったわい」

ばあちゃんは、意地悪そうな笑みを浮かべる。

もし役人より早く来ていたら、卓郎の頭が危ないことになっていただろう。

「でも、ばあちゃんは一人で生活していて寂しくはないの？」

「なあに、天国で死んだじいさんが待つておるんだ。その時が来るまでの辛抱だと考えれば、今の寂しい生活くらい楽なもんじや」

ばあちゃんは笑うが、そこにはどこか達観したような雰囲気か漂っていた。

昔、近所の人から聞いた話によると、ばあちゃんの夫はこの村の出身だったらしい。そして、ばあちゃんが怪談話を始めるようになったのは、夫が若くして病気で他界してからだだったという話も聞いていた。

「じやが、これで死ぬまで寂しい生活を送ることはないじやろうな」

そう言つて、ばあちゃんは卓郎の手を握ってくる。

「お前さんが、こうしてわしの目の前にやって来たんだ。わしも今までしぶとく生きてきて本当に良かったと思つたわい。わしにとつて、お前は孫みたいなものじゃ。この目でお前が立派な大人になるのを見るまでは、わしもそう簡単に死ねんな」

「そんな大げさな……」

「いやいや。正直、お前が行方不明だと聞いたときは、わしもしばらく飯が喉を通らなかつたわい。じゃが、神様はお前さんを決して見捨てはしなかつたようじゃな」

祈るような仕草をしてから、ばあちゃんは訊いた。

「それで、お前さんは今はどこで何をしとるんだい？」

この手の質問は必ず来ると予測していたので、平然を装って卓郎は答えた。

「今は人里から離れた所で暮らしているよ。横にいる美鈴さんと一緒にね」

ばあちゃんは、「おおっ」と目を見開いた。

「お前、こつちが心配している隙に、まんまと人生の伴侶を手に入れたのか！ そうかそうか。こんなぺっぴんさんを手に入れるとは、お前さんは幸せ者だのう。大きな不幸の後は大きな幸せが待っていると言われているが、まさにそれじゃな」

「そういう意味じゃないよ！」

大声で突っ込む卓郎に、隣の美鈴はおかしそうに笑う。さすがに美鈴を妖怪だとは言えず、普通の人間だと紹介したことで、思わぬ勘違いをされてしまったようだ。

美鈴は仕事仲間という説明を済ませた後、卓郎は冷たくなったお茶を飲む。

あと一つ、ばあちゃんに聞いておきたい質問があった。

それは彼にとつて、この四ヶ月の間で最も気になっている質問であつた。

「……ばあちゃん。それで、あの事件はあの後、どうなったのかな」

その質問に、美鈴もわずかに緊張の入った顔になる。

これまで卓郎が得ていた情報は、人里の『妖怪退治』を専門とする

者が、彼の家族を殺した妖怪を探しているということまでだった。その情報から、かれこれ三ヶ月以上が経つ。

今日まで得体の知れない恐怖感が先行して、妖精たちに情報収集を頼むこともできないまま、この話題から目を逸らし続けてきた。

でも、ついに今日、質問をすることができた。

卓郎の問いに対し、ばあちゃんは意外そうな顔をした。

「ありや。まだ知らなかったのかい。お前さんの家族を殺した妖怪は、とつくの昔に天罰が下ったという話を聞いたんじゃけどな」

二人は体を固めた。

「天罰ってどういうこと？」卓郎が問う。

「わしも役人から聞いた話じゃから詳しいことは分からんが、事件から一ヶ月後にお二人さんを殺した妖怪が分かったらしくて、何らかの制裁を与えたらしいぞ」

「制裁って、どんな制裁だったのか分かる？」

ばあちゃんは首を振った。

「さあ。そこまでは言ってくれんかったな」

卓郎は肩の力を抜いて、小さく息を吐いた。

つまり、あの事件は世間の中では解決したということになる。

さらに事件の詳細についてはばあちゃんに尋ねてみたが、これといった情報は得られなかった。せいぜい聞いたのは、二人を殺した妖怪は非常に美しい容姿をしているということだけだった。殺した動機も、制裁した後の行方など、全く分からず仕舞いだった。

時間もだいぶ経ったので、卓郎と美鈴はここでおいとますることにした。

「次はいつ来るんだい？」玄関ではあちゃんが尋ねる。

「近いうちに行くよ。じゃあ、元気で」

名残惜しそうに手を振るばあちゃんに頭を下げて、卓郎は家の扉を閉めた。

誰もいない道を歩きながら、美鈴が言った。

「良かったじゃないですか。事件も解決したみたいですし」

「そうですね。でも、少し腑に落ちないところも多かったですけど」

「私はその気になれば、人里で詳しい情報を収集することができますけど」

その言葉に、卓郎は思わず口を閉ざす。

確かに美鈴や妖精メイドたちの力を使えば、事件の情報はすぐ集まるだろう。少なくとも、どうやって妖怪を制裁したのかは分かるかもしれない。

だが、しばらく考えて卓郎は首を振った。

「いえ、もう情報はいいです」

「腑に落ちないと言ってましたけど、それでいいんですか？」

「はい。事件が解決したのなら、それでいいです」

美鈴はしばらく卓郎の顔を眺めていたが、やがて何事もなかったかのように、「そうですか」と静かに返してくれた。

あの日、レミリアに言われたことを思い出す。

——罪を犯した妖怪は、この世界の決まりごとに従って裁かれるのよ。

おそらく、この事件は人間の卓郎には踏み込めない領域の問題なのだろう。そして、事件が解決したのなら、たとえ遺族であろうと人間の彼にできることは何もない。

もう、終わったことなのだ。

そう思いながら、卓郎はなるべく事件のことを忘れようと決めた時だった。

ふと、胸の奥から奇妙な違和感が襲ってきた。

突然の出来事に、卓郎は目を瞬かせる。

今の違和感は何なんだ？

何か、とんでもない矛盾を抱えているような気がしたからだ。

しかし、具体的なことは卓郎自身もよく分からなかった。

考えれば考えるほど、どうしてそんな奇妙な違和感を抱いてしまったのかすら、よく分からなくなる始末だった。

「卓郎さん、卓郎さん」その時、美鈴の声が聞こえた。

「あまり顔色が良くなさそうですけど、大丈夫ですか」

「ここでもうやく卓郎は我に返る。」

「あつ。いえ、大丈夫です。心配しないでください」

「何でしたら、私が卓郎さんを背負って帰ることもできますよ。そっちの方が、時間の節約にもなりますし、卓郎さんの体力の節約にもなると思いますけどね」

「でも、ここから館までけつこう距離がありますよ」

「これくらいの距離なら、ぜんぜん大丈夫です」

考えた末、卓郎は言葉に甘えることにした。

「じゃあ、お願いします」

「決まりですね」

しやがみ込む美鈴に頭を下げて、卓郎は彼女の背中に乗った。彼女の髪からふわりと甘い匂いがして、思わずつばを飲み込んでしまう。

美鈴におぶられるのは、チルノとの一件があつた時以来で二回目である。だが、あの時は緊急事態の後のことだったので、妙な感情を抱いている暇など無かつたのだ。

「しっかりとかまってくださいー！」

そう言つて、美鈴は空に飛び上がる。

卓郎の体を考慮してか、かなり速さと高度を抑えた飛行だった。

とはいえ、チルノの時とは段違いに高度が高いので、不埒な気分などあつさり吹き飛んでしまった。最初は恐怖で美鈴の頭ばかり見ていた卓郎だったが、次第に高い景色に慣れていった。

「卓郎さん。次はいつおばあちゃん家に行くんですか」

風の音がややうるさかつたが、何とか美鈴の声は聞き取れた。

「たぶん、二ヶ月くらいしたら行きます。母さんと兄さんの墓参りも兼ねまして」

「じゃあ、次からはこの方法で村まで行きましょう。これなら時間も節約できますし、私も村までの道を覚えましたので」

「ええっ。いいんですか？」

「大丈夫ですつて。卓郎さんくらいの重さなら、ちよろいもんですよ」

「……分かりました。それじゃあ、お願いします」

承諾したが、風の音で美鈴には聞こえなかつたようだ。



風に煽られながら、卓郎は改めて上空からの景色を見る。

美鈴の力を借りているとはいえ、自分は今、空を飛んでいるのだ。小さい頃、空を飛んでいる鳥たちを地上から眺めていた時に抱いた夢が、まさかこんな所で叶ってしまうとは思ってもみなかった。

——きれいだな。

雄大に広がる世界の景色を眺めて、卓郎はそう思った。

景色のほとんどは木で覆われているが、一部には湖があり、人間が暮らしてそうな集落があり、遠い向こう側には神々しい雰囲気があり、そんな山もあった。

四ヶ月前、卓郎はこの理不尽な世界をひどく憎んだことがあった。

人間よりも強大な力を持つ妖怪に家族を殺され、この世界の仕組みに為すすべなく従うことになり、ぶつけようのない感情がいつしかこの世界を憎むことに繋がっていったのだ。

でも、今はほんの少しだけ、この世界がいいものだと思うようになった。

その理由は言うまでもなく、あの紅い館の住人と触れ合ったからだろう。今にしても、本来ならば人間の敵である妖怪に、ご丁寧におぶられている有様である。

吸血鬼、妖怪、魔法使い、妖精と多様な種族が行き交うところで、自分には確かに生きているのだ。そして、これからも自分はその場所に居続けるのだろう。

一人の人間として、そして紅魔館の一員として。

「もうすぐ到着しますよ」

彼女の言葉を受けて、卓郎は視線の先にある紅色の館を見た。

## 【外伝1】

紅魔館の使用人、卓郎の朝は日が昇りかけた時から始まる。

「うーん……」

目を覚ました卓郎は、枕元に置いてあった時計を確認する。

起床予定時間の三分前——。この館で働き始めて五年も経つと、さすがに体もこの時間に起きなければならぬと覚えてしまっているようだ。

ただ、今日はいつにも増して体が重い。

なぜなら、昨晩はパチュリーの図書館から借りてきた本に夢中になつてしまい、すっかり睡眠時間を削ってしまったからである。ちなみに中身は恋愛を主軸にした幻想的な物語で、そういつた経験のない卓郎は新鮮な気持ちで最後まで読み進めることができた。

卓郎はベッドから出て、テーブルに置いてあった水を飲む。眠気はだいぶ残つてしまっているが、今日は午後から休みの日なので、体力的には大丈夫だろう。

ふう、と大きく息を吐いた卓郎は早速着替えを始める。

身だしなみを整えつつも、頭の中では今日の妖精メイドたちの仕事の振り分けについて、昨晩にまとめた内容でちゃんと進められるかどうかを確認していく。今日の午後はユキたちに仕事を任せるので、その部分についても考えておいた方がいいだろう。

頭の中は、すでに今日の仕事のことで一杯だった。

※

午後、仕事を終えた卓郎は本を返すため、早速パチュリーの図書館へ入った。

中に入って先に進むと、図書館の主である少女はテーブルで何かを紙に書いている最中だった。その横には小悪魔も立っている。

「パチュリー様。本を返しに来ました」

「ああ、もう読んじやったの」

パチュリーと目を合わせた瞬間、卓郎は「おや？」と思った。

いつもと比べて、血色の良い顔をしていたからである。普段のパチユリーは体が弱いことや、あまり外に出ない生活が続いていることもあって、だいたい顔色が良くないのだ。

彼女は「ちよつと待ってて」と卓郎に言うと、書いた紙を小悪魔に渡す。

「じゃあこれ。お願いね」

「分かりました」

そう言うと、小悪魔はそそくさと図書館から去っていった。

「何か、お使いでしょうか」

小悪魔を見送ってから、卓郎は言う。

「人里で新しい本が入ったらしいから、彼女に買いに行くようお願いしたのよ」

つまり、さつき紙に書いていたのは、その買いたい本の題名なのだろう。

「人里にも本は売っているんですね」

「公には販売されていない外の世界の本だけだね。まあ、あなたのような普通の人間が読んだところで、なんて書いてあるのか理解できないだろうけど」

「外の世界の本……。人里にもそんなものを取り扱ってる店があるんですね」

「細かいところは教えられないけど、ここに置かれている本の一部はそこから取り寄せているものよ。ちなみに、そこはお店として営業はしてないわ。見た目は何の変哲もない家だから、本の売買をしているのは極一部の人にしか知られていないわね」

「ああ、だから小悪魔に頼んだんですね」

人里の店はだいたい把握している卓郎が知らなかったのは、そのためだろう。

卓郎から本を受け取ったパチユリーは、その題名を眺める。

「まさか、たった一晩で読み終えてしまうとはね。そんなにおもしろかったの？」

「はい。一気読みしてしまいました」

パチュリーは本をパラパラとめくりながら、眉をひそめる。

「この本、いつ置いたんだっけ。すっかり忘れてしまったわ」

「だいぶ前に買った本なんですか？」

「いくら私でも、ここに置いてある全部の本を覚えているわけがないわ。魔術の理論とか、そういつた関連の本ならいつまでも覚えているんだけど、あなたに貸したような物語系の本はすぐに忘れてしまうのよ。たぶん、この本もだいぶ昔にもらったものじゃないかしら。題名を見ても、内容は全く思い出せなかったし」

「ここに置いてある本はだいたい専門書ですからね」

むしろ、卓郎でも理解できる類の本や、物語系は極少数なのである。彼自身としては物語系の本が好みなので、もう少し入れて欲しいとひそかに思っている。

「これ、どういった内容だったのかしら」

「幻想的な恋愛の物語でした」

「へーっ。結末はどんな感じだったの？」

「二人とも、幸せな顔をして死んでいきました」

「死んでいった、か……」

パチュリーは紅茶を飲んでから、再び物語の題名を眺める。先ほどまで関心が無さそうな顔をしていたのに、いつの間にか興味がありそうな目をしていた。

「卓郎。今日の午後は休みなんだよね」

「はい」

「予定とかは入ってない？」

「ええ。何もありません」

すると、パチュリーは横に置いてあった椅子を指差した。

「なら、小悪魔が新しい本を持ってくるまで、ちよつと私と付き合っちようだい。私、こういつた物語系はあんまり読まないし、新しい本が来るまでこれを読み切るほどの時間はないわ。だから卓郎——。この本の内容を細かく私に話してちようだいよ」

※

それは一人の魔法使いである少女と、人間である少年の物語だっ

た。

その世界では、魔法使いと人間の寿命は大きく異なっていた。魔法使いは数百年生き続けることができるが、人間はせいぜい五十年くらいしか生きられなかった。

魔法使いは十五歳から二十五歳までの間にいったん体の成長が停止して、寿命が迫ってくるのと一気に老化を始めて、そのまま死を迎えるという特徴を持っていた。

どの瞬間に成長が止まるのかは個人差があり、物語の少女は十五歳くらいで体の成長が止まってしまった。

物語は、そんな魔法使いの少女と人間の少年が出会った時から始まる。

二人は瞬く間に恋に落ち、周りの目を盗んで、ひっそりとお互いの仲を深めていた。

物語の世界では、魔法使いと人間との恋愛は禁止されており、もしそれが分かってしまった場合、両者とも死刑という厳しい決まりがあった。

しかし、少年と少女は自分たちの気持ちを抑えることができず、誰にも見つからないように禁断の恋を続けていた。

しかし、そんな二人を不審に思った周囲の者が調査を始めてしまった結果、二人の恋は判明されてしまった。

死刑にしようと動き始めた周りの目を何とか掻い潜り、二人は街から離れた人気のない森まで逃げ切った。

そして、二人はひっそりと森の中で生活することになった。

これが物語の前半である。

前半は二人の淡い恋心や、周囲との対立から森の中へ逃げ出すまで、息もつかせない展開が続いた。だから、卓郎も最後まで刺激的な展開が続くだろうと思っていた。

しかし、この物語は後半に入ってから、急激にその性格を変えていった。

森の中でひっそりと幸せな生活を送っていた二人だったが、時間が経つごとに、二人は魔法使いと人間という大きな種族の壁を感じてし

まうのだった。

なぜなら、二人の体つきに大きな差が出来てしまったからである。魔法使いの少女は十五歳の姿のままだったが、人間である少年はすっかり立派な青年へと成長してしまっただのだ。

この種族の壁は、寿命の長い魔法使いを大いに悩ませた。

もし、このままの生活が続いていけば、いつしか青年も歳を重ねていき、少女を残して先に死んでしまっただろう。

どうして、自分は彼と共に老いることができないのだろうか。

魔法使いという長く生きられる体で生まれてきたが故に、愛する彼と共に老いることができないのだ。今後、待ち受けているだろう未来を想像するたびに、魔法使いの少女は胸が締め付けられる思いを抱いた。

——自分もできるなら、彼と同じ時間の中で生きていきたい。

そう決めた魔法使いは、ある決意を固めた。

それは、魔法使いという体を捨てて、自分も人間として生きていこうとすることだった。

長く生きられる体を捨ててまで、魔法使いの少女は、寿命が短い人間として生まれ変わる方法を探していこうと決めたのだった。

寝る間も惜しんであらゆる魔法の書を調べていき、ついに少女は魔法使いから人間へと変わることでできる禁断の魔術を見つけることに成功したのだ。

しかし、今の環境では、その魔術を行うことは不可能だった。

その書によると、その魔術を行うためには世界中に散らばっている材料を採集していかなければならなかった。

つまり、必然的にこの森から出ていかなければならなかった。

いくらこの森に入ってから時間が経ったとはいえ、外の世界の住人は未だに二人のことを探しており、もし見つかってしまったら、間違はなく死刑は免れないだろう。

悩みに悩んだ挙句、少女はついに森を出ていく決意を固めた。

少女は愛する彼を説得して、二人は未だに危険が残っている外の世界へと出た。

それは、自分の寿命を縮めるための旅――。  
やがて、物語は最終局面へと入っていった。

※

「で、その後はどうなったのかしら」

紅茶を飲みつつ、リラックスした表情でパチュリーは言った。

卓郎は頭の中で話を整理しながら、ゆっくりと答えた。

「その後、世界中を旅した二人はついに禁断の魔術に必要な材料を集めることができました。でも、いざそれをやろうとした矢先、二人は捕まってしまうました。二人は禁断の恋をしただけでなく、その国では禁断とされていた魔術をやろうとしていましたからね」

「で、そのまま二人は処刑されてしまったのかしら」

「いえ、何とか逃げ出すことに成功しました。でも、人間の青年の方は逃げ出す際に大きな怪我を負ってしまいました、あんまり長くは生きられない状態になってしまいました」

パチュリーは「へえ……」と声を漏らした。

「もう自分は長くないと悟った青年は、魔法使いに言いました。『自分はもう長くないから、君は人間になる必要はないんだよ』と。でも、魔法使いはそれを断りました。魔法使いの方はとっくに覚悟を決めていたようで、何とか逃げ込んだ先でついに人間となるための禁断の儀式を始めました。そこで二人の視点は終わりました」

「それで結局どうなっちゃったの？」

「追いかけていた人たちが二人を発見した時、すでに二人は死んでいました。人間となった少女は青年が息を引き取るのを見て、最後は人間として少女は彼と一緒に死ぬことができたようです」

「ただの恋愛物だと思っていたら、予想外に重苦しい話になってしまったわね」

「はい。特に後半は少女の悩んでいる描写が延々と続いていましたので、読んでいる僕の方も何とも言い切れない気分になってしまいました」

「自ら寿命を縮めるための旅ね……」

パチュリィは本の表紙を撫でながら続けた。

「卓郎。あなたはこれを読んでどう思ったかしら」

卓郎は首を傾げる。

「どういうことですか？」

「この物語の魔法使いは、愛する人間のために自らの命を縮めるための旅に出たわ。この魔法使いの行動に対して、あなたはどう思ったのかしら」

突然のパチュリィの質問に、卓郎は困惑する。

まさか、本の感想を求められるとは思ってもみなかった。卓郎は「うーん」と唸りつつも、読んでいる時に思ったことをそのまま言ってみることにした。

「僕としては、ちよつともつたいない気がしました」

「もつたいない？」

「この物語の魔法使いは、せつかく何百年も生きられる体に生まれてきたんですよ。でも、愛する人間のためにせつかく与えられた寿命を短くするのは……。なんて言いますか、ちよつともつたいない気がしました。彼女の愛する人と同じ寿命で死にたい、という気持ちは分らないでもないですけど、最後まで魔法使いとして与えられた命を全うしても、別に良かったんじゃないかって僕は思いました。たとえば、愛する人が先に死んじゃっても、もしかしたらその後の人生で、その時以上の幸せを得られる可能性だってあったと思いますし」

「逆に、人間の彼と過ごす時以上の幸せは考えられない、と彼女は考えていたら？」

唐突な返しに、卓郎は目を瞬かせる。

パチュリィはゆつくりと紅茶を飲んでから続けた。

「理論派のあなたにふさわしい回答ね。客観的な視点に立つなら、あなたの言うことは正しいと思うわ。自分から寿命を縮めるなんて、この魔法使いは本当に馬鹿らしいことをしたものね。でも、魔法使いの彼女は自分が死刑になるかもしれない、という危険を犯してまで、人間との恋を続けてきたんでしょ？　なかなかの覚悟を持ってるじゃない。その魔法使いにとっては、自分の命よりも人間との恋が大切



だったかもしれないわね」

彼女は卓郎と目を合わせる。

「恋って不思議な感情で、人によっては命より優先順位が高くなってしまふことだってあるじゃない。だから、私から見れば、魔法使いの少女が寿命を縮めるような行為をしたのは必然で、あなたが言うようなもつたいたい気はしなかったわね」

「なるほど。パチュリー様はそう考えるんですね」

思わず卓郎は微笑んでしまった。

「何がおかしいのかしら？」

怪訝そうにパチュリーが尋ねる。

「いや、失礼しました。僕よりも寿命の長いパチュリー様がそんなことを言うなんて、少し意外に思っただけです」

「ああ……。言われてみればそうね」

納得したようにパチュリーは返す。

卓郎より何倍も生きているパチュリーは、魔法使いの行為をもつたいないと感じず、逆に二十年しか生きていない卓郎はもつたいたいと感じてしまった。

長く生き続けてしまったせいで、パチュリーは人間の卓郎とは少し異なる命の価値観を持っているのか――。

そんな彼女は髪をいじりつつ、本の表紙を見た。

「あんまり物語系の本は読まないんだけど、あなたと話していくうちに少し興味が湧いてきたわ。もうちよつとあなたと議論的な話がしてみたいし、私もこれを読んでみることにするわ」

「えっ。パチュリー様も読まれるんですか？」

「当たり前よ。概要を聞いただけじゃ、対等な議論なんてできるわけないじゃない」

議論ということは、先ほどのような話を延々と話し続けることなのか。

それはそれで面倒だな、という卓郎の思いとは裏腹にパチュリーは本を開く。しかし、すぐに中身は読まずに、本を開いたまま彼女は機嫌の良さそうな笑みを浮かべた。

それは滅多に見せない、パチユリーの明るい表情だった。

「私が読み終わるまでここで待ってなさい。その間、適当にそこらへんの本を読んでいいから。勝手に逃げたら承知しないからね」  
使用人である卓郎に選択権はない。

「……かしこまりました」

こうして、貴重な卓郎の休日は、パチユリーによって潰されてしまった。

## 【外伝2】

家中に置かれた多くの人形たちが、じろじろと泥だらけになった卓郎を見ている。

「ついてない。まさか、こんなことになってしまふなんてね……」

窓の外を眺めながら、人形のような金髪の少女が言う。しかし、今の彼女も彼と同じように全身泥だらけになっており、きれいな髪も今や茶色に変わってしまったていた。

少女はため息をついて、顔についた泥を拭う。

「さつきは私が悪かったわ。油断してたというか……弁解の余地もないわ。天気も大荒れだし、あなたの服も洗わなくちゃならないし、今日はここでゆっくりしていきなさい」

現在、外は激しい雷雨が降っており、とても外に出られる状況ではなかった。すでに時刻は夕方であり、雨の勢いが弱くなる頃には夜になっているだろう。

さすがに普通の人間が夜になっても歩けるほど、この一帯は安全ではない。紅魔館の住人たちには心配を掛けてしまいが、今日は彼女の言うことに従ったほうがいいだろう。

大勢の人形の視線に戸惑いつつも、卓郎は頷いた。

「はい、ありがとうございます」

この家の主、アリス・マーガトロイドは不機嫌そうに泥だらけの服を見た。

「あーもーっ。服もこんなになっちゃって。さすがにここまでひどいと簡易魔法じゃ落とせないし、着替えるしかなさそうね」

アリスは泥だらけになった卓郎の姿を見て、困ったように頭を掻いた。

「あなたも着替える必要があるわね。でも、さすがに男性用の着物なんて持っているはずがないし……。ちよっと待ってて」

アリスは、部屋の隅に置いてあった大きい布と小さい布を卓郎に渡した。

「私は奥の部屋で着替えてくるから、卓郎はその間に小さい布で体をきれいにしておいてちょうだい。服はちゃんと全部脱いでおくのよ。で、服をきれいにしている間は、この大きい布で体を覆ってちょうだい。分かった？」

「分かりました」

さすがにこの状態で一晩は過ごしたくなかったので、卓郎は素直に頷いた。

アリスは「じゃあ、よろしく」と言っ、そのまま奥の部屋へ行ってしまった。卓郎も早速、着物を脱ごうとしたが、すぐにその手を止めてしまった。

なぜなら、大勢の人形たちが卓郎をじーつと見つめていたからである。

どの人形も可愛らしい女の子の形をしており、青色のドレスを着ていたり、どこか遠い国の民族衣装のようなものを着ていたり、衣装は実に多種多様だった。

「人形だと分かっ、いてもなあ……」

相手は人間じゃないと分かっているが、それでも奇妙な感覚を抱かざるを得なかった。

卓郎は、何となく目の前にいた長い金髪の人形と目を合わせてみたが、人形は卓郎からの視線に動じる気配もなく、じーつとこちらを見つめるばかりだった。

あまりのまっすぐな視線に、彼の方から目を逸らした。

とりあえず、このままにしておくわけにもいかなかったので、卓郎は服を脱ぎ始めた。

※

卓郎がアリスと遭遇したのは、人里の中だった。

この日、卓郎は午後から人里の店で話し合いを行っていた。

そこはいつも日用品やら雑貨やらを大量に購入している店であり、卓郎は紅魔館を代表して、店長に今後の商品取引に関しての値段交渉を行っていたのである。

この数年、噂を聞きつけて、紅魔館には大量の妖精メイドが入って

きた。

その影響で、日用品などの消費が急激に増えてしまったのだ。

いくら妖精メイドたちに給料が出ないとはいえ、日用品の消費が増えてしまえば、それに伴って屋敷が出すお金も多くなってしまう。

その矢先、卓郎は主人であるレミリアから、「なるべく費用を抑えるようにしてちょうだい」との命令を受けてしまったのである。

いろいろと考えた挙句、卓郎はまず商品をなるべく安く購入しようと考えたのである。

しかし、人里の店をぐるぐる回って安い品物を購入するには手間が掛かるし、どの商品にもある程度の相場が決まっている以上、安く購入するにも限界があった。

そこで、普段から大量の商品を購入しているお店に対して、「今後も商品をいっぱい買うから、店頭で売られている値段よりもっと安くして」と直接交渉するわけである。

人里の店は個人向けに商売をしているところが多いので、たとえば卓郎が少し無茶な要求をしたとしても、店の人はいつも大量の商品を買ってくれる顧客をそうそう逃すわけがないだろう。もちろん、無茶な要求をして交渉が決裂するのは避けたかったので、常識的な範囲内での値引きにするように心掛けた。

この作戦はうまく成功し、いくつかの店で安く商品を購入できるようになった。

そしてこの日、卓郎は主に衣類の生地などを購入している店との直接交渉に臨んだ。

その結果、一定の成果を収めてその店を後にした。外に出ると、空には分厚い雲がかかっており、もう少ししたら大雨が降ってきてそうな心配がした。

まずいな、と直感的に卓郎は思った。紅魔館を出た時はまだ青空だったのだ、不覚にも傘を持ってきていなかったのだ。

寄り道せずに早く帰ろうと判断して、卓郎は笠をかぶろうとした直後だった。

「ねえ、その人」

突然、後ろから声を掛けられたので、卓郎はびくんと体を跳ねらせる。まさか、自分の正体を知っている人なのかと焦りつつ、後ろを振り向いた。

そこにいたのは、里ではなかなか見かけない金色の髪の少女だった。初めて見る顔だった。

「僕になにか？」

「さつき、その店でいろいろと交渉していたようだけど、うまくいったようじゃない」

卓郎は首を傾げる。

交渉は扉を挟んだ店の奥で行われていたため、たとえ交渉の間に少女が店舗内に入ってきたとしても、会話の内容までは聞き取れないはずだ。

「そうですけど、どうして知っているんですか」

「ああ、ごめんなさい。実はちよつと人形を通じて、こつそり聞いていたのよ」

「人形？」

すると、突然少女の背中からひよつこりと金髪の人形が姿をあらわした。少女が人形を操っているような動きを見せなかったため、これには卓郎も驚いてしまった。

少女は笑みを浮かべながら、人形の頭を撫でる。

「紹介が遅れたわね。私はアリス・マーガトロイド。ただの人形遣いよ。あなたは？」

「……卓郎といえます」

「卓郎ね。ちよつとあなたにお願いがあるんだけど、聞いてくれるかしらっ。」

直後、別の人形がアリスの背中から出現した。

その人形はまるで自律して動いているかのようにアリスの肩に乗って、卓郎の顔をじっと眺めている。大道芸人がやっている人形劇の類は卓郎も見たことあるが、彼女の人形の動きは明らかにそれを逸していた。

この瞬間、卓郎はアリスが普通の人間ではないことを察した。

※

彼女のお願いとは、先ほどの店に置いてある生地を購入して欲しいとのことだった。

自らを人形遣いと名乗るだけあって、アリスは人形を作るのに必要な材料の一部を人里で購入しているようだった。しかし、買うといつてもごくわずかな量なので、いつも店の定価の値段で買っているらしい。

そして今日もいつも通り、彼女が店内に入ったところ、ちょうど卓郎が店の主人と一緒に奥に入っているとところを見かけたのである。

扉が閉まる前に『値引き』という言葉が聞こえてきたので、ピンときたアリスはひっそりと人形を使って卓郎たちの会話を聞いてみたのだ。

すると、アリスの欲しかった生地が定価よりかなり安い値段で買えると分かったので、卓郎が店を出てきた瞬間を狙って話しかけてきたのだ。

「私は細かい交渉が得意ではないからね。だからお願いできるかしら」

アリスは一枚の紙を卓郎に渡してきた。

「お金は私が持つてるから、この紙に書いてある物を買ってきてくれるかしら。あなたが商品を購入すれば、定価よりかなり安く買えるんだからね。もちろん、お礼はするわよ」

「なら三割でどうでしょうか」

卓郎の言葉に、アリスは「えっ？」と首を傾げる。

「お礼はお金で結構です。僕が商品を買うことで得をした分のお金については、その三割は僕がもらうというのでどうでしょうか」

アリスは眉をひそめた。

「お金にするの？ 食べ物とかはダメなの？」

「食べ物だとちよっと手間が掛かりますからね。アリスさんの代わりに僕が商品を買いますので、その手間賃とを考えてくれれば」

「こういった交渉はよく分からないけど、手間賃にしてはちよっと高くない？」

この返しは卓郎も想定済みである。だから、少し高めの三割でまずは言ってみただ。

卓郎はわざと焦った素振りをしながら、頭を掻いた。

「ああ、そうですね。すいません。じゃあ、二割ならどうでしょうか」  
彼女はしばらく訝しげな顔つきになっていたが、やがて首を縦に振った。

「……そうですね。じゃあ、それでいいわ」

「ありがとうございます」

交渉が成立後、卓郎はすぐに先ほどの店に入ってしまった。

店主はすぐに店に戻ってきた卓郎に驚いた様子だったが、「すぐに必要になった」と説明すると、喜んで受け入れてくれた。

指定の商品を購入後、卓郎は店の近くで待っていたアリスと合流した。

品物を受け取ったアリスは、満足気な様子で頷いた。

「うん。いいね。この生地だけは、あそこのものじゃないと見た目が悪くなるのよ」

「それは良かったです」と返しつつ、卓郎は空を見上げる。

どうやら店で買い物をしているうちに、空はますます不穏な雰囲気になってきているようで、雨が降ってくるのは間違いなさそうだった。

「雨、降ってきそうですね」

卓郎がつぶやく。

「そうですね。早く私も家に戻らないと……。卓郎の家はどこにあるの」

「僕の家は人里から離れたところにあります」

アリスは意外そうに目を瞬かせた。

「あら、そうなの。珍しいわね。人里に住んでいるんだったら、今後もあなたに買い物をお願いしようと思ってたのに」

「いろいろと事情があります」

「雨が降ってくる前に帰れそう？」

「どうでしょう。五分五分といったところですね」

「そう……。悪かったわね。余計なお願いをして。だったら急いで里を出ましょ」



二人は急いで里の出口に向かった。

移動しながらアリスと話しているうちに、どうやら帰る方向が同じだということが分かったので、しばらく卓郎は彼女と一緒に歩いていくことになった。

しかし、雲行きはどんどん怪しくなっていていき、少し進んだあたりで、ついに冷たいものが卓郎の頬に流れた。

さらに運の悪いことに、雨足はすさまじい速さで強くなっていき、あっさりと卓郎は全身がびしょ濡れになってしまった。

「くそっ……。ここまで強くなつてくるなんて」

ついに卓郎とアリスは走り始めた。

よく見ると、なぜか隣のアリスは全く濡れていなかった。

彼女の体は青白い光に覆われており、事情を訊いてみると、雨を弾いてくれる魔法を掛けているらしかった。

ここで卓郎は、アリスはパチュリーと同じような魔法使いであることを知った。目の前で魔法を使っているのに、全く驚いた素振りを見せない卓郎にアリスは怪しげな顔をしたが、やがて「まあ、余計な詮索はしないでおくわ」と言ってくれた。

念のため、卓郎は尋ねてみた。

「アリスさん。僕に雨よけの魔法を使うことってできませんか」

「悪いわね。この魔法は術者にか発動することができないのよ」

「そうですか……」

アリスのことだから、もし使えていたら雨が強くなる前にやっていただろう。

「あなたの家はもう近いのかしら」アリスは問う。

「いえ、まだまだあります」

この状況では、もう二、三十分ほどは走り続けなければならないだろう。

その時、近くに雷が落ちて、閃光と共にすさまじい轟音が耳に響いた。さすがの卓郎もこれには一瞬、肝を冷やしてしまった。

アリスは走りながら、小さく息を吐いた。

「この状況はさすがに危険ね。物を買ってくれたお礼もしたいし、雨

が弱くなるまで私の家で雨宿りをしていつてちょうだい。私の家は  
この近くの森にあるから」

「あ、ありがとうございます」

「それにしてもこの雨はさすがにきついわね。こんなに激しいのは久  
しぶりだわ」

「そうですね」

「あなたがいなくなったら、ひとつ飛びで家に帰れるんだけど、そうした  
ら卓郎が私の家まで行けなくなっちゃうし……。ちなみに、あなたつ  
て何か能力とは持つてないの？」

「持つていません。僕は普通の人間です」

全身がすっかりびしょ濡れになってしまい、半ば投げやりで卓郎は  
言い返した。それとは裏腹に、魔法で濡れていないアリスの表情はど  
こか余裕があった。

アリスは正面の方向を指差した。

「この先の森の中に私の家があるわ。ただ、普通の人間が通るには少  
しきつい匂いとかがあるから、そこらへんは私の魔法で守つてあげ  
る。私の家に到着したら、もうちよつとあなたのことを詳しく聞かせ  
てちょうだい。あなた、どう見ても並みの人間じゃないと思うから」  
そう言つて、アリスが微笑んだ直後だった。

アリスの足がぬかるみにはまり、大きく滑つてしまった。

「あつ——」

そのまま彼女の体は、大きくバランスを崩してしまふ。

さらに、転んだ拍子にアリスは反射的に隣を走つていた卓郎の着物  
の裾をつかんでしまった。何が何だか分からないうちに、卓郎の目の  
前には茶色に濁った水たまりが迫つていき——。

そのまま、二人は仲良く水たまりに突つ込んでしまった。

さらに、その衝撃でアリスの雨よけの魔法は効力を失つてしまつ  
た。

※

大きな布に包まれながら卓郎は、アリスが淹れてくれた紅茶を飲  
む。

すっかり体が雨で冷えてしまったせいか、紅茶が妙に美味しく感じられた。それとも、紅魔館で支給される紅茶よりも品質の良いものを使っているのだろうか。

まだまだ外から激しい雨音が聞こえてくる最中、卓郎は小さく頷いた。

「おいしいです」

「そう。良かったわ」

アリスは答える。布に包まった卓郎とは対照的に新しい服に着替えて終わったので、すっかり人里で会った時と同じ姿になっていた。

卓郎は紅茶と一緒に出てきた焼き菓子を一口かじる。

甘さが控えめに作られているようで、卓郎はすぐにそれが気に入った。紅魔館で食べる菓子類は、住人達の嗜好に合わせてやたら甘く作られているので、なかなか自分好みの菓子が食べられないのだ。

アリスは紅茶を飲んでから言った。

「あなたの着物は今、私の魔法で洗っている最中だわ。もうちよつとしたら終わるから、完了したらそのまま着替えてちょうだい」

「もちろんです。さすがにこの姿で他人の家にいるのはきついですし」

アリスの人形が、卓郎が飲んでいたコップに紅茶を注ぐ。

これだけ見ると、アリスの人形たちは本当に生きているかのような錯覚に陥ってしまう。

この家の人形遣いは、紅茶のカップを置いた。

「で、さつきも言ったかもしれないけど、あなたの家は人里からだいぶ離れたところにあるのよね。私が聞く限り、人里以外の土地に人間が住んでいるなんて話はあまり聞かないわ。いったい、具体的にどこに住んでいるのかしら」

この問いに、卓郎は頭の中でどう答えるべきか一瞬迷った。

しかし、すぐに正直に答えても良いかと判断した。

目の前の少女は人間ではないことは間違いないが、だからといって自分に危害を加えるような気配は全く感じなかったからだ。こんな人気のない森で住居を構えている時点で、ひっそりとした生活を送っ

ているのは間違いないし、純粋な好奇心で尋ねているのだろう。

卓郎は、自分はここから少し離れた場所にある、吸血鬼の館で働いていることを打ち明けた。それを聞いたアリスは、信じられないと言わんばかりの表情になった。

「そこに館があるという話は聞いたことあるけど、まさかそんなところにあなたが働いているなんてね……。よく吸血鬼の餌にならなかったわね」

「働くまでいろいろありましたけど、何とか今日まで漕ぎつくことができました」

苦笑した後、卓郎は周囲にいる人形たちに目を行き渡らせた。

「アリスさんはずっとここに住んでいるんですか」

「まあ、いろいろあつてね。今はここで暮らしているの」

「人形もここで作っているんでしょうか」

「当たり前じゃない」

卓郎は、何となく紅茶のカップの横にいる人形に目を留める。

アリスと同じ髪色をした人形は、卓郎のカップをじつと見つめている。おそらく、飲んでる紅茶が少なくなったらすぐに補充してくれる役目を担っているのだろう。

いろいろと雑談をしているうちに、テーブルの真ん中に置いてあった焼き菓子が無くなってしまった。「やつぱり二人だと、お菓子の消費も早いわね」とぼやきながら、アリスは立ち上がり、部屋の隅にある棚に向かった。

中を開けた瞬間、アリスは頭を掻いた。

「しまった……。今日は本当についてないわね」

「どうしたんですか」座ったまま卓郎が問う。

「焼き菓子が尽きてしまったのよ。これから作ってくるからちよつと待ってて」

「いや、そこまで無理しなくていいですよ。僕、そんなに甘いものは食べないですし」

「あなたのためと言うより、自分のためね。私、甘いものは常に置いておかないと落ち着かない性分だね」

小さくため息を吐いて、アリスは奥の部屋に再び向かおうとする。その時、卓郎の中である閃きが浮かんだ。

「あつ。アリスさん、ちょっと待っててください」

アリスは体を止めて、「どうしたの」と問う。

「これからお菓子を作るということは、材料はここにあるということなんでしょうか」

「そうだけど、それがどうしたの」

「もし、良かったら僕にお菓子を作らせてもらえませんか？ 焼き菓子じゃないので長持ちはしませんが、泊めてくれるお礼もしたいです」

アリスは意外そうに目を見開いた。

「あなたが？ 甘いものを？」

「ええ。これでも館の使用者をしていますからね。料理全般はそれなりにできるんです。おまけに館の住人たちはやたら甘いもの好きで、お菓子作りにはかなり自信があります」

「へーっ。で、何を作るつもりなのかしら」

卓郎は、初めて住人達があれを食べた時の反応を思い出しながら言った。

「マジックケーキというお菓子です。僕の一番の自信作です」

### 【外伝3】

マジックケーキとは、同じ材料を混ぜて焼くだけで三つの食感が楽しめるケーキである。

特に高度な技術は必要なく、やり方さえ覚えれば誰でも簡単に作れるお菓子である。

卓郎がこのケーキを作り始めたきっかけは、レミリアの無茶な要求だった。

「いつもと違った面白いお菓子を作りなさい」

こんな感じで言われたのは、卓郎が二十歳を目前に控えた時だった。

レミリアいわく、いつも食べているお菓子に飽きてきたので、これまでにないお菓子を作ってくれとのことだった。

この数年間、卓郎はちよくちよくレミリアから「ケーキ作ってちょうだい」「今日は甘い和菓子を作ってちょうだい」などの要求を受けてきたので、それなりにお菓子作りも得意になっていた。しかし、ここまで曖昧な要求は初めてだったので、それを聞いた当初は何を作ればいいのか全く見当もつかなかった。

だからといって、主人の命令に逆らうことはできないので、卓郎はとりあえず一週間くらいの時間をもらって、レミリアが満足するようなお菓子作りに取り掛かったのだ。

しかし、いざ台所に立って考えても、なかなか「これだ」というお菓子は思いつかなかった。なんせ相手は何百年も生きている吸血鬼なのである。

舌だつて肥えているだろうし、中途半端なお菓子を作ってしまったら、間違いない彼女の逆鱗に触れてしまうだろう。

台所においても無駄だと感じた卓郎は、パチュリーの図書館から数少ない料理本を借りて、何か面白いお菓子の調理法はないか、寝る間を惜しんで探し始めた。

マジックケーキの調理法を見つけたのは、その最中だった。

※

「見た目は普通のパウンドケーキっばいね」

完成したケーキを眺めながら、アリスはつぶやく。

型から取り出したケーキは綺麗な焦げ茶色になっており、この時点で卓郎は成功を確信していた。部屋の周囲にいる人形たちも、「これはなんだ」と言わんばかりに興味津々な目つきになっている。

すでに、着物に着替え終わった卓郎は包丁を握った。

「切れば分かりますよ」

そう言つて、ゆつくりとケーキを八等分に切り分けて、そのうちの一つを皿に乗せる。

アリスはケーキの断面図を見て、「あつ」と声を出した。

「ちゃんと三つの層に分かれているわね」

「一番上のスポンジ生地はふわふわな食感、真ん中のカスタード生地はクリームの食感、そして一番下のフラン生地はプリンを食べているような食感になってます」

「早速いただきますしよう」

卓郎の分のケーキも皿に置いて、二人はそれぞれの椅子に座る。

フォークで一口サイズに切り、それを頬張った瞬間、アリスは大きく目を見開いた。

「おいしい……」

「ありがとうございます」

そう答えて、卓郎もケーキを食べる。我ながら良い出来だ、と心の中で思った。

これもアリスの家にあった不思議な器具のおかげだろう。

「甘いものは常に置いておかないと落ち着かない性分」と言っていただけあって、アリスの家に置いてあった調理器具は、どれも今まで見たことない性能を持っていた。

例えば、アリスの家にあった泡立て器は、道具自らが回転して材料をかき混ぜてくれた。ケーキの一番上のスポンジにあたる部分を作るには、普通だったら卵白をかき混ぜてメレンゲというものを作らないといけない。

紅魔館で作る時は、普通の泡立て器で相当な回数を自力でかき混ぜないといけなかったが、アリスの家にあった魔法の泡立て器は、自動で卵白をかき混ぜてくれたので卓郎の度肝を抜かせた。

「こんなお菓子を食べられるなんて、さぞかし館の主人は満足したでしょうね」

アリスの言葉に、卓郎は微笑みながら紅茶を飲む。

「ええ。とても上々でしたよ」

レミリアたちに、初めてこのケーキを振る舞った時の反応が脳裏に蘇ってくる。

普段は取り澄ましたような態度をしているレミリアも、これを食べた瞬間だけは目を大きく見開いて「おいしい」と言ってくれた。

そんな主人の反応を見てか、メイド妖精たちも食べたいと言ってきて、最終的にはパチュリーや美鈴までもが食べに来ってしまったのだ。

余談であるが、卓郎がマジックケーキを作るようになった直後、館に入りたいと希望する妖精が急増した。

どうやら、妖精たちの間で「あの館でしか食べられない美味しいお菓子がある」という噂が流れてしまったらしい。おかげで、手が空いた時にはちよくちよく住人や妖精たちに「あのケーキを作ってよ」と言われるようになってしまった。

卓郎とアリスがケーキを食べ終えた時には、すでに窓の外は完全に暗くなっていた。雨の音も先ほどに比べて、だいぶ弱くなっているようだった。

「なるべく早く館に戻ったほうがいいわよね」アリスが言う。

「そうですね。みんな心配していると思いますし」

「じゃあ、今日は早く寝ることにして、外が明るくなったらさっさと出ましよう」

アリスがそう言った直後、人形たちがせつせとテーブルの片づけを始めた。

もはや、卓郎の目には人形たちがアリスに忠実なメイドに見えてしまった。

人形遣いは椅子から立ち上がった。



「悪いけど、卓郎はこの部屋で寝てちょうだい。さすがに来客用のベッドはないからね。もちろん、毛布とかは用意してあげるからそれで今日は我慢してね」

※

「たまに自分でも考える時があるのよ」

この日の吸血を終えたレミリアが、ぽつりと卓郎に言った。

「見た目は人間とそんなに変わらないのに、どうして私は吸血鬼なのかを」

「どういうことですか?」

主人とベッドで向かい合った状態のまま、卓郎は言い返す。

「ここ最近吸血後もそのまま部屋に戻ることもなく、こうしてレミリアと話すことが多くなつた。話すと言つても、だいたいは取り留めのない内容になつてしまつたが。」

「もし、私の背中に羽根が生えていなかったら——。もしくは、尖った牙が無かつたら——。少なくとも、見た目はそこらへんにいる幼い人間とあんまり変わらなくなるじゃない。あなたのような人間を見ると、なおさら吸血鬼と人間の差つて一体なんなんだろうって考えちゃうのよね。あなたはどう思うかしら」

「いきなりそんなことを言われましても、何て答えればいいのかやら……」

「真面目に考えないでいいわよ。別に明確な回答なんて求めてないんだし」

レミリアは微笑む。ちらりと見えるその牙は紅く染まっていた。

そう言われたものの、卓郎は言葉に気を付けながら答えた。

「そうですね。そこまで難しいことではないと思います。お嬢様は僕より何倍も長く生きておられますし、僕より遥かに強大な力を持っています。確かに見た目は人間と変わらない部分も多いですが、身体能力や寿命といった中身には大きな差があるじゃないですか」

「堅実なあなたらしい回答ね」

「何の能力も持っていない僕から見ましたら、お嬢様は立派な吸血鬼ですよ」

すると、彼女は小さく息を吐いた。

「立派な吸血鬼、ね……」

その言葉には、奇妙な含みが持たれているような気がした。

レミリアは仰向けに体を動かした。

「まあ、そうね。私は偉大なるスカーレット家の吸血鬼だものね。弱小な人間であるあなたと比べたら、大きな差があるのは歴然とした事実だわ。今日、あなたが作ってくれたマジックケーキに例えるなら、私は濃厚な味わいのフラン生地 layered cake で、あなたはすぐに壊れてしまいうようなスポンジ生地 layered cake の層——。それくらいの大きな差よね」

「マジックケーキの層ですか」

「ええ。なかなか良い例えだと思わない？ あのケーキは同じ材料で作られているのに、作り方次第でそれぞれの層にあれだけの違いが生まれるんですよ？ もし、この世界を作った神がいるとしたら、きつと『吸血鬼』という頑丈な種族を作ろうとした際に、作り方を間違えて『人間』という脆い種族を作ってしまったのでしょよね」

「脆い種族ですか」

「あら、私が間違ったこと言ったかしら？ さつきあなたが言ってくれたように、身体能力や寿命はあなたたち人間より遥かに優れてるじゃない」

レミリアは顔を向けると、卓郎の頬に触れてきた。

「まあ、あなたの名誉のためにこれだけは言っておくわ。たとえば脆くても、中身は優秀な人間が存在するってことは間違いないわね。あなたと私はマジックケーキの層のように異なる作り方をしているけど、だからと言ってあなたを否定する気は全くないわ」

そして再び近寄ってきて、ゆっくりと卓郎の体を抱いた。

先ほど吸血しただけあって、彼女の体は異様に熱を帯びていた。

「今日はとても気分がいいわ。私がここまであなたを褒めるのは、あそこまで美味しいケーキを作ってくれたからよ。今はこの私に褒められたことを誇りに思いなさい」

「ありがとうございます」

「しばらくこのままでもいいかしら」

卓郎は小さく頷いた。

「ええ。どうぞ、お嬢様のお好きなように」

「よろしい。それでこそ私の従者よ」

結局、この日は翌朝まで卓郎はレミリアと一緒に寝ることになってしまった。

※

卓郎が目を開いた時、大勢の人形たちが彼の周りを取り囲んでいた。

「ごくり、と思わず唾を飲み込む。」

現在、卓郎はアリスの家の居間で毛布をかぶって横になっており、人形たちはそんな彼をじっと見つめながら囲んでいたのだ。中には卓郎の体の上に乗っている人形たちもおおり、しばらく卓郎は動くことができなかった。

「お、おはよう?..」

その声を聞いて、人形たちはぞろぞろと後ろに下がる。

しかし、卓郎の体に乗っていた人形がバランスを崩して、そのまま彼の顔の前で転んでしまった。慌てて卓郎は起き上がると、人形を持ち上げてそのまま立たせる。

当たり前だが、その感触は人形そのものだった。

人間らしい肉感はないし、体温などは全く感じない。どうして、この人形が人間らしい動きをしてくるのか卓郎は不思議でたまらなくなかった。

助けられた人形はぺこりと頭を下げると、そのまま彼の手に口づけをした。

その直後、卓郎はその人形の体を掴んで、自分と同じ目の高さで持ち上げた。彼女は少し驚いたような素振りを見せたが、その表情は変わらない。

数秒ほど、卓郎はアリスの人形と見つめ合った。顔や肌をじっくり観察してみると、やっぱり彼女の体を構成しているのは無機物であることが分かる。

しかし、だからといって人形である彼女の愛らしさや魅力が無くな

るわけではない。

人形は、どこまでも人形なのである。

「可愛いな。お前」

そう言つて卓郎は微笑むと、ゆつくりと人形を降ろして、その小さな頭を指で撫でた。

彼女は一瞬だけ驚いたように体を跳ねらせたが、すぐに嬉しそうな反応を示した。

周りの人形たちは、そんな卓郎たちの様子をじつと見ていた。

しかし、次の瞬間、一斉に彼女たちは卓郎の手に目掛けて突っ込んできたのだ。

「お、おい……」

一瞬、怒らせてしまったのかと思つたが、そうではなかった。

彼女らは卓郎の手にやたら口を付けてきて、どうやら先ほどの人形のように頭を撫でて欲しいようだった。だが、何十体もの人形が一斉にやってきたら、さすがの卓郎もそんなことをする気にはなれなかった。

「こ、こら。そんなに近づいてくるんじゃない」

卓郎は注意をするが、人形たちは止める気配を見せない。

その時、さつき頭を撫でた人形が卓郎の横にあつた棚に上つていくのが見えた。何をするのかと思つた束の間、その人形は棚の上から卓郎に目掛けて飛んできた。

「あつ——」

その人形は彼の顔に抱きつくように着地すると、そのまま彼の額に口づけをした。

※

「なんだか、だいぶ人形たちに気に入られたようじゃない」

森の出口で、アリスは感心したようにつぶやく。彼女の周囲には何十体もの人形が浮いており、じつと卓郎のこゝろを見つめている。彼女たちの表情はどこか悲しげに見えた。

そんな多くの視線に戸惑いつつ、卓郎は頭を掻いた。

「ええ、どうやらそのようです……。それにしても、この人形たちは

こんな自律した動きができるんですか。もしかして、アリスさんが操っているわけじゃないんですか」

「それは秘密。細かいことを話すわけにはいかないわ」

アリスは苦笑しながら、人差し指を口元に置く。

現在、卓郎はアリスの家を出て、彼女の案内で森の出口までやってきていた。

この先の道を真っ直ぐ歩けば、卓郎の知っている道に辿り着くことができるので、ここで卓郎はアリスと別れることになっていた。

昨晚はあれだけ降っていた雨も今は止み、空はきれいな青に染まっていた。

アリスは軽く手を叩いた。

「さあ、こんなところで駄弁つてないで、早く帰った方がいいんじゃないの。館の人たちだって、きつとあなたのことを心配しているでしょうし」

「そうですね。そうしましょう」

「昨日のマジックケーキはとてもおいしくて衝撃的だったわ。調理法も教えてくれてありがとうね。私も早速、作ってみることにするから」

昨晚、卓郎はマジックケーキの調理法を紙に書いて、アリスに渡していたのだ。

「ええ。ぜひ作ってみてください」

それから、卓郎とアリスは数秒ほど無言で見つめ合う。

この人気のない森の中で、ひっそりと暮らしている魔法使いの少女。

また今度、彼女に会えるという保証は無かった。

アリスいわく、人里にはそんなに積極的に訪れるわけではないらしい。

さらに、この森は普通の人間が何の対策も無しに入ってしまうと、命を落としかねない危険があるので、普段は彼女の魔法で人間が寄ってこさせないようにしているらしいのだ。

今回はいろんな偶然が重なって彼女の家に泊まることになったが、

またその偶然が起こるとは限らない。

「また、会えるといいですね」卓郎がつぶやく。

「ええ。もし、また会う機会があったら、昨日のマジックケーキを作っ  
てちょうだい。それに人形たちともまた遊んでちょうだいね」

人形たちは妙にそわそわした様子で、卓郎をじつと見つめている。

「はい。その時はいっぱい遊んであげますよ」

その言葉に、人形たちは嬉しそうに飛び跳ねたりした。

卓郎はアリスと握手を交わした後、紅魔館に向けて歩き始めた。

後ろを振り向くと、アリスと大勢の人形たちが彼に向けて手を振っ  
ていたので、彼も同じように手を振った。

心地の良い風が、彼の髪を揺らす。

こんなに天気が良いのなら、ゆっくりと歩きたいのが本音だった  
が、紅魔館の方が心配だったので、卓郎は早足で来た道を戻り始めた。

ようやくいつもの道に辿り着き、そのまま紅魔館へ急いでいた矢先  
だった。

前方の上空から、何者かが飛んでいるのが見えた。

「卓郎さーん！」

あろうことか、それは美鈴だった。隣にはユキもついている。

二人は卓郎の前に着地すると、やたら焦ったような表情で迫ってき  
た。

「卓郎さん！ 怪我はありませんか？」

あまりにも必死な様子ユキに、むしろ卓郎の方が驚いてしまっ  
た。

「あ、大丈夫……」

「雷に打たれていませんか？ 変な妖怪に襲われたりしなかったです  
か？」

「いや、何ともないから」

その言葉に、美鈴は安心したように息を吐いた。

「あー。良かったです。みなさん、卓郎さんが帰ってこないってすご  
く心配してましたから」

「でも、どうして僕が今帰ってるってことが分かったんですか」

「パチユリー様の探索魔法のおかげです。ついさつきまでパチユリー様の魔法でも全然見つからなかったんですけど、ようやく探知することができたんです」

ふと、ここで卓郎はアリスがパチユリーと同じ魔法使いであることを思い出した。

もしかしたら、アリスがいる森に滞在していたことによって、何らかの原因でパチユリーの探索魔法がうまくいかなかったのかもしれない。

「良かった……。良かったです。卓郎さんが生きてて」

その時、ユキは大粒の涙を流し始めた。

「おいおい。そんな泣くことはないだろ」卓郎が慌てて言う。

「でも、もし卓郎さんが本当に死んじゃっていたら、私……」

ユキは顔を手で覆って、そのまま泣き始めてしまった。

美鈴は、そんな彼女の肩をとんとんと叩いた。

「さあ。お嬢様たちが待っています。卓郎さん、私の背中に乗って早く館に戻りましょう」

※

館に戻った卓郎を待っていたのは、あろうことか館にいた者全員だった。

「リーダー。本っ当に死んじゃったと思ったんだから！」

館の敷地に入ってから早速、妖精メイドのハルが卓郎に抱きついてきた。

そして、彼女はそのまま彼の胸に顔をうずくませて泣いてしまった。他の妖精メイドたちも卓郎に近付いてきて、嬉しそうな様子で声を掛けてくる。

そんなメイドたちに対応しつつ、卓郎はハルの髪を優しく撫でた。

「心配して悪かったな。後でゆっくり話を聞いてやるから、ちよつと離してくれ」

ハルを引き剥がして、卓郎は奥の方で待っていたレミアアとパチユリーの所に向かった。二人とも日傘をさしながら、卓郎がやって来るのを待っていた。

「遅かったじゃない。いったいどうしたのしかしら」レミリアが問う。  
卓郎はすぐに頭を下げた。

「お嬢様、この度は申し訳ございませんでした。昨日の夕方の大雨で帰れなくなってしまうして、親切な方の家に泊まらせていただきました」

「まあ、昨日の雨はさすがに強かったからね。どこの家に泊まったのかしら」

「それは……」

「普通の人間の家だったら、パチエの探索魔法であなたのいる場所くらいは分かるのよ。でも、昨晚はパチエが魔法をいくら掛けても、あなたを見つけないことができなかった。だから、あなたの身に何かが起こったのかもしれないと思って、昨日は屋敷の者たちが総出であなたを探しに行ったのよ。ユキやハルなんか特に焦っちゃって、もうね」  
「ええ。さつき美鈴さんからいろいろと聞きました」

先ほどのハルの態度から、かなり心配をさせてしまったようである。

ここでパチユリーが、あからさまに大きく息を吐いた。

「なんだか元氣そうなあなたを見て、すごく損した気分になったわ。私の魔法だって、なぜかうまくいかなかったし……ああ、気分が悪いわ」  
「あら。昨晚は私の前でやたら卓郎を心配していた魔法使いは、どのどなたかしら？ 昨晚はすごく必死な顔をして、寝ずに卓郎の場所を探していたじゃない」

パチユリーは痛いところを突かれたような顔になって、レミリアを睨み付ける。

「そういうレミイだって、昨日はものすごく必死な様子で、ユキたちに卓郎を探してこいと命令してたじゃない。あんな焦ったレミイを見るのは久しぶりだったわよ」

「あ、あのね……」

レミリアの顔が険しくなる。

「いくらパチエでも言っていないことと悪いことが——」

何やら嫌な雰囲気になってきたので、卓郎は慌てて制した。



「お二人とも、昨日の件は本当に申し訳ありませんでした。もしよろしければ、この後に今回のお詫びとして、お嬢様たちにいつものケーキを作ってあげますから」

その言葉を聞いた瞬間、二人の目が一気に輝いた。

「そう。それならあなたの好意に甘えようかしら」と、レミリア。

「無理しなくてもいいけど、どうしても言うなら食べてあげるわよ」と、パチュリー。

最近、紅魔館の住人は甘い物にやたら弱いことに、卓郎は気づき始めていた。

「あらあら。卓郎さん、お嬢様たちだけにケーキを振る舞うつもりですか」

その時、後ろから美鈴の声が聞こえてきた。

振り向くと美鈴だけでなく、妖精メイドたちも揃って立っていた。

その中にいたハルが、自分の胸に手を当てた。

「リーダー。あたしたちだって、昨日は必死でリーダーのことを探したんだよ？ ナツやアキやユキだって雨の中をびしょ濡れになりながら、館の遠くまで探し回ったんだからね。だったら、あたしたちにだってケーキを作ってもらわないと納得できないねー」

妖精メイドたちは、期待を込めた眼差しで卓郎を見ている。

——こうなってしまうたら、彼女たちが満足するまでとことんやるしかない。

そう決意した卓郎は、苦笑しながらレミリアに顔を向けた。

「お嬢様。せつかくなので、今日はみんなの仕事を休みにしませんか」

「そうね。一日くらいなら構わないわ」

卓郎は主人にいったん礼を言ってから、全員に聞こえるように声を出した。

「じゃあ、今日はみんなのためにケーキを作ってやるから、今回はそれで許してくれ！ 仕事も今日だけは特別に休みにしてあげるから、みんなマジックケーキを食べよう！」

その瞬間、メイドたちから一斉に歓喜の声が湧いた。

こうして近年の館では珍しい、全員参加のお茶会の開催が始まった。

※

紅魔館――。

そこは吸血鬼を筆頭に、妖怪、魔法使い、妖精、人間と一緒に住んでいる紅い館。

種族の違いによって衝突が起こることもあるが、それぞれが種族としての自尊心を保ちながら生活をしている場所である。

卓郎は、完成したマジックケーキを五等分に切り分けていく。そして、レミリア、パチュリー、美鈴、ユキの順番で切り分けたケーキを置いていった。

他の妖精メイドたちにはこれから作るつもりではあるが、まずは五人で食べようとレミリアが提案してきたので、こうして卓郎も食べることになったのだ。

レミリアは、フォークで切り分けたケーキを見つめる。

「改めて見ると、本当に魔法みたいなケーキね。同じ材料で作られているはずなのに、ここまでではつきりと層が分かれるんだから」

「異なった層の食感を一緒に楽しめるからこそ、このケーキはおいしいんだろうね」

パチュリーはそうつぶやきながら、ケーキの先端をフォークで切る。

全員の準備が整ったところで、レミリアが言った。

「それじゃあ、みんな。いただきますしよう」

卓郎は小さく「いただきます」と言って、ケーキを一口食べる。

我ながら、今日もなかなか良い出来だと思った。

## 【15】間章

大きな疑問を抱くようになったのは、いつ頃からだっただろうか。具体的な時期は彼自身もよく覚えていない。もしかしたら、何年も彼女と接しているうちに、疑問を抱くための要素が少しずつ溜まっていったのかもしれない。

しかし、彼はその疑問を彼女にぶつけることはできなかった。

なぜなら、もし彼がその疑問をぶつけた瞬間、今の平穏な生活が崩れてしまうんじゃないかと危惧したからである。

彼女は館で最も地位の高い者である。彼女の手にかかれば、いとも簡単に彼の首は切られてしまうだろう。

そう思うと、彼はこの事実を認めざるを得ない。

自分はこの館にやってきて、本当に良かったと思っていることに――

彼がこの館で働き始めて、すでに七年が経過していた。

周りの妖精メイドや吸血鬼は、七年前から全くその姿を変えなかったが、人間である彼はすっかり立派な大人に成長していた。

とはいえ、彼がどんなに体を大きくさせても、館の仕事や生活に関しては七年前と大きな変化はなく、相変わらず仕事は忙しくて、妖精メイドたちはいろいろと問題を起こしていたが、毎日充実はしていた。

強いて変わったことを挙げるなら、妖精メイドの数が増えたことだった。

この七年で館で働きたいと希望する妖精は衰えることを知らず、ここ数年は常に館の最高記録を更新している状態が続いていた。

ただ、館の妖精をまとめる彼にとって、急激な数の増加は大きな問題だった。

毎日の仕事の振り分けをほぼ一人で行っている彼にとって、人数が多くなるということはその分、手間も増えるということである。

そこで彼が考えたのは、妖精たちを四つの班に分けることだった。

彼が信頼できる四人の妖精を各班のリーダーにさせて、ある程度の権限をリーダーに与えるという形式だった。

これが功を奏して、館の仕事はさらに効率的に行われるようになった。彼自身も仕事が早い段階で終わるようになり、ここで初めて仕事と勉強以外の時間が生まれた。いわゆる、余暇の時間ができたのである。

これによって新しい趣味も生まれ、彼の生活はさらに豊かになっていった。

だからこそ、なおさら主に対して何を言えなくなるのだ。

館にやってくる前、農業を行っていた時の生活は悲惨であった。

あの頃は大切な家族に囲まれていて、今とは違う種類の幸せを感じてはいたが、やはり過酷な生活をしていたと思う。朝から晩までくたくたになるまで働いても、家族三人が何とか食べていけるだけのお金しかもらえなかったのである。

あの頃は、とにかく生きていくことだけで頭が必死だったのだ。

それに比べると、今の生活はとても豊かであると感ずる。

種族こそ人間ではないが、彼の周りには信頼できる部下が多くいるし、食べ物に困ることはないし、気軽に紅茶やお菓子を嗜むことができる。時間が余れば、勉強や趣味に興じることだって可能だ。

もし、自分が館を出ていってしまったら、どうなるだろう？

たまに、そんな問いが頭をよぎることがある。

だが、自分が再び農民に戻った時の姿が、今の彼には全く想像できなかった。それくらい、彼は今の豊かな生活に体が慣れてしまっていたのだ。

だから、恐いのである。

主である彼女に、逆らうかのような疑問を投げけることに。もし、それが原因で館を出ていかなければならなくなったら、冗談ではなく自分は死んでしまうかもしれない。

もう、自分は農家時代の生活に戻りたくないのだ。

※

ある日の夜、いつも通り彼は門の前に佇んでいた。

今日は雲一つない天気で、空は数々の星と月が輝いていた。

空の景色を眺めながら待っていると、やがて空から何者かが彼の方に向かって降りてきた。一方は彼の部下である白い髪の妖精、もう一方は彼の主の吸血鬼である。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「ええ、ただいま……」

血まみれの服を着た彼女は、疲れたような声で返した。

また、彼女の吸血欲の犠牲になった人間が増えてしまったようだ。たまに彼の血を吸うことがあるが、彼一人だけでは彼女の欲を満たすことはできないようだ。

「あら。どうしたのかしら」突然、彼女が口を開く。

「えっ」

「一瞬、私を睨みつけたように見えたけど、気のせいかしら」

彼女の指摘に、彼は虚を突いたような目になる。

ほんの一瞬のことだとはいえ、思っていたことが顔に出てしまったようだ。

「申し訳ありません。少し血の匂いがきつかったので……」

「まあ、仕方ないわね」

あつさりと納得した様子で、彼女は館に向けて歩き始めた。

「とつとと服を洗うわよ。ついてらっしゃい」

彼は「はい」と頷き、部下の妖精と共に彼女の後ろをついていく。

歩いている途中、ふと彼は空を見上げる。

今日の月も綺麗である。一瞬、今日は満月かと思ったが、右端がやや欠けており、そういえば満月は昨日だったと、彼は皮肉げな笑みを浮かべた。

彼は今、彼女に対していつまでもこの疑問が言えないでいるのだ。

——お嬢様、あなたは どうしてここまで積極的に人間を襲えるんでしょうか？

## 【16】第四章

「少し、絵を見ていてもいいですか？」

その言葉でようやく客がいることに気付いた卓郎は、慌てて本から目を離す。その拍子にかぶっていた笠が落ちそうになったので、何とかそれを手で押さえる。

「どうぞどうぞ。見ていってください」

照れながら返す卓郎に、その女性は微笑みながら商品を見始めた。

卓郎の目の前には、何十枚もの絵が置かれている。

どれも自然と動物を題材にした、はがき程度の大きさの絵である。笠をちらりと上げて、卓郎は絵を眺めている女性を見る。

歳は自分とあまり変わらないだろう。肩まで伸びた黒髪が印象的で、どこか穏やかな雰囲気を感じさせるような女性だった。

彼女がここにやってくるのは、三週間ぶりのことだった。

たしか、前は小鳥の絵を買ってくれた。おそらく彼がこの場所でひっそりと露店を開いてから、最も絵を買ってくれている人だろう。いわゆる常連のお客さんだった。

彼女は草原を題材にした絵に興味を示した。緑に広がる草原の先に、濃い緑に覆われた山々が連なった絵である。つい先日、完成した彼の自信作だ。

「すごい……。なんだか、ものすごく引き込まれる絵ですね」

「ありがとうございます」

「でも、ごめんなさい。今日はあまりお金を持ってないので」

「いえいえ。別に無理して買うことはないですよ」

その言葉を受けて、彼女は「ふふっ」と微笑んだ。その笑みですら、どこか知性を感じさせるところがあり、思わず卓郎は可愛いなと思っってしまった。

しばらく絵を眺めた後、彼女は頭を下げて店を出てしまった。

彼女が視界から消えてから、卓郎は再び持ってきた本を読み始める。

呼びかけや宣伝は一切やらない方針である。彼が露店を構えてある通りは、そこまで多くの人を通らないので、あまり売る気がないのは卓郎自身もよく分かっていた。どちらかというところ、ゆったりと時間を過ごしたいからだだった。

割と早く本が読み終わったので、今日は早めに切り上げることにした。常連の彼女がやってくる前にすでに一枚売っていたので、成果としては申し分ない。

そもそも、最初から損得のことはあまり考えていなかった。

以前から趣味でやっていたことの延長として売り始めたので、値段はかなり抑えめにしてある。それに卓郎自身、まだまだ自分の絵はうまい領域に入っていないと自覚していた。

人里の専門店に売られている絵や、パチユリーの図書館の本に収録されている絵に比べたら、自分はまだまだ素人に毛が生えた程度の出来である。

とはいえ、最近はいじわじわと絵が売れてきているなという実感はある。

先ほどの彼女ののように常連客も出来ているし、材料費を差し引いても多少の儲けが出るようになってきた。これは卓郎も純粋に嬉しいことだった。

せつかくだからお茶でも飲もうと思いついて、卓郎は人里の食事処に寄った。

隅の席に座り、笠を脱いでからお茶と大福を頼んだ。

給料がもらえないので、これまでは人里でお茶の一杯すら頼めなかったが、今はこうして稼いだ金でお菓子くらいは嗜むことができる。

ひっそりと大福を食べながら、卓郎はこれまでの八年間を思い返した。

彼が休日に人里で絵を売り始めるようになったのは、一年半前のことである。

きっかけは単純なことだった。メイドたちに自分の絵を見せたところ、予想以上に好評だったので、それならばと思いついて、こうして

人里に売り始めたのである。

そもそも卓郎が絵を描くようになったのも、単純な理由だった。

紅魔館で働き始めて一年が経過した頃、ふと卓郎は妖精メイドたちのために何かできることはないかと考え始めた。週に一度のお茶会以外に、何かメイドたちを楽しませるような催しごとを開いていきたくない――。

卓郎はこの提案をユキたちにも言ってみた。

すると、ユキたちもこれには大きく賛成してくれた。

それ以降、妖精たちの意見も取り入れながら、様々な催しごとが開催されていった。

その中でもハルが考案した『弾飛ばし大会』は、メイドの中でも特に好評であり、現在でも一ヶ月に一回の間隔で開催されている人気の催しごととなっている。

だが、中には、大失敗に終わってしまった催しごともいくつかあった。

その代表格が、卓郎が行った紙芝居だった。

ちょうどその頃、卓郎は小説という娯楽に夢中になっていた。最初は言語の勉強も兼ねて小説を読み始めたのだが、いつしかその魅力に完全に引き憑かれてしまったのである。

やがて、卓郎もそういった物語を書いてみたいという欲求が出てきた。

ただ、それをハルとアキに打ち明けてしまったのが大きな間違いだった。

瞬く間に卓郎が物語を書くという噂がメイドたちの間で広まり、なぜか途中で紙芝居を書くという噂に変換されてしまい、最終的には噂を聞いたレミリアにいきなり「紙芝居を書きなさい」と命令されてしまったのだ。

当たり前だが、それまで卓郎は小説はおろか絵すら書いたことがなかった。とはいえ、主人の命令には逆らえない。

こうして十七歳のある晩に、卓郎は自作の紙芝居を皆の前で発表した。



自分なりに時間をかけて準備をして発表したのだが、結果としては大失敗に終わった。

メイドたちからは大不評で、あのユキからも「あまり面白くなかったです」と苦笑いされた時は、思わず涙がこぼれそうになった。

でも、今なら言えるが、あれは大失敗となって当然である。

なぜなら、あまりに内容も絵もお粗末すぎたのだ。

具体的には人間の血を吸う三匹の蚊を主人公にした物語だったのだが、なぜあんな物語を書こうと思ったのか、自分でも未だによく分からないでいる。初めて書いたんだから仕方ないと言われればそれまでだが、やはり酷評はそれなりに心が痛む。

こうして、紙芝居は卓郎の人生の中で最大の黒歴史となった。

だが、物語は書かなくなっても、絵を書くことだけは続けた。

十五歳の時、美鈴に背負られながら空からの景色を見て以来、すっかり彼は自然の景色が好きになっていた。あの紙芝居の催しごとがあつて以来、卓郎は休日になると、館の近くをぶらぶらと歩いて景色を描くようになっていた。

それから時間が経ち――。

二十二歳になった卓郎はこうして、自作の絵を人里で売るようになったのだ。

大福を食べ終わった卓郎は、再び笠をかぶって外に出る。

笠をかぶるのは、極力人目を避けるためである。すでに八年も前とはいえ、例の事件で行方不明の扱いを受けているので、こうして目立たないようにしているのだ。

今日は大福も食べて、お腹もちょうどいい具合に満たされている。

このまま、のんびりと館に戻ろうとした矢先だった。

卓郎の視線の先で、妙な人だかりができているのを発見した。

何気なくその中を覗いてみると、思わず飛び上がりそうになった。人だかりの先には、ユキと人間の男性が何やら言い合いをしていたのだ。買い物かごを持ったユキが困った顔になりながら、男性に何かを言っている。

「でも、本当に値段が合わないんです。何度も計算したんです」

「そう言われても困るんだよ、妖精のお嬢ちゃん。値札を見たら分かるけど、この値札から計算すると確かにこの値段になるんだよ」

場所が店の前なので、おそらく相手は店の者だろう。男性の後ろにはもう一人、別の男性がおり、彼は店の中で二人の様子をうかがっているようだった。

会話から察するに、値段に関して両者の間で食い違いが生じたのだろう。

そして店の看板を見て、卓郎は眉をひそめた。

ユキがいる店は、彼の手帳において要注意店舗とされていたからである。

この八年で卓郎は人里にある店の情報を、全で一冊の手帳にまとめていた。

具体的には、この商品はこの店の方が安いといったことや、この店の方が品質が良いといった情報を細かく記しているのだ。ほとんどはメイドたちの口から集めた情報だが、買い出しの時などにおいては非常に重宝されている代物である。

その卓郎の手帳の中で、目の前にある店は最低の評価を下していた。

以前、別の妖精メイドがこの店で買い物をして、通常より高い値段で品物を買わされたからである。そのメイドは計算を苦手としており、店の人が提示した金額をそのまま信じてしまったのである。

だが、どうしてユキはそんな店で買い物をしたのか。

ついでにその疑問も解消させようと思い、卓郎は二人の前まで歩いていった。大切な部下の危機である。いくら目立ちたくないとはいえ、助けられないわけにはいかない。

「ちよつといいかな」

言い合う二人が一斉に彼を見る。

ユキは驚いたように目を見張るが、卓郎の名前は言わない。人里の中においては、絶対に卓郎の名は出さないとメイドたちと約束していたからである。

店の男は訝しげな顔になる。

「あん？　今、取り込み中なんだ、買い物は後にしてくれないか」

「そういうわけじゃない。さつきまで二人の会話を聞いていたのだが、どうやら値段の食い違いが生じているように見えたので、こうしてやってきたんだ」

「ほう。それで何が言いたいんだ？」

「もし、良かったら、僕が彼女が買った品物の計算しようと思ったんだ。二人で言い争っているよりかは、第三者で甲乙つけたほうが話も早いだろう」

「つまり、お前さんは計算が得意なのか？」

「自慢ではないが、五桁までの暗算くらいならお手のものだ」

「へえ。じゃあ、ちようどいいや。計算が得意なお前さんに、この愚かな妖精が俺を騙そうとしているのを証明させようじゃねえか」

自信のこもった男の言葉に、卓郎は疑問を抱いた。

ユキの性格からして、騙すことは絶対にあり得ない。騙しているのは明らかに店の男たちだろう。でも、どうしてあんなに自信のこもった口調で言えるのか。

ユキの買い物かごの中身を見た後、卓郎は次に店の値札に目を移した。

値札はどれも薄い木の板で出来ており、棚の取っ手に紐でぶら下げている形をしていた。値段はどれも相場より二割ほど高い。

卓郎が暗算している間に、隣でユキが小声で「いつものお店が今日が休みでした」と言ってきた。どうやら材料が足りずに、仕方なくこの店に来たのだろう。

暗算の結果、店の人が主張している値段となった。

この結果にユキが焦ったような声でつぶやく。

「そんな……。絶対におかしいですよ。私が最初にやってきた時は、こんなに値段が高くなかったはずですよ。計算は私だってできますし」  
「おかしいのは値段じゃねえよ。どうやら、お前さんのここの方だったようだな」

自分の頭に人差し指を当てて、男は笑った。

「これだから妖精は困るんだよな。頭が悪いくせに、ちよくちよく人

間様にいたずらを仕掛けてきやがる」

ここで男は首を振った。

「いや、今回はいたずらの範囲じゃ済まねえな。れっきとした犯罪だ。犯罪だぜ、このやろう」

取り巻く人間も、ユキに対して厳しい視線を向けてくる。

男はユキに肩に乱暴に手を置いた。

「さあて、俺たちを騙そうとした罰をお嬢ちゃんに与えてやらなくっちゃな」

体を震わせながらうつむくユキに、卓郎はいよいよ焦りを抱き始めた。

念には念を入れて、暗算は二回行った。だが、結果はどちらも店の人が主張している値段になってしまった。どうして、ユキは間違えてしまったのか。

最悪、飛んで逃げろとでも命令するべきか、と思った直後だった。

卓郎の視線が、店の奥にいるもう一人の男に向かった。

その男は不敵な笑みを浮かべながら、外の光景をうかがっていた。右手は柵にぶら下がっている値札を押さえており、その格好が何となく目についたのである。

値札を押さえる？

この直後、卓郎は店中の値札を見回した。

そして半分ほどの値札に、ある奇妙な共通点が見つかったのだ。

卓郎が行動に移し始めたのは、それからすぐだった。

「失礼」

男たちが止める暇もなく、卓郎はユキたちの横を通り抜けて店に入る。

そして、おもむろに近くにぶら下がっている値札を掴む。

店の人が止める間もなく、卓郎はその値札をひっくり返した。

値札の裏面には、表面と同じように値段が書かれてあった。しかも、裏面の方が表面より安い値段である。卓郎の手帳では、相場以下の値段だった。

「てめえ！ なにしやがる！」男が卓郎の体を押さえつけてくる。

その拍子に笠が落ちてしまったが、構わずに卓郎は叫んだ。

「これだ！　これがイカサマの正体だ！　この店の男たちは妖精の隙を突いて、値札の面をひっくり返したんだ。あらかじめ安い値段の面を表に出しておいて、隙を突いて値段の高い面にひっくり返したんだ！」

この言葉に、ユキだけでなく周囲の人間も哑然とした。

卓郎が違和感を抱いたのは、値札を吊るしてある紐がほとんど交差しているからだ。一つ、二つくらいだったらまだしも、半分以上の値札の紐が交差していると、さすがに不審を抱かずにいられない。

ご丁寧なことに、棚には軽い接着剤みたいなものが貼り付けられてあり、その部分に値札を付けることで、値札が自然に裏返らないような細工も施してあった。

計算が苦手な妖精の特性を突いた、狡い小細工であった。ただ、今日は計算が得意なユキが店にやってきたので、完全にうまくはいなかったのだろう。

「このやろうー！」

店の中にいた男が飛び出していく、卓郎の腹を思い切り殴った。体を押さえつけられていた卓郎は為す術なく、その顔を歪ませた。

「適当なこと言ってるんじゃねえ！　証拠はあるのか、証拠は！　それがなかったら、てめえの言ってることは全て嘘になるんだよ！」

男の言葉を受けて、卓郎は額に汗をにじませながら微笑んだ。

「全ての値札を安い方に戻して、また再計算するんだよ。それでさっきの妖精が言った値段と一致すれば、もう言い訳はできないよ」

「てめえ……」

「どうした？　さっきまでの自信あり気な顔はどこにいったんだ？」

「ち、ちきしょうー！」

追い詰められた男は、さらに殴りかかろうとする。

さすがに暴力には対抗できず、思わず卓郎は目を瞑る。

——その時だった。

「そこまでだー！」

この場の空気を一瞬にして停止させてしまうような、鋭い声が聞こ

えてきた。

殴ろうとした男は拳を握りしめたまま体を停止させて、卓郎の背後に視線を向ける。その表情は、恐ろしいものに出会ってしまったかのように唾然としていた。

背後から、何者かが近付いてくる音が聞こえる。

「せ、先生。どうしてこちらに」殴ろうとした男が呟く。

「たまたま近くを通りかかったら、人だかりができていたんでな。どうしたものかと思ったら、ちょうどイカサマという言葉が私の耳に入ってきたんだ」

ここで体を押さえつけていた男の力が緩み、卓郎は解放される。

そして後ろを振り向いた瞬間、懐かしい感覚が一気に蘇ってきた。

「慧音先生……」

殴られた腹を押さええながら、卓郎は呟く。

腰まで伸びた白い髪。その上には、赤い織物が巻かれた青い帽子を被っている。凜々しさと知的さを兼ね備えた彼女な顔は、十年前から全く変わっていないかった。

「イカサマとはどういうことか、私に説明してくれないか」

卓郎の寺子屋時代の恩師、上白沢慧音は鋭い視線で男たちを睨みつけた。

※

「この愚か者が！」

慧音の勢いある頭突きが、店の男に炸裂した。

「ぐおおおっ！」

頭を押さええながら地面で悶える男を見下ろしながら、慧音は叫んだ。

「罪もない者を騙すとは、人間として情けないと思わないのか！ たとえ相手が妖精だろうと妖怪だろうと、罪を犯すことに変わりはない！」

そして慧音はもう一人の男にも近づき、同様に強烈な頭突きをかました。

唸るような叫び声をあげながら、その男も地に伏した。

「恥を知れ！」

その光景を見ながら、卓郎はぶるつと体を震わせてしまう。

彼も寺子屋時代に授業で居眠りをしてしまった罰で、一度だけ頭突きを喰らったことがある。頭突きは慧音の得意技だ。その威力は絶大で、しばらく衝撃で目の前がぼやけて見えなくなってしまうほどである。それ以来、彼女の前では絶対に眠らないと誓った。

慧音がこの場にやってきた後、ユキがこれまでの事情を説明した。そして値札を元に戻して、再計算を行ってみると、卓郎が推理した通りにユキが最初に言っていた値段と一致したのである。

後が無くなった店の男たちは、土下座までして慧音に許しを請おうとした。だが、彼女がそう簡単に許してもらえるはずもなく、こうして頭突きの罰が下されたのである。

もちろん、お金はユキが主張した値段で払った。

事件も一件落着となり、ユキは慧音に向けて頭を下げた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「構わないさ。とりあえず、大きな怪我がなくて良かった」

ここで慧音は感心するように続けた。

「それにしても、お前のような頭の良い妖精がこの世界に存在していたとはな。妖精を馬鹿にしているわけではないが、驚きだな」

「いえいえ。そこまで褒められるほどではありません」

「ははは。妖精の遠慮の言葉なんて、初めて聞いたかもな」

そう呟きながら、慧音は次に卓郎の方に近づいてくる。

「お前さんも大丈夫か？ たしか腹を殴られたらしいが——」

この瞬間、初めて慧音と卓郎は目を合わせた。

慧音の体が氷のように固まる。

「お久しぶりです。先生」

腹を押さえながら、卓郎はふらふらと立ち上がる。

だが、それでも慧音は何も反応しなかった。

卓郎が首を傾げると、ようやく慧音は我に返ったように体をびくんと動かしした。

「お、お前……まさか、あの卓郎か？」

「はい」

「本当に、あの卓郎なのか？」

「はい。卓郎です」

すると、慧音は頭をかくんと落とし、額を手で押さえた。

よつぽど彼の出現が衝撃的だったのか、しばらくそのままの状態で作んでいた。

「そうか。生きていたのか……」

手を放して、慧音は改めて卓郎と目を合わせる。

「寺子屋を辞めて以来だから、十年ぶりだな。てつきり、八年前の事件で死んだと思っていたぞ」

「すみません。なかなか人里に来れる機会がなかったのです」

「まあ、いい。積もる話は後にして、今はとりあえず落ち着ける場所に移動しよう」

「はい」と、卓郎は頷きながら、横目でユキを見る。

ユキはこくりと小さく頷いて、かごを持ったまま空へ飛んで行った。

とりあえず、ユキと卓郎の関係は誰にも判明されなかったようだ。

卓郎は空を見上げて、太陽の高さを確認する。まだ、日が傾くまで時間がありそうだ。これなら慧音と話し込んでも日没までには館に戻れるだろう、と察した。

「久しぶりの再会だ。私の家へ行こう」

こうして、卓郎は彼女の後ろを歩き始めた。

※

慧音の家は寺子屋の近くにある一軒家だった。

彼女の家に入るのには、これが初めてである。長屋の多い人里では珍しい、独立した住宅のようだった。扉を開けて中に入ると、良い紙の匂いがした。

「少し雑然としてて悪いが、適当に座っててくれ」

そう言って、慧音は部屋の奥へと向かっていった。

卓郎はちゃぶ台の前に腰掛けて、近くにあった本を適当に取ってみる。



部屋の至るところには本が積まれており、さながら小さな図書館のようだった。ただ、パチユリーの図書館にあるような、意味不明な文字の本は置かれていない。どれも、今の卓郎でも十分に理解できる内容の本だった。

それに目を通していているうちに、慧音が二つの茶碗を持ってきてくれた。

「その本はけっこう難しいんだが、読めるのか？」

茶碗を差し出しながら、慧音が尋ねる。

「そうですね。これくらいなら十分に読めます」

「どうやら、成長したのは体の方だけじゃなかったようだな」

慧音も卓郎と向かい合うようにして、ちゃぶ台の前に座る。

数秒ほど無言の時間が続いた後、慧音が先に切りだした。

「久しぶりだな、卓郎。お前が寺子屋を辞めてからだいぶ時間も経つが、元気そうにしているようだな」

「はい。この十年いろいろとありましたが、元気にしています」

ここで慧音はうつむき加減で言った。

「いろいろか……。お前の母親と兄が殺されてから八年が経つが、それまで一体どこで何をしていたのだ？ てっきり、私はもうこの世にはいないと思っていたんだぞ」

やはり、慧音も八年前の事件はよく知っているようだ。

「少し話は長くなりますが……」

さすがに、吸血鬼の館で働いていますとは言えない。

故郷の村の「ばあちゃん」みたいに、曖昧な言葉では絶対に通用しない相手である。あらかじめ練っていた物語を使って、卓郎は答えることにした。

「実はあの事件の後、運良く通りすがりの農民に助けられたんです。あの時、例の妖怪から何とか逃げ切れたんですが、その後、近くの湖の前で力尽きてしまったんです。今、振り返りますと、その人が助けてくれなかったら、僕は間違いなく死んでいたと思います。事情を話したら、嬉しいことにしばらくここにいてもいいと言ってくれたんです」

「通りすがりの農民だと？ それは人里の農民なのか？」

「いえ、人里から離れた場所にある村の住人です」

「その助けてくれた農民とやらは、どんな人なんだ？」

「普段は厳しいですけど、たまに優しい所を見せてくれる人でした。僕が十七歳の時に、その人は病気で亡くなってしまいました」

「病気だと？」

「はい。流行の病にかかってしまい、そのまますぐに亡くなってしまいました」

「そうか。お前にとつて、まさに命の恩人だったんだな」

亡くなるという言葉が出てきてか、慧音はこれ以上、追究してはこなかった。やや強引ではあったが、うまくはぐらかすことができたようだ。

その後、卓郎と慧音はお茶を飲みながら、互いの現状を報告し合った。

慧音は現在も寺子屋で教師を続けているらしく、相変わらず子供たちに理解しやすい授業が実現できなくて困っている、と苦笑いをしながら話してくれた。

卓郎は現在もその村に住み続けており、細々と農業をやっていると話した。

細かく突っ込まれても対応できるように、故郷の家でやっていた農業をそのまま続けているということにしておいた。

「じゃあ、今日はどうしてわざわざ里にやって来たんだ」慧音が問う。

「これ売るためです」

卓郎は風呂敷をほどき、何枚かの絵を渡す。

それを見ながら、慧音は「ほう」とつぶやいた。

「なかなかうまいじゃないか」

「仕事の合間にちよくちよく書いてまして、たまに里に行つて売つてるんです」

「つまり、趣味の一環というわけか」

「そういうことになりますね」

すると、慧音は一枚の絵を手で掴み、間近でじつと鑑賞する。

「いや、これは明らかに趣味の領域ではないだろ。私はそこまで絵に詳しいわけではないが、明らかに素人の絵ではないぞ。いつ頃から描き始めたんだ」

「十七の頃から描き始めました」

「ほう。六、七年でここまでか……」 慧音はあごを撫でる。

「卓郎、もしかしてお前、芸術的な才能があるんじゃないのか。我流でここまでの領域に到達するのは、純粋にすごいことだと思うぞ」

「そんな大げさな」

苦笑いをしながら、卓郎は右手を横に振る。

「ありがとうございます。ただ、絵に関しましては、これからも趣味のつもりで描いていくつもりです。もちろん、もっとうまくなりたいとは思っています」

「そうか。お前がそう決めたのなら、それでいいだろう」

「これからも、里にはちよくちよく絵を売りに来ようと思っています。最近はずしずつですけど絵も売れるようになってきましたので、いい小遣い稼ぎになってきました」

「なんだ。それなりに評価されているじゃないか。それだったら、もう少し絵の方面にも本気を出してもいいんじゃないのか。もったいない」

苦笑いをしながら、卓郎は絵を風呂敷に戻す。もし、本当にただの農民だったら一念発起する可能性はあったかもしれないが、今の境遇ではまず不可能だろう。

ふと、窓から外の様子を確認してみると、陽もだいぶ傾いているようだった。歩いて館に戻るまでの時間を考慮すると、そろそろ出たほうが良いだろう。

これでお開きかな、と思った直後だった。

「ところで、少し尋ねたいことがあるのだが……」

慧音はやや顔を落としてから言った。

「八年前の事件について、お前はどの範囲まで知っているんだ？」

卓郎は強く口を結んで、慧音を凝視した。

「辛い記憶を掘り返すことだから、もし嫌だったら答えなくても構わ

ない。でも、もし私だけしか知らない情報があったら、それをお前に教えようかと思っっている」

「先生にしか、知らない情報ですか？」

「ああ。そして身内のお前より、私の方が事件の詳細を知っている自信がある」

卓郎の表情が強張る。どうしてそんなことが断言できるのだ。

その時、彼の中である推測が生まれた。

「もしかして、先生が妖怪退治の人だったんですか？」

慧音がぴくんと反応する。

「なんだ。知っていたのか」

「いえ。単なる予測です。妖怪退治を行う人がいるとは聞いてましたが、具体的に誰がやったのかまでは僕も分かりませんでした」

八年前、まだ彼が紅魔館に来たばかりの頃を思い出す。

その時、レミリアとユキが妖怪退治をする者に関する話をしていたので。

慧音は腕を組んで、真つすぐに彼を見た。

「お前の予想通りだ。私が八年前、お前の母と兄が殺された事件の調査を行ったんだ。里の長からの命令でな。調査の当初はなかなか事件の目撃者がおらずに苦労したが、最終的には犯人も見つかって事件は解決した。そして犯人に対して私が制裁を行った」

「慧音先生が行ったんですか！」卓郎は声を張り上げる。

「当たり前だろ。制裁しなかったら、何のための妖怪退治になる」

「そうですか……」

目の前にいる先生が、自分の人生を狂わせた犯人を裁いた。

そうになると、卓郎はこの質問をせざるを得なくなる。

「どんな制裁を行ったんですか？」

この問いに、慧音は考え込むように目を閉じた。

「その質問に関しては具体的に答えられない。ただ、その妖怪が今後、人間を襲うようなことは絶対にないと断言しておこう。私から情報を教えると言ったくせに、こんな解答になってすまないな。許してくれ」

「いえ、もうだいたい昔のことですし、別に構いませんよ」

慌てて手を振りながら、卓郎は窓の外を確認する。

時間的にそろそろ厳しかったので、風呂敷を持って立ち上がった。

「帰るのか？」

「すみません。話の途中ですが、そろそろ戻らないと」

「分かった。話はまた次の機会にしよう」

玄関の扉を開けて、改めて卓郎は慧音と向かい合う。

すると、慧音は彼の肩にそつと手を置く。

たったそれだけのことなのに、卓郎は妙な安心感を抱いてしまった。

「何はともあれ、お前が生きていて本当に良かった。また時間があつたら、ぜひ私の家に遊びに来てくれ。勉強のことでも悩み相談でも、何でも引き受けるぞ」

「ありがとうございます」

すると、慧音はここで口元を吊り上げた。

「実を言うとな、私は寺子屋時代からお前のことが気に入ってたんだ」  
えっ、と卓郎は声をあげる。

「もちろん優秀な生徒だから、という意味でだ。周りの生徒が何年もかけて習得する知識を、お前はたったの一年で全て理解し終えた。入ってきたばかりの頃は簡単な計算も分からずに戸惑っていたお前が、恐ろしい速度で知識を習得していく様子は、教える側の私も見ていて気持ち良かったよ」

「そんなことありません。結局、歴史は最後まで苦手なままでしたし」  
「苦手な教科があつたとはいえ、お前が優秀だったという事実が変わりはない。お前が家の事情で寺子屋を辞めると言った時は正直、かなり心が痛んだ。もし、あのままお前が学問を続けていたら、きっと優秀な学者になっていただろうな」

「またまた大げさなことを」

「私が簡単に人を褒める奴ではないことは、よく分かっているだろ。もし、お前が構わないのなら、今すぐ私の弟子としてここに住んでもいいのだぞ」

「あはは……。そこまで褒められるとは恐縮です」

「それで、次はいつ里に来るのだ？」

「まだ新しい絵ができたら来ます」

「そうか。待っているぞ」

別れの挨拶を済ませて、卓郎は慧音の家を出た。

まだまだ人通りの多い人里の道を歩きながら、彼は小さく息を吐く。

紅魔館に来てから、ここまで人里で会話をしたのは初めてのことだ。

この八年間、外ではあまり目立たないように行動してきたが、つい自分の顔を知る者と出会ってしまった。しかも、相手は八年前の事件と深く関わった恩師である。

また、次の機会があるようだったら、もう少し事件に関する詳細を聞きたい。

——その時、小さな胸騒ぎを感じた。

卓郎は「んっ？」と目を瞬かせて、自分の胸に触れる。

一瞬、体の奥底から奇妙な感覚が襲ってきたのである。見えない手がそつと心臓に触れてきたような、何とも漫然とした気持ち悪い感触である。

だが、それは一瞬のことだったので、特に気にすることなく歩き続けた。

今回の決勝戦も、予想通りの組み合わせとなった。

巨大な四角形に描かれた線の中で、ハルとナツは向かい合っていた。特にナツは矯正器を外しての参戦だったので、その気合いの入れ様は半端ではなかった。

四角形の線の外では、多くの妖精メイドたちがこれからの戦いを見守ろうとしている。小悪魔の合図で戦いが始まるが、すでに場の緊張はかなり高まっていた。

「いいわね、あの緊張感。たまらないわ」

卓郎の横で、カップを持ちながらレミリアがつぶやく。

レミリアと卓郎は、時計台から庭の状況を見下ろしていた。

紅魔館は二階建ての建物だが、中央には三階の高さに相当する時計台が建てられており、そこから庭全体を見渡しているのだ。レミリアの横にはパチュリーもおり、彼女にしては珍しく本を持たずに庭に視線を落としていた。

現在、紅魔館では一ヶ月に一度開かれる、『弾飛ばし大会』の真っ最中だった。

ハルが最初に考案したこの催しごとは、今や刺激的なことを好む輩が多いこの館の中では、もはや欠かせない催しごとなっていた。

小悪魔が腕を振り上げて、ついに決勝戦が始まった。

「いくわよ、ナツ！」

先に仕掛けたのはハルだった。

両腕を真つすぐに伸ばした直後、彼女の周囲に桃色の弾が一気に発生した。

一瞬で弾を作り上げる速さと、その量は妖精メイドの中では他を圧倒している。

ハルが声を張り上げたと同時に、その弾が一斉にナツに襲いかかってきた。ナツは多少の反撃をしながらも、桃色の弾を避けていく。

ほとんどの弾はうまく避けられたが、いくつかの弾が命中してしま

い、彼女の体は何度か後ろに吹き飛ばされてしまいが、枠の外側には出ていないので勝負は続く。

人間の卓郎にとつて、あの弾は一つの不思議な現象である。

原理は分からないが、妖精という種族は何の道具もなしに『弾』を作ることができるらしい。例外はなく、能力を持っていないユキでさえ弾を作ることはできる。

弾の原料は固体ではないせいか、当たっても痛くはない。以前、余興で卓郎はユキの作った弾に当たってみたが、本当に痛みは感じなかった。

ただ、妖精の弾に当たると何故か後ろに吹き飛ばされるという奇妙な特徴を持っており、吹き飛ばされた卓郎は、そのまま後ろの壁に激突して、違った意味で痛い思いをってしまった。

『弾飛ばし大会』も、この吹き飛ばされる原理を利用した戦いを行っている。

内容は至極単純で、とにかく相手を枠の外に飛ばすのである。

弾を使つて、相手を先に外に吹き飛ばした方の勝ち。枠の中でなら何をしてても自由であり、メイドたちはそれぞれの個性を出しながら戦っているのだ。

ハルの場合は持ち前の力を使つて、とにかく数で押しまくる戦術をしている。

対するナツは不意打ちなどを駆使して、相手の裏をかく戦術を得意としている。

序盤は、ハルが圧倒的物量でナツを押ししているようだった。

「ほらほら、どうしたのナツ！ 攻撃してきなさいよ」  
生き生きとした表情で、ハルは引つ切りなしに弾を繰り出してくる。

だが、いくら体力に自信のあるハルとはいえ、常に大量の弾を出せるはずもなく、次第にその数を減らしていった。  
数分後、ついにハルは弾を出すことを止めた。

その様子を見て、ナツが微笑む。

「あら。さっきまでの威勢の良さはどうしたのかしら」



「う、うるさいわね！」疲れたような声でハルは返す。

「それじゃあ、私もそろそろ反撃を始めましょうか」

どうやら、ナツは先にハルの体力を削りにかかったようだ。そして狙い通り、ハルは序盤の攻勢でかなり体力を消耗してしまったようだ。

今まで弾を避けることに重点を置いていたナツが、ついに反撃を開始した。

先ほどよりも遥かに多い量の弾を、一気にハルに向けて発射していく。

一転して、戦いの主導権がナツに変わった。ナツが繰り出す弾を、今度はハルがひたすら避けていく。時折、弾を受けて吹き飛ばされることがあったが、羽根を上手に使って勢いを殺し、枠から体が出ないように調節していた。

ナツは大きく息を吐いた。

「意外としぶといわね……。避けるのうまくなったじゃない」

「ふん。あたしだって、いつも闇雲に戦ってるわけじゃないんだからね」

両者、だいぶ体力も少なくなってきたようだ。いよいよ戦いも終盤である。

ここでナツが腕を前に突き出した。

「これで決めるわー！」

すると、ナツは周囲に一気に青い弾を発生させる。

その量は、周囲の景色が見えなくなるほどの圧倒的なものだった。まさに『弾幕』と呼べる光景であり、ナツはこれで勝負を決めるつもりようだ。

ハルはわずかに顔をひきつらせながら、後方に弾を発射する。

「何をしても無駄よー！」

彼女の声と共に、弾幕がハルに向けて一斉に移動する。

まるで、大きな壁がハルに迫っているようだった。

ハルは諦めたように空中で体を止めたまま、ナツの弾幕攻撃を受けた。ハルは桃色の髪を大きく揺らしながら、勢いよく後ろに吹き飛ば

される。

勝負ありかな、と思つた直後だった。

ちようど梓の手前で発生している、桃色の弾に卓郎の目が留まつた。

ナツが攻撃をする直前に、ハルが発生させた弾である。そして吹き飛ばされたハルの体が、ちようどその弾の方に向かつていく。

——卓郎がその意図を理解した瞬間、ハルの体が桃色の弾に激突した。

妖精が発生させる弾は例外なく、当たつた者を吹き飛ばす特性を持つている。

ハルの体は一気に前方に方向転換して、梓の中心へと吹き飛ばされていった。ただ、空中で勢いを止めることはできなかつたようで、そのまま体から地面に激突してしまつた。

この光景には、卓郎だけでなく横のレミアも目を見開いた。ハルは自分の作つた弾にわざと当たること、ナツの攻撃を乗り越えることに成功したのだ。

渾身の弾幕攻撃を防がれ、さすがのナツも呆然とした様子で地面に着地した。

「む、無茶すぎるわ……。自分の作つた弾に当たりにいくなんて」「これしか防ぐ手段がなかつたのよ。どうやら、うまくいったみたいね」

ハルはメイド服に付いた土を払いながら、立ち上がる。

満身創痍の体ではあるが、まだ戦う気力は残っているようだ。

対するナツは先ほどの攻撃で、すっかり体力を使い果たしてしまつたようで、そのまま観念するように地面に膝を折つた。

「もう、弾を出せる気力もないわ……。梓からはまだ出てないけど、私の負けよ」

周囲の妖精メイドから、大きな歓声があがつた。

※

今回の『弾飛ばし大会』は、ハルの優勝で幕が閉じた。

前々回はハル、前回はナツの優勝だったので、今回は見事に返り咲

いたことになる。

「ねえ、ねえ、あたしの活躍ちゃんを見てた？」

卓郎が庭のところまでやってくると、早速ハルが駆けつけてきた。すでにほとんどのメイドは館に戻っており、庭には十人ほどのメイドがいるだけだった。

「ああ、見てたよ。おめでどう」

「へへん。前回、ナツに負けちゃった時はどうしようか思ったけど、これでまたあたしの強さが他のメイドたちにも伝わったみたいね」

「うん。ごり押しでやっていた頃のお前とは全然違ったと思うよ」

「これで改めて、あたしが紅魔館一の最強メイドになったというわけね！」

ハルは機嫌が良さそうに、大きく口を開けて笑う。

『弾飛ばし大会』に優勝した場合、賞品として人里で売られている高級菓子が渡される。

嬉しいことに費用は全てレミリアが負担してくれる。

大会ができた当初は、ユキの手作りお菓子が賞品として渡されていたが、大会が盛り上がっていくにつれ、ついにレミリアが賞品の費用を出してくれるようになったのだ。

また、この大会の良いところは、単にメイドたちを楽しませるだけでなく、メイドたち全体の戦闘力向上に繋がるという利点もあった。

そもそも、紅魔館には吸血鬼のレミリアやフランに加えて、美鈴やパチュリーといった確かな実力を備えた者もいる。たいがい敵は、彼女たちだけでも十分に対処できるが、いつまでも彼女たちに頼るわけにはいかない。

万が一、館に不届き者がやってこようと、レミリアたちの手を煩わせることなく、メイドたちで対処できるほどの戦闘力が欲しかったのだ。卓郎自身は全く戦闘力を持っていないので論外だが、メイドたちを強くさせることなら可能である。

実際、『弾飛ばし大会』が始まった直後から、メイドたちは暇な時間ができると積極的に庭に出て、戦いの練習をするようになった。特にハルとナツの成長ぶりは目覚ましく、気付いたら妖精メイドの中でも

飛び抜けた戦闘力を持つようになっていた。

下手したら、湖のチルノとも対等に渡り合える強さを持っているかもしれない。

ハルと話しているうちに、周囲のメイドが二人のもとに集まってきた。

「ハルちゃん、決勝見たよー。すごかったわねー」と、アキ。

「まっ、あたしの実力にかかれば当然ね」

「その割には、だいぶ苦戦しているようだったけどねー」と、別の妖精メイド。

「そ、そうかもしれないけど、勝ったんだから別にいいじゃない！ 今回は大接戦になったけど、次の大会は必ずあたしが圧勝してみせるわよ！」

「おい、みんな。聞いたか。ハルは次の大会、余裕で優勝するつもりらしいぞ。こう言われちゃ、お前たちも負けてられないな」

「ちよつと、余裕で優勝なんて一言も言っていないわよー」

ハルの突っ込みに、卓郎と妖精メイドたちは一緒に笑い合う。

すっかり大人になってしまったが、メイドたちの卓郎に対する態度は八年前から全く変わっていないかった。八年も経つと何かしらの変化があるものだが、メイドたちは全くそれに当てはまらなかった。信頼されている証拠だと、彼の中では捉えている。

しばらく、メイドたちと駄弁っていた矢先だった。

「楽しんでる途中で悪いわね」

突然、後ろから発せられた声に、メイドたちの表情が一斉に固まる。

日傘をさしたレミリアが、卓郎たちのもとにやってきたのだ。

「お嬢様？ どうかしましたか」卓郎が問う。

「卓郎。今日の夜、ちよつと出かけるわよ」

思わず卓郎の顔に緊張が走る。夜にレミリアが出かける場合といったら、たいてい血生臭いことが発生するからだ。

だが、その思考を見抜いたかのように、レミリアは首を横に振った。「安心しなさい。別に血を吸いに行くわけじゃないわ」

そして、日傘を持ち直してから続けた。

「今日の夜、あなたを『ある場所』に連れて行きたいのよ。夜の七時、門の前で待っていていなさい。これは命令よ」

※

夜、レミリアが約束した時間に、卓郎は門の前にやってきた。

すると、門には美鈴、ユキ、ハル、アキの四人がいた。メイドの三人はティーセットや組み立て式のテーブルや椅子など、明らかにお茶を飲むための道具を持っていた。

どうして、こんな時間にそんなものが必要なのか。

「分かりませんが、お嬢様から命令されましたので」

卓郎の問いに対し、ユキは困惑した様子で答えた。ハルも同様なことを答えたので、おそらくレミリアにしかその意図は分からないのだろう。

ほどなくして、そのレミリアも門に到着した。

「全員いるようね。それじゃ行くわよ」

「こんな夜遅くの時間に、どちらまで行かれるんですか」

「来れば分かる。今は黙ってついてきなさい」

卓郎は美鈴に背負ってもらい、一行は夜の空を飛び出した。

今日の天気はやや悪く、上空のほとんどは雲に覆われていた。月や星を観察するには、あまりよろしくない環境である。

「ごこよ。みんなついてらっしゃい」

しばらく飛んでいるうちに、レミリアはいきなり急降下を始めた。

美鈴やユキたちも慌てた様子で、その後ろについていく。

美鈴の背中から下の景色を眺めて、卓郎は首を傾げる。

暗くてよく見えないが、どうやら川辺に降りようとしているらしい。周囲は木々に囲まれており、ちょうど川と森の境目にある平らな土地にレミリアは着地した。

そこは自然と生物の音が聞こえる、とても静かな場所だった。水の流れる音と木々のざわめく音、昆虫の鳴き声などがやかましくない程度に混ざり合っている。

レミリアは地面を叩き、この場所がぬかるんでないことを確認した。

「うん。ここなら良さそうね。早速、準備を始めましょ」

レミリアの命令を受けて、メイドたちはテーブルと椅子の組み立てを始めた。さすがに準備を始めるには周りが暗すぎたので、用意してきた発光草を点灯させた。卓郎も手持ち無沙汰だったので、ついでに手伝うことにした。

ものの数分で、二人分のくつろげる空間が完成した。

「お疲れ様。それじゃあ、卓郎以外の者は二時間後にここにやってくるのよ」

メイドたちと美鈴がその場を去り、卓郎はレミリアと二人きりになった。

こうして外で彼女と二人きりになるのは、初めてのことだった。

「さあ、座りなさい」

彼女の意図が分からないまま、卓郎は椅子に腰掛ける。川からやや遠い距離にテーブルを設置したのは、おそらく吸血鬼の苦手な流れる水があるからだろう。

では、どうしてわざわざ苦手な場所にやってきたのか。

小さな丸テーブルには紅茶をお菓子、ワインが用意されてあった。紅茶とワインは相性が悪すぎるのではないかと思ったが、先にレミリアはワインの方を開けた。

「一体、どういうつもりですか。こんな所で飲むんですか」

「そんなに警戒しなくてもいいわよ。じきに分かるわ」

レミリアの命令を受けて、卓郎はワインを二つのグラスに注いだ。血のように紅いワインである。卓郎はワインに限らず、酒類は苦手な方であった。

「明かりを消してちょうだい」

「あっ……はい」

発光草の明かりを消すと、辺りは一瞬にして暗闇に包まれた。

「静かにしてなさい。もうすぐここに来客がやってくるわよ」

小声でささやくレミリアの言葉を受けて、卓郎は無言で川の方を眺める。

変化が起こったのは、それから数分後のことだった。

川辺の草むらから、小さな発行体が出てきたのだ。

それを見て、ようやく卓郎はレミリアの意図に気付いた。さらに待っていると、小さな発行体は徐々に数を増やしていき、ついに川辺を覆うほどまでになった。

蛍の大群だった。

まるで、空に浮かぶ銀河が地上に降り立ったような光景だった。

「そうでした。今はちょうど蛍の季節でしたね」納得したように卓郎は頷く。

「卓郎。グラスを持ちなさい」

蛍の光でおぼろげに映るレミリアは、グラスを持ちながら小さく口を開いた。

「誕生日、おめでどう。これは私のささやかな贈り物よ」

かちん、とグラスの重なる音が響いた。

——明後日は、卓郎の二十三歳の誕生日だった。

幻想的な光景を眺めながら、彼はワインを口に含む。ぶどうの風味を舌と鼻で味わってから、卓郎は小さく息を吐いた。

いつもは苦手なワインが、今はとてもうまく感じられた。

「ありがとうございます。まさか、こんな贈り物をいただけるとは……」

「ありがたく思いなさい。この私がここまで準備をして、あなたに対して贈り物をしたんだからね。その事実だけでも生涯の自慢になるわよ」

「はい。非常に光栄です」

ワインの後味を堪能しながら、蛍の飛び交う景色を眺める。

この八年間、卓郎はレミリアから誕生日の贈り物を受け取ったことがなかった。

毎年、メイドたちから盛大に祝福されるので、特に意識したことはなかったが、まさかこのような形で主人から贈られるとは夢にも思わなかった。

「でも、どうして今日にしたんですか？ 僕の誕生日は明後日ですのに」

「あまり晴れすぎると、星と月が邪魔しちゃうからよ。外が明るすぎると蛍の光もその分、見えにくくなっちゃうからね」

「なるほど。だから、曇りの日を選んだというわけですね」

蛍の大群は鮮やかな光を放ちながら、それぞれ川辺をさまよっている。一瞬、絵が描きたい衝動に駆られるが、何とかそれを抑える。

「あれから、もう八年が経つのね」

ふと、レミリアがしみじみとした口調で呟いた。

「あなたが紅魔館で働き始めてから。ついこの間まで、妖精メイドと同じくらいの身長までしかなかった男が、もう門番と同じくらいまで成長しているんだからね」

「この八年間、本当にあつという間だったと思います」

「ふん。二十年そこらしか生きてない奴に、そんなこと言われたくないわね」

「ああ……。お嬢様はもうすぐで五百歳を迎えるんですけどね」

「それでも、あなたの二十倍近くは生きてきたのよ。時間の過ぎていく感覚は、圧倒的に私の方が早いわよ」

卓郎は苦笑いをする。

幼い見た目が災いして、つい五百年近く生きているということも忘れてしまうのだ。

レミリアは、グラスを小さく振り回しながら言った。

「ねえ、あの時のことを覚えているかしら」

「なんですか」

「あなたが初めて、私に『ここで働かせてください』と土下座してきた時のことよ。あの時、生意気にもあなたは私のことを睨みつけてきたじゃない」

「ああ、それは今でも覚えています」

「フランを除けば、他人に正面から睨みつけられるのは何百年ぶりだったわ。その時のあなたの顔、今でもよく覚えているわよ」

レミリアに首を絞められながらも、視線だけは彼女の目から離さなかった時のことだ。今、振り返ると、あの時の自分はかなり無茶なことをやっていたと思う。



「今だから言えるけど、あの時は正直、あなたのような人間はすぐに出ていくと思っていたわ。妖精メイドがうまく機能してなかった時期だったし、それなら適当に使用人の地位に放り投げとけば、勝手に潰れて出ていくだろうとね」

「まあ、なかなかうまくいかなくて潰れかけたのは確かですね……」  
「でも、あなたは私の予想を遥かに超える成果を出してくれた」

レミリアは、ぱっちりとした目を卓郎に合わせてくる。

「出ていくどころか、逆に紅魔館の環境を良くしてくれたわ。見かけはあまり変わってないけど、あなたが来てから確実に館の中身は良い方向に変わったと思うわ」

「いえいえ。がむしゃらに働いたら、結果的にうまくいっただけですって」

「普通の人間が多くの妖精を束ねている時点で、かなりすごいことだと思うけどね。きつと、あなたには見えない能力が備わっているんでしょうね」

「勘弁してください。能力という言葉で括られるのは、あまり好きではないんです」

「そう？　じゃあ、才能という言葉で括っておこうかしら」

「それも勘弁してください……」

困ったように返す卓郎に、レミリアは機嫌が良さそうにワインを飲む。

そろそろワインも飽きてきたので、半分ほど残して栓をすることにした。まだ約束の時間までかなりあるので、卓郎は二人分の紅茶を用意して、再び椅子に腰掛けた。

「ねえ、卓郎」

「はい」

「最低でも二十年は紅魔館にいなければいけない約束、覚えているかしら」

突然の問いに驚いたが、その約束に関してはずぐに思い出せた。

「ええ、もちろんです。僕が正式に館の使用人になった時のことですね」

「実を言うとね。その約束をして、少し後悔しているのよ」

「どういうことですか？」

「だって、あと十二年しかあなたを所有できないことになるじゃない」  
卓郎の体が固まる。

レミリアは目を細めて、紅茶の入ったカップに錠剤を入れた。

「残念だわ。あなたのような優秀な人間が、あと十二年もしたら紅魔館からいなくなっちゃうなんて。もし、あなたがいなくなったら、きっと部下の妖精メイドたちも悲しむでしょうね。もちろん、門番やパチエ、私だって悲しむだろうね」

「お嬢様。何が言いたいんでしょうか」

するとレミリアは立ち上がり、卓郎のすぐ目の前までやってきた。背景の蛍の柔らかな光に対し、彼女の瞳は不気味に紅く光っているように見えた。

「卓郎。私のために死ぬことはできないかしら？」

そう言って、彼女はそつと卓郎の唇に指を置いた。

この瞬間、レミリアから同じような質問を八年前に受けたことを思い出した。卓郎を雇ってくれることを許可してくれた直後のことである。

「あなたはすでに紅魔館になくてはならない存在よ。そのような存在を簡単に手放してしまうほど、私はお人よしの主人ではないわ」

唇から手を離して、レミリアは断言した。

「命令よ。あなたは生涯、この館で働き続けることを誓いなさい」

あまりのことに、卓郎は返す言葉が見つからなかった。

生涯、紅魔館で働き続ける――。

つまり、自分はレミリアのために一生を捧げることになるのだ。

レミリアはふっ、と笑って再び椅子に腰掛けた。

「いきなりのことだから動揺するのも仕方ないわね。その意思確認は、また後日にしましょう。まあ、あなたのことだから誓ってくれると信じているけどね」

紅茶を口に含んでから、レミリアは続けた。

「念のため言っておくけど、これは命令だからね。もし、その誓いが立

てられなかったら、それは私の命令に背くという意味になるからね。私の命令に背くということは何なのか、聡明なあなたならすぐに分かるんじゃないかしら」

——つまり、紅魔館を出ていくことを意味する。

レミリアは川辺の方に体を向けた。

「さて、おしゃべりはこれくらいにして、もうしばらく螢の風景を堪能しましよ。この景色をじーっと眺めていたら、嫌なことだつてすぐに忘れられるわよ」

「はい」と頷いて、卓郎も川辺の螢を見ることにした。

だが、先ほどまでの感動はほとんど無くなっていった。

今、彼の中で駆け巡っているのは、自分は死ぬまで紅魔館で働き続けなければいけないのかという戸惑いだった。

仕事自体は概ね順調で大きな不満はないのだが、いざ一生に関わる問題になると、自分はそれでもいいのかという思いが湧きあがってくるのだ。

気持ちとは裏腹に、螢の大群は煩わしいくらい鮮やかに輝き続けていた。

「こんにちは。今日も天気がいいですね」

本を読んでいる最中、久しぶりに聞く声がした。

顔を上げると、目の前には常連の女性が佇んでいた。今日は三週間ぶりに里にやってきて、いつものように露店を開いて絵を売っている最中だった。

卓郎は本を閉じて微笑んだ。

「そうですね。いい天気です」

「しばらく見かけなかったですけど、どうかされていたんでしょうか」  
「少し仕事が忙しくてですね。なかなか絵を描く時間がなかったんです」

「ということは、新しい絵も描けなかったんでしょうか」

「いえいえ。これは三日前に完成した新しい絵ですよ」

彼がその絵を差し出すと、女性は感嘆の声をあげた。

「すごい綺麗ですね……。これは蛍の絵でしょうか」

「ええ。先日、蛍を見に行く機会がありましたので、それを描きました」

卓郎がこの絵を描き始めたのは、四日前からである。

だが、実際に景色を見に行ったのは二週間前のことで、それまでなかなか絵を描く気力が湧かなかったのだ。

しばらく女性は絵を眺めた後、「うん」と頷いた。

「すみません。この絵をください」

「まいど、ありがとうございます」

今日は幸先の良い始まりとなったようだ。

現金の取引を済ませた後、女性が持っていた袋から何かを取り出してきた。

「あの……もしよかったら、どうぞ」

「えっ、これは」

女性が差し出してきたのは、金平糖の入った袋だった。袋の素材

が、いつもメイドたちのために買っている店の金平糖の袋と同じだったからである。

「中身は金平糖が入っております。もしかして甘い物は苦手でしたか？」

「いえいえ、大好物です。わざわざありがとうございます」

卓郎が礼を述べると、女性は嬉しそうに微笑んでから言った。

「あの、少しお聞きしたいことがあるのですが……」

「どうぞ」

だが、女性は『絵、売ります』という店の看板を見たまま、口を開こうとしない。

卓郎が訝しげな顔になると、女性は軽く首を振った。

「ごめんなさい。やっぱりいいです」

そう言い残して、そそくさと露店から去っていった。

彼女の後ろ姿を眺めながら、しばらく卓郎は呆然としたが、気を取り直して手元に置いてあった本の続きを読み始めた。

ついでに彼女から頂いた金平糖も早速食べてみる。ほどよい甘さが口の中に広がり、思わず卓郎は笑みを浮かべた。

レミリアに誓いの命令を出されてから、今日で二週間ほどが経った。

初めて「生涯、紅魔館で働き続けなさい」と言われた頃は、ひどく動揺したが、時間を掛けて考えてみた結果、ひとまず卓郎の中で一つの結論に達しようとしていた。

それは生涯、紅魔館で働き続けようとする結論だった。

レミリアの命令に従う根拠となったのは、自分の命が彼女によって救われたという事実を思い出したからである。

八年前のあの日、卓郎は体中を傷だらけにして湖の前で力尽き、偶然通りかかったレミリアに拾われた。こうして奇跡的に命を取りとめた卓郎は現在、様々な紆余曲折がありながらも、館でそれなりに充実した生活を送っている。

つまり、卓郎はレミリアによって生かされたのだ。自分を生かしてくれた者に対して、生涯を捧げて尽くすことが、最大の恩返しではな

いのか――。

先日、人里で慧音にやたらと絵や頭脳を褒められた。

もしかしたら、そこに自分が戸惑う原因ができたのかもしれないと思っっている。

自分の力が人里でも通用するかもしれないと思ってしまったから、死ぬまで紅魔館で働き続けることに違和感を抱いてしまったのではないか。

――でも、もう迷いはない。

自分の生涯を、レミリアのために捧げていこう。

もちろん、絵は趣味として続けていくつもりだ。まだ、彼女には死ぬまで働く意思を伝えてないが、機会があつたらしつかりと言う予定である。

心の中で、そう決意をした矢先だった。

「やあ、卓郎。三週間ぶりだな」

また久しぶりに聞く声が耳に入って、卓郎は顔を上げた。

露店の前には二人の人間がいた。一人は先日に再会を果たした慧音である。そしてもう一人は、卓郎にとって非常に懐かしい人物であつた。

「お、お前が、本当に卓郎なのか？」

震えた声で訊いてきたのは、だいぶ老けた印象のある卓郎の伯父であつた。

※

今日は早めに店を閉じて、卓郎は伯父の家に向かうことになった。

道中で慧音が説明してくれた内容によると、先日に卓郎と別れた直後、すぐに彼女は伯父の家に向かつて、卓郎が生きていたという事実を話したらしい。すでに卓郎は死んでいたと思っていた伯父は、腰を抜かすくらい驚いたとのことである。

「先生から話を聞いたよ。優しい人が倒れたお前を拾ってくれたそうだな」

伯父もどうやら、卓郎の作り話を信じてくれたようだ。

卓郎にとって、伯父とも十年ぶりの再会だった。

寺子屋を辞めて家の仕事で忙しくなつてからは、なかなか伯父の家に遊びに行く機会がなかったからである。

少し歩いて、一行は伯父の家に到着した。

家は八年前と違い、伯父が経営している着物屋に付属する形で建てられていた。

店の見た目も、だいぶ華やかになってきているようだった。十年前に遊びに行った時は、とても質素な感じのする家だったが、今や見違えるほどになっていた。

「立派になりましたね」

「ああ。おかげさまでここ数年、店の売り上げも順調に伸びていてな。金にも余裕が出てきたら、このような形にしたんだ」

店の横にある細道を通つて、卓郎たちは裏口から中に入る。

居間に通された卓郎と慧音は、ひとまず畳の上に腰を下ろした。

「まだ娘は帰ってきておらん。それでは、私が茶を用意してこよう」  
伯父がいなくなつて居間を見回してみた。調度品はどれも高級品までとは言えないが、それなりに品質の良い物を使つているようだ。

そのうちに、伯父が茶を持って戻ってきた。

礼を述べてから茶を一口飲み、改めて挨拶をした。

「お久しぶりです、伯父さん。元気そうで何よりです」

「ああ。お前も立派に成長したようで、安心したよ」

「今まで生きていることをお伝えせずに、申し訳ありませんでした」

「なに。お前にもいろいろ事情があつたのだろう。それくらいのことには気にしないさ」

伯父は軽く首を振つてから、独り言のように呟いた。

「あの事件から、もう八年が経つたのか……」

「はい」

「事件が起きた直後は、私も心が裂けんばかりの思いだった。でも、慧音先生が事件をすぐに解決してくれたおかげで、私もすぐに立ち直ることができたんだ。先生には言い尽くせないほど感謝しております」  
「ありがとうございます」慧音は頭を下げる。

「しかも、先生は事件を解決してくれたただけでなく、わざわざ亡くなった二人の墓まで故郷の家に建ててくれたんだ」

「えっ。あの墓は慧音先生が建てたんですか？」

「この卓郎の発言に、伯父も驚いたようだ。」

「ああ、そうだが……なんだ、知らなかったのか」

「はい。何度か墓参りには行きましたが、誰が建てたのかまでは……」

「ここで慧音が苦笑いをする。」

「すいません。彼に伝えそびれていました」

「構わないですよ」

「そう言って、伯父は再び卓郎と向かい合う。」

「となると、故郷には誰も住んでいないことも、お前は知っているんだな」

「はい。その理由も知り合いから聞きました」

「なんだ、卓郎。知っていたのか」と、返してきたのは慧音。

「ええ。妖怪から住人を守るために、と聞きました」

「そうか……」慧音は視線を落とす。

「強引なことだとは承知していた。でも、あの時はあれしか方法がなかったんだ。それくらい、お前の家族が殺された事件は人里にとって衝撃的だったんだ」

「でも、僕にとって生まれ故郷はあの村しかないんですよ」

「……すまない。謝っただけで済まされないと思うが、今はそれしか言えない」

彼女の顔を卓郎はじつと見つめる。

生まれ故郷への強引な移住政策は、どうやら慧音が大きく関わっていたようだ。気持ちは分からなくもないが、やはり釈然としない所はある。

すると、伯父が「まあまあ」と言ってきた。

「そう先生を責めるのではない。移住政策は慧音先生が全て決めたわけではないし、先生一人だけを責めるのは酷だろう。とにかく事件は解決したし、だいぶ時間も経ったが、こうして卓郎とも再会することができた。最後までお前の母さんと仲直りできなかったのは残念だ



が、とにかくお前が生きていたという事実だけで、私は本当に嬉しいよ」

はぐらかされた気もするが、とりあえず卓郎はそのまま返した。

「昔は、伯父さんもだいぶ苦労されていたそうですね」

「そうだな。あの日までは、いつ店が潰れてもおかしくない状況だったな。生活もだいぶ苦しくて、娘にもだいぶ迷惑をかけてしまったよ」

卓郎は首を傾げる。

「あの日は、どういうことですか」

「私も実に不思議なことだと思っているのだが、事件から数ヶ月後、いきなり私の家の前に大金が置かれていたんだ。実際に受け取ったのは娘だから、細かいことは娘から聞いたのだが、夕食の準備中にいきなり扉が叩かれて外に出てみたら、扉の前に風呂敷が置いてあったらしいんだ。それを開くと、中には驚くことに大量の現金が入っていたんだよ。ついでに、『このお金を店のために使ってください』という伝言も入っていたな。これはきつと神様からのささやかな贈り物だと思っ、その内容通りに店の再建のため、金を全てそのために使ったんだ。そのおかげで、店もここまで発展することができたんだ」

「へえ。それは不思議な話ですね」

そう言いながら、卓郎は内心で嬉しい気持ちになった。自分がこっそり渡した金のおかげで、店を再建させることができたからである。八年前の事件が起こるまでは、伯父の店も非常に厳しい状況だった。

それまでは伯父の援助で何とか生活が成り立っていた卓郎の家だったが、伯父の店が厳しくなるにつれ、卓郎の家も苦しめられることになったのだ。

伯父は大きく息を吐いた。

「お前の母さんを助けられなかったのが、唯一の後悔だ。あの時は店と娘を守ることに必死で、ついお前の母さんには辛く当たってしまった。今さらなことかもしれないが、そこところは許してくれ。本当にすまなかった」

「いえ。もう八年も前のことですし、別に謝らなくていいですよ。こちらこそ、伯父さんにはだいぶご迷惑をおかけいたしました。何はともあれ、伯父さんの援助のおかげであの時は家の生活が成り立っていましたし、むしろ感謝を述べたいくらいです」

「そうか。そう言われると、少しだけ気持ちも楽になる」

伯父は、すでに湯気の立っていない茶を飲む。

そして大きく音を立てて、湯飲みを置いた。

「まあ、昔の話はこれくらいにしておこう。実は今日、お前を私の家に誘ったのは昔話をするためではない。一つ頼みごとをしたくて誘ったのだ」

「頼みごとですか？」

「ああ。その前に悪いが、お前の絵を見せてくれないかな」

卓郎は風呂敷をほどいて、一枚の絵を伯父に見せる。

二ヶ月前に描いた、花と妖精の絵である。ある休日に、道を歩いていたら偶然うたた寝している妖精を発見したので、これは好機だと思つて筆を走らせた作品である。

じっくりと絵を眺めながら、伯父は嬉しそうに何度も頷いた。

「うむ。慧音先生の言う通り、これは素晴らしいな。まさか卓郎がこんな素晴らしい才能を持っているとは、思いもしなかった」

「一体、何を頼もうとしているんですか」

卓郎が怪訝な顔になると、伯父は絵を持ちながら言った。

「実はな。三ヶ月後に博霊神社という所で、例大祭が行われるんだ」

「博霊神社？ 聞いたことないですね」

「里から少し外れた所にある神社だから、お前が知らないのも無理ないな。その神社で例大祭が行われているんだが、今年は私が祭りの実行委員長に選ばれてしまったんだ。そのせいで、私がいろいろと催しごとを企画しなければいけなくなつてな」

「へえ。それは大変そうですね」

「その一つとして、紙芝居を誰かにやらせようと思つているんだ」

紙芝居、という言葉聞いて、卓郎の体がびくと反応する。

そして恐る恐る自分を指差した。

「も、もしかして、それを僕にやらせるつもりなんですか？」

「ああ。お前ほどの絵の腕前なら、紙芝居もお手のものだろうと思っ  
てな。ちようと適格な者が周囲におらずに困っていたものだから、ぜ  
ひやってくれないかな」

「あはは……。僕が紙芝居ですか」

卓郎は苦笑いをしながら、七年前の黒歴史を思い出す。

紙芝居は絵だけ上手でもうまくいかない。

当然、話の構成力や語り手の演出力なども必要になってくる。七年  
前に比べたら絵の方は格段に良くなったものの、それでも今の自分に  
紙芝居ができるかどうか定かではなかった。

「今すぐに決めろ、とは言わない。もし興味があったら、二週間以内に  
また私の所にやってくればいい。お前の力で、ぜひ例大祭を盛り上げ  
てくれないか」

「お前ならできると思って、私が推薦をしたんだ。どうだ、やってみな  
いか」

伯父に続いて、慧音も言ってくる。

卓郎は「うーん」と唸る。紙芝居が本当にできるかという不安もあ  
るが、その他にも自分が公の場で姿を現してもいいのかという不安も  
あった。

この八年間、彼があまり目立たないように行動してきたのは、例の  
事件で行方不明の扱いを受けていたからである。つまりは、いろいろ  
と面倒なことを回避したかったからである。

しかし、それはもう八年も前のことだ。

すでに伯父や慧音には自分の生存が分かかってしまっているし、わざ  
わざ自分の身を隠す必要は無くなったのかもしれない。そうなる  
と一応、例大祭に参加する可能性くらいは残しておいたほうがいいの  
かもしれない。

そう考えて、ついに卓郎は伯父たちと目を合わせた。

「分かりました。考えておきます」

「おお、そうか。突然の頼みで悪かったな」

「いい返事を期待しているぞ」慧音も嬉しそうに言った。

卓郎は茶で軽く口を潤わせた後、ゆつくりと立ち上がった。

「それでは、僕はそろそろ失礼いたします」

「そうか。それなら私たちも見送ろう」

彼に続いて、伯父と慧音も立ち上がった直後だった。

がらがら、と近くで扉が開く音がした。

と、同時に「ただいま」と微かに女性の声が聞こえてきた。

「おお、ちょうど良いところで娘が帰ってきたな」

伯父がそう呟くと、今度は大声で呼んだ。

「ちよつと優花。こつちへ来なさい。紹介したい人がいるんだ」

「あ、はい」と、扉の先から先ほどの女性の返事が聞こえていた。

この瞬間、卓郎は首を傾げる。何となく聞き覚えのある声だったからだ。

間もなくして、目の前の襖が開かれた。

中から入ってきた女性と卓郎の視線が合った直後、二人は同時に驚愕した。

思わぬことに、卓郎は持っていた風呂敷を落としてしまった。

「あ、あなたは……」

女性も大きく目を見開きながら、卓郎を見据えている。

この状況に横にいた伯父と慧音も困惑する。

「なんだ、知り合いだったのか？」伯父が問う。

「い、いえ。知り合いという程ではないんですけど——」

女性はここで、持っていた一枚の絵を伯父たちに見せる。

それはつい先ほどまで卓郎が売っていた、蛍の大群が描かれた絵だった。

「ついさつき、この方からこの絵を買ったんです」

※

「例大祭で紙芝居なんて、なかなか良さそうな話じゃない」

卓郎が里から帰ってきた日の翌日。

伯父が持ちかけてきた話を、レミリアはあっさりとして承してくれた。

卓郎自身、あまり期待をせずに話してみたが、意外にも彼女は卓郎

が公の場に出ることについては一向に構わないらしい。

「ただ、これだけは肝に銘じておきなさい。卓郎はスカートレット家の代表として、例大祭に参加するんだからね。失敗したら、ただじゃ済まないわよ」

「ええっ……」

心配な顔つきになる卓郎をうかがいながら、レミリアは訊いた。

「例大祭は三ヶ月後だっけ？」

「はい」

「それなら十分に準備できる時間はありそうね。ただ、以前のこともあるし、あなた一人だけで準備させるのはちよつと心細いわね」

七年前のことを思い出して、卓郎は何も言い返せなくなる。

「なら、私たちもその準備に協力するわ。なんせ、この館には物語にはうるさい妖精メイドたちやパチエがいるんだからね。彼女たちからいろいろと助言をもらいながら、最高の紙芝居を作りなさい。あなたならできると信じてるわ」

「どうやら、完全に参加せざるを得ない雰囲気になってしまったようだ。」

とはいえ、卓郎自身は特に不満はなかった。

これをきっかけに、また彼女に会えるからである。

その日の夜、お茶会の時に早速レミリアの口から紙芝居の話がされた。

卓郎にとって初めての大会舞台上に、メイドたちは大きく湧いた。全員にお菓子を配り終わっていざお茶会が始まると、話題は紙芝居のことで持ち切りになった。

「ねえねえ、どんな話にするのかももう決めたの？」

紅茶を飲みながら、右隣のハルが問う。

「いや、まだ完全に真っ白だな」

「物語は幸せな感じで終わらせるんでしょうか？」と、左隣のナツが問う。

「うーん。できれば、その感じに持っていききたいな」

「でも、見た感じあまり幸せではない終わりの方が、逆に見てくれる人

に対して印象に残ることだってありますよね」と、正面のユキ。「それも分かるけど、だからといって気分が悪くなるような終わり方にはしたくないな。できるなら、たとえば見た目が幸せじゃなくても、少しでも希望が感じられるような終わり方にしてみたいな」  
「……それって、けっこう難しくない？」と、ハル。  
「まあ、そうだね。でも、できればそういう感じの終わり方がいいな」  
「なんか、みんな言ってることがよく分かんないですよー」と、後ろでアキがぼやく。

結局、この日のお茶会は結末をどうさせるかで議論になった。まだ伯父に参加することすら言っていないのに、かなりの盛り上がり様である。

何はともあれ、物語をみんな考えていく作業は非常に楽しいものである。むしろ、実際に書いていく作業よりも楽しいかもしれない。早速、卓郎は今週の休日に伯父の家に行こうと決めた。そして、もう一つ――。

彼にとって、紙芝居の他に伯父の家に行きたい理由があった。それは、伯父の娘である優花と出会えるからであった。

※

「そうか。お前が参加すると言ってくれて、私も嬉しいよ」  
次の休日。人里の伯父の家に来た卓郎は早速、参加することを伝えた。

伯父は非常に嬉しそうな顔で、卓郎の参加を歓迎してくれた。  
「参加するにあたって、私から内容に関して特に言うことはない。お前のことだから心配はいらないが、公の場にふさわしくない内容以外だったら何でもいいぞ。期限は例大祭の一ヶ月前だ。慧音先生の確認が済み次第、本番に出すという流れだ」  
「分かりました」

「期待しているぞ」伯父は微笑んだ。

しばらくお互いの近況を話しあった後、卓郎は伯父の家を出た。歩きながら卓郎は今、とても胸が高鳴っていることを自覚した。これから、近くの休憩処で彼女と会う約束をしているのだ。

先ほど、伯父に会うために卓郎は着物屋の正面から中に入った。今日は定休日だったので中には彼女一人だけがあり、その時に約束を交わしたのである。

目的の休憩処の前までやってきて、彼は足を止めた。

店の前には、肩まで伸びた黒髪の女性が佇んでいた。十年前までは普通の子供だったのに、今では一人の美しい女性に変貌を遂げている。

「優花さん」

卓郎の言葉に、女性が気付いた。

「あつ。終わりましたか」

「ええ。伯父さん、とても嬉しそうにしていましたよ」

「そうですか。私も卓郎さんの紙芝居、楽しみにしていますよ」

「ありがとうございます」

優花には、最初に会った段階で紙芝居に参加することを伝えていた。

「ここで立ち話をするのも難ですし、中に入りましょう」

卓郎と優花は休憩処に入って、適当な席に座る。

多少の金は持ってきたので、卓郎は迷うことなくお茶と団子を頼んだ。優花も彼と同じものを頼んだ。

話の始めに、卓郎はまず頭を下げた。

「先日はすぐに帰ってしまいました、すいませんでした。もつといういろと話をしたかったんですが、どうしても時間がなかったもので……」

「いえいえ。別に気にしてないですよ」

そう言ってから、優花は軽く息を吐いた。

「ねえ、お互いそんな固い態度になるのはやめましょう。卓郎さんの正体に気付くまでは私もそれなりの態度をとっていたけど、久しぶりに再会したんだから、もつと砕けた感じでいきましようよ。私もそっちの方が気が楽だし」

「あつ、そう？　じゃあ、僕もお構いなくいこうかな」

「ふふつ。でも、なんかちよつと違和感があるわね」

「そりゃあ、一週間前までは大事なお客様だったんだからな」

お互い顔を見合わせて微笑んでいるうちに、お茶と団子がやってきた。

「それにしても」卓郎は茶を一口飲んでから言った。

「まさか、いつも僕の店に来る人が、伯父さんの娘さんだとは夢にも思わなかったな」

「ええ、私も最初は夢かと思っちゃったわ」

一週間前、卓郎は露店の常連客である優花と再会した。

最初は状況が理解できず、その場にいた全員が困惑した。

伯父も優花が卓郎の絵を買っていたことは知らなかったようで、最初に絵を見た時点で気が付かなかったのである。卓郎と優花が詳しい事情を話してくれたことで、ひとまず二人は理解してくれた。

その後、お互いの自己紹介を済ませてから、卓郎は伯父の家から出た。日没の時間が迫っていたので、やむなく出ることにしたのである。

自己紹介の時に聞いたことが、以下の通りである。

優花は二十四歳。卓郎の一つ年上で、現在は実家の着物屋で親子二人三脚で仕事を行っている。着物を作ることもできるらしく、彼女の作る着物も最近はずいぶん売れ上げが伸びてきていると伯父は自慢げに話していた。

表向きは伯父の娘とされているが、直接的な血の繋がりはない。

伯父の妻——つまり卓郎にとっては伯母の連れ子であるらしく、優花の本当の父親はだいぶ昔に病気で亡くなってしまったらしい。その伯母も十年前に同様の病気で亡くなってしまい、こうして伯父が優花を義理の娘として育てることになったのである。

卓郎も遠い昔、何度か伯父の家に来てきて優花とよく遊んでいた。

いわゆる幼馴染という関係である。兄の拓馬は卓郎の八つ年上だったので、伯父の家によく来る時は、たいてい歳の近い卓郎と優花が遊ぶという流れになっていたのだ。主に、近所にいる優花の友達を集めて、大勢でかくれんぼや鬼ごっこをやっていた。



団子を頬張りながら、卓郎たちは思い出話に夢中になった。

「あの頃はよく優花に負けていたっけな。鬼ごつこの時はいつも優花に追いかけられて、僕が鬼の役をやらされていた記憶がある」

「卓郎さんは、あの時から運動が苦手だったからね。今でも運動は苦手なの？」

「そうだね。その代わり、変な根性はいったと思うけど」

「やだ。なにそれ」優花は可笑しそうに笑う。

「でも、私だって運動が得意だったのは昔のことよ。今は仕事の方が忙しくて、すっかりやらなくなったわ」

「その代わり、着物を作れるようになったじゃないか」

「まだまだ、私なんて半人前よ。いつかお父さんのような素晴らしい着物を作りたいとは思っているけど、肝心のお父さんが『とつと結婚しなさい』ってうるさいのよね」

「あはは。伯父さんにとっては、いろいろ複雑な心境なんだろうね。優花さんが自分と同じ職を極めることは嬉しいけど、だからといって身を固めないというのよね」

「お父さんの気持ちも分からなくないわ。何回かお父さんから相手を紹介されたけど、いまいちその気になれなくて全部断っちゃったのよね」

優花の歳を考慮すると、この時期の未婚はかなり遅い傾向にある。

「でも、このまま結婚しないわけにはいかないだろ。仕事の方をもっと頑張りたい気持ちもあるだろうけど、結婚は時期というものもあるしね」

優花はため息をついて、視線を落とした。

その憂いを帯びた表情を見て、なぜか卓郎は美しいなと思ってしまった。

「卓郎さんは、結婚する予定はないの？」

えっ、と卓郎は思わず間拔けな声をあげてしまった。

「だから、近いうちに結婚するのかって聞いているの」

「うーん。どうだろう。全く考えたことがないな」

「相手とかもないの？」

「そうだね。いないね」卓郎は苦笑しながら、ぽりぽりと頬を搔く。自分が結婚することなど、とうの昔に諦めていた。紅魔館で生涯働くと決意している以上、もはや自分が誰かと結婚することなどできるはずがなかった。

それから、話は八年前の事件にまで進んでいった。慧音と伯父はごまかせたが、優花に対してもそれなりに注意を払う必要があるだろう。

「あの事件を聞いて、私も卓郎さんは死んじやったのかと思ったわ」

卓郎は無言で耳を傾ける。

「あの時は、私も落ち込んで胸がぽっかりと空いた気分だったわ。いくら何年も会ってなかったとはいえ、昔からの知り合いが死んじやったんだからね。すぐに慧音先生が犯人を見つけて制裁をしたという話を聞いて、私もお父さんもすぐに立ち直れたけれど、あの時のことは二度と忘れられないわね」

「慧音先生とも、その時期に知り合ったのか？」

「うん。事件の後も何度も家にやってきてくれたのよ。まだ、その時はお店の状態も良くなかったし、私も仕事を手伝い始めたばかりだったから、すごく悩んでいてね。慧音先生の励ましがなかったら多分、お店の仕事なんて続けていなかったと思うわ」

いくら好きな仕事だとはいえ、『好き』を理由で続けるには限界がある。

優花も慧音がいてくれたおかげで、今の仕事を続けてこられたのであろう。母と兄の墓を建ててくれたことといい、慧音には本当に頭が上がない。

優花は続けて言った。

「たしか卓郎さんは、遠い村の農家の人に拾われたんだっけ」

「そうだよ」

「その農家の人って——」

ここでいったん優花は言葉を止めたが、やがて思いきったように言った。

「もしかして、卓郎さんを拾ってくれた農家の人ってお金持ちだった

の？」

意外な質問に卓郎は一瞬、表情が強張りそうになる。

何とかそれは抑えたが、優花の意外な質問に心の中で困惑せざるを得なかった。

なぜなら、実際に彼を拾ってくれた館の主は本当にお金持ちだからである。

スカーレット家の莫大な財産のおかげで、卓郎は優花たちに現金を渡せたのである。当然、お金持ちの農家に拾われたことなど一言もしゃべってない。

ひとまず、卓郎は笑いながら返した。

「何言ってるんだ。僕を拾ってくれた人は、普通の農家の人だったよ」

「そ、そうだよね……。ごめんね。急に変なこと言っちゃって」

追究する気はなかったようで、優花はすぐに納得してくれた。

食べ終わってからだいたい話し込んでしまったので、ここで二人は店を出ることにした。

優花の提案で、二人は里の外をぶらぶらと歩くことにした。里の外とは言っても、限りなく里に近い場所を歩いていくだけである。

歩いている間、二人は他愛のない会話を続けた。

仕事の話だけでなく、周囲の面白い人の話など話題は絶えなかった。近所に住んでいる人という設定でハルの話をする、優花は「面白そうな人ね」と笑ってくれた。

優花は意外にも教養が豊かな女性で、卓郎が少し知的な話題をしても、ごく普通に乘っかってくれた。道端に咲いている花を題材にして、お互いに即席の自由律俳句を言い合ってみたりもした。

どこでそのような知識を学んだんだ、と尋ねてみると、一週間に一回の頻度で慧音の家に行って勉強していると答えてくれた。ここまて来ると、本当に優花は慧音によつて大きく変わったのだなと思わざるを得なくなった。

楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、そろそろ日も傾き始めてきた。

「いくら里から近いとはいっても、夜になると危険だ。早く戻ろうか」

卓郎の提案に、優花は納得いかないような顔になった。

「えーっ。もうちよつと一緒に歩いてもいいじゃない」

「でも、僕もそろそろ家に戻らないと帰れなくなっちゃうよ」

「ああ、うん……。そっか。卓郎さん、家までかなり歩くんだったよね」

名残惜しいが、ひとまず二人は肩を並べて里の方向に歩き始める。季節はもうすぐ夏を迎えようとしているが、二人の髪をたなびかせる風はまだ冷たい。

「ねえ、次はいつ里に来る予定なの？」優花が問う。

「また一週間か、二週間後くらいかな」

「今日は本当に楽しかったわ。また一緒に話しましょうよ」

「ああ。僕もとても楽しかったよ。絶対、近いうちに会いに行くよ」「うん」

その時、卓郎の右手に温かい感触がやってきた。

顔を向けると、背景の夕日に照らされた彼女の輝いた微笑がそこにあつた。

卓郎の心臓の鼓動が急激に速くなる。

彼女は微笑んだまま、彼の手をぎゅっと握ってきた。

「里に入るまで、いいかな？」

「あ、ああ……。いいよ」

たどたどしく答えながら、卓郎も手を握りしめる。彼女はさらに機嫌が良さそうに、彼の手をさらに強く握ってくる。柔らかく、夕日のような温かい手だった。

何も話せないうちに、二人は里の入口まで到着した。

「じゃあ、また来週ね」そう言って、優花は卓郎の手を離して去っていく。

「あつ……」

名残惜しそうに、卓郎はその後ろ姿を眺める。彼女の姿が視界からいなくなった後、卓郎はつい先ほどまで握られていた掌をじっと見つめる。

それだけで、心の中が満たされていくような気がした。

この二十三年間の人生で、味わったことのない感覚が彼の中で駆け巡っていた。

館に戻るまでの間、ついに心臓の鼓動が平常に戻ることはなかった。

## 【19】第五章

「ねえ、ちゃんと聞いているの、卓郎」

パチュリーの声を聞いて、ようやく卓郎は我に返った。

彼女は呆れながら、下書きの描かれた紙を揃える。

「せっかく私が協力してやっているのに、上の空な態度をとるなんてね。次も同じような態度をとったら、二度と協力なんかしてあげないからね」

「あつ……はい。申し訳ありません」

卓郎は深々と頭を下げる。

よりによつてパチュリーの前でぼんやりとしてしまうとは、我ながら何をやっているんだと思つた。

現在、卓郎は来たる二ヶ月後の例大祭に向けて、紙芝居の準備を行っていた。

パチュリー協力のもと、図書館で話の内容や絵の具合を見てもらっている最中だったが、途中で上の空になってしまい、こうして怒られてしまったのである。

優花と出会って、一ヶ月半が経つた。

あの日、あの場所で一緒に手をつないだ瞬間から、卓郎の意識は彼女から離れられなくなつてしまった。その原因が分からないほど、彼は鈍い人間ではない。

「それで卓郎、こういつた感じの流れはどうかしらね」

パチュリーの言葉を受けて、卓郎は机に置いてある紙を眺める。

もともと紙には卓郎が考えた物語のあらすじが書かれていた。

その一部分は赤い線が引かれており、その横にパチュリーが新しく書き直した内容が書かれてあつた。その性格を端的に表現するかのように、彼女の字は非常にきれいだった。

「この通りの展開にすれば、物語の中たるみも少しは解消されるんじゃないかしら」

確かに、パチュリーの修正した内容は悪くなさそうだった。

「そうですね。じゃあ、この展開でいきましよう」  
気を取り直して、卓郎はパチユリーとの話し合いを始めた。

※

翌日、いつも通りに卓郎は館の仕事を始めた。

昨日は夜の仕事をメイドたちに任せてパチユリーと物語を作ったが、思いのほか長引いてしまったので、やや睡眠が不足気味だった。あくびを噛み殺しながら朝の仕事をこなし、卓郎はいったん休憩に入った。

紅茶でも飲もうと思い、食堂に入ってみると中には誰もいなかった。これならゆったりできるかなと思いい、卓郎は適当な席に座って紅茶を作り始める。

その途中、彼は大きく咳き込んだ。

ごほっ、ごほっ、と嫌な感じの咳を何回かした後、彼は小さく首を傾げた。

一体、何が起こったのだろうか。

だが、数分が経つとそんなことは忘れてしまい、卓郎の頭の中はあつという間に優花の微笑で埋め尽くされていった。それと共に飲む紅茶は格別にうまい。

あれから、卓郎は休日になると必ず里に向かうようになった。

目的はもちろん、優花に会いにくためである。レミアアには例大祭に関する打ち合わせをしなければならぬと嘘をついて、何とかごまかしている。

こうして卓郎は一週間に一回の頻度で優花に会い、仲を深めていった。

一緒に休憩処で雑談を交わしたり、絵画の飾られた店を歩き回ったりと内容は様々である。まだ、お互いの関係を進展させるような言葉は交わしていないが、優花も楽しんでいる様子はよく伝わってきた。不思議なことだが、彼女を考えている時は嫌な気分を忘れることができるのだ。

どんなに順調であろうと、今の仕事に対してどうしても嫌な気分を抱える時がやってくる。それを一瞬にしてかき消す力が、今の彼女に

はあるのだ。

そういえば、だいぶ昔にこんなことがあった。

あの事件が起こる数ヶ月前、兄の拓馬がふと卓郎に対して言ったことだ。

拓馬は幸せそうな顔をしながら、自分は今『ある人』のことで頭がいっぱいで、どうにか頑張ってしまいそうだと話したことがある。事件の半年前までは体調が非常に悪く、精神的にも不安定だった拓馬が急に生き返ったように話しかけてきたのだ。

その時は、意味がよく分からず「ふーん」と適当に返したが、あまりの豹変ぶりだったので今でも鮮明に覚えていたのだ。

もしかしたら、今の自分はその時の兄と同じ気持ちを抱いているのかもしれない。

卓郎も今、一人の人間に大きな力をもらっている。

他人を想う気持ちは、こんなにも力を与えてくれるものなのか。

その感覚に、卓郎はすっかり夢中になっていた。

それから、半分ほど紅茶が飲み終わった頃だった。

食堂の扉がゆっくりと開かれ、パチュリーの部下である小悪魔とユキが中に入って来た。意外な組み合わせに、卓郎は少し驚いた。

「あつ、卓郎さん。今、休憩中ですか」ユキが口を開く。

「うん。早めに朝の仕事が終わったんだ」

「ちようど、あたしとユキも朝の仕事が終わったんだ。だから、ちよつと休憩でもしようかなと思つて、ここに来たんだよ」と、小悪魔が説明する。

彼女の口調はハルとよく似ており、結構くだけた感じである。

パチュリーの前では丁寧な言葉を使ってくるので、穏やかな性格だと勝手に思っていたが、意外にもさばさばとした性格だったので最初はかなり驚いたものだ。

ユキたちも紅茶を作つて、卓郎と向かい合う席に腰掛ける。

カップに口を付ける前に、ユキが訊いた。

「そういえば、来週のビンゴ大会の景品はどうするつもりですか」

卓郎はカップを持つ手を止める。



ビンゴ大会は弾飛ばし大会と同様に、定期的に行う人気の催しごとである。

以前、パチュリーの図書館で適当に本を読んでいたら、偶然にもビンゴという内容の遊びに目が留まったのだ。そこで試しにメイドたちとやってみたところ、意外と好評だったので、今日まで続けているのである。

「いつも通り、ユキが何かお菓子を作ればいいんじゃないかな」

「でも、前回も私がお菓子を作りましたよ」

「ユキのお菓子なら大丈夫だろ」ここで返したのは小悪魔だった。

「うまいし、それにメイドたちが、あんたのお菓子を飽きることなんてないだろ」

「そ、そうかな？」

照れるユキに、小悪魔は可笑しそうに笑みを浮かべる。性格は正反対のように見える二人だが、様子を見る限りでは割と気が合っているようだ。

二人が話し合っている姿をぼんやりと眺めていると、突然小悪魔が言った。

「なあ、卓郎。あんた最近、妙にぼーっとしてるけど、どうかしたのか」

卓郎はびくんと体を跳ねらせる。

「な、なんだよ。いきなり」

「昨日だって、パチュリー様と話し合いをしている最中にぼーっとしちゃって、パチュリー様に叱られてたじゃん。あたしが言うのも変かもしれないけど、最近のあんた、すごく変だぞ。もしかして悪質な幽霊にでも憑依されたんじゃないのか」

卓郎は苦笑いをするしかできなかった。

まさか、人里にいる女性に夢中なんです、とは答えられない。

「最近紙芝居のことで頭がいつぱいでね。考えることが多すぎて、頭がおかしくなっちゃってしまいそうなんだよ」

「ふうん。でも、あんた一人じゃ無理だから、パチュリー様に協力をお願いしたんだろ。パチュリー様の手にかかれば、見に来た客が全員感動するような物語を作れるに決まってるじゃん。だから、あんたは深

く考えなくてもいいんだよ」

「物語自体は大丈夫だと思うけど、実際に話すのは僕なんだぞ」

「じゃあ、みなさんの前で紙芝居を練習するのはいかがですか？」

ここで提案したのはユキ。

ただ、それくらいのこととは卓郎も当初の時点から考えていた。

「そうだね。そうしようか」

とはいえ、ここはユキのために今知ったような感じで答える。

紙芝居なので、ここぞという瞬間に紙を引いていかなければならない。いったん内容が完成したら、妖精メイドたちを観客にして練習しようとはあらかじめ計画していた。

「それでは、近いうちに練習日の方を決めましょう」

ユキがそう言った直後、何人かの妖精メイドが食堂に入ってきた。昼の休憩時間も迫ってきたので、そろそろ食堂も騒がしくなってくる頃だろう。

卓郎たちはカップを持って、片づけを始めた。

※

この日の夜、卓郎はレミリアの部屋の中にいた。

今日は、レミリアから直々に血を吸われる日である。内容は八年前から全く変わっておらず、いつものようにお互い下着姿になって吸血行為に及ぶのである。

「ふふっ。今日もなかなかだったわよ」

満足気な表情を浮かべながら、レミリアは卓郎の胸に体を預けていた。卓郎はベッドの背もたれに体を傾けながら、背中から彼女を抱いている。

こうして密着していると分かるが、八年前に比べたらレミリアの体はだいぶ小さくなったような気がした。実際は卓郎の体が成長しただけなのだが、そう思うと改めて吸血鬼と人間の寿命の違いを改めて感じてしまう。

すると、ここでレミリアが卓郎に顔を向けてきた。

「ねえ、そろそろ返事を出してもいい頃じゃないかしら」

卓郎は首を傾げる。

「何をですか」

「とぼけないですよ。二ヶ月前、あなたの誕生日の日にした誓いの約束よ」

思わず、びくつと体を跳ねらせてしまう。

すっかりレミリアとの誓いの約束は、頭の隅に追いやられていた。いずれ返答はしなければいけないとは思っていたが、何となく今日まで何も言い出せずにいたのだ。

レミリアは小さく目を細める。

「もしかして本当に忘れていたのかしら」

「そんなことはありません。まだ完全に結論が出ていない状態です……」

「でも、もう二ヶ月も待っているのよ。二ヶ月も待たせて『まだ決めてません』などとほざいて、私が納得するとでも思ってるの？ あなただって、それくらいのことすら分からないほど間抜けではないでしょ」

「も、申し訳ございません……」

ぐうの音も言えなかった卓郎は、素直に謝る。

「まあ、あなただからそれくらいは許してあげるけどね。自身の生涯に関わることだし、悩むのは仕方のないことね」

彼女は、頭をそのまま卓郎の体の上に預ける。

「少なくとも、例大祭までには結論を言いなさい。最近は例大祭関連でよく人里に行っているし、忙しいことは私も承知しているわ。分かったわね？」

「かしこまりました」

レミリアは小さく頷く。

紙芝居自体は順調に進んでいるので、実はそこまで忙しくはない。だからと言って、本当の理由を打ち明けられるはずもなく、卓郎は多少の罪悪感を抱いてしまった。

その時、レミリアが全く動かなくなったことに気付いた。

「……あの、お嬢様？」

念のため声をかけてみるが案の定、返事は来なかった。今日もたつ

ぷり血を吸って満足したのか、異様な早さで眠り始めてしまったようだ。

——やれやれ、今日もか。

そう思いながら、卓郎は毛布を掴んでお互いを包むようにかぶせる。

別にこれくらいのごときは珍しくなかった。最初の頃は吸血が終わったらすぐに退室していたが、ここ数年はそのまま眠ってしまうという流れがよく起こっていたのだ。

思わず、ため息を吐いてしまう。こうなると必然的に卓郎はレミアアを起こさないように、そのままの姿勢を維持せざるを得なくなってしまう。

以前、不用意に主人を起こしてしまったことがあり、機嫌を悪くさせてしまったことがあったからだ。当然、満足に眠れるはずもなく、翌日は必ず寝不足になってしまう。

卓郎は視線を下げて、彼女の顔を見る。

絶大な力を誇る吸血鬼は今、幼い女の子相応の無防備な寝顔を晒していた。小さく開かれた口の先にある八重歯が、なぜか可愛らしく見えてしまう。

寝顔を見せてもいいほど、主人は彼のことを信頼しているようだ。

そこは八年間、がむしやらに努力してきた成果だと考えていい。非力な自分が、吸血鬼や多くの妖精メイドたちに認められたことは、純粹に嬉しいことである。

しかし、今の卓郎には「このまま紅魔館にいてもいいのか」という思いがあった。

つい先日までは自分の命を救ってくれたレミアアに対し、生涯を捧げる決意をしていたのだが、優花と出会ったことで、その決意が一瞬にして崩壊してしまった。

それくらい、彼女との出会いは彼にとって衝撃的だったのだ。

出来ることなら、優花と毎日会える環境に身を置きたい。でも、紅魔館での仕事の関係で、優花に会えるのは良くて一週間に一度である。

今は何とか理由を付けて里に行っているが、もし優花との関係に何らかの進展があつたら、卓郎は覚悟を決めなければいけないのかもしれない。

それは、自分が紅魔館を辞めるということである。

だが、それは主人に対する裏切りでもある。もちろん、命を救ってくれた恩は感じているし、これからもレミアアのために働きたいとも思っている。でも、いったん誓いの約束を交わしてしまうと、優花との関係は間違いなく終わりを告げるだろう。

卓郎は小さく歯ぎしりをたてた。

自分は今、重大な選択を迫られているのかもしれない。

主人との忠誠のために、優花への想いを殺したほうがいいのか。それとも、紅魔館の住人たちの信頼を壊してまで、自分の欲求に忠実になるべきなのか。

現時点では答えが全く浮かんでこなかった。

「ごほっ、ごほっ——」

その時、眠っていたレミアアがいきなり咳を始めたので、卓郎の思考が遮断された。しかも、その咳はやたら激しく、口から血を吐きだした瞬間、思わず鳥肌が立った。

「お嬢様！」

窒息させないように、慌てて彼女の血を吐き出させる。目覚めたレミアアはしばらく吐きだした血を呆然と眺めていたが、やがて小さく息を吐いた。

「……あらら。盛大にやっちゃったようね」

「お嬢様。具合はいかがでしょうか」

「今日は少し体調がよくなってね。悪かったわね、驚かせちゃって」

「いえ、大丈夫です」

初めての事態に動揺はしながらも、卓郎はなるべく平坦な口調で答えた。

すっかりベッドも血で汚れてしまったので、誰がメイドを呼んでこようと卓郎は立ち上がった。幸い、卓郎の方は血をかぶらずに済んだ。

「あら、どこへ行くつもりなの」

すっかり疲れた様子のレミリアに、卓郎は答えた。

「メイドを何人か連れてくるため、いったん着替えようかと」

「別に、あなた一人だけでも後片づけはできるでしょ」

ここで卓郎はレミリアの全身を眺める。

盛大に血を吐いたことで、すっかり彼女の下着は血まみれになっていた。キャミソールの胸元には大きな斑点のような血だまりができており、着替えは必須だろう。

すると、レミリアは微笑んだ。

「今さら何を気にしているのかしら。あなたは変質な趣味を持った人間でないことは、とっくの昔に分かっているわ。別にあなたが私の下着を洗っても一向に構わないのよ」

「ですが……」

「命令よ。あなた一人で処理をしなさい」

卓郎はしばらく言葉を噤んだが、やがて仕方なく動き始めた。

普段、レミリアの下着等の洗濯を行っているのはユキとナツである。

それをあっさり許してくれたのは、言うまでもなく卓郎に対する信頼の表れだろう。だが、今の彼にとってはその信頼が少し重たいものを感じてしまった。

ひとまず服を着て、洗濯用の道具を取りに行く。

戻って来ると、すでにレミリアは寝巻用の服に着替え終わっていた。

「下着はベッドの上に置いておいたわ。じゃあ、頼むわよ」

「承知しました」

ベッドの布を新しいものに取り換えてから、卓郎は洗濯を始める。一刻も早く処理をしないと、後で残ってしまう可能性があるからだ。そんな彼の姿をレミリアは横の椅子に腰掛けて、じつくりと眺めている。とりあえず血まみれになったキャミソールを洗おうと、手を動かそうとした瞬間だった。

「んっ？」

思わず、手元を凝視してしまった。

なぜか、そのキャミソールに付着した血に妙な既視感を抱いてしまったのだ。

この血は間違いなく、先ほど卓郎から吸った血だろう。でも、どうしてこんなにも見たことのあるような形になってしまったのか。

「どうしたのかしら」

レミリアの問いで我に返った卓郎は、急いで洗濯を始めた。

※

例大祭まで残り一ヶ月となった、この日の朝。

卓郎は紙芝居の内容をまとめた紙を整理していた。今日も人里に行くのだが、そろそろ伯父に紙芝居の内容を確認してもらわないといけない。なので、今日は早めに館を出発して事を済ませてから、優花と一緒に遊ぼうと考えていた。

とはいえ、下手したら帰りが夜になってしまう可能性も無くはない。

なので、卓郎は出発前にユキとナツに護衛を頼むことにした。

夜の幻想郷は昼とは打って変わって、悪質な妖怪が多く出現しやすい。

よほどのことが無い限り、卓郎のような人間が人気の少ない道を歩くのは非常に危険なのだ。下手したら、妖怪に襲われて命を奪われることも十分に考えられる。

紅魔館にやって来たばかりの頃は、主に美鈴に護衛を任せていた。

最近ではメイドたちの実力も徐々に上がってきたので、ハルやナツなど実力のあるメイドを何人か連れて行けば、ひとまず安心して帰れるようにはなっていた。

「それなら構いませんよ」

朝食後、卓郎の頼みにナツはあっさり承諾してくれた。

紙芝居のことで話が長くなりそうだと説明したら、すぐに納得してくれた。

だが、ユキの方は困ったような顔を浮かべた。

「すいません。実は今日の夜、お嬢様と外に出ることになっているん

です」

「そうか。じゃあ、別のメイドに頼むよ」

今度はハルの方に護衛を頼んでみると、彼女はすぐに承諾してくれた。た。

「護衛ならあたしに任せなさいって。それで、何時頃に行けばいいの？」

「十八時頃かな。お菓子をごちそうしてやるから、その後、ゆっくり館に帰ろうか」

「やったーっ！ よく分かってんじゃないの」ハルは拳を握って喜ぶ。

これで今日は時間を気にすることなく、人里での休日をごせそうだ。

残りの準備を済ませ、卓郎は数人のメイドに見送られながら館を出発した。

※

紅魔館を出て数時間後、卓郎は伯父の家にお邪魔していた。

「ふむ、なかなか良い出来ではないか」

内容をまとめた紙を読み終わって、伯父は満足そうに頷いた。

伯父の隣には慧音も座っている。先に内容を確認したのは慧音であり、彼女から大丈夫だという言葉をもらって伯父も読み始めたのだ。

「私からは特に言うことはない。これなら公の場に出しても問題は無いぞ」

「ありがとうございます」卓郎は頭を下げる。

内容はパチュリーの指摘を受けながら書いた、動物の世界を舞台にした物語である。

例大祭は多くの子供も参加するということだったので、子供にも大人にも取っつきやすいような話にしてみたのだが、どうやら反応は上々のようである。

あとは本番に向けて、話し方や紙を引く瞬間を見極める練習をするだけだ。まだ一ヶ月も時間があるので、これなら余裕を持って準備ができそうである。



「ところで卓郎」紙芝居の紙を返した直後、伯父が口を開いた。

「話が変わるんだが、今日の昼飯の予定はすでに決まっているのか」

「いえ、まだ決まってはおりません」

「そうか。それなら、ここで食べていくか？」

「えっ。よろしいんですか」

「別に遠慮することはない。まだ昼だからそんなに多くは飲めないが、せっかくの休日なんだ。お前も立派な成人になったんだから一緒に飲もう」

隣の慧音も「せっかくの機会だ。少しくらいいいだろ」と誘ってきた。

特に断る理由もなかったので、卓郎はすぐに乗った。

「それじゃ、お言葉に甘えていただきます」

「決まりだな」

ここで伯父が大声で娘の名前を叫ぶ。

呼ばれてやってきた優花が襖を開けた瞬間、卓郎は小さく胸が高鳴った。実は伯父に会う直前、すでに紙芝居に関する話が終わったら一緒に会おうと約束をしていたのだ。

「なんででしょうか。お父さん」

「うむ。お前の分を含めて、今から四人分の昼飯を作ってくれないか。

卓郎と慧音先生もここで食べることになったんだ」

すると、ここで優花は口元を吊り上げてきた。

「やっぱりそうになりましたか」

「どういうことだ」

「実はこんなこともあろうかと、先に準備をしておいたのです。もうお昼の時間になっていきますし、それなら卓郎さんたちもここで食べるのかと思います」

「ほう。それなら、あまり先生たちを待たせず完成しそうだな」

「もう少々お待ちください」

襖を閉める直前、優花は卓郎に目を合わせてきて微笑んできた。

突然のことに胸が高鳴る卓郎を尻目に、襖はゆっくりと閉められていった。

「優花もだいぶ賢くなりましたね」慧音が言う。

「これも慧音先生の教えのおかげです。本当にありがとうございます」

「いえいえ。私はただ知識を教えただけです」

「何を謙遜されているのですか。あなたのおかげで優花は変わりました。知識だけではなく、人として大切なことも教えてくれました。あなたほど先生にふさわしい人物は、この里にはいませんよ」

「そこまで褒めていただけるとは……。恐縮です」

慧音は困ったような笑みを浮かべながら、軽く頭を垂れた。

遠くから、優花が調理をしている音が聞こえてくる。

それを聞きながら、伯父は卓郎に顔を向けた。

「ところで卓郎」

「はい」

「最近、優花とずいぶん仲良くやっているようじゃないか」

いきなりの発言に、卓郎はぽかんと口を開けてしまう。

伯父は苦笑いをしながら手を振った。

「別に悪い意味で言っているわけじゃない。これまで男性に対して消極的だった優花が、いきなりお前の話ばかりしてくるようになってな。最初の頃は少し驚いたりもしたが、最近の優花を見ると、どうもお前に対して好意を抱いているようなんだ」

「好意、ですか」

いぎ、他人の口から言われると、妙に新鮮な気持ちを抱いてしまうのはなぜだろう。

「それで、お前の方はどうなんだ。お前は優花に対して好意を抱いているのか」

「そうですね……」卓郎は着物を軽く握る。

もし、ここで認める発言をしたら、もう二度と後戻りができないような気がしたからだ。でも、自身の中で溢れる感情を最後まで抑えることはできなかった。

「はい。僕は優花さんのことが好きです」

ゆっくりと、そして力強く断言をした。

その答えに伯父と慧音は満足そうに頷いた。

「そうか。それなら良かった」

「相手が卓郎なら、私も歓迎できそうです」と、横から慧音も言う。

「優花の将来に関しては何も気になっていませんでしたが、これで心配は無くなりそうですね」

意味深な言葉に、思わず卓郎は訊いてしまった。

「将来？　どういうことですか」

「ああ。実はまだ優花には言っていないことなんだが――」

そう前置きしてから、伯父は質問した。

「卓郎、念のため訊いておくが、まだ独り身であるか」

「当たり前じゃないですか」

「そうか。それなら話は早い」

すると、ここで伯父は深々と頭を下げてきた。

「卓郎。どうか、優花を嫁にもらってくれないか」

突然のことに、卓郎の思考は一瞬にして真っ白になってしまった。

伯父は卓郎を真っすぐ見据えてから続けた。

「娘もいい歳だ。血は繋がっていないが二十年間、大事に育ててきた自慢の娘だ。まだまだ未熟な所もたくさんあるが、ぜひ優花を嫁にもらってくれないか」

返そうとするが、口が震えてうまく動かない。

「ごほん、と強引に咳をしてから卓郎は言った。

「で、ですが、優花さんは伯父さんの娘なんですよ」

「その所は心配いらぬ。もし、お前と優花が婚姻した暁には、義理の娘としての関係を解消するつもりでいる。もちろん、関係が解消されても、死ぬまで私の娘であることに変わりはないがな」

「とはいえ、いきなり結婚しろと言われても……」

「最初に結婚を提案したのは私だ」

「ここで口を開いたのは慧音だった。

「お前と優花が休憩処で親密に話し合っているところを初めて見た時、ものすごい衝撃を受けたんだ。卓郎と優花――ここまでお似合いの二人は絶対にいない、と私の直感がささやいたんだ」

「そう言われましても、ええと……なんて言ったらいいんでしょうか」  
「突然のことだから動揺するのは仕方ない。ただ、昔から優花を見てきた私にとっては、お前ほど相性の良い奴はいないと思ってる」

いったん間を置いてから、慧音は語り始めた。

「私が優花に知識を教え始めたのは五年前からだ。八年前の事件をきっかけに知り合ってから、よく彼女からは悩み事を相談されていてね。その頃からの付き合いだから、彼女の性格はよく知っているつもりでいる。優花はああ見えてなかなか鋭い娘だから、自分に釣り合わない人だと判断すると、すぐ消極的な態度をとってしまう癖があるんだ。決して本人は意識してやっているわけではないんだが、その癖が今日まで結婚できなかつた原因だと私は考えている。綺麗な容姿をしているから言い寄って来る男は多いが、ほとんどがうまい具合にはぐらかされて終わってしまうんだ」

ただ、と慧音は強調して言った。

「その優花がお前に対しては、非常に親密に接してくるのだ。おそれなくこれを逃したら、次の機会はないだろう。だから、私は卓郎と優花の結婚を提案したんだ」

「私も最初に慧音先生から言われた時は、思わず腰が抜けそうになってしまった」

ここで伯父は苦笑いをしながら口を開いてきた。

「優花もいい歳だから、数年前から私も『そろそろ身を固めろ』と散々言ってきたが、その時はかなり動揺してしまっただけ。つい反対してしまっただが、最終的には卓郎なら大丈夫だろうと受け入れることにしたんだ」

ここで慧音は手を握りしめながら断言した。

「私は、お前と優花には幸せになつてほしいんだ」

慧音の言葉には、妙に鬼気迫るようなものが込められていた。八年前に大きな不幸があったから、ここまで気持ちが入ってしまったのかと卓郎は解釈した。

「勝手な提案であるのは承知している。でも、お前と優花なら結婚しても、幸せな生活を掴めるような気がするんだ」

「もちろん、結論は急ぐ必要はないぞ」ここで伯父が言った。

「まだ優花にも相談していいことだし、お前だってこれまでの生活があるからな。せめて、例大祭が終わった後に具体的な結論を出してくればありがたい」

「例大祭の後ですか？」

「ああ。優花にも近いうちに相談するつもりだ。まあ、両想いなのは間違いなさそうだから、私は何も心配してないけどな」

大きく口を開けて笑う伯父に対し、卓郎は視線を床に下げる。

まさか、ここまで話がとんとん拍子に進むとは夢にも思わなかった。

優花が好きだという気持ちは紛れもなく本物であるが、結婚という発想までには至らなかった。自分には縁のないことであると、勝手に諦めていたのだ。

それが今、慧音たちの手によって間近に迫っているのだ。

紅魔館の使用人として生活していくのなら絶対に得られない、新しい生活にである。

その時、足音が卓郎たちのいる部屋に近づいてきた。

襖が開けられ、優花が皿の置かれたお盆を持ってきた。

「お待ちせいたしました」

そう言って部屋に入った瞬間、優花は首を傾げた。

「あら。みなさん、どうかしたのですか？」

「いや、少し世間話をしていただけだが」慧音が何事もなかったように答える。

釈然としない様子ながらも、優花は皿を机に置いていく。

卓郎は、無言で優花の様子を眺めていた。

昼食を済ませてから、卓郎は伯父の家を出た。

少しながら酒を飲んだせいで、気分は高揚している。昼食は優花を混ぜて四人で非常に盛り上がったものになった。これが夜だったら、もっと楽しくなっていただろう。

優花は昼食の片づけが終わり次第、約束の休憩処に来るとのことである。

卓郎は先に休憩処に入り、お茶を飲みながら待つことにした。

緑茶の苦みを舌で味わいながら、先ほどの伯父たちとのやりとりを思い返す。

もし、僕が結婚したらどうなるのだろうか？

その問いを自分の中でしてみたが、答えは明白だった。

結婚することになったら、間違いなく紅魔館を辞めることになる。

逆に紅魔館に残ることを選んだら、優花との結婚はなくなるだろう。一週間のほとんどの時間は仕事で潰れているので、両立は不可能である。

額から汗が流れてきたので、卓郎はそれを拭う。

「結婚か……」

ふと、ひとりごとを漏らす。

いったん現状のことを隅に置いて、結婚した場合の生活を何となく想像してみる。

卓郎にとって結婚は未知の領域である。

紅魔館のことはほぼ全て知り尽くしたという自念があるが、結婚生活については目の前が霧で覆われているように全く想像ができなかった。でも、優花との生活には大きな期待が持てるし、今までにない新しい幸せが掴めるかもしれない。

では、紅魔館の方はどうか。

もし、自分はこのまま紅魔館に居続けることになったら、どのような生活が待っているのだろうか。もしかしたら死ぬまで、現状のままの

生活が続くのかもしれない。

終着点まで、くつきりと見える人生である。

先の見えている人生は見えない人生よりかは楽かもしれないが、「それで満足なのか」と問われても、今の卓郎は自信を持って肯定することができなかつた。

気付いたら卓郎は湯飲みを持ったまま数分間、微動だにしなかつた。

結婚の話が出てきて、いよいよ人生の重要な岐路に立たされているのだと、実感をせざるを得なくなつた。

その時、店の暖簾から誰かが入ってくる気配がした。

そちらに目を向けた瞬間、これまでの思考が全て吹き飛んでしまつた。

優花は新しい着物に着替えて、卓郎のもとにまでやってきたのだ。先ほどの家にいた時と比べて、明らかに値段の高そうな着物を着ていた。紺色の着物は彼女の雰囲気にとても似合っており、どこことなく高貴な気配もした。

「ごめんね。遅くなっちゃつて」

優花の姿は、これまでの卓郎の悩みを一瞬にして忘れさせる力があつた。

※

優花との時間は、いつも通りの流れで過ぎていった。

もともと話が合う方なので、二人はひっきり無しに様々な話題を出しながら人里を歩いていった。時にはお店で飾られている絵画に対して議論を交わしあつたりと、高度な話題も平然と繰り広げていった。

その最中、何度か優花と目を合う瞬間があり、その度に彼女は微笑み返してきた。優花の表情からは、何とも言えない色気が込められているような気がした。

やがて、あつという間に時間も夕方になってしまった頃。

卓郎たちは、里からやや離れた小道を歩いていた。

すっかり話に夢中になつてしまったので、二人ともだいぶ疲れてし

まっていた。

「どこかに休める場所があるといいね」

「じゃあ、少し探してみようか」

卓郎の提案で二人は迷子にならないように細心の周囲を払いながら、道を進んでいく。遠くから鳥の鳴き声が聞こえてきて、だいぶ夜も迫っているようだ。

やがて、二人は目の前に小さな鳥居がそびえ立つ場所にやってきた。

「なんだろう。神社かしら」優花が鳥居を見上げながら呟く。

「でも、人の気配がしないな」

鳥居をくぐって中に入ると、正面の扉が崩壊している本堂が目に入ってきた。

人がいなくなつてから、だいぶ時間が経っているのだろう。崩壊した建物に潰されて、使いものにならなくなった石像が瓦礫から見えた。

ここに祀られた神様は一体、どんな気分でこの状況を眺めているのだろう。

「ねえ、やっぱり戻りましょうよ」優花が不安そうな顔で口を開く。

「ああ。あまり居てはいけなような場所だな」

結局、二人は寂れた神社を出て、少し離れたところで休憩することにした。

いい感じに座れる大きめの石があったので、卓郎たちは着物が汚れないように下に敷物を敷いてから、それぞれ腰掛ける。ただ、その石は横幅が短めだったので、優花と卓郎はお互いに密着する形で座ることになってしまった。

「ちよっと、狭いわね」

「うん」

「卓郎さんは、このままでも平気？」

「大丈夫だよ」

「そう」

そのまま優花は口を閉ざし、しばらく無言の時間が流れた。



日もそろそろ傾き始めており、橙色の空が名残惜しさを醸し出している。周囲の木々が初夏の生温い風に煽られて、ざわさわと騒いでいる。

「……さつき神社、ちよつと怖かったわね」

優花は声を落として話題を出してくる。

「たぶん、人がいなくなつてからだいぶ時間が経つたんだろうな」

まだ、昼の時間帯だったら好奇心で探索をしていたかもしれないが、辺りが暗くなり始めると、一変して廃墟は近づく者に恐怖を与える場所に変わってしまう。

「あそこに祀られた神様は一体、どんな気分であれを眺めているんだろうね」

「あー。それはさつき僕も考えたな」

「寂しかったりするのかしら」

「寂しい、だろうね。誰も人が来なかったら、神様の存在意義も無くなつちやうし」

優花は小さく息を吐くと、「神様ね……」と呟いた。

遠くの夕日を眺めている彼女をうかがいながら、卓郎は訊いた。

「神様がどうかしたのか」

「ねえ、卓郎さん。いきなりだけど、卓郎さんにとっての神様っている？」

唐突な質問に、卓郎は目を瞬かせる。

「僕にとつての神様って、なんか急に壮大な話になつちやつたな」

「そ、そうだよね……。ごめんね。急に変なこと言つちやつて」

「いや、別にいいんだけど」

十秒ほど沈黙の後、卓郎は答えた。

「まあ、いるとしたらいるね」

「へえ。例えば？」

「僕の命を救つてくれた恩人」

優花はきよとんとしたが、やがて理解したように頷いた。

「ああ、そうよね。卓郎さんは、その人のおかげで今の生活があるんだからね」

「じゅあ、逆に訊くけど優花さんにとっての神様はいるの？」  
「うん。いるわよ」

優花は遠くを見つめながら断言した。

「私にとつての神様はお父さんと慧音先生、あと八年前、私の家にお金を置いていった人よ」

卓郎は何も言い返せなかった。

すると、優花は再び卓郎の方を向いて視線を合わせてきた。

「あのお金が無かったら、おそらく今の生活はなかったと思うわ。少し大げさになっちゃうかもしれないけど、その人のおかげで私の命は救われたのよ」

「でも、その神様とやらはお金を置いていっただけだろ。店を再建できたのは、言うまでもなく伯父さんと優花さんの努力の結果だと思うよ」

「その人が置いていったのは、お金だけじゃないわ」

ここで優花は懐から一枚の紙を出して、卓郎に渡してくる。

それを開いた直後、卓郎は思わず声が出そうになった。

『このお金をお店のために使ってください。あなたの家族の幸せを願う者より』

だいぶ傷んではいたが、そこには八年前に書いた自分の文字があった。

「昔から疑問に思っていたの。どうして、この人は私の家にお金を置いてくれたのかなって。理由も分からなかったし、最初は妖精のいたずらかと思っただわ」

優花は卓郎から紙を取り上げて、その文章を眺める。

「結局、誰が置いていったのかも分からないまま、何年か時間も過ぎていったわ。この人が願った通りにお店も立ち直ったし、もしできるなら、その人に立派になった今のお店を見せたいわ。でも、証拠も何もなし、どうしようもなかったのよ」

なぜ、優花はこの話を詳しく述べてくるのか。

「そんな時、初めて卓郎さんが絵を売っているお店を見かけたの。でも、その時の卓郎さん、熱心に本を読んでいてね。あんまり売る気が

ないのかなって思いながら、そのまま通り過ぎようとしたんだけど、あるものを見て、つい足を止めちやつたのよ」

「ある物って？」

『絵、売ります』という看板の文字よ」

頭を殴られるような衝撃を受けた。

「卓郎さんの字って、すごく素敵だよ。絵も素敵だけど、この整った感じの文字もとっても素敵」

優花が何を言いたいのか、いよいよ卓郎にも分かってきた。だが、それはあまりにも核心を突きすぎる内容だったので、得体の知れない恐怖感すら出てきてしまった。

優花は、卓郎の左手にそつと右手を重ねてくる。

「ねえ、卓郎さん」

「はい……」

「卓郎さんを拾ってくれた農家の人ってお金持ちだったの？」

一ヶ月前にも尋ねてきた質問を、優花は繰り返してきた。

卓郎は唾を飲み込む。

ようやく、彼女が一ヶ月前に奇妙な質問をしてきた理由が理解できた。

彼女は、お金を置いていった人は卓郎かもしれないと思っているのだ。

八年前、何気なく書いたあの紙切れ一枚でここまで核心に近い推理をしてくるとは、鋭い女性だとは認識していたが、ここまでだとは思ってもみなかった。

卓郎は一瞬、優花に全てを打ち明けたい衝動に駆られた。

しかし、すぐにそれは否定した。自分が吸血鬼の館に住んでいると知った時、いくら賢い優花でも受け入れるのは難しいだろうと思ったからだ。

それに、彼女はまだ自分の推理に自信を持っていない様子である。

彼は笑いながら返した。

「ははは。また、その質問か。何度も言っているけど、僕を拾ってくれた恩人は普通の農家の人だよ。それに優花さんの言った通り、僕が本

当にお金持ちの人に拾われたとしても、どうやったら現金を用意できるんだ。あの時、僕はまだ十五歳だったんだぞ」

「ああ、うん。そうよね」

さらに卓郎は、彼女の持っている紙を見ながら続けた。

「その文字も、確かにぱつと見ると僕の字に似ているかもしれないけど、細かいところは全然違うよ。僕の字はここまで丸まった感じじゃないよ」

本当はこの八年で文字を書く機会が多くなったので、単純に文字の書き方が微妙に変わったただけである。

優花はくすつと微笑んだ。

「卓郎さん、おかしい。どうして、そこまで必死な顔で否定するのかしら」

「いや、別に必死に否定なんか……」

「まあ、その話はどういいわ」ここで優花は卓郎から手を離れた。

「少し話を戻すけど、卓郎さんのお店にあった看板がきっかけで、私は卓郎さんのお店に来るようになったのよ。最初の頃はあまり絵画に興味はなかったんだけど、卓郎さんのお店に通っていくうちに、どんな絵画が好きになっていったのよ」

「へえ。それは光栄だね」

「もちろん、あなたのこともね」

この瞬間、卓郎の心臓が大きく跳ね上がった。

二人は至近距離で目を合わせる。と、同時に甘い匂いも伝わってくる。

優花の言いたいことが、じわじわと卓郎の脳内に浸透していった。彼女の頬は夕日に染まっている。妖精メイドたちやレミアアとはまるで違う、こちらの感情を掻き回してしまうような表情だった。

八年前のことは全く関係ないのだ。

きっかけはどうあれ、卓郎と優花が仲良くなれたのは紛れもなく、この数ヶ月間で着々と付き合いを重ねてきた結果である。

どのくらい見つめ合っていただろうか。

二人の間に余計な言葉は必要なかった。

同時に目を瞑って、二人はささやかな口づけを交わした。

時間はほんの数秒間――。風のように何てことのない、自然とした口づけだった。

口を離してから、二人はまた前方に体の位置を戻した。

辺りも暗くなつてきており、夕日もそろそろ完全に山に隠れようとしていている。

「夜も近いし、そろそろ里に戻ろう」卓郎が提案する。

だが、優花は首を振った。

「もうちよつとだけ、一緒にいて」

「えっ」

「お願い」

優花の甘えるような視線に、卓郎は否定できるわけがなかった。

しばらく二人は沈んでいく夕日を眺めながら、残りの時間を過ごしていった。

その間に二回、口づけを交わした。

ほんの少しだけ心に余裕ができたせいか、二回目の口づけで、初めて優花の唇はとても柔らかいことを実感できた。

ハルたちとの約束の時間も迫っていたので、卓郎は先に里に戻ることにした。

優花はしばらくその場にいるとのことだった。「大丈夫か」と卓郎は心配したが、優花は苦笑いをしながら「別に里から遠くない場所だし大丈夫よ」と返してくれた。

また一週間後に来ると約束して、卓郎は優花と別れた。

帰り道、卓郎は自分の唇に触れながら、先ほどの出来事を何度も頭で繰り返し返した。

※

午後六時、約束の場所にはすでにハルとナツがいた。

「お疲れ様です、卓郎さん」

ナツの言葉に卓郎は「ああ」と、ぼんやりと答えた。

「紙芝居の方は順調に進みましたか？」

「うん。あとは本番を想定して練習するだけだね」

「ねえねえ。そんなことはいいから、早く食べにいこうよ！」ハルが急かしてくる。

「ああ、そうだな」

早速、卓郎たちは近くの休憩処に寄ることにした。

席に座ってからすぐにハルはお汁粉を、ナツは団子を頼んだ。

意地悪なことに二人とも少し値段が高めの品物を頼んできたので、卓郎はお茶一杯で我慢することにした。ただでさえ、優花との付き合いでお金を消費しているので、なるべく節約をしなければいけない。

おいしそうに頬張るメイドたちを尻目に、卓郎は先ほどのことを思い返す。

まだ、頭の中は先ほどの甘い出来事に心を奪われていたのだ。

「あの、どうかしたんですか」

ナツの言葉に、ぴくんと卓郎の体が跳ねる。

「さっきからずっと上の空になってますけど、何かあったんですか」

「い、いや……。別になんでもない。気にしないでくれ」

「私ではたいした力になれないかもしれませんが、何か悩みごとがありましたら相談に乗りますよ」

心配そうに見つめてくるナツに、卓郎は少し胸が痛んだ。どうやら、深刻な悩みを持っている風に捉えられたらしい。ある意味、それも当たりではあるが。

「心配してくれてありがとう。でも、大丈夫だから」

「そうですか……」

ナツはそう言ってくれたが、横で様子を見ていたハルが口を開いた。

「大丈夫だと言ってもさー。一人で抱えてて大丈夫なの？」

「ああ。これは僕一人で解決しなくちゃいけない問題だから」

「ふーん。リーダーがそう言うんなら、あたしはそれでいいんだけどね」

ハルはそう呟いてから、お茶を飲んで口直しをする。

これも彼女なりに、卓郎を心配しての言葉だったのだろう。

卓郎もお茶を飲んで、長い深呼吸をする。

二人のおかげで、少しだけ冷静さを取り戻すことができたようだ。自分は例大祭まで、紅魔館に残るか結婚をするかを決めなくては行けないのだ。

いくら優花との付き合いが順調に進んでいるとはいえ、レミリアに対する忠誠が完全に無くなったわけではない。

まだ、結論を出せない状態にいるが、もう少し冷静になってから、真剣に考えていこうと卓郎は心に決めた。

その直後、前方の暖簾が開いた。

中に入ってきたのは、あろうことか慧音だった。

あっ、と軽く声をあげた瞬間、卓郎と慧音の目が合う。

妖精メイドと一緒にいる状況で、慧音に出くわしてしまった。まずいと思ったが、もうどうしようもなかった。慧音は早足で卓郎に近づいてくる。

「良かった。まだ、里にいたか」

だが、慧音は二人のメイドをちらっと見ただけで、何も言及してこなかった。しかも、いつも冷静沈着な慧音にしては、どこか落ち着きのない様子だった。

「先生。どうかしたんですか」

「お前、優花とはいつ別れた？」

唐突な問いに、卓郎は訝しげな顔になる。

「一時間前くらいですけど、優花さんがどうかしたんですか」

「実は、優花に用があつて着物屋に行ったんだが、まだ帰ってきていないよなんだ。だから、こうして優花がよく訪れる場所を回っていたんだ」

「優花に用って、どんな用だったんですか？」

「なんてことない。優花に貸した本が急に必要になったから、返しに行っただけだ。——それで改めて訊くが、優花とは本当に一時間前に別れたんだな？」

「そうです」

「そうか。そうになると、おかしいな。思い当たるところは全て回ったんだが、ここにもいないということは……一体、優花はどこに行った

んだ」

ここで初めて卓郎は嫌な予感を抱いた。ハルとナツがいる中で優花の話をするのはわずかに抵抗があったが、そんなことを気にしている暇はなかった。

「あの、先生」

「どうした」

「実は僕が優花さんと別れたのは、里の郊外だったんです」

慧音の表情は急激に険しくなる。

「郊外だと？」

「はい。ここから北の方に、もう使われていない神社がありますよね。その近くで優花さんと駄弁ってしまして、その後に別れました。優花さんが『もうちよつとここにいる』と言いましたので、僕が先に里に戻ったんです」

「となると、まだ外にいるということか」

嫌な沈黙が二人の間に流れた。

いくら人里に近いとはいえ、夜の外は危険であるのはお互いに承知している。

しばらくしてから、慧音は卓郎にぼつりと言った。

「……卓郎。そこに案内しろ」

彼もこくりと頷き、何も言わずに立ち上がった直後だった。

「ねえ、ちよつと。もしかして、里から出ようとしてるの？」

二人に向かって声をかけたのはハルだった。卓郎は目線で「止める」と指示したが、ハルの目は慧音に向けられていて伝えられない。「外に出るのは危険だわ。もし、外に出ている途中に凶悪な妖怪に襲われたりしたら、どうするつもりなの。人間だけじゃ対処できないわよ」

「お前、妖精か」慧音は目を細める。

「見るからに並みの妖精とは違う感じがするが、いったい何が言いたいんだ」

「あたしがあんたたちの護衛をしてやるってことよ。自分でも言うのも難だけど、あたし、これでも結構そういったことに自信はあるのよ」



慧音の返事は即答だった。

「気持ちはあるがたいが、今回はやめておこう」

「ええーっ！　なんでよ」

「万が一、凶悪な妖怪に襲われたとしても、切り抜けられると思っ  
てるからだ」

これにはハルだけでなく、横にいた卓郎も言葉を目を見開く。

彼女の言葉に、並々ならぬ自信が込められていたからだ。どうして  
そこまで断言できるのか卓郎には分からなかったが、ハルを黙らせる  
にはそれだけで十分だった。

ハルは慄きながらもつぶやいた。

「あんた、いったい何者なのよ……」

「ただの寺子屋の教師だ。——卓郎。時間がない。急ぐぞ」

慧音がこちらに背中を向けたと同時に、卓郎はナツの耳元で「明日、  
朝五時にここで」とささやいた。今日は里に泊まって、早朝に館に帰  
ることにしたのだ。

店を出てから、二人は神社の方向へと走り始めた。

その間に、卓郎はあることを思い出して不安で一杯になった。今日  
の朝、護衛をユキに頼もうとした時、彼女はあることを理由に護衛を  
断ったのである。

今日の夜、ユキはレミリアと一緒に外に出ていくからという理由  
だ。

——まさか、そんなことは。

自分の中で考える最悪な結末を必死で否定しながら、卓郎は足を動  
かしていく。

里の外は明かりのない漆黒の暗闇が全てを支配しており、彼らは事  
前に用意した松明を片手に夜の道を駆け抜けていった。

そして外に出てから数十分後、彼の予測は最悪の形で迎えてしまっ  
た。

つい一時間ほど前まで、卓郎と優花が話し合っていた場所——。

その近くの草むらで、一人の女性が仰向けに倒れていた。

いかにも高級そうな紺色の着物を着ている女性の上半身は血で染

まっっており、その首筋には何かに噛まれたような痕があった。

慧音と卓郎は数秒ほど、時間が止まったようにその場から動けなかった。

「あっ……あっ……」

松明を持つ手が、どんと震えていく。

ついさっきまで魅力的な笑顔を浮かべていた彼女が、血まみれで倒れていたのだ。

自分の中で大切にしていた何かが、今にも壊れようとしていた。

だが、ここで横から慧音の手が伸びてきた。

「卓郎。ちよつと待て」

慧音はゆっくりと倒れた優花の体へと近づいていく。そして、おもむろに優花の首筋に手を当てる。慧音の目が大きく見開いたのは、その直後だった。

「……急げ、運ぶぞ」

「えっ」

「まだ脈がある。急げ。早く医者のところへ運ぶんだ」

慧音の冷静な言葉を受けて、卓郎も体を動かし始めた。

優花を里に運び終えてから三時間が経った。

卓郎は慧音の家の中で、じつと主の帰りを待っていた。

優花をおぶって運ぶ際、彼女の上半身に付いていた血で思いつきり着物を汚してしまったので、現在の卓郎は伯父の店に余っていた着物に着替えていた。すでに時刻は夜で、唯一の光源は机の上に置いてある小さなろうそくのみである。卓郎自身、ろうそくの明かりは好みだったが、今は何とも言えない虚しさを醸し出しているように見えた。

幸いなことに優花は血まみれだったにも関わらず、軽傷だった。すでに意識を取り戻しており、今は伯父の家で静養中である。

「最初は時間との勝負かと思っただが、意外にも傷が少なかった」

一時間前、医者と一緒にいた慧音が細かいことを卓郎に説明してくれた。

優花の傷は首筋に噛まれたような痕がある以外、一つも無かったそうである。

では、傷が首筋しか無かったのに、どうして彼女は血まみれだったのか。

この問いに対して、慧音は腕を組みながら答えた。

「これはまだ推測の領域でしかないんだが、どうやら優花を襲った妖怪はその血を吐きだしてしまった可能性が高いんだ」

「血を吐きだした？」

「首筋に噛まれたような痕があると言っただろう。おそらく、その妖怪は優花の首筋から血を吸った後、そのまま吐いてしまったのかもしない。血だまりからは少量だが、唾液らしき液体も見つかっている。もちろん、吐きだした理由は私にも分からないがな」

人間の血を吸う妖怪が、どうして血を吐きだした——。

卓郎の思考はいよいよ混乱してきた。思い当たる節は大いにあるのだが、それを前提にすると、話が大きく矛盾してしまうのである。

その後、伯父が慧音の家にやってきて、現在の優花の状況を話してくれた。

「もう大丈夫とのことだ。安静にしていれば、すぐに日常生活に戻れるとのことだ」

「そうですか。それは良かったです」 慧音が言う。

「あの、伯父さん」ここで卓郎は深く頭を下げた。

「この度は申し訳ございませんでした。僕が優花さんと里の外で別れなければ、このようなことにはなりませんでした。明らかに僕の不注意です。申し訳ございませんでした」

「ああ、全くだ」

断定した伯父の口調に、卓郎は口を噤む。

「いくら妖怪が人間をあまり襲わなくなつたとはいえ、夜に女性を一人残して先に帰るとは何事だ。外の危険性を知っているなら、どうして一緒に連れて帰ってこなかった」

「ごもつともなことだと思ひ、卓郎は素直に謝罪した。

「申し訳ございませんでした」

「まあ、いい。優花が生きていたのだから、それ以上のことはない。でもな、卓郎。もし、本気で優花と結婚したいのであれば――」

伯父はいったん言葉を切る。

「死ぬ気で嫁を守れ。それが男つてもんだろ」

今の卓郎にとって、その言葉は非常に重たいものであった。

その後、伯父と慧音は状況を確認するということで外に出て行ってしまった。手持ち無沙汰になった卓郎は、思考を再開させて慧音の帰りを待つことにした。

まず、この事件の犯人は間違いなく、主であるレミリアだろう。

定期的にレミリアは夜になるとユキ、もしくはナツを連れて外に出ていき、たいがい服を血で汚して帰ってくるのだ。彼女は吸血鬼である。いったい外で何をしているのか、さすがの卓郎もある程度は予想できる。

しかし、ここで犯人をレミリアとすると、ある一つの矛盾が生じてしまう。

——なぜ、レミリアは優花を殺さなかったのか。

もちろん、優花が生きていたという事実は不幸中の幸いである。もし、あのまま彼女が死んでいたら、今ごろ自分はまともな精神状態ではなかっただろう。

ここで卓郎は一つの仮説を立ててみる。

レミリアが卓郎の知り合いを獲物にしていると気付いて、あえて殺さなかったという説である。

だが、すぐにそれは却下した。

レミリアは優花の顔を知らない。おまけに卓郎も紅魔館の中では、なるべく優花の話をしてこなかったので、レミリアたちが卓郎と優花との関係を知る由もないのだ。

そうなる、レミリアにとって、優花はいつもの獲物に変わりないことになる。

獲物の首に噛みついて、相手が冷たくなるまで血を吸うのを止めない——。卓郎はこの八年間、常にそうやって主人は人間を襲ってきたのだと思い込んできた。

思い込んできた？

その直後、卓郎は大きく咳き込んでしまう。

しかも、勢いが尋常ではない咳で、喉が潰れてしまうのではないかと思うくらい、彼は激しい咳を何度も繰り返した。

ようやく咳が収まって、卓郎は目を瞬かせる。

最近、どうも体調が良くないようである。

おまけに胸もかなり締め付けられる感覚がして、かなり不快である。

しばらく、貴重な休日全てを里に行くことに費やしていたので、もしかしたらまともに休んでいないことが原因かもしれない。

卓郎は深呼吸をして、改めて思考の世界に戻ろうとする。

その時、扉が開かれて慧音が家に戻ってきた。

「先生。優花さんはどうでしたか」すぐに卓郎は尋ねる。

「心配するな。命に別条はない」

そして慧音は、卓郎と向かい合う位置に座った。

「さつき、少しだけだが優花が目を覚ました」

「本当ですか？」

「ああ。本当だ。その時、いったい何が起こったのか覚えているか、と優花に尋ねてみたんだが、どうやら何も覚えていないらしいんだ」

「何も覚えていないんですか」

「一人でいる時、いきなり眠気がやってきて、気付いたらこの場所に寝ていたということだ。だから、どんな妖怪が襲ってきたのかすらも分からない様子だった」

「それでは、どうしようもなさそうですね」

「そうだな。目撃者もないし、このままでは犯人の特定も難しいだろうな。まあ、優花も生きていることだし、今回は夜になったら一人で里から出るな、と注意する程度に済ませておこうかと思っている」

「こればかりは仕方のないことである。」

「ところで」と、ここで慧音は声を落としてきた。

「卓郎。今から言う質問に正直に答えろ」

「えっ」

「お前は私や優花に対して、何か大きな嘘をついているんじゃないか？」

卓郎の体が瞬時に固まった。慧音は腕を組んで続ける。

「あの時は優花のこともあったから何も言わなかったが、私が休憩処に入った時、お前は妖精と一緒に食事をしていた。見たところ、だいぶ洗練された感じの妖精だったな。これは私の直感だが、少なくとも野生にいるような妖精ではなかった」

口を閉ざしたまま、卓郎は視線を下げる。

「そういえば、私と卓郎が久しぶりに再会した時も、あんな感じの妖精がいたよな。あの時は、たまたまお前が介入してきたのだと思っていたが、以前からあの妖精と知り合いだったと考えると、お前が面倒な揉め事に介入してきた理由も分かる」

卓郎は観念したように頭を落とす。

「……やっぱり、見られていましたか」

「当たり前前だ。さすがに見逃すほど私の視野は狭くない」

「はい。先生の言う通り、僕は嘘をついてました」

「どうして嘘をついた」

「……………」

「しゃべれない事情があるのか」

その問いに対し、卓郎は最後まで黙ったままだった。

「まあいい。こんな時にお前の素姓を調べても仕方ないからな」

ろうそくの火が、ゆらりと揺れる。

ここまで来ると、慧音に紅魔館のことが分かってしまうのも時間の問題だろう。結婚の話もどうなるか、全く予測がつかなくなってしまう。

それなら好機は今しかないと思い、卓郎は思い切って口を開いた。

「先生。僕からも一つ訊きたいことがあるんですけど、いいですか」

「なんだ」

「優花さんのように、人間が襲われる事件は昔から発生していたんですか？」

今度は慧音が目を見開く番だった。その表情で卓郎は察した。

「やっぱり、昔からあったそうですね」

「どうして知っている」

「いえ、単なる予測ですよ。それに優花さんを見つけた時、先生は驚くほど冷静に対処してくれたじゃないですか。もしかしたら、昔から同じような事件が発生していたのではないかなって思ったんです」

ろうそくの火に照らされながら、慧音は諦めたように長い髪を掻いた。

「お前の言う通りだ。優花のような事件は、今日に始まったことではない。昔から定期的に、里の人間が外で襲われる事件が起こっていたんだ」

「定期的とは、もしかして二、三ヶ月に一回くらいの頻度ですか？」

「まあ、だいたいそれくらいだろうな」

「被害者はみんな死んでいなかったということですね」

「卓郎」慧音は険しい表情を見せる。

「一体どうしたんだ。どうしてお前はそこまで一連の事件に対して、

分かったような口ぶりができるんだ」

「ごめんなさい。その質問につきましても、答えることができません」  
「答えられないという回答ばかりだな」

「……すいません」

「それならば一つ、取引をしよう。お前が抱えている秘密を全て打ち明けてくれたら、私も抱えている秘密を全て話すことにしよう」

突然のことに卓郎は背筋を張る。

そして、その言葉が意味していることを彼は聞き逃さなかった。

「つまり、先生も何か隠していることがあるんですね」

「それを判断するのはお前自身だ。——さて、どうする?」

張りつめた二人の視線がぶつかる。

これ以上の情報を得るには、自分の手札も公開しなければいけないさ  
そうだった。

そうになると、別の手段を使って情報を得たほうが良いかもしれない。  
い。

その手段とは言うまでもなく、主人であるレミリアに問い詰めることである。レミリアに問い詰めることを優先させると、ここで慧音に全てを打ち明けても自分が不利になるだけではないか。

そう判断した卓郎は大げさに息を吐いた。

「先生。今日はここで止めに行きましょう」

急に話を変えてきたので、慧音は訝しげな表情になる。

「いきなりどうした」

「取引はいったん保留にしまして、今日はお互いに体を休めるということにしませんか。優花さんも生きていましたし、これ以上、起きていても仕方ありませんからね」

「そいつはまだ唐突な提案だな。何か別のやり方でも思いついたのか?」

「判断するのは先生自身ですよ。——さて、どうしますか?」

先ほどの慧音と同じ言葉を返す。

「お前な……。うまいこと言ったつもりだが、話の逸らし方が下手すぎるぞ」



苦笑しながらも、やがて慧音は頷いた。

「まあ、いい。私もそろそろ疲れて、正常な思考ができるかどうか不安になっていたところだ。今日のところはいったん保留にして、頭を休めることにするか」

「ありがとうございます」

ふうっ、とあからさまに息を吐いて慧音は立ち上がった。

「それじゃあ、私は隣の部屋でいったん仮眠をとるが、お前はどのようなつもりだ」

「ここに座布団がありますので、これを使っていいのかなと思います。この部屋で眠っても大丈夫でしょうか」

「別に構わないが、そんな座布団一枚で平気なのか？」

「これくらいなら平気です」

「まあ、迷惑をかけない程度にはしてくれよ」

ろうそくの火を消してから、慧音は部屋を出ていった。

途中で投げ出すような終わり方になってしまったが、体力的に限界だったのは事実である。卓郎は用意された座布団に頭を乗せて、すぐに眠りこんでしまった。

※

翌朝、まだ日も出始めた頃に卓郎は目覚めた。

家の中を見回してみると、どうやら慧音は不在のようだった。固い床の上で寝てしまったので、すっかり体の節々が痛くなってしまった。それを堪えながら卓郎は書き置きを残して、慧音の家を出た。

ほとんど人通りのない道を歩きながら、優花の様子を見に行こうかと考えた。だが、こんな時間だとおそらく眠っているだろうと思いつつ、すぐに却下した。

約束の場所に着くと、すでにナツとハルが待っていた。

「おはようございます」二人はそれぞれ頭を下げる。

「おはよう。昨日はいきなりごめんな」

「あれくらいは別に構いませんが……」と、ナツ。

「あの後、どうなったのか、あたしたちにちゃんと説明してちょうだい」と、ハル。

「分かってるよ。帰りながら説明するよ」

これは仕方ないと思い、卓郎は昨晚のことを説明した。

とはいえ、優花が血を吸われたことは伏せることにしたので、説明がやや曖昧な感じになってしまった。訝しげになりながらも、最後は二人とも納得してくれた。

歩きながら、改めて卓郎は昨晚のことを思い返す。

慧音の言動を振り返ってみると、優花が襲われた事件に関して何か隠していることがあるのは明らかだった。そして、そこにはレミリアも大きく関係しているだろう。

明るくなってきた空を見上げながら、卓郎は一つの仮説を立てる。

もし、今まで自分が思っていたことが全て間違이었다らどうなるか――。

この仮説に立った瞬間、決定的な証拠が頭に浮かんできた。昨晚の事件も、まさにその証拠が優花の体に残っていたではないか。

卓郎は自分の左肩に振れる。もう何十回も彼女に噛まれたところだ。

頭の中で何度も自分の推理を確認してみたが、これ以上はレミリアに問い質さないと分からないことだった。そして、それは非常に危険な行為であることも承知していた。自尊心の高い彼女のことだ。何らかの反発は免れないだろう。

だが、レミリアに何も問い質さないという選択肢はなかった。

自分が好きになった女性を傷つけられてしまったのだ。それで何も言わないのは、男として人間としてあまりにも情けないことである。今回のことばかりは、さすがの卓郎も感情を抑えることができなかった。

もしかしたら、これで長い間、疑問に思っていたことが解消するのかもしれない。もう、紙芝居や結婚のことを考えている余裕はなかった。

卓郎は逸る気持ちを抑えながら、館へと歩き続けた。

※

紅魔館に帰ってきた卓郎は、ひとまず朝の仕事に入った。昨日はま

ともな睡眠がとれなかつたので気分は冴えなかつたが、気合いで何とか済ませた。

日もだいぶ昇ってきた頃、レミリアは食堂に入ってきた。

「おはようございます。お嬢様」

真つ先に卓郎が挨拶をする。周りのメイドもそれに従う。

レミリアはいつも通りの澄んだ顔で、「おはよう」と答えた。

すでに他のメイドは全員、食事を済ませている。

以前はメイドの食事時間は各自の自由となっていたが、そうなる食事当番の負担が大きくなってしまうので、五年前からメイドたちの食事の時間を統一させることにしたのだ。朝食の場合は、必ず九時から十時の間に済ませるようにメイドたちに命令をしている。

なので、レミリアが食事をする時は必ず一人になってしまう。

彼女の朝食時間はいつも十一時過ぎである。とはいえ、結果的に誰にも邪魔をされずにゆつたりと食事ができるようになったため、レミリア自身は「これはいいわね」と答えてくれた。

レミリアは席に腰掛けると、卓郎に目を向けてきた。

「あまり顔色が良くなさそうね」

「昨日、あまりよく眠れなかつたので……」

「ふうん。じゃあ、昨日はどうして帰ってこれなかつたのかしら。ハルとナツに問い詰めてみたけど、彼女たちもよく状況を把握してない様子だったわ。まさか紙芝居のことで議論になってしまった——なんて馬鹿な言い訳はしないよね」

レミリアは挑発的に目を細めてくる。

卓郎は唾を飲み込む。もう逃げることはできない。

「昨晚、僕の知り合いの女性が何者かに襲われたという知らせを聞いたからです」

それを聞いて、レミリアの体がわずかに反応する。

「へえ、あなたに女性の知り合いがいたなんてね。意外だわ」

「その女性は、よく僕の絵を買ってくれる常連客でした」

「なるほど。それは運が悪かつたわね」

「でも、その女性は生きていました」

「不幸中の幸いね」

「その女性の首筋には噛まれたような痕がありました」卓郎は自分の首筋に触れる。「そして、その痕はお嬢様が吸血をなさる時にできる噛み痕と全く同じでした」

その言葉に、レミリアは何も答えない。

二人の重たい雰囲気を感じ取ってか、どのメイドもその場で固まったように動かなかった。彼女たちのことも考慮して、卓郎はメイドたちに言った。

「悪い。みんな少しの間だけ外で待っていてくれないか」

食堂のメイドたちが出て行った後、卓郎はおもむろに言った。

「お嬢様。どうして今まで僕に嘘をついていたのですか」

レミリアは体を卓郎に向けてくる。

「嘘をついていたとは、どういうことかしら」

「どうしてお嬢様はこの八年間、いかにも人間を殺してきたような振る舞いをしてきたのでしょうか。それが気になって訊いているんです」

彼女の視線が鋭くなる。

「振る舞い？ この私が？」

「昨晚、僕の知り合いの女性が襲われました。犯人は間違いなくお嬢様——あなたです。でも、その女性は死んでいませんでした。そして別の知り合いによりますと、これまでも同様の事件が人里でかなり起こっているという話を聞きました」

卓郎の声が高くなる。

「これがどういう意味になるか分かりますか？ つまり、お嬢様は以前から人間を襲ってはきましたが、どれも止めは刺していないんです。でも、お嬢様はこの八年間、常に僕の前では人を殺してきたかのような振る舞いをしてきました。どうして、わざわざ僕を恐れさせるような言動をしてきたのですか？」

「言っている意味が分からないわ」

「とぼけないでください。僕だって一人の人間です。いくら赤の他人であろうと、人間が殺される話を聞いて良い気持ちになれるはずがあ

りません。本当は人間を殺していないのなら、どうしてその事実を僕に話してくれなかつたんですか。まさか、僕を怖がらせるために、わざとあのような言動をされてきたのでしょうか」

すると、ここでレミリアは笑ってみせた。

「また来たわ。あなた得意の詭弁。話を聞いてると、私が実は臆病者だったような言い方をするじゃない。あなたじゃなかったら、その場で殴り殺しているところよ」

「臆病者なんて……そんなこと一言も言っていないじゃないですか」

「あなたはそう思っていたとしても、私はそう思ってしまうのよ。それに証拠もないのに、臆病者の扱いをされるとは心外ね」

「物的な証拠はありませんが、状況的な証拠ならあります」

卓郎は自分の胸元に手を当てた。

「血だまりです。お嬢様は人間の血を吸ってきた後、いつも胸元のところ血だまりを残して帰ってきますよね。これまでは人間の血を吸う時に付着してしまつたものかと考えてきましたが、状況的にそれは不可能なんです」

「はっ?」

「昨晚、襲われた女性の上半身にも血だまりがありました。そして、ここからは唾液らしきものも見つかりました。普通に血を吸うだけでしたら、唾液は首筋の辺りにしか残りません。ここで考えられる説は一つです。それはお嬢様は女性の血を吸った後、その場で吐きだしてしまつたからです」

レミリアの表情が固まる。

以前、一度だけ血の付いたキャミソールを洗う機会があつた。卓郎から吸血をした後に誤って、その血を吐きだしてしまつた時のことである。

その時のキャミソールは、胸元に大きな斑点のような血だまりができてしまい、少量の唾液も付着していた。

唾液の有無はともかく血だまりの形はまさに、レミリアが人間の血を吸い終えて帰ってきた時、服に付いていた血だまりの形とよく似ていたのだ。もし、服を洗う機会がなかったら、卓郎は今日の事実に気

付くことはなかっただろう。

「お嬢様」

卓郎は気持ちを落ち着かせてから、言葉を紡いだ。

「たとえば、今のことが事実でありましても、僕がお嬢様をお慕いする気持ちに変わりはありません。ただ、僕は本当のことが知りたかっただけなのです」

すると、ここでレミリアが席から立ち上がる。

腹部に重たい衝撃が走ったのは、その直後だった。

一瞬、何が起こったのか理解できなかった。

衝撃で後ろに吹き飛ばされた卓郎は、そのまま後方の壁に背中から激突してしまい、がはつ、と呻き声をあげて、そのままうずくまってしまう。あまりの衝撃に胃の中身が出そうになったが、何とかそれは抑えた。

ここでようやく、卓郎は腹部を殴られたことを理解した。

先ほど立っていた場所から壁までは、大人の身長三人分ほどの距離がある。拳一つで成人の男をここまで吹き飛ばしちゃうとは、やはり吸血鬼の力は並大抵ではなかった。

「卓郎。調子に乗るのもいい加減にしろよ」

レミリアが顔を歪めながら、こちらに向かつて歩いてきた。

「さつきからいろいろとわけの分からないことをほざいているけど、つまりあんたは私のことを馬鹿にしているということね」

「そんな……こと、ありません……」

「さつきも言ったけど、あんたは馬鹿にしていなくても、私にはそう聞こえるんだよ。これは明らかに私に対する侮辱ね。少しばかり周りから評価されているからと言って、人間風情が吸血鬼を馬鹿にするなんて百年早いんだよ」

殺気立った様子で、レミリアは背中中の羽根を大きく広げる。

その拍子で、横に置いてあったテーブルが羽根に引つ掛かって吹き飛んだ。

「私たち吸血鬼は常に誇り高く、周囲のあらゆる種族の頂点に立っていないか、いかなければいけないの。対立する者は容赦なく叩き潰す。同調す

る者は絶対的に服従させる。私たちスカーレット家は、常にそのようにして頂点に立ち続けてきた。それを否定する奴は、どんな奴だろうと許さないわ。でも、まさか私に忠誠を誓ったはずのあなたから、そんなことを言われるとは夢にも思わなかったけどね」

「……本当に、頂点に、立ってきたのでしょうか」

搾り出すかのような卓郎の言葉に、レミリアは大きく目を見開く。

額に脂汗をかきながら、卓郎は思わず微笑んでしまった。

彼にとって先ほどのレミリアの言葉は、なぜか強がりにはか聞こえなかったからである。これも長い間、常に彼女の横で働いてきたからこそ何となく分かるものだった。

ようやく腹の痛みも収まってきた。

壁に背を預けたまま、卓郎は口を開いた。

「この八年間、常に僕はお嬢様と一緒に過ごしてきました。でも、その中で一日たりとも、お嬢様が名誉ある吸血鬼にふさわしい行動をとっているところを見たことはありません。紅茶を飲みながら、のんびりとしている姿ならよく見かけましたけどね」

レミリアは歯ぎしりを立てて、鋭く尖った爪を構えてくる。

ああ、もしかしたら本当に殺されるかもしれないな、と卓郎は思った。

でも、殺される恐怖以上に、レミリアに言葉を伝えたい気持ちが先行した。

「お嬢様。少しだけ肩の力を抜いたらどうでしょうか」

卓郎は口調を柔らかくして言った。

「僕から言わせてもらいますと、お嬢様は『自分の家がどう見られているか』ということに意識が傾きすぎていると思うんです。少しは自分に正直になられた方がいいのではないのでしょうか。お嬢様はスカーレット家の長女であると同時に、レミリア・スカーレットという吸血鬼でもあるんです。周りの目ばかりを気にしていますと、いつかは自分を苦しめることになってしまいますよ」

「黙れ！」

瞬間、鼓膜が破れんばかりの破壊音が響いた。

卓郎の顔のすぐ横には、彼女の左腕があつた。レミリアの腕はそのまま壁を貫通していた。さすがの卓郎も、これには思わず体を震わせた。

彼女は眉をひそめながら、至近距離で顔を合わせてくる。

「青二才が分かつたような口ぶりしてるんじゃないわよ。まだ生まれて二十年そこらしか経ってない人間に説教されるほど、私は落ちぶれていないわ」

ここでレミリアは左腕を引く。ほこりが舞った。

「今回ばかりは、お仕置きという言葉で許すわけにはいかないわね。いくら相手が卓郎であろうと、スカーレット家を侮辱した罪は重い」  
彼女が卓郎から一步引いた直後、腕から紅い光が集まってくる。

「制裁よ」

紅い光は徐々に剣のような形を作っていく。

いよいよ卓郎の中で、本気でまずいと思った時だった。

「お嬢様。どうかお止めください！」

騒ぎを聞きつけたのか、外で待機していたメイドたちが中に入ってきたのだ。メイドたちはユキを筆頭に、卓郎とレミリアの間を割り込むようにしてやって来た。

レミリアはメイドたちを睨みつけて、紅い剣を握りしめた。

「ユキ。そこらどきなさい」

「お嬢様。どうか攻撃を止めてください」

「二度は言わないわよ、ユキ」

レミリアの圧倒的な雰囲気、卓郎の前にいた全てのメイドが震えた。

「だ、大丈夫です。何があっても、卓郎さんだけはみんなですりましますから……」

彼の耳元でアキが小さくつぶやくが、その顔は今にも泣きそうだった。

何人かのメイドたちも卓郎をかばうかのように、彼の周りを囲っていた。

腹の痛みは収まってきたとはいえ、まだまともに動ける状態ではな



い。

ユキは気丈にも、卓郎の前から離れなかった。

「お嬢様。どうか落ち着いてください」

「あなたたちは細かい話を聞いてないから分からないと思うけど、あそここの人間は生意気にもスカーレット家を侮辱したのよ。それで何も制裁を加えないことになったら、その時点でスカーレット家は人間に屈したことになるのよ」

レミリアはユキの胸元に剣を向ける。

「痛い思いをしたくなかったら、そこからどきなさい。いくら妖精は死なないからと言って、ものすごく痛いのは嫌でしょ？」

「そ、そうですけど……」ユキは手を握ってから断言した。

「でも、ここを離れるわけにはいきません。お嬢様。どうか剣をお引きください」

レミリアは舌打ちをした。

「ユキ。あんたの卓郎に対する忠誠ぶりには恐れ入ったわ。でも、ここにいる彼はスカーレット家を侮辱しただけでなく、生意気にもこの私を臆病者扱いしてきたのよ」

レミリアは剣を持っていない左手を胸に置いて、声を張った。

「この館の頂点は私なのよ！ 誰も逆らうことは許されないわ！ 逆らう奴は容赦なく制裁を与える。——だから、ユキ。私の命令に従いなさい」

「もし、私がここから離れたら、卓郎さんを殺してしまうのでしょうか」

「当たり前じゃない」

「卓郎さんは死んでしまったら、もう二度と戻ってこれないですよ」さつきまで余裕のあった彼女の表情に、わずかな動揺が生まれる。

「卓郎さんは妖精ではありません。人間です。命を失ってしまったら、もう二度と戻ってこれないんです。それでも、お嬢様は卓郎さんに制裁を加えるつもりなのでしょうか」

「黙れ！ 妖精の分際で偉そうな口を叩くな。お前も消し炭にするぞ！」

紅い剣の周囲に、異様な光が纏わり始める。  
場の緊張がいよいよ頂点に達した瞬間だった。

「そこまでよ、レミィ」

食堂の入口の方から、淡々とした声が聞こえてきた。

目を向けると、扉の前にはパチュリー、小悪魔、美鈴の三人が立っていた。

レミリアは剣を強く握りしめて、扉の方に顔を向けた。

「あら。パチエがこんな所に来るなんて珍しいわね」

「アキが能力で教えてくれたのよ。かなりまずい状況だと聞いてね」

パチュリーは呆れた素振りです、レミリアの前までやって来た。

「細かい事情は分からないけど、そこまでにしておきなさい。当事者である卓郎はともかく、メイドにまで迷惑をかける必要はないわよ」

「それじゃあ、私の気が済まないわ」

「あのね……。人間の挑発にまんまと引っ掛かってんじゃないわよ。  
この館の主人なんだから、そこは主人らしく寛大な態度を見せておきなさいよ」

「パチエ。もしかして、あんたも卓郎に肩入れするつもり？」

「別にそういうわけじゃないわよ」パチュリーはあからさまに大きな声で返した。「細かい事情は私もよく分からないからね。ただ、こんなところで血生臭いことを起こしても後処理が面倒なだけだし、卓郎だって決して役立たずではないし、死なれると困るからここまでやってきたのよ」

食堂にいる全員の視線がレミリアに集まる。

無言の時間がしばらく続いた。

やがて、その沈黙を破るかのようにレミリアは大きく息を吐いた。

「……どうしてかしらね」

天井を見上げながら、持っていた紅い剣を消滅させる。

「能力も地位も名誉も財産も何もかも全て、こんな人間より勝っているはずなのに、どうしてみんな私の言うことに従ってくれないのかしら」

「ここでレミリアは卓郎に視線を向けて、ぽつりと言った。

「出て行きなさい」

「えっ」

「今すぐ、ここから出て行きなさい。今日付けであんたを解雇するわ」  
突然のことに、卓郎とメイドたちがどよめく。

「お嬢様！　いくら何でもそれは……」ユキが言う。

「卓郎はスカーレット家を侮辱した。その事実に変わりはないわ。あの程度は館に貢献していたことは認めるけど、忠誠心の無い奴に紅魔館の使用人を務めさせるわけにはいかないわ。だから、解雇することにしたのよ。本当なら体を切り刻んでいるところだけど、周りがうるさいからそれは止めることにしたわ」

周囲が啞然とする中、レミリアはゆっくりと扉に向かっていく。

「さようなら、卓郎。せいぜいどこかで幸せに暮らしていくことね」  
最後にそう言い残して、レミリアは食堂から出ていった。

着物に着替えて、ある程度の荷物をまとめた卓郎は館の門まで来た。

そこでは美鈴やパチュリーに加え、大勢のメイドが彼を待っていた。

「卓郎さん……。本当に辞めてしまおうでしょうか」

ナツが恐る恐る尋ねてくる。彼女はあの場にいなかったのも、まだ事態をよく把握していなかったのだ。

「ああ、本当だ。お嬢様から直々に言われた」

彼の明確な返事を聞いて、多くのメイドが驚くような素振りを見せる。

正直、卓郎も解雇という現実を、まだ完全に受け入れたわけではなかった。

レミリアに質問をする時点で、ある程度のことは覚悟していたが、まさか館を辞めさせられることになるとは思わなかったのだ。すると、ここでパチュリーが彼の前までやってきた。日射しが苦手だということ、横には日傘を差した小悪魔も同行している。

「レミィに代わって私が謝るわ。ごめんなさい。こんなことになってしまつて」

「そんな……。パチュリー様が謝ることはありませんよ」

「こんなことになるんだつたら、最初から話しておけば良かったわね。レミィのことを知っておけば、今日のようなことも起こらなかつたもしれない」

そうつぶやいた後、パチュリーは横の小悪魔に命令する。

「後で卓郎をあの場合に誘導させて。いろいろと話したいことがあるから」

「パチュリー様。話したいこととは？」小悪魔が問う。

「レミィのことについてよ。悪いけど、よろしくね」

そう言つて、パチュリーは卓郎に体を向ける。

「卓郎。後で話したいことがあるから、館から出たら小悪魔の言うことに従ってちょうだい。それと、レミイへの説得は私の方からしておくから安心しておきなさい」

「パチユリー様……」

「今回は長期休暇をもらったと思っておくことね。八年間、常に働きたまわらなかつたし、体を休めるにはちょうど良い機会なんじゃないかしら。例大祭も近いし、休みの間は入念に準備でもしておきなさい。何かあつたら、メイドたちを通じて連絡するから」

「ありがとうございます」卓郎は深く頭を下げる。

今回の解雇命令は、レミリアの感情的な部分が大きく占めている。それならパチユリーの説得で、戻ってこられる可能性は充分にあるだろう。

少しだけ、希望が見えてきたような気がした。

「じゃあ、卓郎。また後でね」

軽く手を振って、パチユリーは去っていった。当然、小悪魔も後ろについていく。小悪魔はパチユリーを館に入れ次第、またここに戻ってくるのだろう。

「この場合、前向きに考えたほうが良さそうですね」

話を聞いていた美鈴が、ここで卓郎に手を差し出す。

「さよなら、とはいいません。また戻ってくると思っています」

「僕もそう信じています」卓郎は美鈴とがっちり握手を交わす。

すると、ここでナツも矯正器を持ち上げながら言った。

「館のことなら私たちに任せてください。しっかりと卓郎さんの代わりを行います」

同調するように、ナツの近くにいたメイドたちもうなずく。

ここにいるのは八年間、卓郎がじつくりと育ててきた優秀なメイドたちである。彼女たちが力を合わせれば、きっと館も大丈夫だろうと判断した。

「ね、ねえ……」

ここで、ハルが慌てたように言った。

「パチユリー様が言うように、すぐに帰ってこれるんだよね？」

「具体的には分からないよ。でも、今はパチュリー様を信じるしかない」

「でも、もしお嬢様の説得に失敗したら、二度と戻ってこれないんですよ?。」

「まあ、そうなるね」

「そ、そんな。リーダーがいなくなるなんて、あり得ないよ」

ハルの目から、どんどん涙が溜まってくる。

「ハル、お前……」

「絶対に戻ってきてよ! 戻ってこなかったら、あたしリーダーのこ憎むから!」

「憎むって、それはよっぽどだな。これはパチュリー様の責任も大きくなるぞ」

いつもの軽い口調で返すが、ハルの目からはどんどん涙が流れていく。ナツが心配そうにやってくると、ハルは彼女の胸元にうずくまって泣き出してしまった。

卓郎は苦笑いをする。

「ありがとう、ハル。必ず戻ってくるから、それまで館を頼むぞ」

ハルは涙を拭きながら、こくりと頷いた。

小悪魔が戻って来たのを確認して、卓郎は荷物を手に持つ。

「じゃあ、僕は行くよ」

「いつてらっしゃいませ」

メイドたちは一斉に頭を下げる。

本当に館に戻ってこれるのか、今は不安で仕方がない。でも、綺麗に揃って頭を下げているメイドたちを見ると、何故か妙な安心感が出てきてしまった。

彼女たちに見送られながら外に出て、少し歩いた矢先だった。

「卓郎さん」という声が、後ろから聞こえてきた。

振り返ると、ユキがこちらに向かっているところだった。

「みんなと話し合った結果、しばらく私も卓郎さんとお供することにしました」

「えっ。仕事の方はいいのか?。」

「大丈夫です。仕事はナツちゃんとハルちゃんが、何とかやってくれるそうです。それに、今はお嬢様も、私に対してあまり良い印象は持っていないと思いますので」

「聞いた話によると、だいぶユキもお嬢様に反発したんだってな」と、小悪魔。

「うん。でも、本当はすごく怖かったけどね」

平気そうにしゃべるユキだが、あれは並みの精神力では行えなかっただろう。八年前はかなり繊細な感じのメイドだったが、だいぶ立派になってくれたようだ。

最終的に、卓郎はユキの同行を許すことにした。ただ、卓郎はいつ戻れるのか分からない状態なので、同行するのは数日間だけという条件を付けた。

湖を渡りきり、小悪魔に連れられて卓郎たちはいばら道を進んでいく。

「こんなところに何があるんだ」卓郎が問う。

「来れば分かるよ」先を歩く小悪魔の足取りは、しつかりとしている。やがて、道の先にぽつんと建っている一軒の小屋が見えてきた。

「へえ。こんなところに小屋があったんだ」

「もう誰も住んでないところだけだね」

小屋に到着し、小悪魔が扉を開けると、中はもぬけの殻だった。向かい側にある壁は所々に穴が開いており、小屋としての機能は果たしていないようである。

「ここなら大丈夫かな」

そう言っつて、小悪魔が取り出したのは一本の白墨だった。

そして小屋の床に何かを書き始める。十秒もたたず、小屋の床に白墨で描かれた六芒星が出来上がった。完成した瞬間、六芒星がにわかにかに光り始める。

「二人とも、この上に足を置いて」

卓郎とユキがそれに従った後、小悪魔もその上に足を乗せる。そして持っていた白墨を構えると、六芒星の中心に弓で獲物を射るかのよう鋭く投げた。

床に激突した白墨が真っ二つに割れた瞬間、周囲の景色がぐにやりを曲がる。

あつという間に、卓郎たちはパチュリーの図書館の中でたたずんでいた。

突然のことに、卓郎は口をぽかんとさせる。

三人のすぐ横では、パチュリーはいつもの机でお茶を飲みながら待っていた。横には美鈴も立っている。パチュリーは、何事もなかったかのような声で言った。

「ただいま。ようやく来たわね」

「パチュリー様……。今のは」

「魔法よ。瞬間的に移動できる転移魔法の一種よ。ただ、そのためには魔力を込めた貴重な白墨を消費しなくちゃいけないから、頻繁には使っていないけどね」

「でも、どうしてわざわざ魔法を……」

「レミイに卓郎が戻ってきたことを知らせたくないためよ。今、この周囲には気配を消滅させる結界を張り巡らせているわ。私が手間をかけず、どうやって卓郎たちとこっそり話せるかを考えた結果、このような形にしたのよ」

そう述べた後、パチュリーは横に置いてある椅子を示す。

「さて、無駄話はいいから、さつさと本題に入りましょう。レミイのことよ」

卓郎は緊張した面持ちで椅子に座る。

それを確認して、パチュリーは口を開いた。

「まず、結論から言わせてもらおうわ。私の親友のレミイは、人間に対して非常に甘いわ。良く言えば、優しすぎる吸血鬼なのよね」

「優しすぎる、吸血鬼ですか」

「そう。レミイはかれこれ何十年も人間を殺害していないわ。あなたや多くのメイドたちの前では見栄を張って、いかにも殺害しているような雰囲気を出しているけど、それは全て嘘。主人としての威厳を保つため、やむを得ずに行ってきたことよ」

やっぱりな、と思ったと同時に、多少の驚きも隠せなかった。



時には高慢な態度もとる、あのレミリアがそのような顔を持っていたとは、とても思えなかつたからだ。

そうになると、八年前のあの出来事が頭に蘇ってくる。

妖怪の追跡から逃げた卓郎が血まみれで湖に倒れた時、レミリアが彼を紅魔館まで運んでくれた時のことだ。

あの時、レミリアの話によると、たまたま気分が乗ったので卓郎の命を救ったということである。しかし、今回のことが事実なら、レミリアはあの時、最初から卓郎の命を救うつもりでやってきたということになる。

パチュリィは紅茶を一口飲む。

「それで、卓郎はどうしてレミィの秘密に気が付いたの？」

「話をしますと、少し長くなつてしまいますが――」

ここで卓郎は、昨晚のことについてパチュリィ達に説明をした。

当然、優花との関係は明かさなまま話を進めていった。

聞き終えたパチュリィは納得した様子で頷いた。

「なるほどね。あなたが疑問を抱いてしまうのも無理ないわ」

「あの女性が卓郎さんの知り合いだったなんて、夢にも思いませんでした……」

横にいるユキが信じられない様子でつぶやく。

卓郎はそんなユキに顔を向けた。

「昨日は、ユキがお嬢様と同行したんだよな」

「はい。そうです」

「詳しい人から聞いた話によると、その女性の体には血を吐きだしたような形跡があつたらしいんだ。つまり、お嬢様は血を吐いてしまったのか？」

「はい。卓郎さんの言う通りです」

ユキの説明によると、昨晚はレミリアに連れられて空を飛んでいると、ある場所で一人の女性が巨大な石に座って休憩しているのを発見した。

女性の周囲には誰も人はいなかつたので、すぐに標的はその女性に決まった。

やり方は至って簡単である。

パチユリーが作った特殊な薬を標的の周囲に散布させ、標的が眠ってから吸血に及ぶのである。この方法なら標的にも姿を見られることなく、吸血ができるのだ。

ユキがこつそり周囲を飛びながら薬を散布させ、何事もなく女性はすぐに眠った。あとは普通に血を吸えばいいのだが、この日もいつもの結果で終わってしまった。

血を吸っている途中で急にレミリアはむせてしまい、そのまま血を吐きだしてしまっただのだ。しかも、運の悪いことに吐いた血が女性の体にかかってしまった。

「私が館にやってきた時から、お嬢様は血を吐いておりました」ユキが説明する。

「このことに関してしまして、お嬢様からもきつく口外すると言われてきました。吸血鬼としての名誉にも関わる話ですし、私もそれで納得しました。ただ、どうして血を吐いていらっしやるのかということに關しましては、怖くて質問できなかつたです」

「ということは、ユキも昔からお嬢様の秘密を知っていたのか？」

「はい。そうです」

「というか、この部屋にいる全員がレミイの秘密を知っているわ」

ここで付け加えたのはパチユリーだった。美鈴と小悪魔も頷く。

「知らないのは妹様と、ユキとナツを除くメイドたちよ。スカールェツト家の名誉にも関わることだから、信頼できる人にしか秘密を打ち明けなかつたのよ」

「でも、お嬢様はそんなこと僕には全く話してくれませんでした」

「それは、あなたが二十年しかこの館で働くことを誓ってないからよ。もし、あなたが生涯ここで働き続けるとを誓っていたら、レミイは話していたかもしれないわね」

それを聞いて、卓郎はうつむく。

つまり、レミリアはまだ完全に彼のことを信頼していなかつたのだ。

一瞬、どうしてなんだと疑問に思ったが、日ごろの自分の態度を思

い返してみても、何となく理由が分かったような気がした。

もしかしたら、レミリアは卓郎が昔から抱いていた疑問を敏感に察知していたのかもしれない。誕生日の夜にいきなり誓いの約束を持ちかけてきたのも、卓郎が本当に忠誠を誓っているのかを試すための質問だったのかもしれない。

「昔はレミイも、標的が死ぬまで平気で血を吸っていたんだけどね」

パチュリーが懐かしむような感ぜで言う。

「私とレミイが初めて会った頃——まだ、この世界に来ていない頃の話だけど、その時のレミイの暴虐ぶりは凄まじかったとしか言い様じゃなかったわ」

「昔は、そんなに人を殺していたんですか」

「そうね。殺さない日が無かったって言えるくらい、だいぶやっていたわね。前にいた世界は、吸血鬼に対する反発が非常に強いところだね。毎日、血生臭いことが起こっていたのよ。レミイの両親は対話的な路線で反発を抑えようとしていたけど、レミイの過激な行動でほとんど意味を成していなかったね」

初めてレミリアの両親について言われて、卓郎はわずかに驚愕する。とはいえ、レミリアも吸血鬼とはいえ立派な生物なので、親が存在して当たり前である。

「いくら昔ながらの親友だったとはいえ、あの頃のレミイは本当に怖かったわ。いつだったかは忘れたけど、血まみれの姿で殺した人間の頭を振り回して笑っている姿を見たときは、さすがの私も思わず鳥肌が立つちやったし」

卓郎は唾を飲み込む。

「でも、ある時期を境にレミイは人を殺さなくなった。それまで人間を下等な生物と見下して、平気でごみのような扱いをしていた、あのレミイがよ」

「ある時期からですか？」

「両親がいなくなってからよ」

「ずしり、と卓郎の中で重たいものが乗っかってきたような気がした。」

「両親がいなくなったことについては私も詳しいことが分からないから、うまく話せないわ。ただ、それをきっかけにレミイは急に塞ぎこんでしまった。屋敷から一步も外に出ないで、時間を無駄に費やす生活を何十年も続けたわ」

「よっぽど両親がいなくなったことが、衝撃的だったんでしょね」  
「そうね。何百年も満たされた生活を続けてきたから、もしかしたら何かを失うことに慣れていなかったのかもしれないわね。吸血鬼としての才能にも恵まれたし、地位と名誉も財産も最初から持っていたしね」

「今はだいたい立ち直ったように思えますけど……」

「いえ。それはないと思うわ」

パチュリーは強く断言した。

「唐突だけど、卓郎。あなた今、何歳だっけ」

「先日、二十三になったばかりです」

「じゃあ、その倍の時間、何もしないまま生きていける自信はある？」

突然の問いに、卓郎は目を瞬かせる。

「何もしないとは、どういうことですか」

「文字通り、何もしないということよ。例えば、食べて寝るだけの何も変化のない生活を四十年以上続けることはできるかしら」

卓郎はすぐに首を振った。

「そんなの無理ですよ。僕だったら発狂してしまうかもしれません」

「普通の人間ならそうなるね。でも、寿命の長い吸血鬼にとっては、それが逆に功を奏したようで、少しずつだけど、今のような感じに立ち直っていったのよ」

「時間が解決してくれたんですね」

「いえ、ただ単に感覚を鈍らせただけよ。みんな勘違いしているけど、時間が解決することって、そう多くないと私は思っているの。悲しい出来事が起こっても、時間が経てばすぐに忘れちゃう。でも、忘れちゃうだけで本質的な部分は何も解決してないのよ」

遠くを見つめるような目でつぶやくパチュリーに、卓郎は何も言えなかった。いつしかどこかの本で見た、時間は万能で残酷なものとい

う言葉を思い出した。

パチュリーが紅茶を飲み始めた時、美鈴が口を開いた。

「私がこの館にやってきたのは、だいぶ後のことでしたので、詳しいことは分かりません。でも、私が気付いた頃には、お嬢様は血を吐いていたと思います」

カップを置いて、パチュリーは視線を下げる。

「レミイが血を吐くようになったのは、精神的な要因があるからだと思うわ。でも、これ以上は私も言葉を控えるようにするわ。あまりにも私の予測が入りすぎて、かえってレミイの名誉を傷つけることになってしまうからね」

「優しいんですね、パチュリー様は」卓郎が言う。

「レミイに比べたら、これくらいいたしたことないわよ。……正直に言うと、昔の殺伐としていたレミイよりかは、今のような感じが私としてはとても好きね。吸血鬼らしくないと言えば、らしくないかもしれないけど、まあ、たまにはそういういった吸血鬼がいても悪くないんじゃないかしら。門番だって、そういうたところに魅かれたって言うしね」

美鈴は同意するように、こくりとうなずく。

パチュリーが珍しく苦笑いをする。

「こんなことレミイの前で言ったら、間違いなくただでは済まされないわね」

「そうですね」

「この世界でスカーレット家の看板なんて通用しないことは、レミイだって理屈では理解していると思うわ。でも、今日の卓郎に対する態度を見ると、レミイはまだ今の状況を受け入れることができてないよね。『自分の家がどう見られているかに意識が傾きすぎている』か……。まあ、何百年もスカーレット家の看板を背負ってきたんだから、強がってしまう気持ちも分からなくないけどね」

紅茶を一気に飲み込んで、パチュリーは小さく息を吐いた。

「とにかく、レミイへの説得は私に任せなさい。突然のことであなとも戸惑っていると思うけど、レミイの態度にもちやんとした理由が

あつたことを理解しておきなさい。さつきも言ったけど、今は長期休暇だと思つて体を休めておきなさいよ」

「分かりました」卓郎は首肯する。

とにかく、今はパチュリーに頼るしか方法はなかった。

最後に、卓郎はこの質問を試してみたくなった。

「パチュリー様。最後に一つだけいいですか」

「なに？」

「八年前、僕が初めてお嬢様にお会いになった時、『もし紅魔館に残る選択肢を選んだら、容赦なく僕の血を吸う』と言っていました。もし、僕が死ぬ気で紅魔館に残る選択肢を選んでいたら、お嬢様は僕を殺していたんでしょうか？」

「今だから言うけど、最初からあなたを殺す気なんてなかったわ。もしあなたが死ぬ気で紅魔館に残るんだったら、無理やり気絶させて人里に近い場所に投げ捨てると、レミイは言っていたわ。そこなら、後で妖怪に襲われる心配もないだろうしね」

つまり、最初から卓郎が死ぬという未来はなかったのだ。

どこまでもお人よしの吸血鬼である。

「それで卓郎さん。しばらくは、どちらで過ごす予定なんですか」美鈴が問う。

「人里に宿があると思いますので、そこではばらくは過ごすかと考えています。絵を売ってきたおかげで、それなりにお金は持っていますので」

「へえ、いつの間に……。それなら大丈夫そうですね」

「具体的な宿が決まりましたら、ユキが伝えに来るかと思います。ユキも数日は僕と一緒に行動することになっていますので、ユキが戻ってくれば、僕がどこで滞在しているのかも分かると思います」

「なるほど、了解しました」

伝える用件もこれではなくなったので、卓郎たちは館を出ることにした。

やり方は先ほどと同じで、転移魔法を使う。

ただ、先ほどのような白墨を使って六芒星を書く方法ではなく、あ

らかじめ六芒星を書いた紙を床に敷いておき、その上に足を乗せて転移魔法を発動させるという方法だった。

小悪魔も紙の上に乗る、いざ魔法を発動させようとした瞬間だった。

「ごほっ！　ごほっ！」

突如として、卓郎は大きく咳き込んでしまった。

しかも、普通の咳ではなかった。

聞く者の誰もが不安を感じてしまうような、極度に激しい咳を何度も繰り返したのだ。十回ほどでようやく咳は収まったが、この場に入った者はみんな呆然と彼を見ていた。

「すいません……。失礼しました」

苦しそうな表情で返す卓郎に、パチュリーは呆れたように言った。

「やっぱり、今は休んでいたほうが良さそうなんじゃないの。今のは明らかに普通の咳じゃなかったわ。びっくりさせないでよ」

「はい……。そうさせていただきます」

最近、嫌な咳が多くなっているのも、無意識のうちに疲れが溜まっているからかもしれない。八年前は全くそんなことがなかったのだが、これも年齢のせいなのか。

改めて気を取り直して、卓郎は紙の上に乗る。

そして小悪魔は、持っていた白墨を六芒星の中心へ鋭く投げた。

目を覚ますと、茶色の天井が見えた。

一瞬、いつもの赤い天井ではなかったのが驚いてしまったが、ここは紅魔館ではないことをすぐに思い出して、卓郎は小さく息を吐いた。

窓に目を向けると、まだ外は明るかった。時間を確認すると、どうやら二十分ほど眠ってしまったようである。昼寝としては、ちょうど良い感じだった。

現在、卓郎は人里の宿に身を置いている。

転移魔法を使って元の場所に戻った卓郎は、そのまま小悪魔と別れて、ユキと一緒に人里に向かった。用事を済ませた後、適当に安い宿を見つけて、少し横になることにしたのである。昨晚は慧音の家の座布団で眠ってしまったので、やや寝不足気味だったのだ。

持ってきた水入れで喉を潤して、ようやく卓郎は目を覚ます。

この宿に来る前、すぐに彼は優花の家へと向かった。

優花は貧血の症状を起こしており、昨日に比べたらやや顔色が悪かったが、元気そうであった。卓郎の顔を見た瞬間、笑って歓迎してくれた。

優花自身、昨晚のことはあまり記憶にないとのことである。卓郎と別れた後、急に眠気がやってきたと思ったら、すでに布団の上に寝かされていたとのことである。妖怪に血を吸われたという事実を聞いても、本人はあまり実感がなさそうに首を傾げた。

しばらく里に滞在しているという話を伝えて、すぐに卓郎は家を出た。優花は名残惜しそうに卓郎を見つめてきたが、構わずに外に出た。優花の無事もこの目で確認できたので、次は一人になっているろと考え事をしたかったからである。

当然、考え事とは先ほどパチュリーが話してくれたことである。

外の景色を眺めながらぼんやりしていると、扉が叩かれた。

「はい」と答えると、ユキが部屋に入ってきた。



「卓郎さん。今は大丈夫でしょうか」

「ああ。いいよ」

ユキは、部屋の真ん中にある小さな机の前に腰掛ける。彼女は数日間、卓郎の隣の部屋で過ごすことになった。

妖精が人間の宿に泊まるのもおかしい話だったので、申し込みの際は卓郎が一人で向かい、友人が泊まるからという理由で二部屋を借りたのだ。

「あまり気分が冴えないようですね」心配そうにユキが言う。

「そりゃあ、パチユリー様からあんな話を聞いちやうとな」

卓郎は大きく息を吐いて、机に置いてある紙を指差した。

「ここに来るまでは、せっかく貴重な時間ができたんだから、好きなだけ絵を描けるぞと思っていただけ、いざとなるとなかなかその気になれないな」

「パチユリー様は長期休暇と言っておりましたが、やはりそのまま戻れない可能性もありますからね。卓郎さんが、不安になる気持ちもよく分かります」

「それもあるけど、他にも気分が冴えない理由があるんだ」

「えっ。どういうことですか」

卓郎は、再び窓の外を眺めながら答えた。

「まだ、僕が昔から疑問に思っていたことが解決してないんだ」

ユキの目がぱちぱちと動く。

このことを他の人に打ち明けるのはユキが初めてだった。長い間、抱えていた思いを打ち明けるので、少しでも卓郎の方も緊張してしまっただ。

「どうして、お嬢様は平気で人間を襲うことができるのかな」

「平気で襲う、とは？」

「八年前、僕の母さんと兄さんは妖怪に殺された。その時、僕の故郷の村や人里での反響もかなりすごかったらしいんだ。妖怪退治を専門にする人が出てきて、母さんと兄さんを殺した妖怪はすぐに制裁されてしまったんだ」

「ですが、それとお嬢様にどう関係しているのか――」

この瞬間、ユキは何かが分かったように息を止める。

卓郎は頷いてから説明した。

「どうして人里に住んでいる人たちは、お嬢様が人間を襲っても、あまり過剰に反応しないんだろうね。もし、人間に危害を加える妖怪に対して徹底的に制裁をするなら、昔から人里に住んでいる人たちは何らかの行動をしているはずなんだ」

「言われてみれば、確かにそうですね」

先ほど、パチユリーが話したのは、レミアアが血を吐くようになった理由についてだったが、レミアアに対する人里の反応については話してくれなかった。

「いつか、その理由も分かればいいですね」

「いや、当てはもうあるよ」

「えっ」

卓郎は、ぱんと膝を叩いた。

「僕の知り合いに、人里のそういったことに詳しい人がいるんだ。近いうちに、その人に会って話すつもりでいる。だから、きつとすぐに分かると思うよ」

「……そうですか。分かればいいですね」

「ここでユキは窓の外を眺める。

「そういえば、まだまだ外は明るいですね。今ならまだ行けるんじゃないですか」

「いや、さすがに今日行くのはやめておくよ。昨日の事件のせいで、だいぶその人も忙しそうに動いているからね」

「じゃあ、これからの予定はまだ決まっていない感じでしょうか」

「うーん。正直、何もすることがないんだよな」

思えば、紅魔館にやってきて何もすることがないという時間を過ごすのは、初めてかもしれない。仕事の合間には常に勉強や趣味を行っていたので、何もせずにぼんやりと過ごすやり方を卓郎は知らなかったのだ。

「それじゃあ、墓参りに行くというのはどうでしょうか」

「墓参りか……」卓郎は腕を組む。

最近是人里に行く機会が多くなったせいで、あまり行つてなかったような気がする。例の日までだいぶ迫っていたが、悪くはないかなと思つた。

「すぐに済ませて引き返せば、日が沈むまでは帰つてくれるかな」

「そうですね」

「じゃあ、出発しようか」

他にやることがなかったのも、卓郎たちはすぐ行動に移すことにした。

多少の荷物を持つて、卓郎とユキは一緒に宿を出た。季節もいよいよ本格的な夏を迎えようとしており、この時間でもだいぶ暑いと感じるようになっていた。

「ユキ。遅くなつたけど、朝はありがとうな」

故郷の村までの道中、卓郎はユキに礼を言った。

「お嬢様に殺されかけた時、ユキが説得してくれたことだよ」

その言葉で、ようやく彼女は納得したような顔になった。

「いえいえ。私は妖精ですから、あのようなことができたんですよ」

「でも、妖精は死なないとはいえ、お嬢様の攻撃を受けたら間違いない痛目目に遭うだろ。ユキや他のメイドたちが守ってくれなかったら、僕も今ごろどうなっていたか」

「それくらい、みんな卓郎さんのことを大切にしているんですよ。私だって卓郎さんを失いたくなかったですので、あの時は必死で説得しました」

卓郎は小さく笑う。

こんなこと、普段の生活ではまず交わさない会話である。

いくら信頼されているとはいえ、この八年間、毎日メイドたちと仲良く仕事をやってきたわけではない。時には激しく言い争つたりして、卓郎自身もメイドに対して嫌気が差したことが何度もあった。

ユキは空を見上げながら、ため息を吐いた。

「でも、結果としましては、説得は失敗に終わってしまいましたけどね」

「そんなことない。僕がこうして生きているだけでも、十分に成功だ

と思うよ」

「でも、もし卓郎さんが帰ってこなかったら、私たちはどうすればいいんでしょうか」

ユキの悲痛な言葉に、卓郎は口を強く結ばせる。

彼にとつても、そこが最も気になる問題であった。

「卓郎さんの代わりに値する者なんて、あの館には誰もいません。しばらくはみんなと協力して仕事をやっていくことにしていますが、長い目で見ますと、とても難しいことだと私は思うんです」

「あれだけ個性的なメイドばかり集まっているとな」

「やはり、みんなを束ねるリーダーがいまないと、無理な気がしてならないんです」

この八年間、メイドたちは常に卓郎の命令に従って動いてきた。

もちろん、時には彼女たちの独断で動くことも許されているが、それは全体に大きく影響を及ぼさない程度のことである。

卓郎の不在は、館のメイドにとって大きな支柱を失うことになるのだ。

「とにかく、今はパチュリー様を信じるしかない。それに、もし僕が戻れなくなったとしても、人里から助言をするくらいのことならできるよ」

苦し紛れにも程があるが、今の卓郎にはそれしか言えなかった。

話し合っているうちに、二人は故郷の村へ到着した。

八年前に美鈴と一緒に来て以来、卓郎は定期的に墓参りに来るようになっていた。人がいなくなってからだいぶ時間が経ってしまったので、村の家々はどれも跡形もなく崩壊してしまっており、周囲は雑草が生い茂っていた。

そんな家々を通り過ぎていき、卓郎は母親と兄が眠っている場所へ向かう。空も橙色になりつつあり、夕方を迎えようとしている。

そして、ようやく二人の墓が見えてきた時だった。

墓の前に先客がいることに卓郎は気が付いた。遠くからなので細かいところはまだ確認できないが、藍色の浴衣を着ており、髪は腰の辺りまで伸びているようだった。

女性かな、と思いながら卓郎が近づいた直後だった。その女性が、不意に卓郎たちの方を振り向いた。

——この瞬間、卓郎の思考が一瞬にして真っ白になった。

女性の顔には見覚えがあった。おそらく、死ぬまで忘れることのない顔だった。

八年前、母親と兄を殺した妖怪がそこにいたのだ。

※

しばらく、卓郎も妖怪もその場に佇んだまま呆然としていた。

状況が把握できないユキは、恐る恐る卓郎に言った。

「知り合い、ですか？」

卓郎は答えない。ただ、徐々にその体を震わせていく。

状況を把握したのか、髪の毛の長い妖怪はここで微笑んだ。卓郎にとって、それは悪魔の笑みにしか見えなかった。

「へえ。昔、どこかで見たような顔をしているな」

口調は粗暴だが、端正な容姿によく似合う綺麗な声だった。

その妖怪が一步前に出る。それに釣られて、卓郎は一步下がる。

「ああ、そうだ。やっと思い出した。八年前、私が殺した男にそっくりなんだ。腹をぐっさりと刺して、ひいひい震えながら息絶えていった男にそっくりだ」

「く、来るなあー！」

さらに卓郎は後ろに下がろうとするが、足を滑らせて尻もちをついてしまう。

卓郎の異変に気付いたのか、ユキが卓郎と妖怪の前に立った。

「あの、失礼しますが、卓郎さんとはどのような関係ですか」

「さっき言ったじゃんか。私は八年前、そいつの家族を殺したんだよ。残念ながら、そいつには逃げられてしまったけどね」

ユキが「ひっ」と大きく体を震わせる。妖怪は声を出して笑った。

「こんなところで再会するのも何かの縁だな。八年前は運悪く取り逃がしてしまったけど、今日はそうはいかない。しっかり、とどめを刺してあげるからよ」

そして、妖怪の右手が徐々に赤く染まっていく。

この瞬間、卓郎の脳裏に八年前のあの日の映像が一気に蘇ってきた。

家の床が血の海になっていた。

家中が無残に荒らされており、中心には右手が赤に染まった妖怪が佇んでいた。母親と兄はその横でうつぶせに倒れており、二人とも左手の手首から上が切り取られていた。

金縛りにでも遭ったかのように、卓郎はその場から動けなかった。言葉を発しようにも、恐怖でまともに声が出ない。

右手を赤に染め終えた妖怪は、構えの姿勢を見せる。卓郎の記憶が正しければ、その赤色の右手は鉄をも切り裂くことができる凶器となる。

殺す気だ、と直感がささやいた。

すると、ユキが卓郎を守るようにして妖怪の前に立ち塞がった。

「とどめを刺すというのは、卓郎さんを殺すつもりなのでしょうか」

「当たり前だろ」よどんだ目がユキを捉える。

「でも、また人里の方から制裁をされるんじゃないでしょうか」

妖怪の動きが一瞬止まる。

「同じことを犯してしまつたら、今度は以前よりも大きい制裁を受けてしまうかもしれないですよ。それでもいいんですか？」

ユキの言葉はしつかりと聞き取れるが、震えているのがよく分かった。

「……あんだ。見た目からして妖精だな」

「ええ」

「腹立つな。格下の種族から、そんなことを言われると」

そう言うと、妖怪はユキのもとへ駆けて行き、赤色の右手を振り降ろす。寸前でユキは後ろに下がって攻撃を避けたが、体の平衡を崩してそのまま転んでしまった。

尻もちをついた彼女の眼前に、妖怪は右手を構えた。

「今の攻撃を避けたということは、私の能力については知っているようだな。ただ、戦闘には慣れていない感じのようだ。次は避けられると思わない方がいいぜ」

「た、卓郎さんを殺してしまつたら、また制裁が……」

「そんなこと、どうでもいい。八年前は油断して人間共に制裁されたが、今回はこつそりと始末させてもらうよ。私の身の心配はご無用だ」

血に飢えたような視線が向けられて、卓郎は戦慄する。

もはや、言葉が通じる相手ではなさそうだった。だからと言って、自分とユキでは絶対に叶わない相手である。助けを呼ぼうにも、この近くに住んでいる者など誰もいない。最も近い人里ですら、ここから一時間は掛かってしまうのだ。

絶体絶命の状況だった。

すると、ここでユキが卓郎の方を振り返った。

「卓郎さん。逃げてください」

「えっ」

「逃げてください！……ここは私が時間を稼いでおきますので！」

それからユキの行動は素早かった。

妖怪の両手首を掴むと、そのまま体ごと妖怪を押し倒したのだ。

予想外の行動に、妖怪も為すすべなくユキと一緒に地面に倒れる。

「こ、この……放せ！」

もがく妖怪に対し、ユキは必死で相手の手首を掴み続ける。

それは明らかに、死ぬことを前提にした行動であった。純粋な戦闘力は、明らかに妖怪の方が上だろう。妖精だからこそできる、捨て身の行動だった。

ただ、他に対抗手段がない以上、卓郎はユキに頼るしか方法がなかった。

「悪い、ユキ……」

彼女の言葉通りに、卓郎は全力疾走で来た道に戻り始めた。

まさに、それは八年前に起こったことの再現だった。

あの時も、体力が尽きるまで走り続けた。違う所といえば、あの時は川や獣道をなりふり構わず走ってきたが、今日は整備された道を走っていることくらいである。いつ妖怪がユキを倒して追いついてくるのかも分からない状況下、卓郎は死にもの狂いで逃げ続けた。

異変が起こったのは、村を脱出した直後だった。

突然、胸が締め付けられるような苦しさを覚え、卓郎はその場に戻らずくまってしまうた。そして、口を抑えながら激しい咳を何度も繰り返した。

焼けるような喉の感触を残して、ようやく咳は収まった。

ぜえぜえと肩で息をしながら、卓郎は手元を見る。

彼の両手は血に染まっていた。

一瞬、何が起こったのか理解することができなかった。そして、それを証明するかのように、口の中にじわじわと鉄の味が広がっていく。

——喀血した？

寒気が彼の中で襲ってきた。

以前から、体の不調は気になっていた。ただ、ここ最近忙しい日が続いてきたので、単に疲れているからだろうと思いついてきた。

でも、これは明らかに異常事態だった。

赤い血を眺めながら、卓郎は頭の中であることを自覚した。

もう、自分にはあまり時間が残されていないのかもしれない、と。



## 【24】第六章

何とか人里の宿まで戻ってこれた卓郎は、部屋に入るなり力尽きたように倒れた。

もう、思考は完全に混乱していた。

考えることを放棄して、今はとにかく体を休めたかった。あの妖怪がここまで追いかけてくることはないだろう。その安心感もあつてか、卓郎はすぐに眠ってしまった。

目が覚めた時、すでに外は夜になっていた。

部屋を見回してみるが、ユキの姿はなかった。妖精だから死ぬことはないだろうが、まだ帰ってこないのは心配である。

ここで卓郎は、ようやく自分の状態に気が付いた。

右手は渴いた血で汚れており、口の中も鉄の味と酸っぱい味が混ざったようなものが残っている。大量の汗を吸った着物からは嫌な臭いがして、ひどい有様だった。

とりあえず、身だしなみを整えよう。

宿の庭に共同の井戸があることを思い出して、卓郎は重たい腰を上げる。パチュリーから少し発光草を分けてもらっていたので、それを明かりにして部屋を出た。

夜もだいぶ深まっているようで、周囲には誰も人はいなかった。

水で口の中をさっぱりさせた後、桶を使って一気に頭から浴びる。心地よい冷たさに一瞬にして全身が目覚めたが、同時に大きな倦怠感も襲ってきた。

呼吸が、以前に比べてやや苦しく感じた。

胸や首からもまだ小さいが、ちくちくと痛みを発してくる。この感覚がいったい何を伝えているのか、とても信じたくないが彼は理解しようとしていた。

ふと、井戸に映る自分の顔と目が合う。

この数日間の出来事で、すっかり何歳も老けたような気がした。これからもっと悲惨な顔になっていくと想像すると、さらに憂鬱になっ

てくる。

大きくため息を吐いて、部屋に戻ろうとした時だった。

「卓郎さん。ここにいましたか」

小さいが、馴染みのある声が背後から聞こえてきた。

だが、それはこの場面では意外な声でもあった。

「もしかして、美鈴さん？」

「そうです。卓郎さんがこの宿に泊まっていると聞きまして、やってきました」

発光草の盛られた小皿を持って、卓郎は後ろを照らす。

ようやく美鈴の姿をこの目で確認して、卓郎は安堵の息をついた。

「この宿を教えてくださいのは、ユキですか」

「ええ。ユキちゃんです。でも、帰ってきた時、服は傷だらけで半分虚脱状態のままだったので、それはもう飛びあがるくらい驚きました」

虚脱状態ということは、やはりあのまま止めを刺されたのだろう。

「今、ユキはどうしていますか？」

「屋敷で静養をしています。復帰までには一週間ほど時間が掛かりそうですね。ユキちゃんは他の妖精に比べまして、体が弱いほうですか」

「そうですね……」卓郎はがくりと頭を下げる。

いくら死なないからとはいえ、大切な部下がひどい目に遭ったのだ。いくら自分の命が助かったとはいえ、あまり気持ちの良いものはなかった。

「なので、ユキちゃんに代わって、しばらくは私が卓郎さんと共にすることになりました。細かい事情はある程度、ユキちゃんから聞いています。もし、妖怪が襲ってきましても、そこは私に任せてください。すぐに倒してみせますよ」

「それは有難いですけど、屋敷の方は平気なんですか？」

「もちろん、パチュリー様から許可をもらっていますし、何かあったらアキちゃんが能力で伝えてくれます。アキちゃんもだいたい気合いが入っているようでして、卓郎さんが帰ってくるまでは常に門の前に入りますよー、なんて意気込んでましたよ」

「はははっ。あのアキが気合いを入れるなんて珍しいですね」

どうやら自分はパチユリー、ユキ、美鈴など、だいが館の住人に助けられてしまっているようだ。そうになると、いつまでも嘆いているわけにはいかない。

二人で部屋に戻ると、美鈴が発光草の明かりを消した。

「もうだいたい夜も深くなっています。今日は休んだほうがいいでしょう」

「そうですね」

着物もようやく乾いたので、卓郎はそのまま布団へと向かう。

途中、彼は「あっ」と足を止めて、隣の部屋を指差した。

「隣の部屋、もともとユキが泊まる部屋だったんです。だから、美鈴さんはそっちで休んでもいいですよ」

「何を言っているんですか。もし妖怪が卓郎さんが眠っている隙に襲ってきたら、どうするんですか。隣の部屋では間に合わないかもしれないんですよ」

「妖怪はこの場所を知らないのです、大丈夫だとは思いますが……」

「油断は禁物です。私は大丈夫ですので、卓郎さんは眠ってもいいですよ」

そう言つて、美鈴は壁を背に座り込んでしまった。

彼女は大丈夫だと言ってくれたが、卓郎にとっては違った意味で大丈夫ではなかった。

いくら妖怪とはいえ、美鈴も人間の女性と変わらない姿をしているのだ。とはいえ、不安な気持ちがある中で、彼女がここにいてくれることは非常に有難い。

結局、恥ずかしいのは我慢することにして、卓郎は美鈴に甘えることにした。

「ありがとうございます。それじゃあ、おやすみなさい」

「ええ。おやすみなさい」

先ほど起きたばかりだが、まだ体に疲れは残っていたようで、すぐに卓郎の意識は薄れていった。

その最中、脳裏で八年前の出来事が蘇ってきた。

もう、二度と思い出したくない光景だった。でも、あの妖怪と再会してしまつたせいで、堰が切れたようにあの日の出来事が鮮明に蘇つてきたのだ。

血の海の中、よどんだ目で佇んでいる妖怪。

その側では、母親と兄がうつぶせの状態で倒れている。二人の左の手首は切断されており、その切断面の生々しさは思い出すだけでも全身が震えてしまう。

——左の手首？

その瞬間、おぼろげだった卓郎の意識が一気に覚醒した。勢いよく布団から上半身を起こすと、部屋の隅にいた美鈴が驚いたように顔を上げた。

「卓郎さん、どうかしましたか？」

「一つ、気になることができたんです」

「えっ」

卓郎は頭を抱えた。

「八年前、一瞬でしたけど、僕は母さんと兄さんが倒れているところを見ました。そこで一つ、あることを思い出したんです」

「あることですか？」

「左の手首です」

「手首？」

卓郎は、自分の左手首を眺めながら言った。

「僕の母さんと兄さんはあの時、左の手首を切り取られて死んでいました。どうして妖怪は、わざわざ母さんたちの手首を切り取つたんでしょうか」

※

目が覚めると、すでに空は橙色になろうとしていた。

一瞬、何が起こつたのか理解できずにいた卓郎の横で、何者かが立ち上がる気配がした。振り向くとそこには美鈴がおり、どうやら本当に卓郎のそばから離れないでいてくれたようだ。

「おはようございますって、もうそんな時間じゃないですね」

「どのくらい寝てました？」

「丸半日くらいでしようか。だいぶ疲れも溜まっていたんですね」  
「そんなにですか……」

妙に損した気分になり、卓郎はため息を吐く。しばらく頭がぼんやりとしていたが、顔を洗い終え、着替えも済んだ頃にはだいぶ目も覚めていた。

「お腹も減ってきましたし、何か食べに行きましようか」

「そうですね」

気付けば丸一日何も食べていなかったもので、美鈴の提案で二人は外に出た。まだ、夕方前の時間なので、大通りは多くの人で賑わっている。

「実はおすすめの店があるんですよ」歩きながら美鈴は言う。

「へえ。ということは、美鈴さんもよく里に来ているんですね」

「時々、ですかね。おいしい店がないか、よく探し回ってます」

期待しながら美鈴についていくと、ある屋台の前に辿り着いた。そこは人里の大通りからだいぶ離れたところにあり、屋台にいる人はあまり多くなかった。

「まだ開店したばかりですからね。もう少ししたら人も入りますよ」

このような感じの店に入るのは初めてである。

やや緊張しながら中に入ると、威勢の良い中年の男性が迎えてくれた。そして美鈴の顔を見るやいなや、さらに上機嫌になり、今日は特別に量を多くさせると言ってきた。どうやら、美鈴は常連客のようである。

「拉麺というのはご存知ですか」

小さな丸椅子に腰掛けてから、美鈴が訊いてくる。

「いえ、知らないですね」

「じゃあ、食べたこともないんですね」

「はい」

「おいしいですよー。卓郎さんも絶対、気に入ってくれるはずですよ」

そんな会話を交わしているうちに、井に入った拉麺が運ばれてきた。

澄んだ褐色の液体の中に、麺や様々な種類の具材が入っている。見

た目も匂いも、なかなか美味そうな気がした。お互いに「いただきませす」と唱えて、卓郎は麺を口に入れる。

深みのある汁の味と、麺の歯応えが絶妙に味覚を刺激した。

「……うまい」

思わず、そう言わざるを得ないくらいの美味さだった。美鈴がおすすめるのも納得できる。人里でこんなうまい店があったとは予想外だった。

丸一日食べていなかったとはいえ、そこまで食欲があったわけではなかった。卓郎はゆつくりと味わって食べることにした。

気付いたら、隣的美鈴は二玉目に入っていた。

「ここは替え玉自由なんですよ。だから、もつと食べませんと」

「いえ、僕はこれで満足です」

「へーっ。卓郎さん、けっこう食べる方だと聞いていたんですけどね。まあ、最近はけっこう忙しそう感じたから、無理はしなくていいですよ」

そう言いながら、美鈴は豪快に麺をすすっていく。

今さらながら、彼女と一緒に食事をするのは今回が初めてだと気が付いた。

美鈴がさらに話しかけてきたのは、三玉目を頼んだ後だった。

「そういえば、昨日のあの疑問に関して、まだ詳しく聞いてなかったですね」

卓郎の箸を持つ手が止まる。

「左手首が切り取られていたことでしたっけ。どうして疑問を抱いたんでしょうか」

昨晚、布団から起き上がった卓郎は、左手首の疑問を彼女に伝えた。だが、どうしても眠気には叶わなかった。詳しいことは明日と言ってそのまま眠ってしまったのだ。

店主は離れた席で常連客らしき人と談笑している。

まだ開店したばかりなので、卓郎たちの周囲に座っている者もいない。

これなら他人に聞かれる心配はないと思い、卓郎は食べながら答え

た。

「単純に理由が見当たらないからです」

「理由、ですか」

「僕が聞いた話によりますと、母さんたちは腹を刺されていたらしいんです。おそらく、それが致命傷になったのででしょう。でも、腹が致命傷になりますと、どうして妖怪は母さんたちの手首を切り取ったのかが分からなくなってしまふんです」

「確かに致命傷がお腹ですと、切り取る必要なんてないですね」

「いくら力のある妖怪とはいえ、生きている相手の手首を切り落とすのは難しいです。だから、殺害した後に手首を切り落とした可能性が高いと思います」

「殺害した後に手首を切り落とした……。なんだか、おかしい話ですね」

「ですよ。理由も見当たらないですし、だから気になっているんです」

美鈴は考えるように腕を組んだ後、ぱちんと指を鳴らした。

「そういえば、その妖怪は右腕を変化させることができるんですよ」

「そうです」

「仮定になってしまいましたが、もしその妖怪が殺した相手の手首を切り取るという習慣があったから、というのはどうでしょう」

卓郎は残りの麺をすすってから答えた。

「面白いですね。武士が討ち取った相手の刀を奪うような感じでしょうか」

「そんな感じですね」

「でも、普通なら右の手首と切り落とすのではないのでしょうか」

彼女は口を動かすのを止める。そして、ごくりと麺を飲み込んだ。「でも、妖怪が手首を切り取る理由なんて、それくらいしか思いつきませんよ。あまり、右や左は気にしないんじゃないですか」

言い張る美鈴に対し、卓郎は箸を置いてから答えた。

「いえ、やっぱりそれはないと思います」

「なぜですか」

「もし、美鈴さんの言うような習慣が本当にありましたら、昨日やられてしまったユキの手首も切り取られていたと思うからです」

あつ、と美鈴は口を漏らした。

「ユキは妖精ですので、手首を切り取られてもすぐに再生します。もし、ユキが妖怪に手首を切り取られましたら、そのような説明もしているはずですよ。そこで質問なんですが、ユキが紅魔館に戻ってきた時、手首を切り取られたと話していましたか？」

しばらく、美鈴は唸った後、

「……うーん。言っただけだと思えますね」

と、観念したように言った。

これで妖怪の習慣だという説は無くなったことになる。

「では、どうして妖怪は手首を切り取ったんでしょうね」

彼女の問いに、卓郎は首を横に振った。

「分かりません。僕も昨晚、急に思い出したことですので……。いろいろ考えてはいるんですけど、いかにせん証拠が少なすぎるんです」「八年前のことですからね。でも、あまり深くは気にしない方がいいんじゃないでしょうか。私としては、手首が切り取られていたことよりも、卓郎さんの災難がやたら続いていることの方がよっぽど気になりますよ。昨日の朝に紅魔館から出ていなければならなくなつたと思いましたが、今度は妖怪との再会ですからね」

「ははは……。本当に災難続きで、頭もどうにかなくなってしまいましたそうですよ」

苦笑しながら卓郎はつぶやく。

昨日は、二度も自分は命の危機に晒されてしまった。

一度目は逆上したレミリアに殺されかけたこと。二度目は例の妖怪に殺されかけたことである。レミリアのことは多少なりとも自分自身の行動が招いた結果なので、まだ納得できるところではあるが、二度目は母と兄の墓の前で偶然にも妖怪と出会ってしまった、殺されてしまいました。それだ。

災難、という言葉がまさにお似合いの一日だった。

——墓の前で出会った？



昨日のことを振り返った瞬間、卓郎の顔から笑みが消える。

彼の中で新しい疑問が湧きあがってきたからだ。それは手首を切り取られたことよりも、遥かに重大な疑問だった。

なぜ、妖怪は母と兄の墓の前にいたのだろうか。

なにせ、墓の中にいるのは自分が殺した人間である。よっぽどのことがなければ、なかなか来れない場所ではないのか。

すでに拉麺を食べ終わっていた卓郎は、ひじを机に置く。

自分が妖怪の立場に立って、考えてみることにした。もし自分が殺人を犯してしまった時、どのような場合に殺した相手の墓に来るのだろうか？

その答えは、たった一つしか考えられなかった。

「卓郎さん。何、ぼーっとしているんですか」

この直後、美鈴の言葉を受けて卓郎は我に返る。

「そろそろ出ましよう。長居するのは、他の方に迷惑ですからね」

「ああ、そうですね」

精算を済ませてから二人は立ち上がり、屋台を出る。

空もそろそろ黒に染まろうとしている。この時間帯で慧音の家を訪れるのは失礼だろう。今日は宿で考えを整理させて、明日の午前中に行こうと決めた。

そして、美鈴と二人で通りの角を曲がった瞬間だった。

小脇に袋を抱えた優花と、ぼったり遭遇してしまったのだ。

それまで卓郎の中で巡らせていた思考が、一気に途切れた。

「えっ。卓郎さん？」

視線が美鈴へと向いた直後、優花は困惑の表情を浮かべる。持つている袋の素材を見る限り、どうやらこの近くにある織物屋で買い物をしてきたのだろう。

「や、やあ、優花さん。偶然だね」

「うん……。こんな所で会えるなんて偶然ね」

だが、優花の視線は完全に美鈴の方を向いていた。

非常にまずい状況だった。卓郎の隣には、見た目は彼と同じくらいの年齢の女性がいるのだ。下手な言葉を使ったら、よからぬ勘違いを

されてしまうかもしれない。

卓郎が慌てて説明しようとした時だった。

「あつ、卓郎さん。もしかして、この人が例の彼女なんですか？」  
やたら軽い口調で美鈴が話しかけてきたのだ。

呆気にとられる優花と卓郎に対し、美鈴はさらに言った。

「うわー。仕事中に卓郎さんから、ちよくちよく話は聞いています。よく絵を買いにくるお客さんがいて、とてもお世話になっていているというのをですね。しかも、こんなに美人さんだったとは……。卓郎さんがうらやましい限りですよ」

「は、はあ……」優花は呆然と答える。

ここで美鈴はお腹をさすると、大きく息を吐いた。

「ふう。腹ごしらえもできましたし、私はそろそろ仕事に戻りますよ。今日は大事な方を遠くで見守る護衛の仕事ですけど、何とか頑張っていけますよー」

ここで美鈴は卓郎に目を合わせて、さりげなく片目を瞑った。

それを受けて、ようやく彼女の意図を理解した。

つまり、遠くでこっそり護衛しているということである。

「それじゃあ、卓郎さん。また会いましょう」

美鈴は軽く手を振って、その場から去ってしまった。

「あの人、卓郎さんの知り合いなの？」

去っていく赤い髪を眺めながら、優花が妙に低い声で言った。

「ああ。仕事関連の仲間だよ。今日、こちらへんを散歩していたら偶然出会ってさ。彼女のおすすめで、この近くにある拉麺屋に入ったんだ」

「仕事関連ね……。それって本当なの？」

「何、言ってるんだよ。本当に決まってるだろう」

優花は訝しげにじつと卓郎を見る。美鈴が仕事関連の仲間なのは本当のことなので、嘘はついていないが、体が見えない糸に巻かれたような気分になった。

やがて、納得したように優花は頷いた。

「うん。どうやら嘘はついていないようね」

卓郎は苦笑いをするしかない。相変わらず、鋭い女性である。話を逸らすため、卓郎は話題を切り替えた。

「で、優花さんはどうしてここにいるんだ？ 昨日、見舞いにやってきた時はまだ布団にいたはずだけど、もう歩いて大丈夫なのか」「ええ。昨日は頭もふらふらとして辛かったけど、今はだいぶ体調も良くなったわ。でも、お父さんがしばらく仕事を休んでもいいしつくく言ってきたから、少し暇になっちゃってね。だから、買い物に出ることにしたのよ」

あれだけのことがあったにもかかわらず、優花はもう立ち直ろうとしているのだ。

「ねえ、卓郎さん」

恐る恐るといった感じで、優花が言ってきた。

「卓郎さんが泊まっている宿って、この近くにあるの？」

「ああ。そうだけど」

「どの宿なのか教えて」

断る理由もなかったので、卓郎は宿の名前と部屋名を教えた。

「もし良かったら、後で遊びに行ってもいいかな？」

突然の頼みに、卓郎は目を瞬かせる。

「僕は別に構わないけど、時間は平気なのか」

「あんまり長居はできないけど、ちよつとくらいなら平気よ」

「なら、部屋で待ってるよ」

優花の表情が嬉しそうに輝いた。

「うん。じゃあ、荷物を置いたらすぐに行くからね」

そう言つて、優花は早足に去ってしまった。

もし、これが二日前だったら、卓郎も喜んでいたかもしれない。しかし、様々なことが起こった現在は、どうも素直に喜べない自分がない。

宿に戻って待機していると、扉が叩かれた。

念のため「どなたですか」と尋ねると、外から「優花よ」と返ってきた。

卓郎は安心して、優花を迎えることができた。

「しばらく、ここに滞在する予定なの？」中に入った彼女が問う。

「うん。今のところはね」

「でも、仕事の方は大丈夫なの？ 卓郎さん、これまで週に一回しか里に來れないくらい忙しかったんでしょ」

「知り合いの同業者に家を任せているから、しばらくは平気だよ」

「なんだ。それなら良かった」

お互いに部屋の小さな机に向き合う形で座る。

机の上には、周りを和紙で囲った発光草の皿が置いてある。

「なんか、その行灯。すごく明るいよね」優花が何度もまばたきをしなから言う。

「そうかな？ 僕は普通だと思うけど」

「でも、私の家の行灯より全然明るいわよ。絶対高いわよね。これ」

「まあ、そうだね。かなり奮発して買ったからね」卓郎は苦笑する。

さすがに人里では発光草は売られていない。

発光草の存在を隠すために、わざわざ和紙を使って行灯風味にしたのだが、少し勘付かれてしまったようだ。

多少の雑談をした後、しばらく無言の時間が続いた。

前回会ったのは昨日の午前中だったので、これといった新しい話題もなかったからだ。外から聞こえてくる鈴虫の鳴き声だけが、ささやかに二人の間に流れていた。

優花の視線が机に置いてある紙に留まり、ぼつりと言った。

「そういえば、例大祭までもうすぐね。紙芝居の方は順調かしら」

「おととい、伯父さんに内容をまとめた紙を持って行って、了承してくれたよ。でも、それからは全く手を付けていないな。この三日間、い

ろいろあったし」

「ああ、そっか。お父さんが了承してくれたのって、まだおとといの話だったんだよね。なんかこの数日間、いろいろなことがありすぎて一週間くらい経ったと感じてたわ」

優花もまた、卓郎と同じ時間の流れを感じていたようだ。

すると、優花はふうつと息を吐いた。

「ねえ。卓郎さん」

「なに？」

「私、おとといの夜、もしかしたら死んじゃってたかもしれないのよね」

「ど、どうしたんだよ、いきなり。優花さんらしくない」

「私、おとといの夜のことはよく覚えてないの。卓郎さんと会った後、急に眠気がやってきて、気付いたら布団に寝かされていたのよ。お父さんや先生に何があったのか尋ねてみたけど、二人とも細かいことは話してくれなかったわ。妖怪に血を吸われたとは聞いたけど、いまいち実感が湧かなくてね」

優花の声が、どんどん弱々しくなっていくのが分かった。

「実は、私ね。昔からよくちよく里の外に散歩に出かけていたの」

「外に出てた？」

「うん。四年くらい前からかな。仕事に疲れた時とか、のんびりしたい時とかにね」

「でも、危険じゃなかったのか」

「うん。お父さんは危険だから出ない方がいいと言ってたけど、それまで悪い妖怪に襲われたことも無かったから続けてきたの。山の景色だとか、流れる川なんかを眺めているとね——。なんか不思議と今まで考えてきた嫌なことが、急に小さいことに思えてきちやうのよ。だから、ちよつと危険かもしれないけど、今まで続けてきたの」

優花の言っていることは、卓郎にも理解できた。

仕事のことで悩んでいた時、彼も何度か近くの湖をぼんやりと眺めて気分転換をしたことがあったのだ。

「でも、今はね。少しだけ外に行くことが怖くなっちゃったのよ」

視線を手元に落として、優花は手を震わせる。

「いえ、外に限ったことじゃない。寝るのも少し怖くなったのよ。もし、自分が寝ている隙に、また妖怪に襲われちゃったらどうしようって思っちゃって。だから、昨日もあんまりよく眠れなかったのよ……」

ぽとり、と机の上に一滴の水が落ちた。

「私、怖い。とっても怖い……。妖怪に殺されたくないよ……」

「優花さんー」

叫びながら、卓郎は優花の手を握る。

怯えた優花の目つきが彼を捉える。いつの間にか彼女は大量の汗をかいており、額にへばりついた黒髪が何とも言えない疲労感を映し出していた。

「優花さん。落ち着いて。今は、大丈夫だから」

優花の目から涙があふれたのは、それからすぐだった。

机を回り込み、優花の目の前にやってきた瞬間、彼女は卓郎の胸にうづくまって叫びながら泣き始めた。

てつきり立ち直ったのかと思っていたが、全然そんなことはなかった。

昨日は平気そうに振る舞っていたが、やはり精神的に衝撃を受けたのは間違いない。

卓郎自身もそうである。

八年前の事件が起こって以来、たまにあの日の光景が夢に出てくるのだ。

彼もずっと事件の見えない悪夢に襲われ続けているのだ。

今は少しながら症状も緩和されてきているが、死ぬまでこの悪夢は消えないだろうと思っている。パチュリーも言っていたが、時間は感覚を鈍らせるだけで、本質的な解決には至らないのだ。

ようやく落ち着いてきた彼女に、卓郎は水を飲ませた。

「ごめんね……。情けない姿を見せちゃって」優花は袖で涙を拭う。

「いや、いいんだ。それで少しでも気が楽になれば」

「うん、大丈夫。私、こんなことで絶対に負けないから」

もしかしたら彼女はこのことを打ち明けるために、卓郎のところまでやってきたのかもしれない。これが彼女にとって良いきっかけになれば、と卓郎は思った。

優花は、自分の着ている着物を眺めながら言った。

「あーあ。本当はこの前の着物でここに来たかったんだけど、血がなかなか落ちなかったし、着るたびに事件のことを思い出しそうだったから、処分しちゃったのよね」

「そればかりは仕方ないよ」

「うん……。実は目覚めた後、洗う前の浴衣をちらつと見ることができたんだけど、けっこう血が付いててびっくりしちゃった。あれ全部、私の血だったんだよね」

「話によると、妖怪が吐きだしてしまったらしいね」

「あれだけの量の血を見るのは、かなり久しぶりだったわ」

「へえ。昔も大量の血を見てしまったことがあるんだ」

「うん、そう。確か八年前くらいだったかしら。家に帰ってきたら、お父さんが血まみれの着物を洗っていてね。あの時も本当にびっくりしたわ」

八年前、という単語が卓郎の中で妙にひっかかってしまった。

「血まみれの着物って、どういうこと？」念のため訊いてみる。

「私も同じようなことを訊いてみたけど、あの時のお父さん、すごく怖い顔をしていてね。このことは絶対に誰にも話すんじゃないぞ、って強く言ってきたから、詳しくは訊けなかったの。体のあちこちに切り傷があつたし、何かあつたんだとは思うけどね」

何か嫌な予感がした。

「それって、いつ頃に起きたのか覚えてる？」

「えっ。もう八年も昔の話だから、さすがに覚えてなんか——」

すると、ここで優花は言葉を切って、考えるような目つきになった。「ちよっと待ってて」と言った後、「あつ」と思いだしたように顔を上げた。

「そうだわ。卓郎さんの事件が起こる一週間前だったと思うわ。卓郎さんの事件が起こった時、立て続けに嫌なことが起こるなって思っ

て、日付を確認したからきつとそれで間違いないよ」

卓郎の頭の中で、雷が落下してきたような衝撃を受けた。

記憶が正しければ、その日は卓郎の母親が伯父の家を訪れていたはずである。しかし、伯父の家でそのような事態が起こったことなど、全く卓郎は知らなかったのだ。母親の話では、伯父からは金は貸せないと行って門前払いを喰らったとしか聞いていない。

だが、その時の母親の沈んだ表情と、手にぐるぐると巻かれていた布があまりに印象的で、今でも日にちを覚えていたのだ。

着物に染まった血？ 伯父が負った切り傷？

そして、これまで卓郎が得てきた事実を思い浮かべた瞬間――。

卓郎の中で何かが弾けた。

ばらばらになっていた断片が合わさって、ある一つの結論を与えてくれたのだ。

だが、それは彼にとって最も残酷な結論であった。

「卓郎さん？」

彼の急激な変化を敏感に感じ取ってか、優花は首を傾げる。

すぐに我に返った卓郎は、慌てて手を振った。

「あつ、いや、何でもない」

「でも、急に顔色が悪くなったよ。どうしたの？」

「え、ええと……」

その瞬間、大きく彼は咳き込んだ。よりによって、こんな時に襲ってくるとは――。

何度も続く激しい咳に、慌てて優花は立ち上がった。

「卓郎さん、大丈夫？」

心配そうに背中をさすってくる優花に、ぽつりと卓郎は言った。

「ごめん、優花さん。そろそろ体力の限界かもしれない」

「でも……」

卓郎は困ったように苦笑いを浮かべた。

「最近、いろいろなことがあって少し疲れているんだ。実は今日の朝、医者に診てもらったんだけど、軽い風邪を引いてしまっているようなんだ」



「じゃあ、どうして部屋にやってきてもいいって言ったのよ」

「少しくらいなら平気だと思ってたんだ。ごめん……」

顔色の悪い彼を見て、優花は納得してくれたようだ。

それから彼女は看病したいという理由で、部屋に残りたいと希望してきた。

もちろん、そこはやんわりと断った。風邪が治ったら必ず会いに行く約束を交わして、優花は部屋を出て行った。帰る際、名残惜しそうな優花の表情が妙に印象的だった。

一人になって数分後、再び扉が叩かれた。

また優花が戻ってきたのかと思いつながら「どなたですか」と言うと、「美鈴です」と聞こえてきた。卓郎は慌てて扉を開ける。

「先ほどの女性が帰りましたので、戻ってきました」そう言って、美鈴は部屋に入る。

「今までどこにいたんですか」

「ずっと部屋の前にいましたよ。他のお客さんが通りかかる時や女性が立ち去る瞬間だけは気配を察知して、こっそり物陰に隠れてましたけどね」

つまり、優花が号泣した時も彼女は扉の先にいたということになる。

どこかで護衛をしているとは思っていたが、まさかそんなに近くにいるとは予想外だった。

「で、卓郎さん。あれはどういうことでしょうか」

「えっ」

壁に背を預けた美鈴は、真剣な眼差しを向けた。

「あの女性との関係ですよ。卓郎さんと遭遇した時、あの女性、すごい動揺していたじゃないですか。何となくまずいと思いついて、あの時はすぐにその場を離れましたけど、あの女性が卓郎さんを見る目は、明らかに普通ではありませんでしたよ」

あの状況では、さすがに追究されるのはやむを得ない。

今はそんなことで時間を使いたくなかったが、仕方なく卓郎は答えた。

「美鈴さんが予想していることで、だいたいあつてると思えますよ」  
「ということは、あの女性と卓郎さんは恋愛関係にあるのでしょうか」  
「そうなりますね。まだ付き合い始めたばかりですけど」

美鈴は「うーん」と唸ってから、言いにくそうな感じで口を開いた。  
「まだ肉体的な関係には至っていない、と考えていいでしょうか」  
「ええ、そうなります。そして、今以上の関係にはならないとも断言します」

美鈴は虚を突かれたような顔になる。

「えっ。どういうことですか」

これに対し、卓郎は暗い表情でうつむく。

おそらく、体の変調に気付いているのは自分自身だけだろう。でも、一方ではその事実を認めたくない自分自身もいた。美鈴に打ち明けるべきなのか、彼は迷った。

結局、勇気が出てこなくて、打ち明けることはできなかった。

「……とにかく、これ以上の関係になることはないと思言しておきます。だから、館のみなさんに迷惑をかけることはないと思います」  
「そうですか」

美鈴はふうつと息を吐くと、夜になりつつある外の景色を眺めた。  
「そういえば、あの女性が先日、お嬢様に血を吸われたんですよね。もしかして、襲われたのがあの女性じゃなかったら、卓郎さんはお嬢様を問い詰めるということはなかったんでしょうか」  
「もしかしたら、そうかもしれないですね」

卓郎はその場に座り込む。

「でも、いずれは分かっってしまうことだったと思います。お嬢様が人間を殺さなくなつて、もう何十年も経っているんですからね。それに僕自身、本当にお嬢様は人間を殺しているのかという疑問は昔から抱いていました」

「確かに、いずれはやってくる問題だったんでしょうね」

そう言つて、美鈴も壁際に背を預けて腰掛ける。

長い夜が始まろうとしていた。

※

翌日の午後、伯父の家を出た卓郎の表情は沈んでいた。

昨晚、卓郎が思いついた結論は、どうやら正しい方向に固まりそうだった。

頭の中では予想していたとはいえ、いざ本当のことになると、やはり心に受ける衝撃は半端なものではなかった。浴びるほど酒を飲みたい気分だったが、後でみじめになるのは明白だったので、すぐにそれは振り払った。

先ほど、卓郎は優花がいない隙を狙って伯父の家に来てきた。

そして八年前のことについて、強く詰問をした。

最初は彼の異様な態度に困惑しながらも、伯父はなかなか口を開こうとしなかったが、粘り強く説得し続けた結果、ついに打ち明けてくれたのだ。

「あの日のことは、今でも後悔している自分がいる」

話し終えた後、伯父はうつむいたまま言った。

「結局、あれが私を見た彼女の最後の姿になってしまった。喧嘩別れのままで二度と会えなくなるのは、いくら何でも辛い。もし、ほんの数秒だけでも天国にいるお前の母親と話せるのであれば、すぐに頭を下げて謝りたいよ」

「いえ、伯父さんがそこまで自分を責める必要はないと思います」

卓郎の言葉に、伯父は顔を上げる。

「八年前は伯父さんの家もかなり厳しかったんですよ。だったら、仕方ないことだと思います。伯父さんの選択は間違いではないと思いますよ」

「ああ。お前の言う通り、理屈では分かっているんだがな……」

苦しそうな様子で、伯父は額の汗を拭う。

「あんなことを目の前でされると、嫌でも自分のせいだと思ってしまふんだ」

卓郎は伯父を責める気など毛頭なかったが、さすがにあれだけのことを起こされると、人の良い伯父にとっては自分を責めざるを得なかったのだろう。

礼を言っ、卓郎は伯父の家を出た。

次の目的地までの通りを歩いている途中、何人かの子供たちが彼の横を走り抜けていった。鬼ごっこを行っている最中なのか、先を走っている子供たちがやたら高い声で「鬼さんこちら！」と叫んでいた。元気そうな子供たちである。

ほとんどは黒髪の子供だが、中には金髪の女の子も混じっていた。さらに歩いていると、威勢の良い商人の声が聞こえてきた。そのうちの一人が「酒でもどうですか」と話しかけてきた。もちろん、やりわりと断った。

その先には、九尾の狐の妖怪が買い物をしていた。背中にある九つの特徴的な尻尾を除けば、あとは人間の女性とたいして変わらない。

おそらく人里に来ることを考慮して、わざと人間に近い姿をしているのだろう。商人と世間話を交わしながら、妖怪は現金を渡していた。

今日も人里は活気に満ち溢れているようだった。

だが、これでも七年くらい前までは深刻な食料危機が発生しており、人里もかなり厳しい状況に追い込まれていたことである。天候不良でろくに作物が作れず、多くの餓死者を出してしまっただけ。今は従来の生産を取り戻しており、食料危機を教訓とした新しい農業改革も少しずつだが順調に進んでいるとのことだった。

もしかしたら、母親と兄もその食料危機の犠牲者なのかもしれない。

空を見上げながら、そう考えた。

ふと、ここで卓郎は足を止める。

そして来た道を引き返すと、先ほど話しかけてきた商人の店まで戻って来た。

「すいません。お酒ください」

つい数分前に話しかけた客だと気付いた商人は一瞬、呆然とした顔になったが、すぐに商人の顔に戻ると、威勢の良い声で酒を渡してくれた。

準備を済ませた卓郎は深呼吸をしてから、再び目的地へと向かう。

行き先は慧音の家である。  
今日、彼女から全てを聞きだそうとしているのだ。

慧音はやや心配そうな表情で、卓郎を迎えてくれた。

「顔色が三日前よりだいぶ悪くなっているが、大丈夫なのか」

「ええ、ご心配なさらず。平気です」

三日前の夜に眠った座布団の上に腰掛けて、卓郎は机越しの彼女と向かい合う。

早速、先ほど買ってきた酒を机に置いた。

「酒は苦手じゃなかったのか」

「今日は特別です。まだ空は明るいですけど、少し飲んでいきましようよ」

彼の提案に、慧音はわずかに口元を吊り上げた。

「いいだろう。今日は特別だ」

慧音が持ってきた盃に交互に酒を入れて、お互い口に含む。かなりきつい酒だったようで、自分で選んだくせに卓郎は顔をしかめてしまった。

盃を机に置いて、慧音は先に話を切り出した。

「で、わざわざ酒を持ってきてまで、私の家にやってきたのは何故だ」  
「言うまでもないでしょう。まだ、先生とは話を保留にしていたことがいっぱいあるじゃないですか。今日はそれをうかがいに来たんです」

「そういうばそうだな。でも、いったい何から話せばいいのやら」

「まずは、おとといに優花が襲われた事件のことについてです」

酒も回ってきたようで、少し頭がふらふらとする。

一口飲んだだけでこうなるくらい、卓郎は酒に弱い体質だ。

だが、そのおかげで今なら良い具合に躊躇なく話が出来そうな気がした。

「先生。おとといの夜、先生が提案してきた取引は覚えていますか」

「ああ。忘れるわけないだろ。お前が抱えている秘密を打ち明けてくれたら、私も抱えている秘密を打ち明けると」

「それなら、話は早いですね」

もう、細かいことは気にしていなかった。

彼の中ではとつくに優花との結婚を諦めているので、ためらう必要など無かった。

卓郎は胸に手を置いて断言した。

「先に僕から言わせてもらいます。僕は人里から離れた、吸血鬼の館で使用人として働いております。優花さんの事件の犯人は、その館に住んでいる僕の主です」

慧音の体が氷のように固まる。

「だから、事件の細かいことを聞いたときから犯人の目星がついていました。僕の主は定期的に外に出ています。人間の血を吸っていましたから」

「……そうか。お前は吸血鬼の館にいる人間だったのか」

彼女は卓郎をじっと見つめる。

「お前の様子を見る限りだと、奴隷のような扱いは受けてなさそうだな」

「主は多少ながら、僕のことを認めてくれます」

「へえ。それは素晴らしいと言っておいた方が良いのかな」

困惑と喜びの入り混じったような顔で、慧音が答える。

「僕が秘密を知った上で、先生に質問したいことがあります」

「なんだ」

「どうして、人里は吸血鬼に対して消極的な態度をとっているんですか」

いつも冷静な彼女がこの瞬間、わずかに体を震わせた。

その様子をうかがって、卓郎は疑問を抱いた経緯を説明した。一度、このことはユキに打ち明けていたので、説明自体は滞りなく行うことができた。

説明が終わってすぐに、慧音は盃の酒を飲んだ。

「なるほど。お前は疑問を抱くのも無理ないな。確かに八年前の事件と、おとといの事件の対応には明らかかな差があったな」

慧音は視線を下げる。

「お前は秘密を打ち明けた。約束通り、私も答えることにしよう——と、言いたいところだが、実はその質問に関しては私も答えられないところが多くてな」

「どういうことですか」

「私が人里に住み始める前から、ある約束が人里と吸血鬼の間に取り交わされていた。だから、約束が交わされた当時のことについては、私もよく分からないんだ」

「人里と吸血鬼の約束？ どのような約束ですか」

「吸血鬼はこの世界の人間を襲つてもいい代わりに、絶対に殺害をしない。その代わりに、人間は吸血鬼が起こした事件に関しては、深く干渉はしないという約束だ」

あまりのことに、今度は卓郎が動揺する番だった。

人間が吸血鬼の起こした事件に深く干渉しない。

つまり、それは人間が襲われるのを見過ごすという意味である。しかも、それをこの瞬間に打ち明けたということは——。

「もしかして、先生は最初から事件の犯人は吸血鬼だと知っていたんですか？」

「完全にはないが、可能性は高いと思っていた。だから、人里の長たちにもこのことを報告した。長たちも私の意見に賛同して、今回の事件に関しては深く追求をしないと判断を下した。優花たちにも、いずれは犯人を特定できなかつたと伝えるつもりだ」

「そ、そんな馬鹿な……」

一瞬、頭がふらふらとしたが、何とか持ちこたえて続けた。

「その、吸血鬼との約束について、もう少し詳しく教えてください」  
「私が聞いた話によると、吸血鬼がこの世界にやってきた時、人里もかなり慌てたらしい。吸血鬼の力は強大だ。下手したら一人の吸血鬼によつて、人里の人間が全滅する可能性もあつた。だから、昔の支配者たちは命がけで吸血鬼と約束を交わしたんだ」

「……それは何年前に交わしたのですか？」

「だから、詳しいことは私も分からない。このことを知っている者は人里でもかなり少ないんだ。私は先代の人里の長から、今の約束を簡



略的にだが聞いた程度なんだ」

「先生でも分からないことがあるんですね」

「当たり前だ。いくら私でも全てを知ることには限界がある」

盃の酒を眺めながら、卓郎は話を整理する。

レミリアが血を吐くという症状が起きたのは、パチュリーによると両親が不在になってからである。

彼女はもうすぐで五百歳を迎える吸血鬼だ。

人間の感覚に勘算すると、血を吐いてしまう症状が起きてから、かなりの年月が経つたと考えていいだろう。しかも、パチュリーの話によると、塞ぎこんでいる時期もそれなりに長かったという。

おそらく、その時期にレミリアは人間と約束を交わしたのではないかと推測した。

あの自尊心の高いレミリアのことだ。通常の状態では、人を殺さない約束など絶対に交わさないと考えたのだ。

「今の約束が本当でしたら、昔から吸血鬼は人間を襲っていたんでしょうか」

「多分、そうかもな。ただ、ここしばらく吸血鬼に関する事件は、私の知る限りでは起きていない。優花の事件は本当に久しぶりのことだったんだ」

この八年間、レミリアは数え切れないくらい人間の血を吸い続けた。だが、これまでは人里から離れた場所にいる人間を標的にしていたとユキから聞いていた。

幻想郷の人間のほとんどは人里に住んでいるが、一部の人間はまだ人里から離れた所に住んでいる。それに村人に限らず、盗賊の類だつて人里の外に潜伏している。つまり、優花の事件が起こるまで、レミリアは上手に吸血を行っていたことになるのだ。

卓郎はひぎに置いていた拳を握った。

「昨日、優花さんと話す機会がありました。その時、彼女は一人で外を歩くのが怖いと言っていました。見た目は平気そうにしていますが、かなり落ち込んでいます」

「殺されかけたんだ。落ち込まない方がおかしいだろう」

淡々と返す慧音に、思わず卓郎は口が出てしまった。

「どうして、優花さんが襲われないといけないんですか。それに先生や人里の人間たちは、これからも人間が襲われても見過ごすつもりなんでしょうか？」

「それを私に訊いてどうする。お前は吸血鬼の館に属しているのだから？ だったら、その疑問は実際に襲った本人に問い質すべきじゃないのか」

ごもつともな意見に、卓郎は唇を噛む。

慧音は小さく息を吐いた。

「吸血鬼の館で働いている使用人が、そのような質問をしてくるとは意外だな。まあ、襲われたのが仲の良い優花だから、動揺するのも無理ないと思うが――。結局、お前は人間と吸血鬼、どちらの味方なんだ？」

その問いに、卓郎は答えることができなかった。

慧音は首を横に振る。

「いや、今の問いは聞かなかったことにしてくれ。吸血鬼と人間の狭間の立ち位置にいるお前にとつては、答えにくい質問だろうしな」

ここで彼女は畳から立ち上がる。

「ただ、これだけは覚えていてくれ。私はどんなことがあるかと人間の味方だ。多くの人間を守るためならば、泥を塗るくらい覚悟は持っている。たとえ、私の行為が人間から非難されようと、それが多くの人間を守るためならば問答無用で実行するつもりだ。そして、お前は人間だ。どんなに吸血鬼に忠誠を誓っていようと私はお前の味方であり、大事な一人の生徒だ。どうか、それだけは忘れないでくれ」水を持つてくる、と言いつつ残して、慧音は奥の部屋へと行った。

狭間の立ち位置にいる者――。

不思議なことだが、先ほどの彼女の言葉には奇妙な説得力を感じた。

一人になった卓郎はうつむきながら、ため息を吐く。

「いったい、自分は何のためにここに来たのだろうか。」

慧音から全てを知るといふ意気込みで来たものの、いざ聞いてみる

と、残ったものは自分の力ではどうしようもないという無力感だけだった。

結局、いくら卓郎がこの現状を嘆いても何も変わることはないのだ。目の前に存在している問題は、一人の間人ではどうしようもないくらいに大きく、そして重たいものだった。

その時、卓郎は何度か咳をしていまう。

しかし、最後の一回だけは大きな咳になってしまった。

ようやく収まった後、口の中で生温かい水の感触と鉄の味がした。何とか外には吐き出さなかったが、咯血してしまったようだ。慌てて酒を飲んで、その味をかき消す。

ぜえぜえ、と息を吐きながら、左手で自分の首に触れる。

喉の奥に残る生臭い匂いを感じていくうちに、彼の中で徐々に先ほどの暗い気分が無くなっていった。

体の中を蝕んでいる何かは、着実に進行している。

もう、まともに動ける時間すらあまり残されていないのかもしれない。

では、このまま何をせずに終わらせてしまうのか？

自分自身への質問に対し、卓郎はすぐに「否」と答えた。

水の入った容器を持った慧音が戻ってきた。

「だいぶ顔が赤くなっているな。私が席を外している間に、また飲んだのか？」

「ええ、まあ……」

「無理するな。ただでさえ、最近のお前顔色が悪いんだからな」

湯飲みに水を入れて、彼の前に差し出す。

それを一口飲んでから、卓郎は言った。

「先生。まだ、訊いていなかったことが一つあります」

「なんだ」

「久しぶりに先生と再会した日のことを覚えていますか？ あの時、八年前の事件について、また後日に詳しい話をしようかと約束したじゃないですか」

慧音はしまった、と言うように顔をしかめた。

「そういえばそうだったな。それで何が訊きたいんだ」

「例の妖怪を制裁したのは、慧音先生ですよ」

「ああ。そうだ」

「もし、八年前の事件に関する資料がまだ残っていましたら、それを少しの間だけでいいですので、僕に読ませてもらえないでしょうか」

彼女は目を見開く。

「資料だと？」

「はい。先生も八年前の事件の調査に大きく関わっていたんですよ。それでしたら、事件に関しての資料も持っているはずですよ。し、別の場所にあるのでしたら、その場所がどこにあるのかも教えていただけませんか」

「資料はあるにはあるが、それくらい私が直接、話してもいいんだぞ」

「いえ、これ以上、先生に迷惑を掛けるわけにはいきませんので」

「もう、お前の中では解決したんじゃないかなかったのか？」

「そうですね、やっぱり詳しいことは確認しておきたいのです」

慧音は腕を組む。なぜか、その表情はとても苦しそうに見えた。

彼女は犯人の妖怪に制裁を加えただけで、事件に直接的な関係はない。

だから、余計な迷惑は掛けなくなかったのだ。

「……卓郎。今さら八年前のことを知って、どうするつもりなんだ」  
「どうするつもりだ、とは？」

「八年前のことを詳しく知ったからといって、母親たちが戻ってくるわけではない。もしかしたら、詳しいことを知ったせいで、さらに心が傷が広がることだってあるのかもしれないんだぞ。全てを知ることが、正しいことではない。お前はそれも覚悟して、ここまで来ているんだろうな」

「はい。しています」即答だった。

今の自分にできることは、八年前の事件に決着をつけることだった。

吸血鬼と人里との約束は、自分の力ではどうしようもない領域の問題だ。館に復帰できるかどうかの問題も、全てパチュリーに任せてい

る始末である。

ならば、自分は八年前の事件の真相に力を入れるしかなかった。一度は決着がついたと思った事件が、この数日間の出来事で一気に内容が変わってしまったのだ。

もう、この身が限界を訪れるまで突き進むしかなかった。

慧音は頭を抱えて、ついに観念した。

「……そうか。その覚悟があるのなら、資料を見せてやってもいい。幸い、資料は私の家の中にある。持ち出しは禁止だから、この場所が気が済むまで読んでくれ」

「恩に着ます。先生」

「だが、いったいどうしたんだ。どうしていきなり、とつくに解決したはずの八年前の事件のことを知りたくなつた。何か事情でもあるのか」

「……もう、僕には時間が残されていないからです」

卓郎は自分の胸に手を当てて、険しい表情で答えた。

「何も知らないまま死んでしまうのは、まっぴらごめんだからです」

※

資料の内容を頭に叩き込んでから、卓郎は慧音の家を出た。資料には事件の現場に関する詳細や犯人の妖怪のことなど、知らない情報も多く書かれてあつた。

まず、妖怪は凜音という名前らしい。

昔からこの世界に居座っている妖怪らしく、卓郎の家の近くにある廃墟と化した神社に住んでいるとのことだった。

家の近くといつても、裏山の奥深くにぽつんと存在している神社である。

この資料を読んで、卓郎も初めてそんなところに神社があつたのだと知つたくらいだ。資料によると、神社が廃墟と化したのはかなり昔のことらしい。

事件現場に関しても、詳細がしっかりと記入されてあつた。

まず、母親と兄の左手首から上は完全に切り取られていたとのことである。

これは卓郎の記憶通りである。そして、二人とも腹に刺し傷があったとも書かれてあった。母は一ヶ所。兄は二ヶ所で、そのうち一つは非常に浅い傷とのことだった。

他にも現場はひどく荒らされていたり、いくら探しても調理用の包丁や水入れ用の壺が見つからなかったことなど、細かい情報が書かれてあった。

全ての内容に目を通して、卓郎の中で一つの結論が固まろうとしていた。

それは、自身が数日前に考えたことは、決して間違いではなかったことである。だが、遺族である卓郎にとって、それはあまりに残酷な真実でもあった。

とにかく、考えはまとまった。

あとは凜音に直接、話を聞くだけである。

一応、彼女と会う方法は目処がついていた。

とはいえ、二日前は実際に襲われてしまったので、下手な行動はできない。念のため、護衛役を連れていく必要があるそうだった。

里の通りを歩いていると、何者かが近づいてきた。

横を向くと、美鈴が卓郎と並行して歩いていた。

「恩師のところに行っただんですよね。何を話していたんですか」

「八年前の事件の真実です」歩きながら答える。

「ああ、あの手首のことに関係したことですな。で、結果はどうでしたか」

「大当たりでした。あとは、例の妖怪に会うだけです」

「えっ。直接、会うつもりなんですか」

「会う方法は目処がついています。でも、それは美鈴さんの協力が不可欠なんです。どうか、僕の頼みを聞いてくれませんか」

美鈴の目がやや真剣になった。

「会わない、という選択肢はないんですね」

「はい。決行は九日後に予定しています。必ず妖怪は九日後にあの場所に現れます」

「どうして九日後なんですか」

「その日は、母さんと兄さんの命日だからです」

あつ、と思いだしたように美鈴は言葉を漏らした。

「そういえばそうでしたね。それで、私に頼みごととは？」

「護衛です。相手は妖怪ですので、念のためお願いします」

「了解しました。頼みごとはそれだけですか」

「いえ、あと一つだけ……。決行日までにパチュリー様に会いたいのですが、それはできないでしょうか」

「人里へ買い出しにやって来る妖精を介して、小悪魔に頼めば会えると思いますよ」

「なるほど。その方法なら、美鈴さんに負担をかけずに済みますね」

会話をしながら、卓郎はこれからの計画を練っていく。

期限まであと九日間もある。頭に溢れている情報を整理するには、充分すぎる時間だろう。むしろ、気になるのはそれまで体が持つてくれるかどうかだった。

今日も空は元気が良さそうに青く輝いている。

それを見上げながら、卓郎は無駄だと分かっているのに眉をひそめた。

※

決行の日。昼過ぎに荷物をまとめ終えた卓郎は、ついに行動を開始した。

部屋に出る前、まずはパチュリーからもらった薬を一口飲む。

五日前、パチュリーに自分の体のことを打ち明けると、彼女は困惑しながらも進行を抑える薬を作ると約束してくれたのだ。

そして、その薬が小悪魔を通じて手渡されたのが、一昨日のことである。おかげでこの一週間、悩まされ続けた咳や胸の痛みもだいぶ改善することができた。このことは全ての決着がつくまで誰にも口外しないでくれ、とパチュリーには念を押していた。

荷物を持って外に出ると、すでに入口には美鈴が待っていた。

「卓郎さん。いよいよですね」

「はい。準備は全て整いました。それじゃあ、行きましょう」

この場所でおぶられるには人目につくので、いったん人里から離れ

た場所まで歩くことにした。そして、里から充分に離れた位置で卓郎は美鈴におぶってもらい、上空を飛んで移動を開始する。彼女におぶってもらうのは久しぶりのことだった。

上からの景色を眺めながら、卓郎はこれからのことを考える。

故郷の村に向かう目的はただ一つ――。凜音と会うためである。

そして、母と兄の命日である今日、必ず夕方に凜音は墓にやってくると卓郎は確信していた。先日、凜音と墓の前で鉢会った時も、ちようど夕方の時間帯だった。

日も橙色になりつつある頃、卓郎と美鈴は故郷へ到着した。

だが、すぐに母と兄の墓には行かなかった。

「美鈴さん。例の待機場所までお願いします」

「分かりました」

卓郎の家の跡地を通過して、美鈴はばあちゃんの家の前に降りた。

卓郎の提案で、このまま墓の前で待っていても、先に凜音に気付かれてしまう恐れがあったので、いったん別の場所で待機することにしたのだ。

中に入る前、卓郎は家の横にある墓石の前に立ち、そのまま両手を合わせた。

この場所には、半年前まで家の主だった『ばあちゃん』が眠っている。

彼女の死体を発見したのは、他でもない卓郎だった。

八年前に再会して以来、卓郎は月に一回の頻度でばあちゃん家に行っていた。

周りに誰も人が住んでいないこともあり、高齢の彼女は非常に厳しい生活を余儀なくされていた。たまに人里から食べ物などの援助が来るが、その量は微々たるものだったので、ほとんどの食べ物や日用品は、卓郎が持って来ていたのだ。

ただ、ばあちゃん自身も、一方的な援助では申し訳ないと思ったのだろう。

食べ物を受け取る代わりに、彼女は一ヶ月のうちに考えた怪談話を卓郎に披露してくれた。意外とばあちゃんの怪談話は面白かったの



で、卓郎も密かな楽しみとして遊びに来ていた。途中から知り合いと称して、ユキやアキも一緒に来るようになり、いつの間にか、ばあちゃんも紅魔館のメイドの中で密かな有名人となった。

そんな、ある日のことだった。

遊びに来た卓郎が家に入ると、彼女はまだ布団で横になっていた。珍しくこんな時間まで寝ているな、と最初は思った。時間は午後である。夜遅くまで怪談話でも考えていたのかな、と呑気に思ったりもした。

とりあえず起こそうと、卓郎は彼女の左肩に触れてみたところ、その異様な冷たさに愕然とした。ある意味、怪談話を聞いた時以上に衝撃を受けてしまった。

祈りを終えて、卓郎は眼前の墓石を見下ろす。

ばあちゃんの死の確認後、同行していたユキに伝言を頼んで何人かの妖精メイドを呼び寄せて、亡骸と家の後処理を行った。家にあった備品は全て処分して、使えそうなものは館で再利用することにした。亡骸は家の横に埋めて、簡素にだが墓を作った。

——せめて、天国にいる最愛の人と再会をしていますように。

そう祈りながら、卓郎はばあちゃんの最後を見届けた。

不思議なことにはばあちゃんの死に顔は、とても穏やかそうに見えた。卓郎は泣かなかったが、ユキとアキはまるで大切な人が死んだかのように号泣していた。

ふうっ、と小さく息を吐いて、卓郎は家の中に入ろうとする。

「あつ、卓郎さん。待ってください」

だが、それを美鈴が止める。

「どうかしたんですか」

「私の役目はこれで終わりです。私はいったん館に戻ります」

予想外の発言に、卓郎は目を瞬かせる。

「えっ。でも、護衛の仕事はこれからですよ」

「安心してください。ある意味、私より信頼できる護衛が中にいますので」

そう微笑んで、美鈴は空を飛び始める。

「それでは、良い結果になるよう祈っています」

問い質す暇もなく、美鈴はそのまま飛び去ってしまった。

ぽかんと口を開けたまま、卓郎は後ろ姿の美鈴を見届ける。だが、すぐに気を取り直して、彼女の言葉がどうということなのかを確かめるため、家の扉を引く。

中には、レミリアとユキが待っていた。

予想外の先客に、卓郎はその場で体を固めてしまった。

「久しぶりね、卓郎。なんか、見ない間にだいぶ顔色が悪くなったわね」

レミリアは余裕のありそうな表情で言う。

彼女はわざわざ家の中に外用の組み立て式テーブルを置いてまで、優雅に紅茶を飲んでいった。横にはユキが立っており、卓郎に「心配かけてすいません。すっかり元気になりました」と微笑みながら、カップに紅茶を注いだ。

「お嬢様。ど、どうしてこちらに……」卓郎がちぐはぐな声で問う。

「門番から話を聞いたのよ。なかなか刺激的なことをするらしいと聞いてね」

「美鈴さんから？」

「そう。具体的に何をするのかは、あんまり聞いていないけどね」

それはそうだ、と卓郎は思った。

美鈴にも八年前の真実を知りたい、としか話してはいないはずだ。

「とりあえず、門番から墓を見張っておいてくださいと言われたから、見張り役にナツを外に出しておいたわ。彼女の能力を使えば、まず問題ないでしょ」

「ああ、それなら大丈夫ですね」卓郎は同意する。

ナツは『物の色を変える程度の能力』を持っている。

この力を応用すれば、自分の姿を隠すことができるのだ。

方法はあらかじめ大きめの布を用意しておき、その布を周囲の色に合わせて体に纏うと、まるで生物の保護色のように自分の姿を覆い隠すことができるのだ。ハルやアキに比べるとナツの能力は非常に地味だが、使い方によっては大きく化ける可能性を秘めている。

レミリアがもう一方の空いた椅子を指で示してきたので、卓郎はそれに座る。

家財道具など全くない家なので、背の高いテーブルは微妙に違和感があった。

「お嬢様……」

何か言わないといけないと卓郎は思ったが、うまく口に出せない。解雇を命じられて以来、初めての再会となるので、どうしても緊張してしまった。

「この前は悪かったわね。あれは私らしくなかった気がするわ」  
すると、先にレミリアが口を開いてきた。

「あの後、パチエから散々言われたのよ。——レミイらしくない。彼の方も確かに強引なところがあつたかもしれないけど、それだけで解雇は酷すぎるとかね」

「パチユリー様が？」ととりあえず、驚いたように返す。

「とりあえず冷静になってみて、私もちよつとやりすぎたかなって思うようになったのよ。でも、肝心のあなたの行方が分からないままで、どうすればいいかなって思っていた矢先に、門番から今回の話を聞いたの。しかも、かなり面白そうな感じだったしね。ちようど良い機会だと思って、私がここに来ることにしたの」

五日前、こつそり館に戻ってパチユリーに会った時、手応えはあると彼女は話してくれた。どうやら、約束通りにレミリアを説得してくれたようだった。

これで館に戻れるかもしれない、と思った瞬間だった。

「でも、謝罪はするけど、解雇を取り消すとは一言も言っていないわ」  
意外な発言に、卓郎の背筋がぴんと張る。

「どういうことですか？」

「あらあら。そんな怖い顔しないでちようだい。今から私がする質問に対して、私が納得する回答をしてくれたら解雇を取り消してもいいのよ」

挑発的な物言いだつたが、レミリアの表情はどこか冴えない。

「ねえ、卓郎……」

そして、虚ろな感じでつぶやいた。

「私は、吸血鬼らしくない吸血鬼なのかもしれないわ」

この八年間で初めて聞く、主の弱気な発言だった。

「私は人間を殺めることも血を満足に吸うこともできない、出来損ないの吸血鬼よ。今まであなたや大半のメイドたちには、いかにも人を殺しているような感じを出してきたけど、残念ながらあなたには見破られてしまったようね」

「昔から、本当に人を殺しているのかと疑問には思っていました」

「鋭いのね。で、こんな私に失望した？」

「そんなことはありません。むしろ大きな疑問が晴れて、すっきりしました」

「曖昧な答えにも聞こえるけど、まあいいわ」

ここでレミリアは小さく息を吐いた。

「じゃあ、ここで本題に入るけど、私はこのままの態度を続けた方がいいのかしら。表では、いかにも立派な吸血鬼を演じているけど、本当は出来損ないの吸血鬼でしかないわ」

レミリアは爪を立てる。

「ねえ、卓郎はどう思う？　こんな私がスカーレット家の吸血鬼としていられるのかしら。スカーレット家は代々、あらゆる種族の頂点として君臨し続けてきた誇り高き一族よ。今は私とフランしか血族がないから、私がこの家の主人になっているけど、たまに自分がこの家の主人にふさわしくないんじゃないかって思ってしまうのよ」

「今の自分では、誇り高き吸血鬼と呼べないということでしょうか」

「当たり前じゃない。周囲から出来損ないの吸血鬼と見られたら、それでスカーレット家は終わりよ。今はまだ大丈夫だけど、いつかばれてしまうかもしれないわ。あなたにだって、八年目でついにばれてしまったんだし」

「じゃあ、逆に問いますけど——」

人間の卓郎にとって、これから言う質問はやや苦しい内容であった。

「出来損ないの吸血鬼と呼ばれたくないなら、どうして人間を殺さな

いんでしょいか。正直に言いまして、お嬢様の力でしたら人間を殺したり血を吸ったりするのは、決して難しいことではないと思いますけど」

「そうね。昔は平気で殺せたんだけどね……」

レミリアはつぶやきながら、紅茶の表面を眺める。先ほどまでの高慢的な態度はどこへいったのか、何かに怯えているような表情を浮かべていた。

失うことの怖さを知ってから、レミリアは何もできなくなってしまう。

パチュリーは、そう彼女を分析していた。

「人間に優しいんですね。お嬢様」

「人間に甘い、と言ったほうがいいかしら」

「でも、その甘さのおかげで八年前、僕はお嬢様に命を救われたんです」

「最初は追い出す気でいたわ。それから全て、あなたの努力の結果よ」

「でも、お嬢様が僕の命を救ってくれたことは事実なんです」

ここで卓郎は声を張った。

「もし、お嬢様が本当に人間を平気で殺してしまうような吸血鬼でしたら、僕はすぐに館から逃げていたと思います。館で働きたいと決意しましたのも、もちろん生活のためでもありません。お嬢様の優しさを漠然とですが感じたからなんです。パチュリー様や美鈴さんだって、お嬢様のその優しさに魅かれて、ここまでついてきたと言っていました」

「ふん。優しさだけで生きられるほど、この世界は甘くないわよ」

「そうですね。甘くないですね。でも、せめて信頼している人に対しては、本当の姿を出してもいいんじゃないでしょうか」

その言葉に、レミリアのカップを持つ手が止まる。

「スカーレット家の主人として、威厳のある態度は崩したくない。でも、お嬢様は、それだけでは我慢できないですよ。自分の今の現状では、威厳のある態度を出し続けるのは苦しいということですよ」

ね」

レミリアは黙ったまま聞いている。

「でしたら、自分の悩みを共有してくれる人を、もう少し増やしたらいいんじゃないでしょうか。館には僕やパチュリー様や美鈴さん、ユキやナツだっています。誰に対しても本音を言えないというのは、とても辛いことだと思います」

「口では簡単に言えるけどね。そう簡単にうまくいかないのよ」

「では、お嬢様はこのままの状態を続けるつもりなのでしょうか？」

「それは……」レミリアは口ごもる。

「でしたら、今から証明してみせましょうか。本当のことをいつまでも隠し続けるのは、いかに苦しいかということをごです」

レミリアは「はっ？」と首をかしげた直後、扉が開かれた。

入って来たのは、大きな布を持ったナツだった。

布は緑色に染まっており、どうやら草むらの中に潜んでいたのかもしれない。

「お嬢様。例の墓の前に、何者かがやってきました」

「ちようどいいですね。お嬢様。行きましょう」

卓郎はさっそうと立ち上がる。

呆然と座ったまま彼を見る主人に、卓郎は挑発的に言った。

「お嬢様。どうかしましたか？ 僕は今から八年前の真実を全て明か

そうと思っています。まさか、怖気づいたわけじゃありませんよね」

すると、レミリアの瞳に生気が蘇ってきた。

「あなた今、『本当のことをいつまでも隠し続けるのは、いかに苦しいことかを証明する』と言ったわね。私にそんなことを言ったからには、覚悟はできているんでしょうね」

彼女もテーブルから立ち上がり、鋭い爪を掲げる。

「私にはさっぱり事情が把握できてないけど、今はとりあえず、あなたの後ろに立って状況を見守ることにするわ。もし、そこで私の納得できない結末を迎えたのなら、今日からあなたを赤の他人として扱うことにするわ」

「ええ。どうぞ。構いませんよ」

「面白いわ。ほんの少しだけ面白くなってきたわ」

ユキから日傘を受け取ったレミリアは、卓郎たちに向けて言い放った。

「じゃあ、行こうじゃないの。八年前の真実とやらを知りにね」

その後ろ姿は、八年前と何ら変わりは無かった。

数日前までは恐怖の対象でしかなかった彼女だが、夕焼け空を背景に映し出される後ろ姿は、とても寂しいように見えた。

気配に気付いたのか、凜音がくるりと卓郎たちの方を振り向く。

人間、妖精、吸血鬼という奇妙な組み合わせのせいか、彼女は眉をひそめた。

「やっぱり、夕方にやって来ましたね」

卓郎の丁寧な口調に、凜音はさらに訝しげな顔になった。

「以前、会った時も夕方の時間帯でしたよね。必ずやって来ると思っていました」

「夕方？ 何を言ってるのか、よく分からないな」

「ここは人里からだいたい離れたところにあります。もし、普通の人間が墓参りに来るのなら、どんなに遅くても夕方前には必ず来ます。夕方にやって来ますと、人里に戻る途中で夜になってしまい、とても危険ですからね」

凜音は目を細める。

「それで？ 何が言いたいんだ？」

「そうなりますと、どうして妖怪であるあなたが夕方にやって来るのか、という疑問が出てきます。そこで僕はある一つの仮定を出しました。それは人目を避けるためです。誰にも会うことなく、ひっそりと墓参りを済ませるには、夕方がちょうど良い時間だったからです」

この八年間、卓郎も遅くとも夕方前には墓参りを済ませていた。

だから、先日まで彼女と鉢合うことが無かったのだ。

後ろで日傘を差しているレミリアが、「ふうん」とつぶやいた。

「卓郎。今の話を聞いてみると、まるで彼女がちよくちよく墓参りに来ているような感じに聞こえるわね」

「ええ。おそらくそうだと思います」

卓郎は二人の墓石に視線を向けた。



「母さんと兄さんの墓。とても綺麗じゃないですか。八年も経ちますと、それなりに傷んでくるのが普通ですけど、そうとは思えないくらい綺麗な状態を維持してます。僕もたまに手入れに来ますけど、それでもあの状態を維持させるのは難しいです。つまり、誰かが毎日、母さんたちの墓を手入れしているということになります」

右隣にいるユキが、慌てた様子で顔を向ける。

「卓郎さん。それって、もしかして——」

「くだらない戯言はやめろ」

凜音が大きく声を放ち、ユキの言葉を止めた。

「さつきから訳の分からない話ばかりしやがって、いったいどうしたっていうんだ。もしかして、あんたたちはわざわざ私がやって来るのを待っていたのか？」

「ええ。待っていました」

「なるほど。わざわざ私に殺されに来たということか」

凜音は右手を赤色に染めると、そのまま戦闘態勢に入る。

それを受けて、彼の両隣にいるユキとナツも臨戦の構えを取る。

だが、肝心の卓郎は全く怖がる素振りを見せず、ただ笑った。

「なにがおかしいんだ」凜音が問う。

「どうして、僕を殺すんですか？」

「はっ？」

「ここは僕の母さんと兄さんの墓の前ですよ。あなたは二人の墓参りにために、ここにやって来ているんですよね。どうして遺族の僕を殺す必要があるんですか」

彼女の表情が一瞬、固まった。

それを見逃さなかった卓郎は、ここで初めて確信を得た。

「さつき、何者かが母さんたちの墓を毎日、手入れしているという話をしました。それは間違いなく、凜音さん。あなたですね」

卓郎は、再び視線を墓に戻す。

墓の周囲は雑草の一本も生えていなかった。少し離れた場所では雑草が鬱蒼と生い茂っているのに、墓の周囲だけは綺麗に何も無かった。

まるで何者かが毎日、せつせと墓の周りにある雑草を抜いているかのようだ。

「先日は気が動転していて気付くのが遅れましたけど、もう一つ大きな疑問がありました。それは先ほども言いましたが、どうして僕を襲ってきたのかという疑問です。——明らかに矛盾しているんですよ。被害者の墓の前で、親族である僕に襲いかかってくるんですよ。常識的に考えまして、加害者が被害者の墓参りにやって来る時は、被害者に対して多少なりとも申し訳ない気持ちが入っているのが普通ではないでしょうか」

レミリアたちにも問いかけるように、卓郎は言う。  
生温い風が、沈黙する凜音の髪を揺らした。

「そもそもこの事件には、動機が見当たらないのです。僕を殺そうとしたことにも矛盾を感じましたけど、そもそも母さんと兄さんを殺した理由も分からないままです。事件のことが詳しく書かれた資料にも、最後まで動機は書かれてありませんでした」

「なるほどね。でも、殺したのは人間じゃなくて妖怪なのよ」  
ここでレミリアが口を挟む。

「人間ならともかく、妖怪や吸血鬼が明確な動機を持って人間を殺すなんてあまり考えられないわ。それこそ、単に快樂を求めて殺したんじゃないのかしら」

「いいえ。それは絶対にはないと思います」

卓郎はきつぱりと頭を振った。

「もし、快樂のために殺したのであれば、わざわざ墓参りなんかに来ませんよ」

「ああ。言われてみれば、確かにそうね」

レミリアは納得したように頷いてから続ける。

「で、あなたが疑問を抱く理由は分かったけど、結局、何が言いたいのかしら」

「そうですね。まずは結論から述べましょうか」

卓郎はここで深呼吸をする。

覚悟を決めて、ゆっくりと口を開いた。

「八年前に、母さんと兄さんを殺したのは凜音さんではありません。状況的に考えまして、二人は自殺をしてしまった可能性が非常に高いのです」

横にいるユキとナツが、驚くように体を跳ねらせた。

「じ、自殺？ 自分から命を絶ってしまったのでしようか？」と、ナツ。

「ああ。たぶん、原因は手首を切ったことによる失血死だと思う」

ここで凜音の様子をうかがうが、特に目立った動きは見せない。

卓郎は自身の左手首を眺めながら続けた。

「八年前、僕が家に帰ってきた時、家の中は血の海でした。床が完全に真っ赤に染まっていましたのです。それだけを言えば、よほど凄惨な殺され方をしたんだと連想しますが、資料によりますと、母さんたちの傷は腹と左手首のたった二箇所しかなかったんです。つまり、母さんたちの傷で床一面が真っ赤に染まるのは物理的にあり得ないんです。良くて死体の周りにしか血は流れないので」

ここで「ちよつと待って」と制したのは、レミリアだった。

「腹と手首に傷？ あんたの推理だと、二人は手首を切って死んだんでしょ？ もし手首を切って自殺したんなら、腹に傷ができるわけないじゃない」

「そうですね。手首を切って自殺したのなら傷は二箇所もできません。でも、母さんたちが死んだ後に、誰かが腹に傷を付けることなら可能です」

ここで卓郎は凜音を真っ直ぐ見た。

「そして凜音さん。おそらく、あなたがわざと母さんたちを殺したように見せるため、死体に細工を施したんじゃないでしょうか。先ほど母さんたちは手首を切って死んだと言いましたが、おそらく家にあった大きな壺にぬるま湯を入れて、そこに手を突っ込んだのだと思います。そして母さんたちが死んだ後、あなたは隠蔽のために死体を壺から引き離して、その壺をひっくり返した。そうすれば、床があたかも血の海のような感じになります。壺はその後、処分したのでしよう」

おそらく、現場の床に流れていた血も、実際の血よりだいぶ濃度が薄かっただろう。

だが、あの時は床に流れている血などじっくり見ている暇などなかった。

「なるほど。自殺の隠蔽ね」

レミリアは日傘を持ち直しながら言った。

「ということは、手首の傷も彼女がやったのかしら」

「そうです。まずは死体を壺から引きずりおろして、腹に刺し傷を付けます。そして、今度は手首の自殺痕を消すために、手首を丸ごと切り取ったのです。凜音さんの能力なら、人間の手首くらい切断することは容易いでしょう」

ユキとナツが体を震わせる。

もし、この説が本当であるなら、当時の卓郎が彼女から逃げ切れた理由も説明できる。

当時は運良く逃げ切れたと思っていたが、最初から卓郎を殺す気がない上で追いかけていたのなら、逃げられるのは当たり前のことである。

そもそも身体能力の高い妖怪が、人間を逃すわけがないのだ。

無言で唇を噛む凜音に対し、卓郎はふうと息を吐いた。

「以上が僕が考えた推理です。もし、この推理が正しいのなら、あなたは何もしていないのに、わざと自分が殺したと言ったことになりません。なぜ、母さんたちを殺していないのに、罪を背負うような行動をしたのですか？」

凜音の返事は行動で示された。

大きく叫びながら、赤い右手を構えて卓郎に向かってきたのだ。

だが、彼は動じない。その時の対策は、すでに準備済みだった。

「ユキ、ナツ！」

卓郎の命令を受けて、二人の妖精が前に出る。

そして緑色の皿のような物を取り出すと、凜音に向けて掲げる。

直後、皿の中心部から、巨大な木の根みたいなのが飛び出してきた。

彼らに向かって突っ込んできた凜音は、為すすべなくその根を全身に巻かれて捕縛された。特に凶器となる右手付近は、嚴重に巻きつけ

ることを怠らない。

見動きを取れなくなった凜音は、これでもかと卓郎を睨みつけた。

「くそつ。放しやがれ!」

「僕の知り合いに魔法使いがいましたね。その方に、特別に作ってもらったのです」

「てめえ……」

妖精たちが持っているのは、先日パチュリーが作った特製の捕縛道具である。

魔法の力で作った木の根で、対象の動きをしばらく封じる道具である。

しかし、時間が経ってしまうと皿の中に溜めていた魔力が無くなってしまうので、長い間は捕縛ができないのが弱点である。

木の根が消滅するまでに、卓郎は凜音を観念させる必要があった。

「その態度ですと、僕の推理が正しいことになりますね」

「はっ。馬鹿言うな。結局、ただのお前の妄想じゃないか」

「妄想ではありません。僕が考えました、可能性の高い推理です」

「ふん。自殺の隠蔽だとか、訳の分からないことをほざいてるが、これだけは言っておく。別にお前の家族を殺した動機なんて、最初からないんだよ。さつき、あんたの後ろにいる小さい奴が言っていたように、私は妖怪だからあんたの家族を殺したんだよ。すでに私以外はいなくなってしまったが、私の一族は昔から人間をよく殺してきたんだ。いちいち殺すための理由なんて、作ってられないんだよ」

その瞬間、なぜか卓郎は胸が苦しい気分になった。

言葉とは裏腹に、凜音の目から殺気が感じられなかったからだ。

何かに必死で、言葉からも苦悩の感情が伝わってくるような気がした。

まさに、先日のレミリアと重なる姿だった。

「自分は殺人の隠蔽をしていない、ということですか」

「ああ、そうだよ。もし、それが真実だって言うなら、今からその証拠を見せてくれよ。証拠が無かったら、お前の言っていることは全て迷惑な妄想でしかないんだよ」

「証拠ですか……」卓郎は顔を歪める。

八年も前の事件である。物的な証拠など何一つない。

しかし、ここで卓郎が顔を歪めたのは証拠がないからではなかった。これから言うことは、凜音にとっても卓郎にとっても非常に心苦しい内容であったからだ。

でも、彼女を観念させるには、この話をする必要があった。

胸の痛みをこらえながら、卓郎は返した。

「物的な証拠は何一つありません。しかし、僕の知り合いからいくつか事件に関わる話を聞いていまして、それを基にした予測ならここで話すことができます」

凜音は首を傾げる。

「先日、僕の伯父からこんな話を聞きました。事件の一週間前、僕の母さんが伯父の家に来てきまして、自殺未遂を起こしたという話です」

これは凜音だけでなく、横の妖精二人も大きく目を見開いた。

「あなたもご存知かと思いますが、僕の家はとても貧乏でした。事件が起こるまでは、母さんも兄さんもともに農業ができない状態でした、明日の飯を食べられるかどうか分からないくらい追い込まれていました」

凜音の表情は固まっている。

「伯父は人里でお店を経営しています。最近までは軌道に乗っていませんでしたが、それでも僕の家よりは多少のお金を持っていました。だから、母さんは昔からお金が足りなくなりますと、伯父からよくお金を借りていました。でも、事件の数ヶ月前から、伯父は母さんにお金を貸さないようにしていました。その頃、人里では大きな飢饉が発生していきまして、伯父の家もかなり追い込まれていたからだと話していました」

おそらく、この話は優花と出会わなければ、死ぬまで知らないままだっただろう。

知らないままの方が幸せだったのか、知った方が幸せなのか――。  
今の卓郎には全く判断できなかつた。

「伯父の話によりますと、その日も母さんの頼みを断ったそうです。でも、伯父さんが目を離れた隙に、母さんは家にあつた包丁で自分の手首を切つてしまいました。幸い、傷は浅かったのです。大事には至りませんでした。おかげで伯父はすっかり血まみれになったと話してくれました」

優花が言っていた、伯父が血まみれの着物を洗っていた話はここで一致する。

今さらだが、卓郎も十五の頃とはいえ、母親の兆候に気付かなかつたのは非常に悔しかった。もし、手首の傷痕に気付いていたら、こんなことにはならなかつたかもしれない。

凜音はここで口元を吊り上げる。

「なるほどな。もしかして、その話を聞いて自殺の話が思い浮かんだのか」

「そうです」

「へえ。つまり、お前の母親は無駄死にしたというわけだ」

目を瞬かせる卓郎に対し、凜音は小馬鹿にするように笑った。

「いいのか、そんな話を真実にしちゃつてさ。お前の母親なんだろう？」

自分の家族が自殺という、そんな死に方をして悔しくないのか。それだつたら、今まで通り私に殺された結末の方がまだましじゃないのか？

——落ち着け。これは明らかな挑発だ。

高ぶる感情を何とか抑えて、卓郎は続けた。

「まだ、この話には続きがあります」

「はっ？」

「事件の一週間前、伯父の家に来た母さんが頼んだのは、お金のことだけではありませんでした。実はもう一つ、頼んでいたことがありました」

「なんだ」

「僕をしばらく伯父の家に預けることはできないか、という頼みでした」

凜音から、小馬鹿にしているような表情が消えた。

「伯父はそのことも詳しく話してくれました。僕の母さんは、昔から僕を人里に住まわせることはできないかと考えてきたそうなんです。僕は昔、人里の寺子屋で勉強していました。でも、家の経済事情が悪くなつて一年間で辞めてしまいました。母さんはそのことをひどく悔やんでいまして、自分はどんなことになつてもいいから、卓郎だけはどうかかすることはできないか——。そう話していたそうです」

「じゃあ、卓郎さんのお母様が自殺をしてしまったのは——」と、ユキ。

「これはあくまで僕の予測の範囲になりますけど、僕を伯父の家に住まわせるためではないかと思つています。自分たちが死ねば、僕の身寄りには伯父しかいなくなりますので、必然的に伯父の家に引き取られる形になりますからね」

「そんなことつて……」

呆然としながらナツが返す。

「僕も最初は信じたくなかったです。でも、伯父が着物に付いた血を洗っているところは娘さんも目撃しています。母さんの自殺理由はあくまで僕の想像の範囲内ですけど、自殺未遂を起こしたことは、まぎれもない事実なんです」

確かに、あの時代の生活は本当に苦しかった。

飢饉で日に日に食べ物の量が減つていく光景を目の当たりにしたときは、おぼろげに死も覚悟したこともある。

そんな自分の守るために、母親たちは自らの命を絶った。

つまり、今の自分は二人の命を引き換えに、生きていることになるのだ。いくら卓郎のためとはいえ、それで命を絶たれてしまうと、胸が締め付けられるような重たい気分を抱いてしまうのだった。

——本当のことを知ったせいで、さらに傷が広がってしまう。

まさに、慧音の言う通りになつてしまった。

「た、卓郎さん……」

その時、皿を持っているユキが小声で話しかけてきた。

「そろそろ、魔法の効果が切れてしまいそうです」

それを聞いて凜音の方に目を向けてみると、確かに捕縛の威力が弱まっているようだった。少しずつだが、彼女の右手が動くようになって



てきているのだ。

もう、時間はあまり残されていないのかもしれない。

卓郎は、最後の推理を披露することにした。

「これが僕の考えました母さんたちの自殺理由です。でも、まだ最後に肝心な謎が残っています。それは、あなたがどうして自殺の隠蔽をしたのかです。そもそも母さんたちの自殺を隠蔽することによって、あなたが得することは何もありません。むしろ、人里から制裁を受けるなど、良くないことばかりが起こります。でも、あなたはそれでも母さんたちの自殺を隠蔽しました。これは、いったいどういうことでしょうか」

「黙れ、黙ってくれ……」

凜音の表情は、険しいと言うよりも悲痛に歪んでいるような気がした。

構わずに卓郎は続けた。

「考えられることが一つあります。それは死んだ母さん、もしくは兄さんのどちらかに隠蔽を頼まれたからじゃないでしょうか。でも、知り合い程度の関係でしたら、ここまでのことはしません。そこで思いつくのは、母さんと兄さんのそちらかに特別な感情を持っているということですよ。この場合ですと、凜音さん——。あなたは事件が起こる前から、兄さんと何らかの親交があったんじゃないでしょうか」

次の瞬間、凜音の右手が木の根の一部を切り取った。

「黙れと言ってるだろうが！」

右手に巻きついていて根を切断した直後、全身に巻きついていて根が消滅する。

それと同時に緑の皿も割れてしまい、二人の妖精は「きゃっ」と悲痛な声をあげて尻もちをついてしまう。ついに魔力が途切れてしまったようだ。

再び自由の身となった凜音は、般若のような形相で右手を構えて卓郎に向かっていく。彼女から発せられる雰囲気は、明らかに殺意が込められていた。

本能的にまずい、と思った直後だった。

卓郎の眼前に日傘がいきなり出現して、凜音は動きを止める。彼を守るように立ち塞がったのはレミリアだった。

「この勝負、卓郎の勝ちね。これ以上、あんたの苦しい姿を見ていられないわ」

——本当のことをいつまでも隠し続けるのは、とても苦しいことである。

今の一言は、まさにレミリアが卓郎の推理を認めたことになる。立ち止まった凜音は目を細めて、レミリアを注意深く観察する。

「あんた。見た目からして、もしかして吸血鬼なのか」

「そうよ。誇り高き吸血鬼、レミリア・スカーレットよ」

「その割には日傘なんか差しやがって、格好悪いな」

「ふん。そんなことより、まだ彼の推理は終わっていないわよ」

レミリアは卓郎を振り返る。

「あんたの兄とこいつが特別な関係にある、と言ったわね。そもそも二人は妖怪と人間なのよ。よく、そんな突飛な発想が思い浮かんできたわね」

「事件が起こる前、兄さんからその話を聞いたことがあるんです」

それは事件の数ヶ月前のことである。

兄である拓馬の口から、ある人に夢中になっているという話を聞いた。

当時の卓郎はその意味がよく理解できなかったが、優花と親しくなったおかげで、初めてその意味に気付くことができたのだ。

「具体的な名前は明かしてくれませんが、その時の兄さん。とても幸せそうな顔をしていました。事件の半年くらい前までは、だいぶ沈んだ表情をしていたのですが、急に生き返ったような顔になりました、今日までよく覚えていたのです」

「でも、具体的な名前は明かさなかつたんでしょ」

「いえ、相手は凜音さん以外に考えられません」

そう強く断言して、卓郎は理由を説明した。

「兄は高台から落ちて足に重傷の怪我を負って以来、満足に農業ができなくなっていました。ついでに遠方への移動もできなくなっ

てしまいましたので、遠方の女性と親しくなる可能性はまずないです」

「じゃあ、村の女性と親しくなった可能性は？」

「僕の村はそういった噂にはとても敏感でした。もともと、近所の繋がりが強いところでしたからね。でも、兄さんと村の人が親しいという噂は全く耳にしませんでした」

「なるほどね」

レミリアは再び凜音に向き直る。

「と、彼は言っているようだけど、何か反論はないかしら。私が言うのも難だけど、あんた、さつきからほとんど反論してこないじゃない。もし、彼の推理が間違っているというなら、今すぐに反論した方がいいわよ。正直、あなたのその中途半端な態度が、彼の推理の信憑性を高めているのよ」

「ふん。私が反論しない理由は単純なことだよ」

ここで凜音は赤色の右手をレミリアに向ける。

「あんたたちをここで全員始末するからさ。あんたたちが何を言おうと、死ねばそれで終わりなんだからな」

「あら。もしかして、この私に刃向かうつもりなの」

レミリアの声が低くなる。

「愚かな選択ね。そんなに私に殺されたいの？」

「吸血鬼の力くらい、さすがに知ってるさ。普通の状態だったら、手も足も出なかっただろうな。でも、今の空の状況だったら、むしろ私の方が有利なんじゃないのか？」

その言葉の意味に気付いた卓郎は、慌てて空を見上げる。

空は薄暗くなっていたが、まだ太陽は健在だった。

今の位置から計算すると、完全に沈むまであと一時間ほど掛かりそうだった。

「吸血鬼は太陽の下には出られないんだろ？ 太陽が沈むまでは、あなたは日傘の下から完全に見動きが取れない。つまり、有効な攻撃がまともにできないわけだ」

レミリアの舌打ちする音が微かに聞こえてきた。

吸血鬼は強大な力を得る代わりに、多くの弱点を持つ。

その代表的なものが、雨と太陽の光である。レミリアの場合は多少の日光なら平気だと話していたが、それでも日中に外出する時は日傘を差さなければならぬ。

「私は妖怪としての力は、ほとんど失ってしまった。でも、今なら充分にあんたにも対抗できるはずだ。殺されるのはむしろ、あんたの方がじゃないのか」

ユキとナツが困惑した様子で、卓郎に目を向けてくる。もし、ここでレミリアが負けてしまったら、必然的に卓郎の命もないということだ。

だが、ここで哄笑したのは他でもないレミリアだった。

「あははは！ 何を言うかと思ったら、その程度のことか」

すると、レミリアは凜音に手招きをしてきた。

「弱小妖怪が調子に乗るなよ。確かに私は日光に弱いけど、それがあったとしても、あんたに勝ち目は最初からないと断言しておく。もし、それが納得できないと言うなら、かかってきなさい。一瞬であんたの腹に風穴を開けてやるよ」

凜音の体が大きく震えたのが、卓郎からでも分かった。背中しか見えないが、レミリアから発せられる凄まじい威圧感がこちらにも伝わってきた。

レミリアの言う通りだとしたら、勝負は一瞬で決着がつくだろう。

いや、勝負の結果は最初から分かっているようなものだった。

自尊心の高いレミリアのことである。

本当に日傘を差したままでも、凜音に止めを刺せる自信があるのだろう。八年間、常に一緒にいるのだ。主人の性格くらい把握しているつもりでいる。

だが、凜音は戦闘態勢を止める動きを見せない。

「そんなの、やってみなけりや分らないだろ……」

彼女の声は、どこか震えているようにも聞こえた。

——なにやってるんだ。相手は吸血鬼なんだぞ。本当に死ぬ気なのか。

そう思った瞬間、卓郎の中で恐ろしい考えが頭に浮かんできた。凜音は無言のまま、右手を構える。

彼女は最初から返り討ちにされると覚悟して、レミリアの挑発に乗ろうとしているのではないか。つまり、ここでわざと死んで真相を全て闇に葬らせる気なのだ。

レミリアも空いている右手を開けたり閉じたりして、ゆっくりと戦闘態勢に入る。

「やめてください……」

だが、卓郎が止める暇もなく、凜音は正面のレミリアに向けて走り始める。

「やめろー!」

「そこまでだ!」

卓郎の叫び声と、別の叫び声が重なったのは、その直後だった。

それから、卓郎の目の前でもあまりにも予想外の光景が広がった。

レミリアに向けて攻撃をしようとした凜音の右手を、横からやってきた者が手で掴んで制止したのだ。

その人物は卓郎にとつて、非常に馴染みのある人物だった。

「これ以上は限界だ。もう、お前は何も背負わなくていいのだ」

その言葉を受けて、凜音は力を失ったようにその場に座り込む。

そして、やってきた者の胸にうずくまって、そのまま泣きだしてしまった。

あまりの光景に、卓郎だけでなくレミリアも啞然としている。

「……どうして」

凜音を抱いている者を眺めながら、卓郎は力の抜けた声で言った。

「どうして、慧音先生がこちらにいるんですか」

寺子屋の師匠、上白沢慧音はゆっくりと卓郎に目を合わせてきた。

「話せば長くなる。ただ、簡潔に言っておくと、凜音とは事件をきっかけに出会った。それから今日まで、私は彼女と一緒に協力してきたのだ」

「協力?」

「まあ、その話は後で話すことにしよう」

訝しげな様子の卓郎に、慧音は話題を変えてきた。

「それはそうと、さつきまでの話の一部始終は全て聞かせてもらった。わずかな記憶と証言で、よくここまで辿り着いたと思う。そのところほ褒めてやろう。だが、お前の推理には致命的な間違いがある。だいたい合っているんだが、お前の兄——拓馬の名誉のためにも、これだけは先に言っておく」

泣き続ける凜音を強く抱きながら、慧音は断言した。

「拓馬は自殺したのではない。厳密には、凜音に殺されたのだ」

彼女がこの世界にやってきたのは、かなり昔のことだった。具体的な数字はよく覚えていない。それくらい長い年月が経っているのだ。

以前の世界での生活を一言で表すなら、まさに『壮絶』であった。彼女の一族は、昔から自分以外の一族は破滅するべきだという非常に排他的な思想を持っていた。一族に刃向かう者は、一人残らず息の根を止めるのが常識であった。

そんなこともあり、戦いは日常茶飯事だった。

全盛期は全身を真っ赤に染めて身体能力を極限にまで高めて、彼女に刃向かう者は全て殺害していった。たまに、これは能力のせいで全身が真っ赤になってしまったのか、血を浴びすぎて全身が真っ赤になってしまったのか、判別できない時もあった。

だが、戦闘に特化した彼女の一族も、ついに限界が訪れた。

敵を多く作りすぎたことで、ある時期を境に一気に多くの敵が彼女の一族を襲うようになった。次第に一族の人数も減っていき、ついに彼女一人だけになってしまった。

それでも命からがら逃げ切り、やってきたのがこの世界だった。

ここはとある村の外れにある、廃墟と化した神社である。廃墟になつてからかなり時間が経っているようだが、奇跡的に中の本堂は健在だった。

この日も彼女は神社の境内にある手頃な石に腰かけて、のんびりと過ごしていた。たまに喉が渇くので、近くの湧水を入れたひょうたんを横に置いている。

この場所で目を閉じていると、様々な自然の音を聞こえてくるのだ。

虫の鳴き声。水のしたたる音。木々のざわめき。

どれも微かな音色である。

彼女は雑念を振り払い、耳から来る情報だけに全ての感覚を委ね

た。

この時の自分は、『自然の中に溶け込んでいる状態』だと思っ  
てる。

最初の頃はなかなか判別ができず、どれも同じような音に聞こ  
えた。

しかし、季節や天気によって微妙に音が変化することに気付くと、  
少しだけ面白いと感じるようになった。今では微かな音の強弱で、植  
物の生育の調子なども分かるようになった。

この世界に来た当初、彼女は強烈な無力感に苛まれていた。  
これまでの自分は常に敵を討つことだけを考えて生きてきた。

それがこの世界にやってきてからは、全く刺激の感じられない生活  
を送ってしまったのである。一時は何がしたいのかも分からず、周囲  
に生息している動物たちを手当たり次第殺していったが、さらに自分  
が惨めになっていくような気がしたので、すぐに止めた。

しかし、少しずつこの生活に慣れてくると、彼女の考え方にも変化  
が訪れた。

周りの自然と同じ調子で生きていくのも悪くないな、と思うよう  
になったのだ。

とにかく、以前の世界はあまりにも殺伐としすぎていた。

一人で過ごすのは寂しい気はしなくもないが、常に死と隣り合わせ  
の環境に比べたら快適だと感じるようになったのだ。

何となく彼女は目を開けて、久々に能力を発動してみる。

だが、赤色に変化したのは右手だけだった。長年、全く能力を使わ  
なかったこともあり、やはり寿命による衰えが顕著になってきている  
ようだ。

「まあ、いいか」

独り言をつぶやいてから、彼女は大きく息を吐く。

どうせ、この身が朽ち果てる瞬間までこのままの生活が続くのだか  
ら、能力が発動してもしなくても関係ないことなのだ。

そう思いながら、再び目を閉じた直後だった。

入口の階段から、何者かが登ってくる音が聞こえてきた。



彼女は大きくため息をついた。久しぶりにこの神社が廃墟になったことも知らない、無知な参拝者かやって来たようだ。

それならば話は早い。とつとと隠れて、参拝者が立ち去るのを待つだけである。

すでに廃墟と化した神社なので、おそらく落胆しながらすぐに帰るだろう。

だが、この日の彼女は油断していた。

隠れようと動き始めた直後、座っていた石に足を引つ掛けてしまったのだ。予想外の出来事に思わず、彼女は声をあげてそのまま転んでしまった。

「誰かいるのですか」と、階段の方から声が聞こえてきた。

しまった、と思った矢先、一人の男性が境内に入ってきた。

見た目は二十代前半くらいの人間だった。ただ、歩き方が妙にぎこちない。足を悪くしているのか、と直感で思った。

「もしかして、あなたもお参りに来たのですか？」男性が問う。

「ま、まあ、そうだけど」とつさに嘘をつく。

誰かと会話と交わすのは、何十年ぶりのことだった。

男性の視線が寂れた本堂に移った瞬間、大きく目を見開かせた。

「あれっ。もしかして、この神社はすでに使われていないのですか？」

「ああ。もう廃墟になってる。私もついさっきやって来て、気付いたんだ」

「なんとということだ……」

男性はがっくりと頭を垂れた。

「参ったな。ここまで二時間も掛けて歩いてきたのに、これじゃあ何も祈ることもできないじゃないか」

その言葉を聞いて、何となく彼女は尋ねてみたくなった。

「祈りつて、もしかしてその足のことか？」

「そうです。弟のためにも、何とんでも治したいのです」

「そいつはご苦労なことだ。でも、こんな寂れた神社じゃ、神様もとつとくに別のどこかに旅立っているだろうよ。とんだ無駄足になってしまったな」

「あはは……。そうなりますね。少し休憩してから、帰ることにします」

男性はぎこちない動作で、階段に腰掛ける。

この神社は山の奥に位置している。普通の人間でも、ここまで来るとはかなりの時間を要してしまう。あの足で来たということは、さぞかしここまで苦勞したのだろう。

寒い時期なのに、首筋から流れる汗の量もかなりのものだった。

わずかにだが、彼女は彼に同情してしまった。自分らしくないと思ったが、彼の背中から感じる雰囲気、妙に自分自身と似ていると感じてしまったのだ。

——たまには誰かと話すのも悪くないかもしれない。

思い立ったら、行動するのは早かった。

「おい。こっち向け」

その言葉に男性が従うと、彼女は小型のひょうたんを男性に投げた。男性は慌てながら、そのひょうたんを両手で受け止める。

「中には水が入ってる。遠慮するな。飲め」

呆然とする男性の横に、彼女は腰掛けた。

これが人間、拓馬との出会いだった。

あれからどうしてあそこまで親しくなってしまったのか、当時を振り返ってもよく分からない。ただ、拓馬と出会ったことで何も無かった生活に、わずかな彩りができたのは言うまでもなかった。



もうすぐで日が沈むので、細かい話は家の中ですることになった。

家とは、もちろん『ばあちゃん』の家である。

一行が床に腰掛けた頃には、凜音もだいぶ落ち着きを取り戻したようだった。先ほどまでであった殺意の込もった目も、完全に消えて無くなっていた。

中もだいぶ暗くなってきたので、ユキが家の中心に発光草を置いてくれた。

「先生。先ほどの話を続きをお願いします」

震える声で卓郎はお願いをする。

先ほど慧音が言ってくれた内容は、卓郎のこれまでの推理を一気に覆ってしまうようなものだったからだ。

「話をすると長くなる。まずは、隠蔽に気付いた経緯から話そう」

慧音は正座をしたまま、ゆっくりと口を開いた。

「私が現場に駆け付けたのは、事件が発生してから翌日のことだった。人里から村までは距離がある。近所の者が死体を見つけて、その情報が里に伝わってくるまで多少の時間が掛かってしまったんだ。まだ、犯人が誰なのかも特定できなかったが、ひとまず私も現場に向かうことにした。床の血はすっかり乾いていたが、家の中にはまだ二人の死体もあった。だが、調べていくうちに、不審な点が二点ほど見つかったのだ」

「それはなにかしら？」

レミリアが、家の隅に設置した簡易テーブルにひじを乗せながら訊く。メイドのユキとナツは、その横に立っている。

「二点目は、これは先ほど卓郎も述べていたが、床の血の濃度がかなり薄かったところだ。これは凜音が壺の水をまき散らした推理で正しい。しかも、家の中には明らかに壺らしきものが置かれていた形跡があったのに、肝心の壺が無くなっていたしな。この時点で私もこれは単なる殺人事件ではないな、と思うようになった。だが、重要なのは二点目だ。ある意味、これが事件の真相に辿り着いた大きなきっかけとなった」

「一体、なんですか」卓郎が問う。

「腹の傷の出血量の違いだ。拓馬の場合は腹の周りに、おびただしい量の血が流れていた。しかし、母親の腹の周りにはあまり血が流れていなかったのだ。拓馬の場合は間違いなく、腹の傷が致命傷になったのだろう。しかし、母親はそうではなかった。つまり、母親は別の何かの要因で死亡した後、腹を刺されたと私は考えたのだ」

ここで卓郎は、出血に関する知識を思い出した。

いつか人体に関する本で読んだことがある。死んだ人間は生きている人間に比べて、傷を負ってもあまり出血しないのだ。

こればかりは、現場を見た慧音だからこそ分かることだった。

「母さんの場合は、自殺でよろしいんですよね」

「ああ。お前の母親は自殺で正しい。拓馬が殺されたのは、母親が自殺した後だ」

険しい表情で慧音は腕を組む。

「まあ、私も真相に辿り着くまではだいぶ悩んださ。当初は犯人が最初に母親を別の手段で殺した後、帰ってきた拓馬の腹を刺して殺したのかという仮説も立てた。まあ、すぐ却下したけどな」

「では、どうやって真相に辿り着いたんでしようか」

「最終的に凜音が全てを答えてくれたからだ。懸命な捜査の結果、犯人は近くの廃墟と化した神社に住んでいる妖怪だと特定した。拓馬はともかく、母親の自殺を隠蔽したことは事実だから、そのことを追究した結果、彼女は全てを打ち明けてくれたんだ。私が神社にやってきた時、彼女はだいぶ疲れたような目をしてたよ」

慧音の言葉に、凜音はこくりと頷く。

今さらだが、その姿は普通の人間とあまり大差なかった。これが昔、大勢の人間を殺してきた妖怪の姿だとは到底思えなかった。

卓郎は恐る恐る訊いた。

「凜音さん。あなたと兄さんは本当に親しい関係だったのでしょうか」

「ああ。そうだよ」

か細い声で凜音は肯定する。

「本当に兄さんは自殺ではなく、凜音さんが殺したのでしょうか」

「厳密に言えばそうだな。あれは完全に私に非がある」

「どうして、兄さんを殺したのでしょうか」

「そうだな。話は長くなるが、先に言っておくとしたら――」

凜音はいったん天井を見上げてから、すぐに卓郎と向き合った。

「拓馬に頼まれたんだ。俺を殺してくれ、つてな」



凜音と出会ってから、拓馬はちよくちよく神社に来るようになってた。

あの足でわざわざ神社までやって来るのだから、よっぽど凜音と話

したことが楽しかったのだろう。ただ、凜音の方は多少の煩わしさを感ずるようになっていた。

あの時は、彼と出会うことは二度とないと思っていたから、一緒に話すことにしたのだが、二回目、三回目になってくると話も変わってくる。

悪い奴ではないとは承知していたが、これまで常に一人で暮らしてきたこともあり、他人と接することに煩わしさが出てきてしまったのだ。

どうすれば、彼を追い出すことができるか――。方法は簡単だった。

ある日、凜音は「私は妖怪だ」と拓馬に正体を打ち明けることにしたのだ。

この話をした瞬間、拓馬の表情は固まった。

人間は妖怪を恐れる。風の噂で人間と妖怪を共生させるといふ訳の分からない話も聞いているが、人間の妖怪に対する恐怖意識はまだ健在である。

これで拓馬も彼女を恐れて、二度と来なくなるだろう。

そう考えながら打ち明けたのだが、拓馬の返事はあまりにも予想外だった。

「へえ。こんなに美しい妖怪がいたなんてな。そいつは驚きだ」

今度は凜音が表情を固める番だった。

拓馬いわく、薄々と彼女は人間ではないかもしれないと思っていたらしい。

この近くに住んでいる人間の顔はみんな覚えていくらしく、君のような美人だったら絶対に忘れることはない、と真顔で話してくれた。

あざといにも程がある言葉だったが、不思議と気分は悪くなかった。

ふっ、と凜音は笑ってしまった。

「おかしい奴だ。お前のような奴を周りは物好きと呼ぶんだ」

「それは君だって同じだろ。よく、人間なんかと話す気になれたな」

「たまたま気が向いたただけだ。それ以上の理由はない」

「つまり、今日までたまたま気が向いていたということか。それは運の良いことだ。できるなら、これからもその運が続いてほしいものだな」

何故か、凜音は言い返すことができない。

「もし良かったら、これからもここにきていいかな」

「……まあ、勝手にしな」

呆れるように返したが、やっぱり気分は悪くなかった。

それから、二人の仲は急速に進展していった。最初は煩わしかったはずの拓馬の存在が、次第に気になる存在へと変貌していったのだ。移動時間の関係で、拓馬が神社に来るのは一週間に一度くらいだった。

気付いたら、前回に拓馬が来たのはいつだろう、と日付を数えるようになっていた。

妖怪が人間と親しくなるなんて……。そう葛藤した時期もあった。

しかし、彼女を咎める者はこの世界に誰もいない。そう思った瞬間、種族という理由で勝手な境界線を決めることが急に馬鹿馬鹿しくなってしまった。

仲が良くなってくるにつれ、拓馬の家に関する事情も分かってきた。

彼の家は貧乏な農家らしく、今は七歳下の弟が主に仕事を行っているとのことだった。足を悪くした拓馬、体の弱い彼の母親もできる限り手伝っているが、それでも家の生活はかなり困窮を極めているとのことだった。

そもそも、彼がこの神社に来たのも神頼みをするためだった。偶然にもこの付近の地図を見る機会があり、そこで初めてこの場所に神社があることに気付いたらしい。

彼は自分の足を治すことに必死だった。

「この神社にいる神様に祈りを捧げて、必ず足を治してみせるんだ」

それが彼の口癖だった、

お金がないので医者に頼ることもできない彼は、最後の手段として神様に祈りを捧げることにしたのだ。凜音に出会ったのは、その最中

のことだった。

また、彼は事故で足を悪くして以来、常に弟に対して罪の意識を持っていた。

「あいつは本当に頭の良い奴だ。将来は有名な学者になって、俺と母さんを絶対に楽にさせるんだって言っていたのに、俺の不注意でその夢を潰してしまった。俺は駄目な兄だよ。だから、弟を楽にさせるためだったら、何でもするつもりでいる」

弟の話をする時の彼の瞳は、どこか必死だった。

数年前まで弟は里の寺子屋に通っていたが、自分が足を悪くさせたせいで、弟は寺子屋を辞めざるを得なくなってしまった。

拓馬はそのことをひどく気にしていたのだ。

凜音もまた、彼に対して何かできることはないかと考えるようになった。

※

例の日、朝から凜音は珍しく不安な気持ちになっていた。

拓馬が神社にやってきたのは、今から二週間前。いつもは一週間に一度はやって来るのに、今回はやたら来ない期間が長くなっていたのだ。

だが、そんな不安も杞憂に終わり、この日の午後には拓馬はやってきた。

「どうしたんだ。やけに間が空いたじゃないか」

そう言いながら凜音は微笑む。

「ああ……。そうなってしまったな」

久々の来訪にもかかわらず、彼の表情は冴えなかった。

顔はあまり生気が感じられず、凜音はすぐに異変を察知した。

「どうしたんだ。何か嫌なことでもあったのか」

だが、彼は答えずに俯いたままである。凜音の不安はさらに増した。

「おい。そんな暗い顔されて、私が訊かないとでも思っていたのか」

「そうだな。すまなかった」

そう言って、彼はいつものように階段の隅に腰掛ける。凜音もその

横に座る。

季節は夏真っ盛りで、蟬の鳴き声がかましく響いていた。

「実は一週間前、うちの母さんが怪我をしたんだ。それも普通の怪我ではない。自分で自分の手首を切って、怪我をしてしまったんだ」

「自分の手首だと？ もしかして、それは――」

「ああ。自殺しようとしたんだ。幸いなことに傷は浅かったようで、大事には至らなかった。場所も親戚の家だったこともあり、弟はまだ気付いていない」

あまりのことに、凜音はしばらく呆然としてしまう。

妖怪の彼女にとって、自殺は縁の遠い言葉だった。人間によく見られる行動とは聞いていたものの、まさかこんな場面で出てくるとは夢にも思わなかった。

「なぜ、自殺しようとしたんだ」

「今のままでは家族全員、飢え死にになってしまうからだと言っていた。今年はなかなか作物が取れなくて、家にある食い物もどんどん減っていてな。人里にいる親戚に金を借りようとしたけど断られてしまって、もう自分が死ぬしかないと思っただけなんだ」

そんな理由で死ぬのか、と凜音はむしろ驚きを抱いてしまった。

そういえばここ最近、各地で天候不良が続いて、作物があまり取れなくなっているという噂を聞いている。拓馬の家は農家だから、その被害も計り知れないだろう。

「それで、お前はちゃんと母親を説得できたのか」

「もちろんしたさ。でも、うちの母さん、かなり責任感の強い人だな。病気でまともに農業ができないことを、ひどく気にしているんだ。自分は病気でそう長くない。だったら、俺たちのためにさっさと死んだほうがましだと考えたんだ」

拓馬は頭を抱えた。

「母さんは自分が死ねば、俺と弟が幸せになると思っている。また自殺を起こさせないために、俺は必死で説得したよ。せめて弟だけには勘づかれないように、彼が農作業に出ている間にさ。だから一週間、ここに来れなかったんだ」



「そうだったのか……」

「ただ、食べ物に関しては、どんどん少なくなってきたのは事実だ。このままの状況が続いたら、母さんだけでなく、俺たちも飢え死にしてしまうかもしれないんだ」

「よせ。そんな後ろ向きで考えるものじゃない」

「だから、俺も考えてしまったんだよ。もし、母さんじゃなくて俺が死んだ方が、弟は救われるんじゃないかってな。俺は足が悪いだけで、それ以外は至って健康だ。俺が死んだら、その分の食べ物も浮くから——」

「やめろ！」

彼女の叫びに、びくつと拓馬は体を震わせる。

「そんな物騒なことは考えるものじゃない」

断言して、凜音は彼の体に寄りかかる。

拓馬は一瞬だけ困惑した様子を見せたが、すぐに受け入れてくれた。

彼の温もりを感じながら凜音は目を閉じて、神社での生活を振り返る。長い間、世話になったところだが、いよいよ決心する瞬間がやって来たのかもしれない。

今こそ、拓馬のためにできることを打ち明ける時であった。

「拓馬。私もお前の家に行くぞ」

「えっ」

「私は今日から、お前の家に住むことに決めた。私もお前の家の農業を手伝うぞ」

突然の宣言に、拓馬は口をぱくぱくさせる。

「い、いや、待て……。いきなりどうしたんだ」

「どうしたもこうもない。お前の家は今、弟が実質的に一人で農業をやっているんだろ。だったら、私も手伝った方が良いに決まってるじゃないか」

「でも、凜音は妖怪だろ。もし、妖怪だとばれてしまったら——」

「私はすでに妖怪としての能力は、ほとんど失っている。もう人間と同じようなものさ。お前の嫁として家に行けば、問題ないだろう」

「よ、嫁？」

拓馬は目を見張る。

「なんだ。やはり妖怪だから、嫁として行くのは厳しいのか」

「いや、そういうわけじゃないけど……ああ、なんて言えればいいだろう」

拓馬は真つ赤に顔を染めながら、大きく息を吐いた。

「そうだな。お前が家に来れば、俺たちもだいぶ助かる。先行きはまだ不透明だけど、お前が農業を手伝ってくれたら、今年の飢饉も乗り越えられるかもしれない」

「腐っても妖怪だ。私が手伝えば百人力だろう」

そう言って、凜音は自信の込めた笑みを浮かべる。

「善は急げだ。さっさと行こう」

彼女は立ち上がって拓馬の手を握ると、神社の階段を降り始める。

拓馬は「ちよつと、俺は足が悪いってこと思い出せよ」とぼやきながらも、凜音についていく。

敵である人間と一緒に暮らす。

以前いた世界では、到底考えられない発想だった。

もし、自分の一族が今でも存在していたら、凜音のことを間違いないく「一族の恥だ」と非難していただろう。

だが、今の彼女はとても心が満たされていた。

もしかしたら、この世界で生きていくうちに、だいぶ思考が人間に近づいてしまったのかもしれない。これが良いことなのか悪いことなのか、凜音にはさっぱり区別がつかなかったが、とにかく今は彼のためにできることを行うつもりだった。

そして、二人は家に辿り着いた。

「まずは自己紹介から始めなくっちゃな」

扉の前で、拓馬が機嫌良さそうにつぶやく。

「出会いの経緯とか、そこは全部お前が考えておけよ」

「ははは。卓郎たちを納得させるだけでも、先が思いやられるな」

苦笑いをしながら、拓馬は家の扉を引く。

つんと生臭い匂いがしたのは、その直後だった。一瞬、なんだと凜

音は思ったが、家の中で広がっている光景を見て、その思考はすぐに停止した。

彼の母親が水の入った壺に左手首を突っ込んで、倒れていたのだ。

※

「母さん！ 母さん！」

叫びながら、拓馬は母親のもとに駆け寄る。

彼が母親を抱きかかえると同時に、壺から左手首が出る。

そこには何本もの深い切り傷ができており、死因はこれだとすぐに断定した。

拓馬は叫びながら母親の名を何度も叫ぶが、全く反応を見せない。もう助からないのは、目に見えていたが、それでも彼は叫ぶことを止めない。

家の中を見渡してみるが、母親の死体以外に誰もいないようだった。弟の卓郎とやらは、まだ外から帰ってきていないようである。

背筋が冷たくなるような感触を味わいながら、凜音は断言した。

「拓馬。諦めろ。もう死んでいる」

「何を言ってるんだ！ まだ死んだと決まったわけじゃない！」

拓馬は完全に錯乱している様子だった。

凜音は母親の亡骸に近寄って、念のため右手の脈を確かめてみる。

だが、結果は予想通りだった。彼女は顔を歪めながら、首を横に振った。

「なんでだよ！ なんで死んでしまうんだよ！」

拓馬は母親の亡骸を揺らす。

「これから……これからだっていうのに、どうして死んでしまうんだよ！」

涙を流しながら、拓馬は咆哮する。見ていられず、凜音は目を逸らした。

この場合、彼にどんな言葉を掛ければいいのかだろう。

頭で励ましの言葉がいくつか浮かんできたが、どれも無意味な気がした。

拓馬の何十倍の年月を生きてきたはずなのに、自分が何もできない

ことに凜音は悔しさを感じた。できることと言えば、彼の横でたたずんでいることだけだった。

その時、凜音の視線が土間の隅に置いてある紙に留まる。

こんな貧困な家に、紙とは珍しかった。その紙は丁寧に三つ折りされておき、もしかしたら誰かに手紙を送るつもりだったのかもしれない。

——手紙？

嫌な予感がしたので、凜音は紙の方に近づいてみる。拾って手に取ってみると、一枚目には『拓馬へ』。二枚目には『卓郎へ』と、拙い字で書かれてあった。

凜音は唾を飲み込んで、その紙を拓馬の方に持っていった。

「拓馬。母親からの遺書だ」

すっかり腫れてしまった拓馬の目が、遺書を捉える。

「これは、母さんの遺書なのか？」

「そうかもしれない。見てみたらどうだ」

涙を流しながら拓馬は遺書を受け取り、中身を開こうとする。

だが、手が異様に震えているせいで、なかなか中身が開けない。

「どうした。私が開こうか」

凜音の問いに、拓馬は首を振った。

「いや、いい。それより凜音。ほんの少しだけでいい。僕を一人にしてくれないか」

「おい……」

「大丈夫。少し落ち着いてから、この遺書を読みたいんだ。頼む」

身内が死んだばかりなのに、妙に平坦な口調で拓馬は懇願した。

凜音は一瞬、嫌な考えが頭によぎった。

蘇ってきたのは、先ほどの神社で拓馬が嘆いていた言葉である。だが、さすがにそれは考えすぎだろうと思ひ、最終的に「分かった」と仕方なく承諾した。

二人で母親の遺体を隅に寄せて、顔に布をかぶせる。

「最後の別れだ。しつかり済ませてこい」

そう言い残して、凜音は家を出る。

念のため、扉の前で待機することにした。もし、拓馬が暴走してしまい、何かよからぬことをするようであったら、すぐに扉を蹴破って彼を止める算段である。

中の惨劇とは裏腹に、外は穏やかな夏の光景が広がっていた。

空を流れる雲はいつも通りに真つ白だし、周りの木々や植物たちも風に煽られながら、活きの良いざわめきを奏でている。蝉の鳴き声もそこら中から聞こえてくる。

あの神社と、全く変わらない音だった。

だが、今はそんな音に浸っている余裕など無かった。

「これから、どうすればいいんだろう」

凜音はぼつりとつぶやく。

彼と神社を出る時に思い描いていたことは、あつさりと実現できなくなってしまった。

拓馬の母親が欠けた中で、自分たちは暮らさなければいけないのだ。

自分はともかく、拓馬とその弟の受ける心の傷も計り知れないだろう。もしかしたら、ここを出て行く選択肢だって考えられるかもしれない。

その場合、妖怪である自分は何ができるだろう。

気が付けば、凜音は今後の生活について頭を巡らせていた。

——その油断が隙を生んでしまった。

家の中から唸り声が聞こえてきたのは、その直後だった。

はっ、と気付いた瞬間、凜音は扉を引いて中に入った。そして啞然とした。

拓馬は、家にあつた包丁で自分の腹を刺していたのだ。包丁を持つ手が異様に震えており、血が床に垂れていくのが見えた。

「なにやってんだ、お前は！」

すぐさま凜音は、彼の握っていた包丁を取り上げる。

拓馬の横には、広げられた母親の遺書が置いてあつた。

だが、すでに血で半分ほどが見えなくなっていた。

「り、凜音……」

「馬鹿野郎！ どうしてこんなことをした！」

拓馬の腹からは、どくどくと血が流れている。先ほど母親の血も浴びてしまったせいで、もはや赤い着物を着ているかのように見えてしまった。

「凜音、許してくれ……。これが俺にとって最善の選択だと思ったんだ」

涙と血で顔を歪ませながら、彼は言った。

「母さんの遺書には、こんなことが書かれてあった。自分が死ねば、人里の伯父さんは俺たちに同情してお金を恵んでくれる。ああ見えて、伯父さんは優しい人だ。間違いはないだろうってさ。それに万が一、お金を恵んでくれなくても自分が死ねば一人分の食料が減るから、二人で頑張れば飢饉もきつと乗り越えられるだろうと書かれてあった」「じゃあ、どうしてお前まで死のうとした！」

「簡単なことだ。卓郎を救うためだよ」

拓馬は真つ直ぐに凜音を見る。

「母さんはこの飢饉を乗り越えるために、自ら命を絶った。でも、それだけじゃ駄目なんだ。たとえ母さんの言う通りに飢饉を乗り越えたとしても、その後の生活はどうなる？ またいつもの厳しい生活に戻るだけだ。母さんがいなくなったことで卓郎の負担も増えてしまい、さらに家の生活は苦しくなる。もし、また同じような飢饉が起こったら、今度こそ俺たちは飢え死にするかもしれない。だから俺も死ぬことにしたんだ」

拓馬の口から血が垂れていく。

だが、目の光はさらに強さを増していった。

「俺と母さんが死ねば、もう卓郎はこの家にいられない。おそらく、伯父さんの家に引き取られるだろう。生活は相変わらず苦しいかもしれないが、人里で暮らせるなら、今の生活よりはまともになるのは間違いない。あいつは、ここにいてべき人間じゃないんだ」

凜音は言葉を失ってしまった。

目の前にいる男は、自分の命より弟の幸福を最優先しているのだ。家族の幸福を願う気持ちは理解できるが、それで自分の命まで絶と

うとするのは理解できなかった。

「おかしいな……。けつこう喋っているのに、なかなか死なない。人間って案外しぶといのかもしれないな」

そうつぶやいてから、拓馬は申し訳なきように言った。

「凜音。最後に一つお願いがある。俺に止めを刺してくれないか」

凜音は大きく目を見開く。

「本当は自分で止めを刺したかったけど、もう限界だ……。手が震えてきているし、腹の感覚もあまり感じなくなってきている。確かこの前、自分の手を凶器にして薪を割っていたよな。それを使って、俺に止めを刺してくれないか？ もし、自分の手が嫌だったら、さっきの包丁でやってもいい」

拓馬の強い視線が凜音にぶつかる。

「なあ、頼むよ」

この瞬間、彼女は久しぶりに恐怖という感情を味わった。

拓馬の視線は、それくらい鬼気迫るものだった。

彼は何の能力も持たない、ただの人間なのに、妖怪の凜音は何故か彼の表情がとても怖いと感じてしまったのだ。

なかなか動こうとしない凜音に見かねてか、ふっと拓馬は微笑む。

「なあ、凜音。こんなところで言うのもおかしい話かもしれないけど、俺、最後に君に会えて本当に幸せだったと思っている」

「拓馬……」

「なんだろう。君と一緒にいると、いつも気分が落ち着くんだった。君と話している時だけは、嫌なこと全部忘れてきた。大切な家族ですら幸せにできない、ろくでなしの男だったけど、最後に君に会えて本当に良かった」

苦笑いをした直後、拓馬の目が再び険しくなった。

「今までありがとう。君の前で死ぬるなら、それは本望だ」

おもむろに凜音は右手を赤く染める。

なぜ自分は拓馬の言いなりになっているのだと一瞬、焦った。

だが、一方でこのまま彼の願いを叶えなければいけないと思う自分もいた。

とにかく、彼の最後の願いを叶えなければ――。

思考が混乱状態のまま、凜音は右手を振り降ろす。

止めは一瞬だった。

右手が肉を引き裂く感触がしたと同時に、拓馬は呻き声をあげた。

その直後、彼の口からある言葉が発せられた。

それからすぐに全身を痙攣させて、そのまま動かなくなってしまった。人間は確かにしぶとい生物であるが、致命的な傷を受けてしまうと、いともたやすく死んでしまう。

右手を引き抜くと傷口から血が噴き出して、凜音はそれを顔に思い切り浴びた。

立ち上がった凜音は、息絶えた彼の姿をしばらく見下ろす。

弟の幸福のため、大切な命まで犠牲にした人間――。拓馬の亡骸を眺めているうちに、ふと凜音はある疑問を抱いた。

親戚の家に預けられれば、本当に拓馬の弟は幸せになれるのだろうか。

拓馬は自分が死ねば、弟は親戚の家に預けられると考えた。

弟の年齢は十五である。たぶん、その願いは叶えられるだろう。しかし、親戚の家に預けられた後はどうなる。果たして、拓馬の弟はその家でまともな扱いを受けるだろうか。

答えは「否」だと、すぐに凜音は判断した。

人間は先入観の塊みたいな種族だ。弟は自殺した親族の生き残りである。きつと、親戚はまともな扱いなどしてくれないだろうと思っ

た。

それが拓馬の弟にとって、本当に幸せなことだろうか。

拓馬の願いは、これで叶えられるのか。

そう思った瞬間、凜音の中である発想が浮かんできた。

――自分が二人を殺したように細工すればいいじゃないか。もしかしたら、自分はこの世界で最も愚かな妖怪かもしれない。今、ここで思いついたことは、確実に自分自身が損な役回りとなるからである。

だが、悠長に考えている暇はない。弟がいつ帰ってくるのか分から



ないのだ。

『好きだった』

最後に彼が残した言葉は、彼女の頭の中で何度も流れた。

「私もだ」

彼女のつぶやきは誰にも伝わることのないまま、空気に溶けて消えた。

まず凜音は再び右手を赤く染めると、拓馬と母親の左手首を切り取った。だが、これでは自分が二人を殺したというようには見せられない。

何としてでも、自分が二人を殺したように見せるのだ。

そうすれば、周りの人間は残された弟に対して、大きく同情をしてくれるだろう。人里にいる彼の親戚も、これなら確実に弟を手厚く扱ってくれるだろう。

拓馬の最後の願いを叶えるために、凜音は次なる行動を開始した。

涙が頬に付いた血を通って、赤い涙となって流れた。

※

凜音の話が終わってから、しばらく卓郎は何も言うことができなかった。

彼女の言うことが本当ならば、卓郎にとって重く心にのしかかる内容だった。

つまり、彼らは卓郎のためにそれぞれ行動に出たのである。母親と拓馬は命を犠牲にして、凜音は自分が制裁されることを覚悟して行動に出たのだ。

慧音は、凜音の肩にそつと手を置いてから言った。

「これが真実だ。凜音は拓馬の願いを叶えるために、自殺の隠蔽を行ったのだ」

「兄さんに頼まれたわけじゃかつたんですね……」

「そうだ。隠蔽は凜音の独断だった。頼まれてやったわけじゃない」「なるほど」

卓郎は息を吐く。

「隠蔽の動機は分かりました。でも、凜音さんの話を聞く限りですと、

厳密には凜音さんが兄さんを殺したわけじゃなさそうですね。だって、先に兄さんが自分の腹を刺してしまったんでしょ？　凜音さんは止めを刺す意味で、兄さんを殺してしまったんですよね」

「ああ。確かに、止めを刺したのは凜音だな」

「ここで慧音は、表情をさらに歪ませる。

その態度に卓郎は首を傾げた。

「まだ、何かあるんですか？」

「卓郎。以前、お前に見せた資料の中で、拓馬の傷は何ヶ所あったか覚えてるか」

「もちろん覚えています。手首と腹の二ヶ所です」

「それは違う。正確に言うなら、傷は三ヶ所あったはずだ」

「三ヶ所？　手首と腹以外のどこに——」

と、ここで卓郎は言葉を止める。

記憶をたどってみると、確かに傷は三ヶ所あったことを思い出したのだ。

一つ目は手首の傷。二つ目は致命傷となった腹の傷。ここまでは問題ないが、凜音の話が正しければ、もう一つ傷がなければならぬのだ。

それは、拓馬が自ら包丁で刺した傷のことである。

資料によれば、その傷は浅い傷だったと書かれてあった。

——浅い傷？

その瞬間、卓郎は口をぽかんと開けたまま、体を固めてしまった。ここでようやく「拓馬を殺したのは凜音だ」という、慧音の意図が分かったのだ。

だが、それは真実をより残酷にさせる内容でもあった。

「もしかして、兄さんが自分で刺した傷はかなり浅かったんですか？

すぐに治療すれば問題ない程度の傷だったんですか？」

慧音はこくりと頷く。

「そうだ。あの時、その気になれば拓馬を救うこともできたんだ。だが、最終的に彼女は拓馬の頼みを断りきれず、そのまま止めを刺してしまっただ」

すると、ここで凜音が慧音を制した。

「それに関しては私がしゃべるよ。慧音の言う通り、拓馬の傷は非常に浅かった。出血はそれなりにあったけど、すぐに止血をすれば問題ない程度だった。これに関しては、拓馬のところに駆け寄った時から分かっていたことだった」

「最初から分かっていた、止めを刺したんですか」

「ああ。今、振り返ると、どうして止めを刺してしまったのか自分でもよく分からないんだ。拓馬の気持ちに押されてしまったのか、もしくはあまりに惨めに見えてしまったのか……。とにかく、あの時は私もだいぶ普通の状態ではなかったのは確かだ」

凜音は自嘲するように笑った。

「——つて、自分で言っておきながら全く弁解になつてないな。冷静になれば、拓馬を生かす方法はいくらでもあったんだ。母親が死んでしまっても、私が農業を手伝うことを強調していれば、自ら腹を刺すようなことはしなかったかもしれない。まあ、こればかりは今さら嘆いても仕方ないけどな」

彼女の表情には、後悔の念が感じられた。それと同時に、長年抱えていたことを打ち明けたことによる、ある種の解放感も感じられた。「なるほどね。だいたいこの事情は把握したわ」

今まで黙っていたレミリアが、ここで口を開く。

「八年前、彼から事件の簡単な概要は聞いたけど、まさかこんな真実があったとはね。さすがの私もこればかりは笑えないわ」

慧音がレミリアを眺めながら、眉をひそめる。

「お前が卓郎が働いている館の主だな」

「ええ。そうよ」

「本来ならば先日、人里で女性が襲われた事件について問い質したいが、今日のところは何も言わないことにしておこう。——八年前、卓郎を拾ったのはお前か？」

「そうよ。だってその時の彼、普通の状態ではなかったからね」

レミリアはそれから、卓郎が紅魔館で働くまでの経緯を簡潔に説明した。

話し終えた後、慧音は納得したように頷いた。

「なるほど。だから、最近まで卓郎を見つけないことができなかったのか」

「どういうことですか」卓郎が問う。

「私と凜音はこの八年間、ずっとお前のことを探していたんだ」

「僕のことを？」

「そうだ。あの事件が起きてから、ずっとだ」

それから慧音の話は、凜音から真実を聞いた時にまで遡った。

真実を知った慧音がまず決めたことは、凜音に対して制裁を行わないということだった。念のため人里に対しては、慧音個人で制裁を加えたと言った報告をした。

母親と拓馬の死体については、凜音が所持していた左手首を繋ぎ合せてから、丁寧に葬った。

ただ、事件から数日が経っても、卓郎の行方は分からないままだった。

これは慧音にとって、大きな不安材料であった。

母親と拓馬は、卓郎のために自らの命を犠牲にした。しかし、その肝心の卓郎の行方が分からないとなると、二人の死は完全に無駄に終わってしまうのだ。

慧音もあらゆる方法を使って、彼を探した。

あまり馴染みのない天狗の新聞記者にも顔を合わせ、十代の少年に関する情報はないかと尋ねた。しかし、望んでいた回答は得られなかった。

凜音は事件から日が経つたびに、憔悴しきった顔になっていった。

卓郎は凜音の姿を見て、逃げてしまったと聞いている。つまり、凜音が余計なことをしてしまったせいで、彼は行方不明になってしまったのだ。

ちょうどその頃、このような事件が二度と起こらないよう、卓郎の故郷に住む人々の移住政策が人里の長から提案された。

昔よりは平和になったとはいえ、まだまだ凶悪な妖怪がはびこる世界である。

凜音の事件はともかく、今後も人間が妖怪に殺される事件が起こらないという保証はない。慧音もこの政策には賛成した。

この頃になると、卓郎はもう生きていないだろうと慧音も考えた。そこで彼女は、ある思い切った行動をすることにした。

まず、卓郎の家を取り壊して、そこに母親と拓馬の墓を建てたのである。

卓郎の墓を建てなかったのは、せめて本当に死んだのかを確認してからでも良いと思ったからだ。そして墓の完成後、憔悴しきった凜音に対して、慧音は毎日ここに来るように言った。

「拓馬に対する、せめてもの罪滅ぼしだ」

慧音はそう凜音に説明した。

そして慧音の言う通り、凜音は毎日二人の墓にやってきた。人間に遭遇しないよう、時間は必ず夕方にした。おかげで墓は八年経った今でも、きれいな状態を保った。

それから何年か経過した。

事件で大きな心の傷を負った凜音は、徐々にだが元気を取り戻していった。慧音の方も移住政策が順調に進み、事件のこともそろそろ忘れようとしていた矢先のことだった。

人里で、すっかり大人になった卓郎と再会したのである。

慧音もこの時は、あまりの衝撃に呆然としてしまった。何とか卓郎には勘付かれずに済んだものの、それから彼女の中で新たな苦悩の日々が始まった。

——彼に対して、八年前の真実を打ち明けるべきなのか？

彼には真実を知る権利がある。

だが、彼は別の場所で立派に生活している。もし、真実を話してしまったら、せっかく新しい生活を手に入れた卓郎を困惑させてしまう。

最終的に慧音は、真実を打ち明けないという方針で決めた。

その代わり、自分の力で卓郎を幸せにする方法はないかと考えた。

その最中に、彼が優花と親しく話しているところを目撃したのである。しかも、優花は慧音にこっそり卓郎に好意があることを教えてく

れた。

「そういえば、優花との結婚を最初に提案したのは先生でしたね」と、卓郎。

「そうだ。優花もいい歳だったし、優花の家も昔に比べたらだいぶ立派になった。これなら卓郎を結婚させることで、人里に住まわせることができる考えたんだ」

初めて優花との結婚話を持ちかけてきた時、慧音の態度はやけに力が入っていた。どうやら、その原因はこれにあったようだ。

結婚、という単語を聞いて、ここで大きく反応したのはレミリアだった。

「ちよつと待ちなさい。結婚つてのは初耳だわ。詳しく説明してちようだい」

「ああ……。お嬢様にはまだ言つてなかったですね」

卓郎は結婚のことに関して、初めてレミリアに打ち明けた。

説明を聞き終えた彼女は不機嫌そうに、かたかたとカップを震わせた。

「あんたねえ……。主人の許可も得ずに結婚だなんて、いい度胸してんじゃない」

「お嬢様。僕は優花さんと結婚するとは一言も言っていないですよ」

「はっ？」レミリアは動きを止める。

「僕は優花さんと結婚する気はありません。先日、そう決めました」

「おい、待て。結婚しないという話は私も初耳だぞ」

ここで強く反応したのは慧音だった。

卓郎は慧音に向き合うと、そのまま土下座の姿勢になった。

「申し訳ございません。僕は優花さんと結婚しないことに決めました」

「なぜだ。お前は優花に好意を抱いていたんじゃないのか」

「はい。抱いていました。でも、個人的な理由で結婚しないことに決めました。これに関しましては、優花さんに非は一切ありません。全て僕が悪いのです」

「その個人的な理由とは一体何なんだ」

「申し訳ございません。それも話すことができません」

「吸血鬼のところで働いているから、結婚は無理だというわけじゃないのか？」

「それもありますけど、原因は他にもあるという感じです」

「慧音はしばらく卓郎を見つめていたが、諦めたように大きく息をした。

「そうか……。今さらだが、お前はいつも私の思い通りにいかない男だな。八年前の真実に自力で辿り着くし、結婚の話は断ってくるし。私の苦労はいつも水の泡だ」

珍しく愚痴を漏らしてきたが、慧音はここで天井を見上げた。

「ただ、今日はこの場所にやって来て、本当に良かったと思っている。この八年間、喉の奥につつかえていたものが今日、ようやく取れたんだ。凜音を止める瞬間まではどうしようかと迷ったものだが、今は少し安心していい」

「そういえば、先生は出てくるまでどこに隠れていたんですか」

「心配を消して、近くの木の後ろに隠れていたんだ。お前に八年前の資料を見せてくれと頼まれた時から、こうなることは覚悟していた。今日は二人の命日だし、お前が凜音に会いに来るとしたら、今日しかないと思って待機していたんだ」

「なるほど……」

心配を消すとは一体どういうことか気になったが、そこは何も言わないことにした。

「卓郎。お前に渡したいものがある」

ここで凜音は、自分の着物の中に手を入れる。

取り出してきたのは一枚の紙だった。

よく見てみると紙は変色しており、かなり古い紙のようだった。

「これは？」

「お前の母親の遺書だ」

ぴくんと卓郎は反応する。

受け取って確認すると、確かに表には『卓郎へ』と書かれてあった。「拓馬の分は血で汚れてしまつて処分したんだが、お前の分は幸いに

も汚れずに済んだんだ。まだ、私も中身は確認していない」  
「……それでは開きます」

深呼吸をしてから、卓郎はゆっくりと中身を開く。  
八年越しに見る母親の字は、お世辞にもあまり綺麗ではなかった。  
だが、その一字一字からは母親の必死な思いが伝わってくるような気がした。

内容は自殺に至った経緯と、卓郎に対する謝罪だった。  
八年越しの母親の言葉に、卓郎は思わず胸が締め付けられそうになる。

だが、一方では悔しい思いも拭うことができなかった。  
もしかしたら、別のやり方があったのではないか。二人が死ぬことなく、飢饉を乗り越える方法があったのではないか。全員、生き残れる方法があったのではないか。

まさに、先ほど凜音が嘆いていたことと同じ思いを抱いた。  
その時だった。

卓郎の中で何かが込み上がってきた。

それは激しい咳と共に、口から一気に噴き出してしまった。

「ごほっ！…ごほっ！」

突然の事態に、レミリアや慧音たちが一斉に立ちあがる。

口から吐き出された血は、一気に母親の遺書を汚してしまった。  
血に染まった遺書をぼんやりと眺めながら、卓郎は思った。

——ついに限界が来てしまった、と。



## 【29】第七章

この年、博霊神社で開かれた例大祭は例年通りの盛り上がりを見せた。

神社の境内まで伸びる街道には様々な露店が立ち並び、境内の中においても太鼓の音に合わせた盆踊りが行われている。この踊りは夜通し行われる予定で、途中では祭りをさらに盛り上げるために打ち上げ花火も上げられる。

基本的にこの世界の人間と妖怪は、催しごとを非常に好んでいる。そのせいか、この瞬間に限っては人間と妖怪はお互いに肩を並べて、祭りを楽しむようにしているのだ。

ある場所では夜雀の妖怪が屋台を開いて、人間に自慢のうなぎ料理を提供している。また、ある場所では三人の妖怪が珍しい楽器を持って、活気の良い音楽を演奏している。

種族という境界線を一瞬だけ忘れることができる、この例大祭の最中――。

ある一つの催し事が、人間と妖怪の中で秘かな話題となっていた。それは境内の隅でひっそりで行われた、とある一人の男が行った紙芝居である。とにかく、その内容が見学者の中で話題となっていたのだ。

内容を簡潔にまとめると、こうだった。

人里から遠く離れた場所にある村で、村人の男が廃墟と化した神社へ行った。

彼は足を悪くしており、まともに農業ができなくなってしまったため、神様をお願いをして足を治そうと考えたのである。

しかし、そこで会ったのは神様ではなく、一人の美しい妖怪だった。たちまちその妖怪に惚れてしまった男は、定期的に神社に来るようになった。

最初は煩わしいと思っていた妖怪も、次第に男に心を開かせていっ

た。たちまち二人は仲良くなり、ある日、美しい妖怪はあることを男に言ったのである。

「私がお前の足になってやろう」

妖怪は人間の身分になって、男と一緒に暮らそうと決意したのである。妖怪は人間に比べて非常に強い力を持っているので、農作業も楽にこなすことができ、結果として彼女が手伝ってくれたおかげで、男の家はみるみるうちに良くなっていった。

こうして男と妖怪は、いつまでも幸せに暮らしたのである――。

「最初はてつきり女が妖怪だったことが村人にばれちゃって、妖怪と人間が殺されちゃう話かなと思ってたんだけど、意外とそんなことなかったのね。でも、人間と妖怪が一緒に暮らすなんて、ちよつと想像できない話よね」

紙芝居を見た一人の人間は、そう評した。

「内容は普通だったけど、俺が気になったのは演じ手の方だったかな。なんか途中から鬼気迫るといふか何というか、すごい熱が入ってて、それが印象的だったかな」

紙芝居を見た一人の人間は、そう評した。



全てを終えた卓郎は、神社の本殿の横にある手頃な石に腰掛けた。

本殿の近くとはいえ、周囲には誰も人はいない。

神社の関係者を含めて、今はみんな不在のようだった。一般の参加者はこの場所に入ることはできないが、卓郎は例大祭の関係者ということもあり、ここに入ることが許されたのだ。

広場で行われている盆踊りの喧騒が、遠くから聞こえてくる。

――ついに、終わったのだ。

紙芝居を終わらせた卓郎は、安堵のため息をついた。

とにかく、例大祭までの三週間は本当に大変だった。伯父に紙芝居の内容を変更してくれと申し出てから、本番まであつという間に時間が過ぎたような気がした。

伯父の説得を済ませた後、卓郎は貴重な睡眠時間を削って、新しい

紙芝居の製作に取りかかったのである。たまに吐きだした血が紙にかかってしまい、何枚か書き直しをするという事態もあつたが、何とか二日前に絵が完成したのである。

内容については後悔していない。あの紙芝居を発表したことで、卓郎の中で渦巻いていた何かが多少ながらも、ようやく収まつてくれたのだ。

ごほつ、ごほつ、とまた咳がひどくなりそうだったので、卓郎は持っていた錠剤を口に入れる。あの日以来、パチユリーから作ってもらった薬を飲まなければ、まともにも外すら歩けない体になつてしまった。

最初の頃は胸の中にある不快な気分を取り除いてくれたが、最近はほとんど効果が無くなつてしまつていた。どうやら、彼の蝕むものは驚くべき速さで進行しているようだった。

もうすぐで、打ち上げ花火が始まろうとした時だった。

「あつ。いたいた」

卓郎のいる場所に、一人の女性が近づいてきた。

優花だった。藍色を基調した花柄の浴衣を着ている。

「どうしたの。急にこんなところに呼び出して」

「君に伝えたいことがあるんだ」

「へえ。伝えたいことって、何？」

そう言つて、優花は卓郎の隣に座る。

優花にこの場所に来るように言つたのは、卓郎の方からである。

彼女の態度がやけにそわそわした感じになつているのは、期待の現れであろう。

しかし、肝心の卓郎の表情は沈んでいた。

優花の気持ちを考えてと身を引き裂かれるような思いだったが、彼は覚悟を決めた。

「ごめん。今日をもつて、僕が人里に二度と来ないつもりでいる」  
「えっ？」

予想外の発言に、優花の体が固まる。

暗闇の中でおぼろげに移る彼女に、卓郎は視線を合わせた。

「だから、今日で優花さんともお別れしないといけない」

「ちよ、ちよつと待つてよ……」

震えた声で優花が言う。

「いきなり別れるって、どういうこと？　もう、二度と卓郎さんに会えなくなつちやうってこと？」

「うん、そう」

優花の顔から、徐々に戸惑いの色が浮かんでくる。

「意味が分からないわ。慧音先生の話によると、卓郎さんは私に対して前向きな態度をとっていると聞いたわ。もしかして、私のことが嫌いになつちやつたの？」

「違う。それは断じてない」

「じゃあ、どうして別れるって言うのよー」

優花が、がっしりと卓郎の腕を掴んでくる。

予想外に強い力で握ってくるので、卓郎はわずかに顔をしかめる。

必死な形相の優花に、卓郎の気持ちは大きく揺れた。

最初の段階では「他に好きな女ができた」と言うつもりだった。しかし、優花に下手な嘘は通用しないことは分かっているので、正直に全てを打ち明けるしかなさそうだった。

卓郎は小さく息を吐いた。

「僕の寿命があと少ししかないからだ」

「えっ？」

「僕の体は今、悪い病に犯されている。知り合いの詳しい人によると遺伝的なものらしいんだ。僕の父さんとじいちゃんも、同じ病で早死にってしまった」

知り合いの詳しい人とは、パチュリーのことである。

気付いた時には病はかなり進行していたようで、パチュリーの力ではどうしようもなかった。せいぜい、進行を抑える薬を作るのが精一杯だったのだ。

卓郎の腕を握る力が、どんどん弱まってくる。

「う、うそ……。卓郎さん、死んじやうの？」

「まだ完全に実感しているわけじゃないけど、そうらしい」

ここで卓郎は錠剤の入った容器を取り出す。

「今はこの薬で何とか動けるけど、そろそろこれも効かなくなってきた。この例大祭が終わったら、僕はこれまで住んでいた場所で療養するつもりでいる。だから、人里にはもう二度と来れなくなってしまうんだ」

実物を見せられて、いよいよ優花の戸惑いは大きくなる。

花火まで時間が迫っているせいか、遠くのざわめきが少し大きくなった。

優花は可笑しそうに笑った。

「……ねえ、卓郎さん。手の込んだ冗談はやめてよ」

「優花さんの前で下手な嘘はつけないよ。全部、本当のことだ」

「でも、卓郎さん。自分で言うのも難だけど、私のことが好きなんですよ。それでも私と別れなくっちゃいけないの?」

卓郎は思わず黙ってしまう。

今でも優花が好きなのは事実である。だが、ここで素直に「好きだ」と告白するには、優花にとってあまりにも残酷すぎた。

「別に、好意は抱いていると言った覚えはないよ」

「嘘よ! お父さんと慧音先生が、ちゃんと『好きだ』って聞いたのよ」

優花の顔が震えてくる。

胸が引き裂かれるような思いで卓郎は言った。

「うるさいな。僕は最初から優花さんのことが嫌いだったんだ」

「言っていることが滅茶苦茶よ!」

「……さよならだ、優花さん」

「嘘よ! 嘘よ!」

優花が卓郎の胸にうずくまった瞬間、二人の背後で花火が打ち上がる。

彼女の泣き叫ぶ声が、花火の音で消えた。

※

例大祭が大団円で終了した後、卓郎はすぐに人里へと戻った。

すでに時間は夜だが、この日に限っては人里も多くの松明や提灯を使って道を明るく照らしているので、人通りはいつもと比べたら非常に多い。

優花に続いて、別れを告げなければならぬ人がまだいた。

目的の家に辿り着いた卓郎を待っていたのは、ユキとナツだった。人里に長居する気はないので、これが終わったら二人に館まで護衛してもらおう予定である。

「すぐ戻ってくる。大丈夫だ」

心配そうに見つめる二人のメイドに対し、卓郎は静かに言った。

そして、家の扉を何度か叩いてから中に入る。

待っていたのは慧音と伯父だった。

「優花との別れは済ませてきたのか」 慧音が問う。

「はい」

「ちゃんと納得してくれたのか」

「いえ……。いろいろとありまして、ほとんど強引な感じで終わってしまいました」

まだ、優花から受けた背中の痛みは残っている。

あの後、泣き続けた優花がいきなり卓郎を押し倒してきたのだ。

突然のことに何も抵抗できなかつた卓郎は、そのまま優花を抱きかかえながら背中から地面に激突する。そして、彼女は卓郎を抱きしめながら、「ねえ、今すぐ結婚しよう」と耳元で囁いてきたのだ。

卓郎は背筋が凍るような気分になった。

優花は明らかに混乱しているようで、涙の溜まった目は半分定まっていなかった。

たとえ卓郎の余命がわずかだとしても、最後まで見届けてあげるから結婚しよう、というのが彼女の主張だった。

当然、それには「否」と答えて、それから彼は優花を落ち着かせるために時間をかけて説得を続けた。花火が終わった頃には、ようやく優花も泣きやんでくれたが、なかなか彼のそばから離そうとしなかった。

「優花は今、どうしているんだ」 伯父が問う。

「神社の関係者に預けています。今日は妖怪に襲われる心配はないとはいえ、このまま夜の道を歩かせるのは危険だということでしたので、明日の朝まで神社で療養させると、関係者の方は言っていました」

「そうか……。まあ、場所が神社なら心配はいらないか」

ここで卓郎は伯父に対して、膝を折って土下座をする。

「今回はこのようなことになりました、本当に申し訳ありませんでした」

「ああ。私もとても残念だ」

伯父はそう言ってくれたが、表情はとても苦しそうであった。

理由はどうあれ、自分の娘が悲惨な別れを経験したのだ。その心中は卓郎にはとても想像できない。

すでに、慧音と伯父には詳しい病気の事情を話してある。

例大祭の後、卓郎は紅魔館で療養生活をする予定である。一応、伯父に対しては吸血鬼の館という事実は伏せて、人里から離れた村で療養すると話している。

卓郎は土下座の姿勢から立ち上がる。

「先生。僕の最後のお願いを聞いていただけませんか」

「なんだ」

卓郎は風呂敷からある物を取り出して、慧音に渡す。

それは紙芝居の紙と、卓郎がこれまで書いてきた大量の絵の数々だった。

受け取った慧音は、その目を大きく見開かせる。

「もう、その絵は僕には必要ありません。どうか受け取ってください」

「しかし、こんなに大量の絵をいきなり受け取られても……」

「それなら誰かに譲ってもいいですし、売っても僕はぜんぜん気にしませんよ。もし、受け取ってくれなかったら、そのまま処分するつもりでいます」

「そう言われるとな……」

しばらく考えた末、ついに慧音は折れた。

「分かった。これは全て受け取ることにしてしよう。寺子屋には絵の好きな生徒も多くいるから、彼らに一枚ずつ渡すことにしよう」

「ありがとうございます」

もう絵を書く余裕すらないだろう。人里への別れと同時に、自身の趣味とも別れの意味も含めて、卓郎は信頼できる慧音に絵を渡すこと

にしたのだ。

「……もう、これでお前とは二度と会えないんだな」

確認するように慧音がつぶやく。

「はい。そうなります」と、卓郎は頷く。

「人里に残るといふ選択肢はないんだな」

「ええ。人里から離れた場所で、療養生活することに変わりはありません」

「お前が良かったら、私の家で療養してもいいんだぞ」

「冗談はやめてください。これ以上、先生に迷惑はかけられません。凜音さんの件でも、かなり迷惑を掛けてしまいましたし」

ふうっ、と慧音は大きな息を吐いた。

「もし、この世に神がいるとしたら、今日ほど神を憎む日はないな。どうして、お前のような優秀な人間が早死にしなければならぬんだ」  
「優秀な人間って、それは大げさですよ」

軽い口調で返したが、慧音の表情は真剣だった。

「大げさではない。本気で思っている」

そして恩師は卓郎のもとへ近づくと、ゆっくりと彼の体を抱きしめた。

突然のことに、さすがの卓郎も動揺する。

「お前のことは決して忘れない」

力強いが、どこか悲しきを含んだ口調だった。

「先生……」

「お前の存在は、私の歴史の中にいつまでも居続ける。永遠にな」

卓郎は体の力を緩める。

歴史に携わっている者だからなのか、彼女が最後に言ってくれた言葉には、底知れぬ重みが含まれているような気がした。

※

こうして、卓郎の紅魔館での療養生活が始まった。

まだ薬が多少効いていた頃は、メイドに命令を出したり、仕事を手伝ったりと、多少ながらも館に貢献することができた。彼がこの八年間、育ててきた優秀なメイドたちも協力して動いてくれたので、大き



な問題も起こらずに済んだ。

しかし、卓郎を蝕む病は、異常な速度で進行していった。薬の効果は少しずつ薄れていき、咳や胸の痛みが日に日に激しくなっていた。

痛みで眠れない日が続き、卓郎の顔は徐々に生気を失っていった。この頃になるとメイドたちに命令する気力も残っておらず、リーダーの役割を全てユキとナツに任せるようにしていた。

姿の見えない魔物に、首を絞められているような感じだった。しかも、その魔物は日が経つごとに、徐々に彼の首を絞める力を強くさせていくのだ。

幸い、この直後にパチュリーが痛みを抑える薬を開発してくれたので、ある程度の痛みは感じなくなった。しかし、今度は何もできない無力感が彼を襲ってきた。

——なんで、僕だけこんな思いをしないといけないんだ。

毎晩、ベッドに横になりながら、卓郎は苦悩し続けた。

ただ、どんなに辛いことがあると、涙は決して流さなかった。家族を失った八年前のあの日から、卓郎は絶対に涙を流さないと誓っていたからだ。彼に残っていた最後の自尊心が、決して目を濡らせないようにしたのだ。

この八年間、卓郎はがむしやらに館の仕事をやってきた。

でも、今は部屋の掃除ですらメイドに任せている始末だった。ユキやナツは嫌な顔一つせず彼の看病にあたってくれたが、それが一層、彼を惨めな思いにさせるのだ。

もう、自分はこの館に必要な人間ではないのか？

ある日の朝、卓郎は強引にベッドから起き上がった。

やることはただ一つ。掃除をするためである。

就寝用の着物という非常にだらしない格好であるが、せめて部屋の掃除くらい行わないと、自分があまりにも無様で仕方なかったのだ。だが、体がなかなか思うように動かない。

手に持った箒を動かすたびに体中から激痛が走り、その度に彼は顔を歪ませる。呼吸するだけでも苦しく感じる。

その途中、部屋の扉が開かれ、ユキとハルが中に入って来た。

「卓郎さん！」

事態に気付いたユキが慌てながら、卓郎のもとへやってくる。

「何をやっているんですか！ 今は安静にしませんと」

「でも、せめて掃除くらいは、僕の力で……」

「掃除は全て私がやります。だから、どうか今は安静にしてください」  
「でも、これくらいなら——ごほっ！ ごほっ！」

卓郎の言葉は突然の咳によって遮られてしまい、その場で血を吐き出してしまった。ぽたぽたと、吐きだした血が絨毯に染み込んでいく。

「ほら、言わんこっちゃない」

ハルの言葉を受けて、急に卓郎の中で悔しい気持ち湧きあがってきた。

「ちきしょう！」

叫びながら、持っていた箒を地面に叩きつける。

二人のメイドがびくつと体を跳ねらせた。

それからユキの言う通り、卓郎はベッドで安静することになった。吐きだした血もハルが迅速に処理してくれて、部屋はあっさりと綺麗な状態に戻った。

再び一人になった卓郎は、横になったまま呆然と天井を眺める。

自分は館に必要なのか、という疑問はついに確信へと変わった。

胸の痛みがさらに増したような気がした。

※

自分が館に必要な人間だと思うようになってから、卓郎の精神状態はさらに最悪になっていった。どうせ、自分はあと少しで死んでしまうのだ。今、自分がどんなことをしようと、どうせすぐ死ぬんだから関係ない。

その感情は、言動にも出てくるようになった。

「卓郎。容態はどうかしら」

ある日、パチュリーと小悪魔が彼の部屋にやってきた。

パチュリーは現在、卓郎のために病気を治療する薬を急いで開発し

ている。

しかし、まだその完成には至っていないかった。もともと薬学は専門外なので苦戦するのは当たり前だが、それでもパチュリーは彼のために日々努力をしていた。

目の下にくまが出来た状態のパチュリーを見た時、なぜか卓郎は自分のために動いてくれている嬉しさより、虚しさが出てきてしまった。

「苦しくて今にも死にそうですね」淡々と答える。

「そう……。今、何とかして薬を作っているから、それまでの辛抱よ」別に、僕のためにそこまで頑張る必要はないですよ」

これには、パチュリーだけではなく小悪魔も瞠目する。

「もう無駄ですよ。どうせ、僕はあと少ししたら死ぬんです。そんな役立たずの僕のために薬を作る時間があるんですしたら、本業の魔法の研究でもしたらどうですか。はつきり言って、薬の開発なんて時間の無駄だと思いませんか」

「卓郎……。あなた一体どうしたのよ」パチュリーは困惑する。

「どうしたもこうしたもないです。ただ、僕が思ったことを話しただけです。パチュリー様だって、病気を治せる薬なんて作れるはずがないと思っっているでしょ？」

「てめえ！ ふざけるんじゃないぞ！」

突然、横にいる小悪魔が卓郎の胸ぐらを掴んできた。

「パチュリー様がどんな思いで、お前のために動いているのか分からねえのか！ これ以上、生意気なことを言ってみろ。本気で殴るぞ」

「殴れよ」

「殴りたかったら思い切り殴れよ。どうせ僕は重病人だから、今なら殴り放題だぞ。どうぞ、お前の気が済むまで殴れよ」

小悪魔は歯ぎしりを立てながら、卓郎を睨みつける。

「いっそのこと、死ぬまで殴り続けてくれないかなと思っただけだった。」

「小悪魔。そこまでしておきなさい」

意外にも小悪魔を止めたのは、パチュリーだった。

「でも、パチュリー様！」

「気にしないで。彼は今、病気でまともな精神状態ではないのよ。だから、いちいち彼の挑発的な言動に反応してたら切りがないわ」

彼女の口調はいつもと同じように、とても淡々としていた。

小悪魔が卓郎の胸ぐらを放してから、パチュリーは彼のベッドに接近する。

「卓郎。これだけは言っておくわ」

彼に顔を接近させて、パチュリーは続ける。

「あなたが何を言おうと、私は薬の開発を続けるわ。確かに私は薬学は専門外だし、今からどれだけ頑張っても、あなたが生きている間に薬は完成しないと思っっているわ。——でもね、私自身もよく分からないけど、今ものすごく調子がいいのよ」

ここで初めて、パチュリーの目が異様に漲っていることに気付いた。

「いつもは体の調子が悪くて、なかなか研究に集中できないんだけど、ここ最近ものすごく調子がいいのよ。自分でも信じられないくらいにね。だから正直に言おうと、私は別にあなたのために薬を作っているわけじゃないのよ。単純に調子が悪くいいから、その流れに乗っているだけ。変な勘違いしないでちょうだい」

その直後、パチュリーはベッドから離れて、何度か咳き込んでしまう。調子が良いと言っていた割に、持病の喘息はいつも通りのようだ。

小悪魔が慌てて彼女の背中をさすりながら、卓郎に鋭い視線を向けた。

「今回のところはパチュリー様の言葉に免じて、見逃してやる。だが、もしまた同じような言葉をパチュリー様の前で吐いてみる。その時は本気で一発殴るからな」

パチュリーを介抱しながら、小悪魔は部屋の扉を乱暴に閉めて出ていった。

沈黙に包まれた部屋の中、再び一人になった卓郎は自虐的な笑みを

浮かべる。

いつそのこと、本気で殴って欲しかった。

でも、あんな態度をされてしまうと、逆にこちらが惨めになるだけだった。調子がいいからと返答したのは、卓郎の言動に対する、ささやかな反抗ではないのか。

——情けない。

ようやく冷静になった卓郎は、大きな自己嫌悪に駆られた。

本当にどうかしている。病気でついに頭もおかしくなってしまうたんじやないか。このまま療養生活を続けていたら、もつとひどいことになるんじゃないか。

「ああ、もうー」と、叫びながら頭を掻き筆る。

ひたすらもがき続けた後、卓郎は力が抜けたようにベッドに横になる。

そして、思った。

もう、自分はずっとと死んだほうがいいんじゃないのか。

※

「卓郎。調子はどうかしら」

それから数日後の夜、珍しくレミリアが彼の部屋にやってきた。窓の外をぼんやりと眺めていた卓郎が、主人の方に顔を向ける。

それを見たレミリアの目が、ぎよつと見開いた。

「……あんた。本当にあの卓郎なの？」

「ええ、まあ」

「何日か目を離れた際に、だいぶ老けたわね。一体どうしたつていうのよ」

彼女の問いに、卓郎は何も答えない。

とつくに病気のことは、館中に周知されているはずだ。

八年前の真実を知った後も、レミリアの態度に大きな変化はなかった。

ただ、病に冒されてまともに仕事ができなくなった彼を、今でもここに残しているということは、まだ彼を必要とする理由があるのかもしれない。

「卓郎、今日は何の日が知っているかしら」レミリアが問う。

「なんででしょうか」

「いつもの吸血の日よ。あなたの病気を知ってから、なるべく我慢してきたけど、そろそろ限界なのよね。だから、今日はやってくれるかしら」

発光草に照らされた彼女の顔は、どこか興奮しているような感じだった。

なるほど、と思いながら卓郎は頷いた。

「いいですよ。こんな体ですが、どうぞお嬢様のお好きにしてください」

「よろしい。それでこそ私の従者よ」

「でも、その前に二つ条件があります」

「条件？」

卓郎は部屋の窓を見ながら、ゆっくりと答えた。

「まず一つ目ですけど、ほんの少しの間だけ僕を外に出してもらえませんか」

「外に？　こんな夜の時間だと、何も景色なんて見えないと思うけど」

「いいんです。外の空気を吸いたいです」

「じゃあ、ユキに車椅子を押してもらえるように頼んでくるわ」

「いいえ。これは僕からのお願いなんですけど、お嬢様が代わりに押ししてくださいませんか」

「私が？」レミリアは訝しげに言う。

「はい。どうかお願いします」

頭を下げる卓郎に、レミリアは「まあ、これも血のためならね」と小さく呟いた。

「分かったわ。あなたがそこまで言うなら、私が直々にやろうじゃないの」

「ありがとうございます」

車椅子は、すでに部屋の隅に置かれている。

すでに歩く体力すらない卓郎のために、パチユリーが作ってくれた特別製の車椅子である。魔力を動力源として動くため、押す側はほと

んど力を必要としないのだ。操作に慣れれば、乗っている者だけでも動かすことができる。

車椅子に乗った卓郎は、レミリアに押されて館の庭に出る。外に出た瞬間、ひんやりとした空気が皮膚を刺激した。もう季節は冬である。用意してきた毛布で肩まで包み込んで、卓郎はふうつと白い息を吐いた。

冬の空は光り輝く月と、何百にも散りばめられた星で満たされている。

夏に比べたら、冬の夜空はだいぶ綺麗に見える。卓郎にとってこうして外の空気を吸ったり、空を眺めるのはかなり久しぶりのことだった。

「きれいですね」卓郎がつぶやく。

「そう？　いつもと同じ空で、私はもう見飽きちゃったわ」

「でも、きれいなものはきれいですよ」

——僕が死んだら、僕の魂は本当に星となって光り続けるのだろうか。

どこかのおとぎ話で、死んだ人間の魂が星になるという話を聞いたことがある。

なんだか現実味のない、あまりにも幻想的な話であるが、その一方では言葉にできない美しさもあるような気がしてならないのだ。

卓郎は大きく息を吐いて、空を見上げる。

もう少し、この世界の未だ見ぬ自然を絵にしてみたかった。もう少し、パチュリーの図書館に眠っている未知なる知識を学びたかった。もう少し、館にいる住人たちと一緒に過ごしたかった。やり残したことは山ほどあったが、どれも叶うことのできない夢である。もう、割り切るしか方法はない。

静かに目を閉じて、卓郎は心の準備を済ませる。

あとは、後ろにいるレミリア次第だった。

「お嬢様。もういいです。ありがとうございます」

「普通の星空を見ただけなのに、それで満足しちゃっていいの？」

「ええ。満足です。これでもう思い残すことはありません」

「何、明日から死んじゃうようなこと言ってるの。まだ分からないでしょ」

「いいえ。僕は今日、死ぬつもりでここに来ましたから」

そう断言した直後、がたつと車椅子が揺れる。

「今日、死ぬ？ 冗談はやめてちょうだい」

「冗談ではないです。僕はお嬢様に殺されるつもりで、ここに来ましたから」

卓郎は後ろを振り返る。主人の動揺している表情がうかがえた。

そんな幼い吸血鬼に向かって、卓郎はゆつくりと微笑んだ。

「お嬢様。二つ目の条件です。どうか最後に僕の血を思いつきり吸って、僕を殺してください。もう、僕の寿命はあと数ヶ月くらいで、ほとんどないに等しいです。僕の血を吸う機会もこれで最後になるでしょう。でしたら、病気で苦しんで死ぬよりかは今ここでお嬢様に殺された方が楽ですし、紅魔館の使用人としても本望です」

「……冗談言わないでちょうだい」

表情が出ないまま、レミリアは答える。

「あなた、私あまり血を吸えないってことは承知してるでしょ」

「ええ、承知しています。でも、お嬢様だって、いつまでも血が吸えない吸血鬼のままではいたくないですよね」

卓郎の問いに、彼女は「ええ、まあ……」と答える。

弱気の状態になる主人に、卓郎は言葉を連ねた。

「僕はとつくに館に貢献できる人間では無くなってしまいました。せいぜいできること言えば、お嬢様に血を吸わせることだけです。でしたら、今ここで自分の弱点を克服しませんと、お嬢様は永遠に臆病者の吸血鬼のままなんですよ」

レミリアは車椅子の持ち手を強く握る。

「この私が、臆病者だって？」

「ええ。もしここで僕の血を吸い尽くすことができたなら、もう誰もお嬢様のことを臆病者だなんて言いませんよ。今は何とかごまかせているようですが、いずれは分かかってしまう問題だと思います。お嬢様だって、いつまでも臆病者扱いされたくないですよね」



レミリアは視線を下げる。

「……嫌だ。偉大なるスカーレット家に、臆病者なんていらぬ」  
「でしたら、ひと思いに僕の血を吸ってください。僕を殺すことができたら、人間を殺すことに抵抗なんて無くなりますよ。お嬢様のいるべき場所は、この世界ではありません。弱点を克服すれば、きつとお嬢様は歴史に残る吸血鬼になれるでしょう」

「歴史に残る吸血鬼？」

「ええ。お嬢様にはその才能があります」

幼い姿の吸血鬼を眺めながら、卓郎は続けた。

「類まれなる容姿に併せて、誰にも負けない圧倒的な力がお嬢様にはあります。お嬢様なら将来、種族を越えて大勢の者の頂点に立つことができるとしよう。僕はこの世界のことしか分からないですけど、きつと別の世界でもお嬢様の力は通用すると思います」

そして、彼は強く言い放った。

「だから、お嬢様。僕を殺してください」

冬の冷たい風が、静かに二人の間に流れていく。

卓郎にとつては、何分にも感じる時間が過ぎていった。

その後、レミリアが卓郎の正面までやってきて、車椅子の上に乗っかり、卓郎に抱きつくような姿勢になる。

ついに決心してくれたようだ。

——人間以外の種族の女が、人間である男を殺そうとしている。

そういえば、この状況は以前、凜音が話してくれたことによく似ている。

「お嬢様。あの時、凜音さんは兄さんの頼み通り、兄さんを殺してくれました。あの凜音さんができたことなんです。吸血鬼のお嬢様ができないことはないですよ」

レミリアは無言で卓郎の服をずらして、露出した左肩に狙いを定める。

いよいよ、苦しみから解放される時がやってきたようだ。

「お嬢様。どうか、偉大な吸血鬼となってください。僕は一足先に逝きます」

その直後、レミリアは左肩にかぶりついてきた。

いつもは味わうようにゆっくりと吸血しているが、今回は最初から勢いよく血を飲み込んでいる。本当に致死量まで吸えるのか気になったが、どうやらその心配いらぬようだ。彼女は本気で卓郎を殺すつもりで吸っている。

夜空の星が一段と綺麗に見える。

やがて、全身が冷えてくるような感覚が襲ってきた。

——そろそろかな。

星を見上げながら、卓郎は全ての力を抜こうとした瞬間だった。

「ごほっ！　ごほっ！」

突然、レミリアが左肩から口を離すと、そのまま吐血をしたのだ。

吐き出された血はそのまま卓郎めがけて降りかかり、彼は顔から盛大に血を被ってしまう。レミリアも同様、吐きだした血で服を汚してしまった。

はあっ、はあっ、と白の吐息が卓郎の鼻に触れる。

「お、お嬢様……」

「卓郎。私はあなたの兄が犯した行為は、絶対に認めないわ」

唐突な発言に、卓郎は目を瞬かせる。

「見た目はあなたを守る一心で、あなたの兄は妖怪に殺してくれと頼んだと思う。でも、それは迷惑な自己犠牲でしかないのよ。——あの妖怪が泣きわめく姿、あなたも覚えているでしょ。あなたの兄の命令に従ったせいで、あの妖怪は八年間も苦しみ続けたのよ。あなたの兄は、殺した側の妖怪のことを全く考えてなかったのよ」

レミリアの紅色の瞳が、至近距離でぶつかる。

「私はあの妖怪のような末路にならない。もし、あなたが今から死ぬ『運命』であるのなら、私はその『運命』を変えてみせるわ」

吸血鬼は紅い血を吐きながら、口元を吊り上げた。

「生きなさい。せつかく与えられた命、最後まで全うしなさい。それが生物としての定め、あなたに与えられた新しい『運命』よ」

ここでレミリアは血まみれの卓郎の頭を、包み込むように抱く。

「でも、今のあなたは病気のせいで、生きるだけでもとても辛いでしょ

？ パチエとユキからいろいろ話を聞いているけど、全身が痛くて痛くて仕方ないそうじゃない。だから、今日から私がずっとあなたのそばにいるわ。私はあなたの痛みを治す力は持つていないけど、励ましたり看病したりすることならできるわ。あなたが生きる最後の瞬間まで、私はずっとあなたのそばにいてあげるわ」

レミリアは耳元で囁いた。

「——それで満足できないかしら？」

吸血鬼は顔を動かして、穏やかな目を卓郎に向ける。

それはこの八年間で初めて見る、優しさに満ち溢れた表情だった。見る者の心を落ち着かせるような、そんな包容力を感じる表情だった。

レミリアは車椅子から降りる。

「ユキたちを呼んでくるわ。あなたはそこで待ってて」

ゆっくりとした足取りでレミリアは、館に戻っていく。

一人取り残された卓郎は血まみれのまま、ぼんやりと星空を見上げる。

その直後、大粒の涙が頬に流れてきた。もう二度と涙を流さないと八年前のあの日に誓ったのに、溢れてくる感情が彼の最後の壁を破壊したのだ。

「あの方は優しい。いや、優しすぎる吸血鬼だ……」

言葉にならない独り言を漏らして、卓郎は涙を流す。

優しさは時として甘さを生む。しかし、今の卓郎は間違いなく、レミリアの優しさによって命を救われたのだ。こんなちっぽけで弱い一人の人間のために、あの吸血鬼は生きろと真正面から言ってくれたのだ。

多くの星に包まれながら、卓郎は小さく呟いた。

「お嬢様……。僕はあなたに会えて、本当に幸せでした」

夜空にある一つの星が、大きく輝いたような気がした。



ユキにとって、その変化はあまりにも劇的だった。

庭で血まみれ状態で泣いていた卓郎を保護した翌日、レミリアがい

きなり「今日から私も卓郎の看病を手伝うことにしたわ」と言ってきたのだ。

突然のことに困惑したユキだったが、主人の命令には逆らえない。ただ、看病をするにしてもレミリアは全くやり方が分かっていなかったのだから、最初はユキに手伝う形で協力することになったのだ。

食事の作り方、掃除のやり方、服の畳み方――。

一介の妖精が吸血鬼に対して何かを教えること自体、あり得ないことだった。

こうして、レミリアによる卓郎の看病が始まった。卓郎も主人の看病が嬉しかったのか、先日まで暗い表情をしていた顔が嘘のように輝いていた。

看病の当初はなかなかうまくいかず、ユキや卓郎に大きな迷惑をかけた。

ある時、レミリアが誤ってひざをテーブルに当ててしまい、置いていた花瓶を落としてしまった。花瓶は盛大な音を当てて割れてしまい、横で掃除をしていたユキは音に驚きながら反射的に声を荒げてしまった。

「お嬢様。何をやっているんですか！」

「あつ。う、ごめん……」

初めて聞く主人の言葉に、この場にいたユキと卓郎が大きく目を見開く。直後、ようやく自分の不手際に気付いたユキは慌てて謝罪をしたが、横にいた卓郎が微笑んだ。

「お嬢様。その姿は僕だけにしか見せるつもりじゃなかったんですか」

「べ、べつに、あんただけに――」

レミリアは顔を赤らめながら、ごほんを咳払いをする。

「ユキ。今のは誰にも口外しちゃだめよ。約束してちょうだい」  
意味が分からずに呆然とするユキに対し、卓郎は大きく口を開けて爆笑した。

あの日以来、レミリアは片時も卓郎のそばから離れようとしなかった。

まるで一秒でも彼が生きている時間を共有したいかのように、その献身的な態度はユキだけではなく館中のメイドの度肝を抜かせた。

ある時、扉の隙間から二人が話している姿を見かけたが、その時のレミリアはとても活き活きとした顔をしており、一瞬、あれが本当にこの館の主人なのかと疑ってしまった。

しかし、レミリアたちの必死の看病も虚しく、卓郎の容態はどんどん悪化していった。意識を失う時間もどんどん増えていき、いよいよ最後の瞬間まで秒読みとなった。

そして、レミリアの看病が始まってから二ヶ月後――。

この日、卓郎の部屋には大勢の館の住人たちが集結していた。彼のベッドを中心として、大勢のメイドたちが固唾を飲んで見守っていた。

やがて、彼の右手を握っていたパチュリーが小さく首を振った。

最初に膝を崩したのは、ハルだった。

「そ、そんな。もう、だめなの？」

ハルの言葉に、パチュリーはゆつくりと首肯する。

そして、ゆつくりと彼の顔に布を被せた。

「あっ……あっ……」

そのままハルは、大粒の涙を流してしまった。慌てて横にいたナツがハルを抱きしめてやるが、彼女の目にも涙が流れていた。

ハルの態度に釣られて、他のメイドたちも涙を流し始める。

その直後、ばたんと部屋の扉が開いた。

さつきまで卓郎の側にいたパチュリーが、部屋から出ようとしているのだ。

「少し……外の空気を、吸ってくるわ……」

後ろ姿のパチュリーの肩は、異様に震えていた。

パチュリーが去った後、部屋の中はメイドたちの泣き声で一杯になった。部屋の隅にいる美鈴も壁に背を預けながら、静かに涙を流している。

そんな中、一人だけ平然とした顔の者がいた。

卓郎の側にいたレミリアはユキに顔を向けて、穏やかに言った。

「ユキ。なに自分だけ我慢しているのよ」

彼女はぴくんと体を動かす。

「泣きたい時は泣きなさい。特にあなたは彼がここにやってきた時から、ずっと彼のことを信賴してきたじゃない。彼のために、泣きたい時は泣きなさい」

その言葉で、我慢の限界が訪れた。

あらゆる思考を全て吹き飛ばして、ユキは涙を流して叫んだ。

レミリアは卓郎の手の甲に、そっと口づけをする。

「今までお疲れ様。あなたのことは二度と忘れないわ」

吸血鬼は最後まで平然とした表情を保ちながら、卓郎の顔を眺めていた。

## 【30】終章

ユキが館の庭を歩いていると、前方に美鈴に後ろ姿が見えた。

「おはようございます」

ユキが挨拶をすると、美鈴はこちらを振り向く。

「おはようございます。今日も良い天気ですね」

「ええ。そうですね」

頷きながら、ユキは美鈴と肩を並べる位置までやってくる。

ユキたちの目の前には大きめの花壇があり、色とりどりの花が咲き誇っていた。

その綺麗な景色に感心しながら、ユキは言った。

「良かったですね。今年も咲きまして」

「ええ。これまでは卓郎さんが世話をしていましたので、今年はちゃんと咲くかどうか少し心配でしたけど、これなら卓郎さんも喜んでくれると思います」

目の前の花壇はこれまで、卓郎が管理をしてきた。

それだけではなく、庭の清掃や隅で栽培している紅茶など、庭のあらゆることは全て彼が行ってきたのだ。いっしか彼は、「初めて庭で草むしりをした時、庭がすごく汚くてどうにかしたいと思っていたんだ」とユキに話したことがある。

卓郎が亡くなってから、一年が経過した。

彼の死後、美鈴と何人かの妖精メイドが協力して庭の管理を行うことになった。

幸い、そのメイドたちは庭いじりを非常に好んでいる性格だったので、現在でも庭は彼が生きていた頃の状態を維持していた。

これは館にとって奇跡的なことだった。なぜなら、庭以外のことに関しては、彼が亡くなってから急速に状況が悪くなっていったからである。

まず、この一年で多くのメイドたちが館を辞めていった。

そのほとんどは、彼が育ててきた優秀なメイドたちである。ハル、

ナツ、アキといった昔から館にいるメイドは残ってくれたが、それでも館にとつては大きな痛手となった。

彼が一時的に館から出て行った時は、その優秀なメイドたちが代わりに仕事を行ってきたおかげで、彼がいない分を補うことができた。しかし、彼女たちが辞めたことで、メイドの質はおろか館の戦闘力も大幅に低下してしまったのだ。

卓郎が作った仕事の振り分け制度も、お菓子の制度もすぐに廃止となった。メイドの中で管理に長ける者が館を辞めてしまい、まともに機能しなくなったからである。

一時はユキが一人で管理を行おうとしたが、あまりの膨大な量に頭がついていくことができず、断念してしまった。

もともとユキはそういった管理を苦手としており、それが仇となつて、卓郎が来る前にメイドたちが彼女の言うことを聞かないという惨状ができてしまったのだ。とはいえ、以前のように仕事をサボるメイドはあまり出ていないので、そこは救いだつた。

「あら、二人揃つて、何をしているのかしら」

その時、後ろから声が聞こえてきて、ユキは振り向く。

やって来たのはパチュリーだつた。

珍しく横に小悪魔がおらず、一人で日傘をさしながらユキたちに近づいてきた。

「パチュリー様。庭の花の様子を見に来たんです」ユキが答える。

「へえ。綺麗に咲いているじゃない」

「今日は卓郎さんのところに、いくつか持つていくつもりなんです」

ユキの言葉に、パチュリーの目が見開く。

「……そっか。今日は彼の一周忌だっけ」

「はい。とても綺麗な花になりましたので、卓郎さんもきつと喜ぶはずですよ」

卓郎の墓は現在、彼の故郷の家にある。

紅魔館の敷地に埋めておくよりは、家族が眠る場所に置いておいたほうが幸せだと判断したレミリアが慧音の協力も得て、その場所に墓を建てたのだ。



あそこには凜音もいるので、墓の管理を彼女に任せられることも踏  
んでの判断である。ユキの聞く話では、現在も凜音は毎日、卓郎たち  
の墓に通っているとのことである。

ユキも二、三ヶ月に一回の頻度で墓に行っているが、どれも彼女が  
手入れする必要がないくらい、墓は綺麗な状態を維持していた。

なので、前回は墓参りを済ませた後、凜音のいる神社まで行き、い  
つも手入れをしているお礼を兼ねて、優花の着物屋で購入した着物を  
彼女に贈ったのだ。

ちなみに優花は現在、一流の着物職人を目指して父親の指導の下、  
修行中であり、すっかり立ち直っている印象だった。

凜音は戸惑いながらも、その着物を受け取ってくれた。

渡した直後、凜音はユキに対して「あの時は刺してしまつて悪かつ  
た」と頭を下げてきた。あの時とは、卓郎と凜音が八年ぶりに再会し  
た時のことである。卓郎の命を救うため、ユキは捨て身で凜音に突撃  
した際、彼女の右腕がユキの胸を貫通してしまつたのだ。

もともと、ユキを『一回休み』にする気は無かつたようで、あれは  
偶然に刺してしまつたとのことである。凜音は何度も謝ってきたが、  
その所はユキも笑つて許してあげることにした。もともと、あの時  
は彼女も『一回休み』を覚悟して凜音に突撃したのだ。

「で、どのくらい持つていくつもりなの？」

パチュリーの言葉に、ユキは我に返る。

「ええと、これくらい持つていこうかなと思います」

ユキは花を摘む範囲を指で示す。

「じゃあ、今からその分を摘みましょ。私も手伝うわ」

「えっ。パチュリー様もやるんですか？」

「いくら体の弱い私でも、花を摘むくらいなら容易だわ」

病弱の魔法使いは苦笑をしながら、日傘を美鈴に渡す。

まだまだ冷たさを感じる春の風を浴びながら、ユキとパチュリーは  
花摘みを始めた。日常生活の中でパチュリーがここまで積極的に動  
く姿は、ユキも初めてだった。

「早いものね。彼が死んでから一年なんて」

作業の途中、ぽつりとパチュリーがつぶやく。

「そうですね。もう一年経ってしまいましたね」ユキは頷く。

「本当に今さらだけど、彼がいなくなっただけで初めて彼の偉大さが分かったような気がするわ。彼が館で働いていた頃は、館全体がとても活気に満ちあふれていたよね」

「ええ。夜のお茶会、弾飛ばし大会、ビンゴ大会……。あらゆる催しごととは全て卓郎さんが企画していましたからね」

美鈴が同意する。

「優秀なメイドも多く揃っていました」と、ユキ。

パチュリーは摘んだ赤色の花をじっと見つめる。

「彼は何も能力を持たない、ただの人間だったわ。でも、彼の存在はこの紅魔館に大きな影響を与えた。これは紅魔館の長い歴史の中でも、驚異的なことよ」

そしてパチュリーは隣に咲いていた花を摘む。

その花だけは、何故か赤色ではなく青色に染まっていた。

「彼は断言していたわ。持ち前の能力だけで強さを決めるのは嫌いだって。強さって、そう簡単に決められるものじゃないって。この世界にはどうやら個人的な能力を持つ者がたくさんいるらしいけど、能力なんてただの便利な道具に過ぎないって」

青い花を顔に近づけて、パチュリーはその匂いを嗅ぐ。

「もしかしたら、この館にいる誰よりも卓郎は強かったのかもしれないわね。何も便利な道具が無かったからこそ、彼はあそこまでがむしやうらに動けたのよ」

「パチュリー様……」

「私たちもまだまだ修行不足ね。彼がやって来る前は、人間なんて何もしない種族だと勝手に馬鹿にしていたけど、その人間に教えられる羽目になってしまうなんてね」

小さく苦笑しながら、パチュリーは青い花を布の上に置く。

「人間を馬鹿にするのは止めることにするわ。もしかしたら今後、彼のような強い人間が私たちの前にやってくるかもしれないね。そう遠くないうちに」

遠くを見つめるような目で、パチュリーは言葉を紡いだ。

そう話しているうちに、ユキたちは全ての花を摘み終えた。

摘んだ花をいったん一枚の布に入れて、それを束ねる。ようやく全ての作業が完了して、あとは卓郎の墓に持っていくだけだと、ユキが安堵の息を吐いた直後だった。

「あら。みんな揃って、何をしているのかしら」

後ろから幼い声が聞こえてきて、ユキはぴんと背筋を張る。

やって来たのは、日傘を差したレミリアだった。

「レミイ……」パチュリーは立ち上がる。

「パチエが外に出ているなんて珍しいわね。何かあったの？」

「別に。今日は卓郎の一周忌だから、その供え用の花と一緒に摘んでいただけよ」

「ああ、そういえば今日で一年だったわね」

思い出したようにレミリアが言う。

彼の死後、レミリアの態度はいつもの感じに戻った。

彼が死ぬ二ヶ月くらい前からは、あれだけ献身的な態度を取っていたのに、彼が死んだ後はまるでこれまでのことが嘘だったかのように、素っ気ない感じに戻ってしまったのだ。

彼の墓参りも半年前に行ったきりである。

辞めたメイドの一人は「お嬢様にとつて、卓郎さんは死んだらそれで終わりの存在だったのかしら？ それって何だかすごく冷たくない？」と、不満を漏らしていた。

ユキが今日、卓郎の墓参りに行くと説明すると、レミリアは何度か頷いた。

「そう。墓参りに出かけるのね。だったら、私も一緒に行こうかしら」

「えっ。お嬢様も行かれるんですか？」

「当たり前じゃない。一年という節目だしね」

突然の主人の参加に困惑しながらも、ユキは承諾した。

「分かりました。それでは、夜に一緒に行きましょう」

「うん。供え用の花や食べ物とかは、全て用意しておくのよ」

そう命令して、レミリアがこちらを去ろうとした直後だった。

「レミイ。ちよつと待って」

突然、パチユリーがレミリアに口を開いてきたのだ。

「どうしたの、パチエ」背中を向けたままレミリアが問う。

「レミイ。どうか、あまり我慢しすぎないでちょうだい。あなたの立場は承知しているけど、それでも我慢しすぎるのは体に毒よ」

「……言っている意味がよく分からないわ」

淡々とした口調で、レミリアはその場を去っていった。

※

夜、仕事を他のメイドに任せて、ユキはレミリアと共に館を出た。

もし、ユキ一人だったら午後に行くつもりだったが、急遽レミリアも一緒に行くことになったので、こうして空も暗くなった時間帯での出発となったのだ。

ユキの持つかごの中には、午前中に摘んだ花束と多少の食べ物が入っている。

羽根を使つての移動なので、数十分後にはあっさり卓郎の故郷の村に到着した。

村とは言つても最後の住人が一年半前に亡くなってしまったので、すでに地図上には存在しない村である。人がいないので、明かりも全く存在しない場所だった。

墓の前に到着したユキは、真つ先に皿に盛った発光草を点灯させる。それまで月明かりを頼りに進んできたので、点灯からしばらくはとても眩しく感じてしまった。

「お嬢様。暗いですので、周りにはご注意ください」

「分かってるわ。安心しなさい」

発光草を目の前に掲げると、三つの墓石がきれいに並べられていた。手入れは相変わらず隅々までよくできており、凜音の律義さを感じさせる。

花束と食べ物を墓の前に置いて、二人は手を合わせる。

「せめて私たちだけでも、彼のごことは忘れないようにしないとね」

ぽつりと呟いた主人の言葉に、ユキは「ええ」と返した。

その時、後ろから足音が聞こえてきた。

不届き者かと思ひ、慌ててユキは発光草の皿を手に持って、そちらに向ける。

しかし、やって来たのは凜音だったので、ひとまずユキは肩を撫で下ろす。

「今日は卓郎の命日だ。やって来ると思っていたよ」先に凜音が言う。「あら。その言動だと、まるで私たちを待っていたようじゃない」と、レミリア。

「ああ、ユキにちよつと言いたいことがあつてだな」  
「私にですか？」

「墓参りが終わったらでいい。後で私の神社に来てくれないか」

妙に深刻そうな顔つきだったので、レミリアの許可を得てユキは承諾することにした。

すでに墓参りは済んでいるので、ユキはそのまま凜音についていくことになった。レミリアはまだここに残ると言ってきたので、ユキは話が終わったらそのまま紅魔館に戻ることを伝えて、レミリアといったん別れた。

ユキは暗闇でも目が見えるので、発光草の明かりはレミリアに渡しておくことにした。

やがて、ユキと凜音は寂れた神社に到着した。

「話とは何でしょうか」ユキが問う。

「一つ、重大なお願ひがあるんだ」

「お願ひですか？」

「それを言う前に、まずはこれを見てほしい」

そう言つて、凜音は自分の右手をユキに見せる。

最初は意味がよく分からなかったが、よく目を凝らして見てみると、指先がかすかに赤くなつていような気がした。それを確認した瞬間、ようやくユキは理解する。

「気付いたようだな。もう、私の能力はほとんど残ってないんだ。妖怪のくせに、実力はそこらの人間とほとんど変わらないところまで衰えてしまった」

「でも、それが何のお願いに繋がるんですか？」

「考えてみる。妖怪が完全に力を失うことは、どうということなのかを」「力を失うこと？」

「全ての力を失った瞬間、私もそこで死ぬというわけさ」

突然の宣言に、ユキは驚愕する。

不死である妖精のユキにとって、死とは全く想像できない領域の話であった。

しかし、卓郎を失った経験から、どうやら死とは『二度と会えなくなる』ことを意味するのではないかと最近では思っている。

つまり、凜音と二度と会えなくなってしまう――。

ユキは唾を飲み込む。

「凜音さん、死んじやうんですか？」

「自分の体くらい自分で理解しているよ。そもそも私は長生きをしすぎた。別の世界からこちらへやってきて、だいぶ長い時間をこの神社で過ごしてきた」

「じゃ、じゃあ、さっきのお願いというのは……」

「ここまで来れば、あとは容易に予想がつくと思うが、もうすぐで私が死んでしまうから、代わりに墓の手入れができる奴が欲しかったんだ。その中でユキが最も適任だと思って、ここまで呼んだんだよ。お前は妖精にしては几帳面なところがあるからな。まあ、私のように毎日墓の手入れをしてくれとは言わないけど、一ヶ月に一回くらいはあの墓まで来てほしいな。きつと天国の卓郎も喜ぶだろう」

「い、一ヶ月に一回くらいなら、全然問題はないんですけど……」

ユキは、困惑しながら視線を凜音に向ける。

凜音はそんなユキをよそに、口元をわずかに吊り上げた。

「なんだ。どうしてそんな深刻そうな顔をするんだ」

「だって、凜音さんが死んじやうだなんて……」

「仕方ない。これも天命だ。特に一年前に真実を卓郎に話してから、急速に能力の消失が進んでいったんだ。間違いなく、これは私に対する神の罰だよ」

「でも……」

「別に私はこの世界に対して、何の未練も思い残すこともない。むしろ、やつと天命を全うできて、嬉しいと思ってるくらいさ。ユキに墓を任せられたら、私の役目はそれで終わりだ。これで天国の拓馬のもとへ、やつと行けるよ」

凜音は空を見上げる。空は多くの星が小さくも美しく輝いていた。

ユキはこくりと頷いた。

「分かりました。お墓は私に任せてください」

「そうか。これでもう思い残すことはない。ありがとう」

凜音は境内にある石に腰掛けて、空を見上げる。

「今日は星がおかしいくらい綺麗だな。下手したら、魂を持っていかれそうだ」

「それじゃあ凜音さん。私はこれで館に戻ります」

「ああ。元気でな」

目線は夜空を向きながら、凜音はユキに手を振った。

漠然とした重たい気分を感じながら、ユキは神社の出口へと向かう。空を見上げてみると、確かに今日の夜空はやたら星が多いような気がした。

ふと、ユキは凜音が座っている方向を振り向く。

だが、すでにそこに凜音はおらず、辺りは何も無い静寂に包まれていた。

ユキは無言で神社を飛び立つ。

とてもではないが、館に戻る気分ではなかった。レミリアにはそのまま館に戻ると言ってしまったが、もう一度、卓郎たちの墓に戻ってみようと思った。

そして、墓に近づいてきた直後、ある声が耳に聞こえてきた。

近くから、人の泣き声が聞こえてきたのだ。

だが、この近くに人なんて住んでいるはずがない。不審に思いながらも、とりあえず墓が見える位置まで近づいてきた時、墓の前で小さな人影を見つけた。

その瞬間、ユキは口元を手で覆う。

泣き声の正体は人ではなく、レミリアだったのだ。

レミリアは卓郎の墓の前で膝を落として、大粒の涙と共に泣き叫んでいたのだ。

とにかく、彼女の叫びは尋常ではなかった。

まるで魂が叫んでいるような、聞いているユキも心が揺さぶられてしまいそうな響きが込められていた。いつも澄ました顔をしている主人が、あそこまで感情を爆発させている姿を見るのは初めてのことだった。

「お嬢様……」

そこにいたのは、間違いなく偉大なるスカーレット家の吸血鬼ではなかった。

優しい心を持った一人の吸血鬼が、そこにいたのだ。

ユキは目を閉じて、ゆっくりと館の方に向けて帰り始めた。

終